

大原社会問題研究所

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

大原社会問題研究所は、研究・教育活動として、2回のシンポジウム、シネマ・フォーラム、10回の月例研究会のほか、専任研究員、兼担研究員による多数の研究プロジェクトが実施されており、評価できる。研究成果の対外発表も定期刊行物の発行に加え、研究所員の学会報告、論文発表も多数あり、評価できる。

また、外部資金においても、科学研究費助成事業で多数の採択があり、高く評価できる。

質保証活動に関して、質保証委員会が設置され改善がみられた。質保証委員会の活動により、さらなる研究所の質向上に繋がることを期待したい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

- ・大原社研はILO駐日事務所と共催で、第32回国際労働問題シンポジウム「ILO（国際労働機関）と日本——100年の歴史と仕事の未来」を大阪で開催した。第11回「大原社研シネマ・フォーラム」を開催した。月例研究会も10回開催した。
- ・研究所100周年記念事業の一環として、『大原社会問題研究所100年史』を刊行した。研究所所蔵資料の展示（8回＋特別展示）を行い、展示内容の図録を作成した。HOSEIミュージアムプレ企画として市ヶ谷キャンパスでも展示会を開いた
- ・大原社会問題研究所の2019年度（第2回）の質保証委員会が3月25日に開かれ、大原社研のステイタス・研究所としての特質のアピール、研究所の大学院教育へのかかわり、国際交流の推進などの意見が出された。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

大原社会問題研究所は、国際労働機関駐日事務所と共催で第32回国際労働シンポジウム「ILO（国際労働機関）と日本—100年の歴史と未来の仕事」を共催し、その他にもフォーラムや月例研究会を開催するなど、例年通りの実績を残すことができている。加えて、研究所100周年記念行事の一環として『大原社会問題研究所100年史』の刊行および所蔵資料の展示とその図録の作成は、研究所の存在を社会に向けて周知する効果が期待できる。

質保証活動については、質保証委員会が開催されることで改善が見られるものの、外部評価などの評価体制を構築、整備するなど、引き続き検討が望まれる。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2019年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

①第32回国際労働問題シンポジウムは、「ILO（国際労働機関）と日本——100年の歴史と仕事の未来」

11月11日に大阪市中央公会堂（大阪市北区）で標記のシンポジウムをILO駐日事務所と共催で開催した。ILOと大原社会問題研究所は、2019年にともに創立100周年を迎えた。そのため、国際労働問題シンポジウムも趣向を変え、例年法政大学ボアソナードタワースカイホールで実施しているシンポジウムを、大原社会問題研究所誕生の地である大阪で実施し、129人が参加した。田口晶子ILO駐日代表が「2019年第108回ILO総会について」報告し、基調講演「ILOと日本」（吾郷眞一立命館大学衣笠総合研究機構教授／九州大学名誉教授／ILO条約勧告適用専門家委員会委員）と個別報告「ILO第1号条約と労働時間問題」（石井聡近畿大学経済学部教授）、「国際労働会議代表問題と大原社会問題研究所」（榎一江法政大学大原社会問題研究所教授）をふまえ、パネル・ディスカッションを行った。

②大原社研シネマ・フォーラム

「大原社研シネマ・フォーラム」（第11回）は、11月28日（木）に多摩キャンパス・エッグドーム5階ホールにて開催された。映画「SEED～生命の糧～」の上映後、島本美保子社会学部教授による解説、北原瞬氏と島本教授による対談が行われた。北原氏は社会学部の卒業生で、神奈川県愛川町で「有機農園けのひ」を経営する立場から、有機野菜や伝統的な品種を消費者に受け入れてもらう難しさについてお話し下さった。参加者は97人と盛況で（前年度68人）、うち学部学生は37人（前年度36人）であった。参加者には北原氏が声をかけてくださった同業者や顧客の方も多く、地域社会に開か

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

れたイベントを実現することができた。

③月例研究会

毎月1回開催する月例研究会の活性化を図るため積極的な企画運営を行うことによって、研究所内外の報告者を得て、多彩なテーマで研究会を開催した。なお、各月例研究会の概要については、『大原社会問題研究所雑誌』に記載されている。

- ・4月13日(土)「『史学史における日本政治史——分化の検討と現在の課題』(報告者: 米山忠寛客員研究員)
- ・5月29日(水)「『日本型市民社会』の持続と変容——1970年代以降の消費者団体の発展過程を中心に」(報告者: 大和田悠太兼任研究員)
- ・6月26日(水)「無料低額診療事業の歴史と現状」(報告者: 阿川千尋嘱託研究員/日本女子大学社会福祉学科学術研究員)
- ・7月24日(水)「戦時下の協調会について——『社会政策研究会記録』を中心に」(報告者: 山本和重東海大学文学部教授)
- ・9月26日(木)「書評コメント『日本社会党・総評の軌跡と内実——20人のオーラル・ヒストリー』」(評者: 梅崎修法政大キャリアデザイン学部教授)
- ・10月18日(金)「ギャラリートーク(展示解説)」(報告者: 榎一江専任研究員「100周年記念展示および特別展示について」、立本紘之兼任研究員「堺家・近藤家関係資料について」、伊東林蔵兼任研究員「稀観書について」、伊東久智兼任研究員「月島調査・水平社について」)
- ・11月20日(水)「キリスト教における「家族主義」への一考察——キア神学の観点から」(報告者: 堀江有里客員研究員)
- ・12月11日(水)「深川正夫の労務管理思想とその実践——三井三池労務管理から大日本産業報国会参画へ」(報告者: 横山尊九州大学大学院比較社会文化研究院特別研究者)
- ・2020年1月29日(水)「『青年』運動史研究と男性史研究の架橋——第一次大戦後における学生社会運動を事例として」(報告者: 伊東久智千葉大学大学院人文科学研究院助教)
- ・3月25日(水)「『日本労働年鑑』の100年—内容と構成は時代をどのように反映したのか」(報告者: 鈴木玲専任研究員)

④HOSEIミュージアムプレ企画「大原社会問題研究所創立100周年・法政大学合併70周年記念特別展示 社会問題研究のフロントランナー——研究所の創立から合併まで」

10月1日から10月20日までの間法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー14階 博物館展示室で標記の展示会が実施された。この展示は、1919年の研究所創設から1937年の東京移転を経て、1949年に法政大学と合併するまでの研究所の活動に焦点を当て、当時の研究員が収集した貴重な洋書や1918年の米騒動資料、月島調査や水平社、堺利彦に関する資料など現在の所蔵資料を通して、社会問題の解決を目指したフロントランナーの姿に迫るものであった。開催中に199人が来場した。

⑤2019年度に活動が行われた大原社研専任研究員、兼担研究員主催の研究会、研究プロジェクト:

環境・労働問題研究会、女性労働研究史研究会、大原社会政策研究会、社会問題史研究会、無産政党資料研究会、環境・市民活動アーカイブズ資料整理研究会、冷戦期、ソ連・東欧社会主義圏と西側世界の文化・学术交流に関する史的考察プロジェクト、貧困と世論プロジェクト、日本資本主義論争の現代資本主義的位相—ポスト(68年)における諸概念の再組織化—プロジェクト、労働組合法上の「労働者」に関する歴史的総括と新たな解釈の可能性プロジェクト、子どもの労働と貧困プロジェクト

⑥上記以外に、研究所創立100周年記念事業の一環として、大原社研の専任研究員が実行委員会を構成して、社会政策学会第139回(2019年度秋季)大会を2019年10月19日、20日に市ヶ谷キャンパスで開催し、303人が参加した。なお、学会の開催に当たっては、法政大学より学会開催補助費を得た。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・国際労働問題シンポジウム、シネマ・フォーラム、展示のチラシ、月例研究会の概要を記録した『大原社会問題研究所雑誌』、社会政策学会2019年秋季大会プログラム

②対外的に発表した研究成果(出版物、学会発表等)

※2019年度に研究所(センター)として刊行した出版物(発刊日、タイトル、著者、内容等)や実施した学会発表等(学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等)の詳細を記入。

①『日本労働年鑑』第89集、2019年版(旬報社6月25日、527頁): 研究所所員(所長、副所長、専任研究員、一部の兼任研究員)から構成される編集委員会が校正・編集作業、本文執筆(序章、一部の章および節)を行った。年鑑は、2つの特集と、5つの部(労働者経済と労働者生活、経営労務と労使関係、労働組合組織と運動、労働組合と政治・社会運動、労

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

働・社会政策)から構成されている。第89集の特集は、「長時間労働問題の現在」と「社会保障制度改革と福祉の市場化」であった。

②『大原社会問題研究所雑誌』(2019年4月号～2020年3月号、9月・10月は合併号)法政大学出版局：本雑誌の編集委員会は、所長、専任研究員、兼担研究員より構成されている。編集委員会は、2ヵ月に一回開かれ、雑誌編集計画、特集案、査読論文の状況、書評本選定について審議する。

2019年度に刊行された雑誌の特集は以下のとおり。4月号「第31回国際労働問題シンポジウム 持続可能な開発目標(SDGs)とディーセント・ワーク」、5月号「朝鮮三・一独立運動100年」その歴史像の再検討——民族運動史の新たな可能性を探る(1)」、6月号「朝鮮三・一独立運動100年」その歴史像の再検討——民族運動史の新たな可能性を探る(2)」、7月号「「人手不足」と外国人労働者」、8月号「薬害スモン関係資料の整理と活用」、9・10月号「大原社会問題研究所創立100周年・法政大学合併70周年記念シンポジウム 社会問題の現在」、11月号「イギリスの福祉改革と〈排除〉」、12月号「経済学部の成立と日本の学知」、1月号「働き方改革関連法の問題点と課題」、2月号「東アジア福祉レジームとダブルケア(1) 東アジア比較と計量分析」、3月号「東アジア福祉レジームとダブルケア(2) 構造的葛藤と制度的不正義」。

③法政大学大原社会問題研究所叢書(法政大学大原社会問題研究所編『大原社会問題研究所100年史』、法政大学出版局、2020年3月30日、本文223頁、附録63頁)：本叢書は、1919年2月の大原社会問題研究所の創立から2019年までの研究所100年の歴史を記録したものである。大原社研は、すでに30年史、50年史を刊行しているが、100年史は1969年以降の研究所の諸活動の歴史を叙述するとともに、30年史、50年史ではカバーされなかった研究所や研究所に関する人物に関する最近の研究成果も内容に反映させた。

④『法政大学大原社会問題研究所 創立100周年記念展示』(図録)：同図録は、研究所入り口に設けられた展示スペースで行われた「創立100周年記念展示」の第1回～第8回で展示された所蔵資料(特別展を除く)のすべてのタイトルと写真を掲載し、各展示の解説を和文、英文で記述したもので、9月30日に法政大学大原社会問題研究所社会問題史研究会編で刊行された(総ページ数51頁)。

(研究所研究員〔専任研究員および兼担研究員である副所長〕の主要な個人業績)

鈴木玲専任研究員(所長)

(論文)

・「企業別組合の公害問題への対応と住民運動との関係—富士市の公害問題を事例として」『日本労働社会学会年報』第30号(2019年)、26～49頁。

・「大原社研の100年とILOの100年」『Work & Life 世界の労働』(2019年第6号、日本ILO協議会)、2～8頁。

(学会報告)

・“Politicization of Commemorative Events of Atomic Bomb Victims,” 50th Annual Conference of the International Association of Labour History Institutions (IALHI)、2019年9月11～14日にスペイン・マドリッド近郊のAlcala de Henaresで開催。

・”Factors Behind the Occurrence of *Karojisatsu*,” Labor and Employment Relations Association 71st Annual Meeting、アメリカ・オハイオ州クリーブランドで2019年6月13～16日に開催。

鈴木宗徳兼担研究員(副所長)

(論文)

・「福祉ショービニズムとコンディショナリティ——イギリス連立政権期の政策と世論をめぐって」『大原社会問題研究所雑誌』733、2019.11、19～27頁。

榎一江専任研究員

(論文)

・「大原社会問題研究所と初期社会調査」(特集「経済学部の成立と日本の学知」)『大原社会問題研究所雑誌』734、2019年12月、58-76頁

(書評)

・「石井香江『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか——技術とジェンダーの日独比較社会史——』歴史学研究会『歴史学研究』987、2019年9月、53-56頁

・「栗屋利江・井上貴子編『インド ジェンダー研究ハンドブック』政治経済学・経済史学会『歴史と経済』245、2019年

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

10月、47-50頁

・「佐々木啓著『「産業戦士」の時代——戦時期日本の労働力動員と支配秩序』『日本歴史』吉川弘文館、862、2020年3月、101-103頁

・“Review of *Chikako Katō, Kindai Nihon no Kokumin Tōgō to Jendā (National Integration and Gender in Modern Japan)*”, Nobuko OkudaTetsuhiko Takai eds. *Gender and Family in Japan*, Part of the Monograph Series of the Socio-Economic History Society, Japan book series (MSSEHSJ), Springer, 2019, 131-135

〈解説〉

・「全造船機械関係資料について」『大原社会問題研究所雑誌』730、2019年8月、80-82頁

〈報告その他〉

・報告「大原社会問題研究所と初期社会調査」、政治経済学・経済史学会春季総合研究会「経済学部の成立と日本の学知」（2019年6月15日、於東京大学）

・報告「国際労働会議代表問題と大原社会問題研究所」、ILO・大原社会問題研究所創立100周年記念第32回国際労働問題シンポジウム「ILO(国際労働機関)と日本—100年の歴史と仕事の未来」（2019年11月11日、於大阪中央公会堂）

・コメント、法政大学江戸東京研究センター「テクノロジーとアート」研究プロジェクト主催「東京の京友禅」（2020年1月25日、於法政大学）

藤原千沙専任研究員

〈論文〉

「子育ての生活資源保障に関する研究——「雇用を通じた生活保障」と母子福祉」（東京大学大学院経済学研究科博士学位論文）2020年3月

清水善仁専任研究員

〈論文〉

・「近現代日本の公害史研究と公害関係資料」『大倉山論集』第66輯、2020年、167-195頁。

〈学会・研究会での報告〉

・「全史料協関東部会定例研究会300回のあゆみ」（全史料協関東部会第301回定例研究会、2019年8月8日）。

〈その他〉

・「全史料協関東部会定例研究会300回のあゆみ」『アーキビスト』第93号、2020年、10-13頁。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・刊行物の現物

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2019年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2019年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

・社会労働問題分野の多くの研究論文・文献が『大原社会問題研究所雑誌』掲載論文を引用・参照しているが、数は把握していない。また、研究所ウェブサイト公開されている雑誌バックナンバーの論文は、多くの人にダウンロードされているが、ダウンロード数は把握していない。

・『日本労働年鑑』は多くの研究者、一般市民に利用されているが、論文の引用等は把握していない。

・2018年度叢書の書評：五十嵐仁・木下真志／法政大学大原社会問題研究所編『日本社会党・総評の軌跡と内実』、評者、梅崎修、『大原社会問題研究所雑誌』737号、2020年3月。

・2018年度叢書『日本社会党・総評の軌跡と内実』（旬報社）が第10回社会理論学会研究奨励賞（2019年度）を受賞した。

・『法政大学大原社会問題研究所 創立100周年記念展示』（図録）は、大原社研が加盟するThe International Association of Labour History Institutions (IALHI)の各国の加盟機関にも送付したところ、送付を受けたいくつかの機関から大原社研の所蔵資料に関心を示したメールがあった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・海外の加盟機関からの感想メール

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

大原社会問題研究所の2019年度（第2回）の質保証委員会が3月25日に開かれた。委員会では、大原社研のステイタス・研究所としての特質のアピールが必要なこと、研究所の大学院教育へのかかわり、国際交流の推進、閲覧者に対するサービス内容等の意見が出された。質保証委員会の報告書は4月の研究所運営委員会（メール審議）で報告されたが、報告書に基づいた議論は運営委員会が通常開催できるようになった段階で行う予定。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・質保証委員会の報告書

⑤ 科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2019年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

（19年度に採択を受けたもの：研究代表者で採択されたもののみ記載）

- ・榎一江：2019年度基盤研究（C）一般「富岡製糸場における女性労働環境の変容に関する史的研究」（2019～21年度）（19年度、100万円）
- ・藤原千沙：2019年度 基盤研究（C）一般「地方自治体のひとり親家族政策に関する研究」（2019～22年度）（19年度、40万円）
- ・清水善仁：基盤研究（C）（一般）「公害関係資料の適切な管理と公開に関する研究：アーカイブズ学の観点から」（2019～2021年度）（19年度、80万円）
- ・鈴木宗徳：基盤研究（C）一般「福祉スティグマの実態とその背景にある保守イデオロギーについての総合的研究」（2017～19年度）（19年度、60万円）
- ・米山忠寛（客員研究員）若手研究「昭和戦時期の体制秩序と戦時平時の政治経済体制の総合的研究」2019～2021年度（19年度、100万円）
- ・堀江有里（客員研究員）：基盤研究（C）「日本におけるキア神学の文脈化をめぐる研究—『解放の神学』アプローチの可能性」（2017～19年度）（19年度、100万円）

（19年度に応募したもの）

- ・鈴木玲：2019年度 基盤研究（C）一般「日米の労働運動の職業病問題への対応に関する研究」採択、（20年度、50万円）
- ・鈴木宗徳：基盤研究（C）一般「ワークフェア政策の展開と貧困をめぐる表象の研究——イギリス福祉改革を事例として」（不採択）
- ・金美珍：2020年度 若手研究 「韓国ソウルにおける「新しい労働運動組織」を支える社会的基盤に関する研究」採択、（20年度、90万円）

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・「科研費交付決定者一覧」研究開発センターホームページ

（2）長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・19年度は、研究所創立100周年記念の一環で重要な位置をしめる『大原社会問題研究所100年史』を刊行した。 ・前年度から始まった「創立100周年記念展示」を19年度も継続し（第5回～8回および環境アーカイブズの特別展）、展示した所蔵資料（特別展を除く）の図録を作成した。 ・HOSEI ミュージアムプレ企画「大原社会問題研究所創立100周年・法政大学合併70周年記念特別展示 社会問題研究のフロントランナー——研究所の創立から合併まで」をHOSEI ミュージアムプレ企画として市ヶ谷キャンパスで実施し、学内外に研究所の所蔵資料とその意味をアピールすることができた。 	1.1①、②

（3）問題点

内容	点検・評価項目
2019年10月より研究業務補助員制度が始まり、大原社研の閲覧・資料整理業務を行ってきた事務嘱託職員が、研究業務補助員に移行した。研究業務補助員は、法政大学の他キャンパスに出張でき	1.1①

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

るようになったが、研究所が求めてきた学外における業務やアーカイブズ学等の研修の機会を認めることについては、規程化されなかった。また、依然として研究所の基幹的な業務の多くを更新上限の定めのある事務嘱託職員が担っている体制は、その対内・対外的責任の重さを考えると改善が必要である。

【この基準の大学評価】

大原社会問題研究所の研究・教育活動実績については、国際シンポジウムを共催し、1件のフォーラム、10回の月例研究会、6つの専任研究員が主催する研究会、5つの兼任研究員が主催する研究プロジェクトを実施しており評価できる。前述の100年史の刊行や展示と図録の作成のほか、「大原社会問題研究所創立100周年・法政大学合併70周年記念特別展示 社会問題研究のフロントランナー——研究所の創立から合併まで」を、HOSE Iミュージアムのプレ企画として市ヶ谷キャンパスで開催したことは、本学を代表する研究所の一つとして、学内外にアピールすることができたと思われる。

研究成果の対外的発表については、図書、図録をそれぞれ1冊刊行し、研究所所員が『日本労働年鑑』の編集・執筆に関わり、11冊の雑誌を編集・発行した。専任・兼任研究所員は、6編の論文を刊行し、5回の学会・研究会での報告を行なった。研究成果に対する社会的評価としては、2018年度叢書『日本社会党・総評の奇跡と内実』（旬報社）が第10回社会理論学会研究奨励賞（2019年度）を受賞したことは、当研究所の研究力を広く社会に周知するという観点から特筆に値する。ただし、論文の被引用数や研究所ウェブサイトの閲覧件数、掲載コンテンツのダウンロード件数などの把握に向けて努力することが望まれる。

外部からの組織評価については、内部に設置された質保証委員会が点検やフィードバックを行なっている点は評価できるが、組織に対する客観的な外部評価の導入を検討することも期待される。

科研費等の外部資金の応募・獲得状況は、2019年に研究所員が研究代表者で採択されたものだけでも4件ののぼり（客員研究員1名を含む）、継続課題と2020年度の新規採択も5件あり、高く評価できる。

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的	
1	中期目標	大原社会問題研究所は、創立者大原孫三郎の「社会問題の解決にはその根本的な調査・研究が必要である」との理念により1919年に設立された。この理念は現在もなお、研究所の活動の指針となっている。この理念をさらに具体化し発展させる。	
	年度目標	研究所の通常業務（『日本労働年鑑』『大原社会問題研究所雑誌』の刊行、資料の整理と公開など）、研究会・研究プロジェクト活動、シンポジウム等開催により社会問題の解決のための調査・研究についての発信を行う。	
	達成指標	『日本労働年鑑』88集（2019年版）、『大原社会問題研究所雑誌』（2019年4月～2020年3月号）の刊行。国際労働問題シンポジウム「ILO（国際労働機関）と日本」の開催や法政大学大原社会問題研究所編『大原社会問題研究所100年史』（仮）の刊行など100周年記念事業の実施。	
		執行部による点検・評価	
	自己評価	S	
	年度末報告	理由	『日本労働年鑑』第89集（2019年版）は、6月25日に刊行された。『大原社会問題研究所雑誌』は、726号（2018年4月号）～737号（2019年3月号）を刊行した。第32回国際労働問題シンポジウム（ILOシンポジウム）は研究所100周年事業の一環として、「ILO（国際労働機関）と日本」をテーマに11月11日に大阪で開催された。もう一つの100周年事業である、『大原社会問題研究所100年史』の刊行が3月末に予定されている。19年度は、共同研究プロジェクト「貧困と世論」、「冷戦期、ソ連・東欧社会主義圏と西側文化・学術交流に関する史的考察」などが新たに立ち上がった。
		改善策	—
No	評価基準	内部質保証	
2	中期目標	研究所の活動についての絶えざる自己点検と改善のため、運営委員会、研究員会議、事務会議、研究員総会などの場で集団的討論と方針の策定を行うとともに、運営委員会メンバーによる質保証委員会を立ち上げる。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度目標	専任研究員による打ち合わせ、および運営委員会、所員会議、事務会議、研究員総会における集団的討論と方針の策定による研究所運営にこころがける。また、前年度に立ち上がった質保証委員会の報告内容を研究所活動に反映させる。	
	達成指標	各種委員会や会議を適正に実施し、前年度と同様に、質保証委員会を年度末に開催する。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	運営委員会は8月を除く毎月開催され、教員の人事、研究活動、研究所の諸事業などについて審議をした。また、2019年3月27日に開かれた質保証委員会のコメントについても審議した。19年度の質保証委員会は、3月25日に開催する予定である。
		改善策	—
No	評価基準	研究活動	
3	中期目標	研究所の定期刊行物である『日本労働年鑑』と『大原社会問題研究所雑誌』を継続して刊行する。	
	年度目標	『日本労働年鑑』89集(2019年版)の編集作業および『日本労働年鑑』90集(2020年版)の刊行準備を行う。『大原社会問題研究所雑誌』(2019年4月～2020年3月号)の特集企画および編集作業を行う。	
	達成指標	『日本労働年鑑』89集(2019年版)の刊行。『大原社会問題研究所雑誌』(2019年4月～2020年3月号)の刊行。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
自己評価		S	
理由		『日本労働年鑑』第89集(2019年版)は、6月25日に刊行された。『大原社会問題研究所雑誌』726号(2019年4月号)～737号(2020年3月号)が刊行された。	
改善策		—	
No	評価基準	研究活動	
4	中期目標	研究所創立100周年に関連する研究プロジェクト(『大原社会問題研究所100年史』(研究所叢書)、『大原社会問題研究所雑誌』特集号、所蔵資料の利用に基づいた論文集(研究所叢書)の刊行など)を進める。	
	年度目標	100年史編纂委員会、100周年記念事業準備委員会を開催して『大原社会問題研究所100年史』の刊行準備を進める。また、2019年3月20日に行われた100周年記念シンポジウム「社会問題の現在」の記録・報告集を『大原社会問題研究所雑誌』特集号で掲載する。	
	達成指標	・法政大学大原社会問題研究所編『大原社会問題研究所100年史』(仮)の刊行。刊行とあわせて、研究所ウェブサイトの「100周年サイト」を拡充する(『大原社会問題研究所雑誌』や『日本労働年鑑』の刊行の歴史に関するコンテンツなどを掲載)。 ・『大原社会問題研究所雑誌』100周年記念シンポ特集号(9・10合併号)の刊行。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
自己評価		A	
理由		・『大原社会問題研究所100年史』の刊行準備を進め、複数の研究員で初校、再校を終えた。 ・『大原社会問題研究所雑誌』9・10月合併号は、「大原社会問題研究所創立100周年・法政大学合併70周年記念シンポジウム 社会問題の現在」の特集を組み、19年3月20日に行われたシンポジウムの報告を記録した。 ・研究所ウェブサイト「100周年サイト」の「100年史資料編」に「大原社会問題研究所雑誌」、「IALHI」、「環境アーカイブス」を掲載した。当初予定していた『日本労働年鑑』の刊行の歴史のコンテンツは、現在準備中で2020年度に掲載できる予定である。	
改善策		『日本労働年鑑』の歴史についての解説のコンテンツを「100周年サイト」に掲載するために準備を進める。	
No	評価基準	研究活動	
5	中期目標	研究会・研究プロジェクトは、「環境と労働」「貧困と労働」「文化と労働」などの社会問題と労働問題の接点を捉えたテーマに取り組み、研究活動に参加する研究者の分野の裾野を広げ	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		る。	
	年度目標	「環境・労働問題研究会」「子どもの労働と貧困プロジェクト」など社会問題を捉えた研究活動に継続して取り組む。環境と労働をテーマとした2021年度叢書の刊行準備を進める。	
	達成指標	「環境・労働問題研究会」を開催して、20年度叢書の内容を具体化する。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	「貧困と世論」、「冷戦期、ソ連・東欧社会主義圏と西側文化・学術交流に関する史的考察」研究プロジェクトなどが新たに立ち上がった。「環境・労働問題研究会」の3回の開催と1回の打ち合わせで、叢書の執筆者と各章の内容を決めた。
		改善策	—
No	評価基準	研究活動	
6	中期目標	海外の学会や研究組織（労働史研究機関国際協会[IALHI]、国際社会学会労働運動研究委員会[ISA RC44]、ハーバード大学ライシャワー日本研究所など）との連携を強め、共同研究の可能性などを模索する。	
	年度目標	労働史研究機関国際協会や国際社会学会労働運動研究委員会の大会に参加することで国際交流を促進する。	
	達成指標	9月にスペインで開催される労働史研究機関国際協会大会への研究員の参加。その他の国際学会への研究員の参加。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	・労働史研究機関国際協会大会（IALHI）第50回大会が2019年9月11～14日にスペイン・マドリッド近郊のAlcala de Henaresで開催され、鈴木所長が参加した。鈴木所長は大会テーマに沿って、1950年代後半から60年代前半の日本の原水爆禁止運動内の政治的対立と分裂について研究所所蔵資料を使い報告した。欧州を中心とした労働史アーカイブズ関係者とも交流をした。 ・イタリアのABMO (Archivio Biografico del Movimento Operaio) によるコミンテルン・プロジェクトの成果『コミンテルン100周年記念人物伝（1919-1923）』がミラノで刊行された。大原社会問題研究所は、このプロジェクトに協力し、日本から初期コミンテルンに参加した人物の評伝を寄稿した。
		改善策	—
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
7	中期目標	所蔵資料の整理を進め、整理した資料をデータベース等で公開することで、研究者や市民の研究調査活動に貢献する。	
	年度目標	専任研究員の下で兼任研究員が資料整理を進める。	
	達成指標	・産別会議資料（復刻事業との関連）、権田保之助資料、山岸章資料、環境アーカイブズ資料を整理・公開する。 ・100周年記念展示（研究所内での資料展示および市ヶ谷キャンパスでのHOSEIミュージアムプレ企画展示）を行う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		・3点の資料群を公開し、1点の資料群の整理を終了した。環境アーカイブスでは4点の資料群を公開した。 ・「創立100周年記念展示」（研究所の常設スペースでの企画展示）およびHOSEIミュージアムプレ企画展示（市ヶ谷キャンパス）を予定通り実施した。	
	改善策	—	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
8	中期目標	「産別会議資料」など貴重な資料群の復刻事業を進める。	
	年度目標	「産別会議資料」の復刻（柏書房、2019年秋から全4期、4年間にわたりマイクロフィルム	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		として刊行予定)と『社会民衆新聞』『社会大衆新聞』復刻(三人社、全5巻、別冊1)の準備(資料整理、解題執筆)を進める。
	達成指標	予定通りに資料の復刻版を刊行する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	・柏書房より刊行予定の産別会議資料は、全4期を4年間にわたりマイクロフィルムで刊行する計画で、すでに第1期分の資料29箱分の出版社への引き渡しを完了し、2019年秋から刊行開始の予定であったが、遅れている。 ・2020年1月、『社会民衆新聞・社会大衆新聞復刻版』第1回配本として、第1巻『社会民衆新聞1927～1929』、第2巻『社会民衆新聞1929～1932』が三人社より刊行された。
	改善策	産別会議資料の復刻版が確実に刊行されるようにフォローする。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	研究所創立100周年事業を進め、研究所の活動を社会的にアピールする。
	年度目標	・2019年度叢書として、法政大学大原社会問題研究所編『大原社会問題研究所100年史』(仮)を刊行する。 ・HOSEIミュージアムプレ企画「大原社会問題研究所100周年記念・法政大学合併70周年記念展示」(市ヶ谷キャンパス、BT14階展示室、2019年10月1日～20日) ・社会政策学会秋季大会の開催(市ヶ谷キャンパス、10月19～20日) ・国際労働問題シンポジウム「ILO(国際労働機関)と日本」の開催(11月11日、於:大阪) ・「創立100周年記念展示」の図録を作成する。
	達成指標	叢書と図録を刊行するとともに、100周年記念として企画しているイベントを実施する。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
年度末報告	理由	・2019年度研究所叢書『大原社会問題研究所100年史』は2020年3月末に刊行予定である。 ・HOSEIミュージアムプレ企画「大原社会問題研究所創立100周年・法政大学合併70周年記念特別展示 社会問題研究のフロントランナー——研究所の創立から合併まで」が10月1日から10月20日までの間法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー14階 博物館展示室で実施された。開催中に199人が来場した。 ・第32回国際労働問題シンポジウム「ILO(国際労働機関)と日本」が19年11月11日に大阪中央公会堂で開催され、約130人が参加した。 ・研究所の専任研究員が実行委員となり、社会政策学会第139回大会が19年10月19、20日に法政大学市ヶ谷キャンパスで開催され、303人が参加した。 ・研究所の「創立100周年記念展示」の図録を作成した。第1回～第8回の展示(特別展を除く)のタイトルと写真、各展示の解説を和文、英文で記録したもので、9月30日に刊行された(法政大学大原社会問題研究所社会問題史研究会編)。
	改善策	—
No	評価基準	社会連携・社会貢献
10	中期目標	大原社研シネマ・フォーラムなど、学部生や地域住民を対象とした研究所主催のイベントを実施する。
	年度目標	大原社研シネマ・フォーラムを企画し、学部生の参加促進をはかる。
	達成指標	第11回大原社研シネマ・フォーラムの実施。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
年度末報告	理由	「大原社研シネマ・フォーラム」(第11回)は、11月28日(木)に多摩キャンパス・エッグドーム5階ホールにて開催された。映画「SEED～生命の糧～」の上映後、島本美保子社会学部教授による解説、北原瞬氏と島本教授による対談が行われた。参加者は97人と盛況で、うち学部学生は37人であった。
	改善策	—

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【重点目標】

前年度に続き研究所創立 100 周年事業を進め、研究所の活動を社会的にアピールする。

目標を達成するための施策：100 周年記念事業委員会・100 年史編纂委員会を開催して、国際労働問題シンポジウム「ILO（国際労働機関）と日本」の準備、研究所叢書『大原社会問題研究所 100 年史』の刊行準備、となどの 100 周年記念事業を遂行する。

【年度目標達成状況総括】

研究所 100 周年記念事業の目標については、基本的に計画通りに達成でき、社会的にアピールすることができた。その理由として以下の 5 点を挙げる。(1)「創立 100 周年記念展示」(研究所内常設)、HOSEI ミュージアム企画「大原社会問題研究所創立 100 年・法政大学合併 70 周年特別展示—社会問題研究のフロントランナー —研究所創設から合併まで」(市ヶ谷キャンパス BT14 階博物館展示室、10 月 1 日～20 日)を予定通り実施した。(2)研究所の「創立 100 周年記念展示」の図録を作成した。(3)社会政策学会第 139 回大会の法政大学での開催、(4)第 32 回国際労働問題シンポジウム (ILO シンポジウム)が「ILO (国際労働機関)と日本」をテーマに 11 月 11 日に大阪で開催された。(5)19 年 3 月 20 日の「大原社会問題研究所創立 100 周年・法政大学合併 70 周年記念シンポジウム 社会問題の現在」を記録した『大原社会問題研究所雑誌』を刊行した (9・10 月合併号)。(6)『大原社会問題研究所 100 年史』が 3 月末に刊行される。

【2019 年度目標の達成状況に関する大学評価】

大原社会問題研究所の 2019 年度目標に対する年度末における自己評価は理念・目的が S、内部質保証が S、研究活動 4 項目のうち 3 項目が S で 1 項目が A、社会貢献・社会連携 4 項目のうち 3 項目が S で 1 項目が A と、十分に達成できている。

研究活動の重点目標である「研究所創立 100 周年事業を進め、研究所の活動を社会的にアピールする」については、創立 100 周年記念展示、その図録作成、社会政策学会第 139 回大会の法政大学での開催、第 32 回国際労働問題シンポジウム共催、「大原社会問題研究所創立 100 周年・法政大学合併 70 周年記念シンポジウム」を記録した『大原社会問題研究所雑誌』の刊行、『大原社会問題研究所 100 年史』の刊行により、十分に達成できている。

IV 2020 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	大原社会問題研究所は、創立者大原孫三郎の「社会問題の解決にはその根本的な調査・研究が必要である」との理念により 1919 年に設立された。この理念は現在もなお、研究所の活動の指針となっている。この理念をさらに具体化し発展させる。
	年度目標	研究所の通常業務 (『日本労働年鑑』『大原社会問題研究所雑誌』の刊行、資料の整理と公開など)、研究会・研究プロジェクト活動、シンポジウム等開催により社会問題の解決のための調査・研究についての発信を行う。ただし、新型コロナウイルス感染症に関する対応のため、年鑑や雑誌の刊行時期の変更や資料整理の公開が延期される場合がある。また、研究会・プロジェクト活動、シンポジウム等のオンライン開催などの対応をとる場合がある。必要に応じて新たな方法を採用し、社会問題の解決のための調査・研究についての発信を行う。
	達成指標	『日本労働年鑑』90 集 (2020 年版)、『大原社会問題研究所雑誌』(2020 年 4 月～2021 年 3 月号)の刊行。毎年、ILO 駐日事務所と共催で行っている国際労働問題シンポジウムが開催できない場合は、別のテーマ (例えば、新型コロナウイルス感染拡大が雇用状況に与えた影響) でオンラインなどによりシンポジウムの開催を実施する。
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	研究所の活動についての絶えざる自己点検と改善のため、運営委員会、研究員会議、事務会議、研究員総会などの場で集団的討論と方針の策定を行うとともに、運営委員会メンバーによる質保証委員会を立ち上げる。
	年度目標	専任研究員による打ち合わせ、および運営委員会、所員会議、事務会議、研究員総会における集団的討論と方針の策定による研究所運営にこころがける。集団的討論の方法は、必要に応じてメール審議やオンライン会議などで対応する。また、18 年度に立ち上がった質保証委員会の報告内容については議論を経たうえで、研究所活動に反映させる。
	達成指標	各種委員会や会議を適正に実施し、前年度と同様に、質保証委員会を年度末に開催する。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

No	評価基準	研究活動
3	中期目標	研究所の定期刊行物である『日本労働年鑑』と『大原社会問題研究所雑誌』を継続して刊行する。
	年度目標	『日本労働年鑑』90集(2020年版)の編集作業および『日本労働年鑑』91集(2021年版)の刊行準備を行う。『大原社会問題研究所雑誌』(2020年4月～2021年3月号)の特集企画および編集作業を行う。
	達成指標	『日本労働年鑑』90集(2020年版)の刊行(6月末を予定)。『大原社会問題研究所雑誌』(2020年4月～2021年3月号)の刊行。
No	評価基準	研究活動
4	中期目標	研究所創立100周年事業を継続し、研究所の活動を社会的にアピールする。
	年度目標	研究所ウェブサイト「100周年サイト」の「100年史資料編」のコンテンツの充実をはかる。
	達成指標	『日本労働年鑑』の刊行の歴史に関するコンテンツを研究所ウェブサイト「100周年サイト」の「100年史資料編」に掲載する。
No	評価基準	研究活動
5	中期目標	研究会・研究プロジェクトは、「環境と労働」「貧困と労働」「文化と労働」などの社会問題と労働問題の接点を捉えたテーマに取り組み、研究活動に参加する研究者の分野の裾野を広げる。
	年度目標	「環境・労働問題研究会」「子どもの労働と貧困プロジェクト」「大原社会政策研究会」など社会問題を広く捉えた研究活動に継続して取り組む。環境と労働をテーマとした2020年度叢書の刊行準備を進める。
	達成指標	「環境・労働問題研究会」のメンバーが執筆する論文集を2020年度叢書として編纂する。
No	評価基準	研究活動
6	中期目標	海外の学会や研究組織(労働史研究機関国際協会[IALHI]、国際社会学会労働運動研究委員会[ISA RC44]、ハーバード大学ライシャワー日本研究所など)との連携を強め、共同研究の可能性などを模索する。
	年度目標	海外の学会や研究機関との直接交流が困難な状況が続く場合は、研究所はオンラインで行われる国際会議に参加し、報告するなど研究所の新たな海外への発信方法を考える。
	達成指標	労働史研究機関国際協会[IALHI]などへの参加。研究所ウェブサイトの英語コンテンツの拡充。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
7	中期目標	所蔵資料の整理を進め、整理した資料をデータベース等で公開することで、研究者や市民の研究調査活動に貢献する。
	年度目標	専任研究員の下で兼任研究員が資料整理を進める。作業は大学構内入構禁止解除後に再開する。
	達成指標	丸子警報器労組関係資料などの公開
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	「産別会議資料」など貴重な資料群の復刻事業を進める。
	年度目標	「産別会議資料」の復刻(柏書房、全4期、4年間にわたりマイクロフィルムとして刊行予定)の準備(資料整理、解題執筆)を進める。
	達成指標	2020年度に第1期の復刻版を刊行する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	大原社研シネマ・フォーラムなど、学部生や地域住民を対象とした研究所主催のイベントを、新型コロナウイルス感染症の問題が終息したことを前提に開催する。
	年度目標	大原社研シネマ・フォーラムを企画し、学生の参加促進をはかる。
	達成指標	第11回大原社研シネマ・フォーラムの実施。
【重点目標】 新型コロナウイルス感染症拡大の対応のため、現在大学が原則入構禁止になっており、いつ頃研究所の通常業務が再開できるか見えない状態となっている。そのなかで在宅勤務のできる作業を進める。具体的には、メールや電話等で連絡が作業が		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

ある程度できる『日本労働年鑑』（第90集、2020年版）と『大原社会問題研究所雑誌』の編集作業と刊行を進める。また、研究会やシンポジウムなどの集会在今後も長い間で開催できない可能性があるため、オンライン開催などの方法を検討する。研究所は2020年に大きく変化すると予想される社会労働問題の動向をフォローして、『日本労働年鑑』や『大原社会問題研究所雑誌』を通じて発信していく。

・研究所業務の諸課題に関して、教職員はオンライン会議により意思疎通を図る。また、運営委員会はメール審議などの方法で意思決定を行う。

・『日本労働年鑑』、『大原社会問題研究所雑誌』の編集作業を、ファイル共有やオンライン上の情報交換などにより進める。

・月例研究会やシンポジウムのオンライン開催をする。

・雇用問題の悪化や労働運動の対応などの社会労働問題の状況の変化を新聞やインターネット等を通じてフォローするプロジェクトを立ち上げ、その成果を2021年の『日本労働年鑑』でまとめる準備をするとともに、適宜『大原社会問題研究所雑誌』を通じて報告する。

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

大原社会問題研究所では、評価基準の理念・目的、内部質保証、研究活動、社会貢献・社会連携について、これまでの達成状況を反映しながら中期目標を設定し、具体的な2020年度の目標と達成指標を掲げており評価できる。とくに、研究活動の達成指標の定期刊行物（『日本労働年鑑』、『大原社会問題研究所雑誌』）の刊行は、新型コロナウイルス感染症に関する臨機応変な対応が求められることを鑑みると、特筆に値する。

社会貢献・社会連携の年度目標および達成指標については、新型コロナウイルス感染症などの社会的なリスクを考慮した慎重な対応が望まれる。

【大学評価総評】

大原社会問題研究所の研究・教育活動は、国際シンポジウムやフォーラムの開催、多数の研究会や研究プロジェクトが実施され、多くの外部研究資金を獲得するなど、活発な活動が実施されており、高く評価できる。19年度は、『大原社会問題研究所100年史』の刊行や、「創立100周年記念展示」所蔵資料の図録の作成、HOSE Iミュージアムプレ企画の実施などが特筆すべき活動であった。

対外的な発表についても、図書・図録の刊行や、研究所の定期刊行物の発行、多数の論文発表や学会等での報告を行っており、優れている。とくに、2018年度叢書『日本社会党・総評の軌跡と内実』（旬報社）が2019年度第10回社会理論学会研究奨励賞を受賞したことは、本研究所の研究力を広く周知したという観点から特筆に値する。ただし、研究成果に対する社会的評価については、書評や受賞等の把握だけでなく、論文の被引用件数やwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツのダウンロード数等の把握が望まれる。

組織評価については、内部の質保証委員会だけでなく外部評価の導入も期待される。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

イオンビーム工学研究所

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

イオンビーム工学研究所は、私立大学における小型加速器を活用した先駆的な研究所の一つとして、多数の論文出版・学会発表に加えて、研究者・学部生・院生に対するシンポジウム、公開セミナー、講演を開催し、小型加速器等主要設備の管理・活用のための放射線取扱講習会等の活動が適切に実施されていることが高く評価できる。一方で、研究所主要設備の老朽化への対応や装置の運用・保守全般を担う技術スタッフ増員のための大型の外部研究資金獲得に向けた対策が課題となっていた。

この解決策の一つとして第三者による点検・評価体制の構築が課題となっていたが、2018年度の終わりに関連分野の専門家らによる評価を実施して頂くなど評価体制構築の確実な進展が見られ評価できる。また、外部資金に関しては、科研費以外の公的研究資金では獲得が3件、科研費は獲得が4件、応募が3件あり、適切な対応がなされていると言える。引き続き、競争的研究資金への応募活動の活性化が期待される。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

昨年度に続き、各種評価から指摘されていた高度化についての取り組みの一つとして、注入用加速器に対する新規スキャナーの開発・導入などの対策を行いより高度な要求へ答えていく。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

イオンビーム工学研究所では、小型加速器を活用し、多数の論文投稿・学会発表による先駆的な研究成果アピールするとともに、主要設備の管理・活用のための活動が実施されている。主要設備の老朽化への対応や装置の運用・保守全般を担う技術スタッフ増員が課題となっていた。この解決策として2018年度に関連分野の専門家による評価体制を構築したこと、および外部資金獲得に対して科研費を含む公的研究資金7件獲得したことが、2019年度評価結果では高く評価されていた。その後、主要設備の管理・活用の高度化に向けて、さらなる競争的研究資金への応募活動の活性化が必要との評価結果に対し、注入用加速器の新規スキャナーの開発・導入などの対策を行い、より高度な要求へ答えていくという対応の成果を期待したい。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2018年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。

・2019年12月18日のシンポジウム開催のため、大学や関連研究機関に案内状、ポスター送付を行い、応用物理学会誌や物理学会誌へ案内の掲載依頼を行った。またホームページへも案内を掲載した。今年度は以下の3名の方に招待講演をお願いした。小林 直人教授(早稲田大学リサーチイノベーションセンター)「戦略的研究開発のあり方と最近の先進光デバイスの動向」、柚木 彰氏(産業技術総合研究所分析計測標準研究部門)「放射線測定器の製品規格に係る国際標準の動向」、徳田 清仁氏(早稲田大学国際情報通信研究センター)「電磁波イメージング技術とその生活安全支援システムへの応用」。一般講演件数は37件で、シンポジウム参加者は82名(学外24名、学内58名)となり、一般講演件数は昨年と同規模であった。またシンポジウムプロシーディングスを刊行した。

・NHKに実験協力した原子衝突実験の内容の一部が高校生向け番組「NHK 高校講座」ベーシックサイエンス ライブラリー 第39回「サイエンスヒストリー ～原子の物語～」の中で使用され、番組ホームページからネット配信されている。

・学内の放射線業務従事者への教育訓練や登録手続き等の協力を行った。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウムに関するポスター、案内状、プログラム、アブストラクト集
 ・刊行物「Proceedings of the 38th symposium on materials science and engineering research center of ion beam technology」

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- ・イオンビーム工学セミナーのポスターや受講者名簿
- ・NHK <http://www.nhk.or.jp/kokokoza/library/tv/basicsscience/archive/chapter039.html>
- ・放射線安全取扱講習会のポスターや受講者名簿、記録ビデオ等

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

<刊行誌>

- 1) 「法政大学イオンビーム工学研究所報告」 No. 39. (2020年2月17日)
- 2) Proceedings of the 38th symposium on materials science and engineering, Research Center of Ion Beam Technology, Hosei University, Dec. 18, 2019.

<論文>

- 1) Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Fumimasa Horikiri, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tomoyoshi Mishima, “Two-Step Mesa Structure GaN p-n Diodes with Low On-resistance, High Breakdown Voltage and Excellent Avalanche Capabilities”, IEEE Electron Device Letters, **41**, No.1 p.123-126 (2020/01). 査読有
- 2) Kenji Shiojima, Tomohiro Sagawa, Fumimasa Horikiri, Yoshinobu Narita, Takehiro Yshida, and Tomoyoshi Mishima, “Effect of Wafer Off-Angles on Defect Formation in Drift Layers Grown on Freestanding GaN substrates”, Phys. Status Solidi B, Vol. **2019**, p. 1900561-1-5 (2019/11). 査読有
- 3) Fumimasa Horikiri, Noboru Fukuhara, Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tomoyoshi Mishima, Masachika Toguchi, Kazuki Miwa, and Taketomo Sato, “Photoelectrochemical Etching Technology for Gallium Nitride Power and RF Devices”, IEEE Transactions on Semiconductor Manufacturing, Vol. **32**, No.4, p. 489-495 (2019/11). 査読有
- 4) Naomi Asai, Hiroshi Ohta, Fumimasa Horikiri, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, and Tomoyoshi Mishima, “Impact of damage-free wet etching process on fabrication of high breakdown voltage GaN p-n junction diodes”, Jpn. J. Appl. Phys., Vol. **58**, p. SCCD05 (2019/04). 査読有
- 5) Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Fumimasa Horikiri, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tomoyoshi Mishima, “4.9 kV breakdown voltage vertical GaN p-n junction diodes with high avalanche capability”, Jpn. J. Appl. Phys., Vol. **58**, p. SCCD03 (2019/04). 査読有
- 6) Kenji Shiojima, Masataka Maeda, and Tomoyoshi Mishima, “Scanning internal photoemission microscopy measurements of n-GaN Schottky contacts under applying voltage”, Jpn. J. Appl. Phys., Vol. **58**, p. SCCD02 (2019/04). 査読有
- 7) V. Osipov, N. Romanov, K. Kogane, H. Touhara, Y. Hattori, K. Takai, “Intrinsic infrared absorption for carbon-fluorine bonding in fluorinated Nanodiamond”, Mendeleev Commun., Vol. **30** 1-4 (2020). 査読有
- 8) V. Osipov, F. Treussart, S. Zargaleh, K. Takai, F. Shakhov, B. Hogan and A. Baldycheva, “Photoluminescence from NV- Centres in 5 nm Detonation Nanodiamonds: Identification and High Sensitivity to Magnetic Field”, Nanoscale Res. Lett., Vol. **14**, 279 (2019). 査読有
- 9) V. Osipov, D. Boukhalov, K. Takai, ” Non-chelate noncovalent bonding of copper atoms on the nitrogen containing sites of hydrogenated diamond surface”, Mendeleev Commun., Vol. **29** 452-454 (2019). 査読有
- 10) K. Kubota, T. Nishimura, K. Kuriyama, T. Nakamura, “Evaluation of lattice displacement and electrical property of Zn-ion implanted GaN by Rutherford backscattering spectrometry”, Nucl. Inst. Methods in Physics Research B, Vol. **451**, 70-72 (2019). 査読有
- 11) S. Sato, M. Deki, T. Nakamura, T. Nishimura, D. Stavrevski, A. D. Greentree, B. C. Gibson, T. Ohshima, “Photoluminescence properties of praseodymium ions implanted into submicron regions in gallium nitride”, Jap. J. Appl. Phys., Vol. **58**, 051011 (2019). 査読有
- 12) M. Yoshino, K. Sugamata, K. Ikeda, T. Nishimura, K. Kuriyama, T. Nakamura, “Ion implanted GaN MISFETs fabricated in Mg implanted layers activated by conventional rapid thermal annealing”, Nucl. Inst. Methods in Physics Research B, Vol. **449**, 49-53 (2019). 査読有
- 13) M. Yoshino, Y. Ando, M. Deki, T. Toyabe, K. Kuriyama, Y. Honda, T. Nishimura, H. Amano, T. Kachi, T.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- Nakamura, “Fully Ion Implanted Normally-Off GaN DMOSFETs with ALD- Al_2O_3 Gate Dielectrics”, *Materials*, Vol. **12**, 689 (2019). 査読有
- 14) Z. Yuan, T. Nakamura, S. Chinnathambi, Y. Pu, N. Shirahata, K. Matsuishi “Facile Formation of Stable Water-Dispersed Luminescent Silicon Nanocrystals by Laser Processing in liquid: Toward Fluorescent Labeling for Bio-imaging”, *Chem. Nano. Mat.*, Vol. **5**, 1137 (2019). 査読有
- 15) K. Sawada, T. Nakamura, “Dynamics of Resonance Energy Transfer Process from Tb^{3+} to Eu^{3+} in Ga_2O_3 Phosphor”, *J. Lum.*, Vol. **215**, 116616 (2019). 査読有
- 16) K. Koshida, T. Nakamura, “Emerging Functions of Nanostructured Porous Silicon - With a focus on the emissive properties of photons, electrons, and ultrasound -”, *Frontiers Chem.*, Vol. **7**, 273 (2019). 査読有
- 17) S. Sakurai, T. Nakamura, S. Adachi, “Unusual Near-infrared Luminescence from Ti-doped $\text{MgSiF}_6 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ Powder”, *J. Lum.*, Vol. **211**, 157 (2019). 査読有
- 18) Eiichi Inami, Takamasa Ishigaki and Hironori Ogata, Sol-gel processed Nb_2O_5 thin-film for a scaffold layer in perovskite solar cells”, *Thin Solid Films*, Vol. **674**, 7-11 (2019). 査読有
- 19) Wei Gong, Bunshi Fugetsu, Zhipeng Wang, Takayuki Ueki, Ichiro Sakata, Hironori Ogata, Fei Han, Mingda Li, Lei Su, Xueji Zhang, Mauricio Terrones, Morinobu Endo, “Thicker carbon- nanotube/manganese-oxide hybridized nanostructures as electrodes for creation of fiber-shaped high-energy-density supercapacitors”, *Carbon*, Vol. **154**, 169-177 (2019). 査読有
- 20) Ishigaki Takamasa, Nakada Yusuke, Tarutani Naoki, Uchikoshi Tetsuo, Tsujimoto Yoshihiro, Isobe Masaaki, Ogata Hironori, Zhang Chenning, Hao Dong, “Enhanced visible light photocatalytic activity of anatase-rutile mixed-phase nano-size powder given by high-temperature heat treatment”, *Royal Society Open Science*, Vol. **7**, 191539 (2019), <http://dx.doi.org/10.1098/rsos.191539>. 査読有
- 21) Yosuke KATAOKA, Hironori OGATA, Seiichiro KONO and Yusuke MORIYOSHI, “Molecular Dynamics Simulation on Modulus of Elasticity and Thermal Expansion Coefficient of Sintered Alumina with Bimodal Particle Size Distribution”, *Journal of the Technical Association of Refractories, Japan*, Vol. **40**, [1]18-25 (2020). 査読有
- 22) Ishimatsu, S. Tashiro, T. Kasahara, J. Oshima, J. Mizuno, K. Nakano, C. Adachi, T. Imato “Kinetics of Excimer Electrogenenerated Chemiluminescence of Pyrene and 1-Pyrenebutyricacid 2-Ethylhexylester in Acetonitrile and an Ionic Liquid, Triethylpentylphosphonium Bis(trifluoromethanesulfonyl)imide”, *J. Phys. Chem. B*, Vo. **123** 10825-10836 (2019). 査読有
- 23) 緒方啓典, “セラミックス/ナノカーボン複合材料の高機能化”, *耐火物*, Vol. **71**, 385-387 (2019). 査読有
- <国際会議、国内学会>
- 1) Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Fumimasa Horikiri, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tomoyoshi Mishima, “High breakdown-capability vertical GaN p-n junction diodes”, *Materials Research Meeting 2019 (MRM2019)*, Yokohama Symposia, 2019/12/10-13
- 2) Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Fumimasa Horikiri, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tomoyoshi Mishima, “High Breakdown Voltage Vertical GaN p-n Junction Diodes with Reversible Characteristics”, *The 9th Asia-Pacific Workshop on Widegap Semiconductors (APWS2019)*, OIST Okinawa, 2019/11/10-15
- 3) Kenji Shiojima, Tomohiro Sagawa, Fumimasa Horikiri, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, and Tomoyoshi Mishima, “Effect of Wafer Off-Angles on Defect Formation in Drift Layers Grown on Freestanding GaN substrates”, *2019 International Conference on Solid State Devices and Materials (SSDM2019)*, Nagoya University, 2019/9/2-5
- 4) Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Fumimasa Horikiri, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tomoyoshi Mishima, “High breakdown voltage vertical GaN p-n junction diodes with excellent breakdown capabilities by application of a two-step mesa structure”, *13th International Conference on Nitride Semiconductors 2019 (ICNS-13)*, Bellevue, Washington, USA, 2019/7/7-12
- 5) Fumimasa Horikiri, Noboru Fukuhara, Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida,

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- Tomoyoshi Mishima, Masachika Toguchi, Kazuki Miwa, and Taketomo Sato, “Simple Wet-etching for GaN using an Electrodeless Photo-assisted Electrochemical Reaction with a Luminous Array Film as the UV Source”, 13th International Conference on Nitride Semiconductors 2019 (ICNS-13), Bellevue, Washington, USA, 2019/7/7-12
- 6) Junichi Takino, Tomoaki Sumi, Yoshio Okayama, Masaki Nobuoka, Akira Kitamoto, Masayuki Imanishi, Masashi Yoshimura, Naomi Asai, Hiroshi Ohta, Tomoyoshi Mishima and Yusuke Mori, “Vertical GaN p-n diodes on low dislocation and low resistive GaN wafer produced by OVPE method”, 13th International Conference on Nitride Semiconductors 2019 (ICNS-13), Bellevue, Washington, USA, 2019/7/7-12
- 7) Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Fumimasa Horikiri, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tomoyoshi Mishima, “Impact of Lowering Threading Dislocation Density on Performances of Vertical GaN p-n Junction Diodes”, Compound Semiconductor Week 2019, Kasugano International Forum, Nara, 2019/5/19-23
- 8) Fumimasa Horikiri, Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, and Tomoyoshi Mishima, “The Effect of Tetramethylammonium Hydroxide Treatment on Photoelectrochemically Etched Gallium Nitride Trench Structures”, Compound Semiconductor Week 2019, Kasugano International Forum, Nara, 2019/5/19-23
- 9) T. Nishimura, K. Ikeda, T. Nakamura, T. Kachi, “Effect of Mg ion implantation to GaN substrate under channeling condition”, 23rd International Workshop on Inelastic Ion-Surface Collisions (IISC-23), 17-22 November 2019, Matsue, Japan.
- 10) S. Sato, M. Deki, S. Li, A. D. Greentree, B. C. Gibson, T. Nishimura, T. Ohshima, “Photon emission enhancement of praseodymium ions implanted with GaN nanopillars”, International Conference on Nanoscience and Nanotechnology (ICONN), 9-13 February 2020, Brisbane, Australia.
- 11) M. Ogura, T. Nishimura, H. Kato, T. Makino, S. Yamasaki, “Generation of p-type conductive layer by boron ion implantation into phosphorus-doped n-type diamond”, 30th International Conference on Diamond and Carbon Materials, 8-12 September 2019, Seville, Spain.
- 12) Wenshen Li, Kazuki Nomoto, Zongyang Hu, Tohru Nakamura, Debdeep Jena, Huili Xing, “Single and multi-fin normally-off Ga₂O₃ vertical transistors with a breakdown voltage over 2.6 kV”, 2019 IEEE International Electron Devices Meeting (IEDM), (07-11 December 2019, San Francisco, USA).
- 13) Zongyang Hu, Kazuki Nomoto, Wenshen Li, Riena Jinno, Tohru Nakamura, Debdeep Jena, and Huili (Grace) Xing, “1.6 kV Vertical Ga₂O₃ FinFETs With Source-Connected Field Plates and Normally-off Operation”, 2019 31st International Symposium on Power Semiconductor Devices and ICs (ISPSD) (19-23 May 2019). 10.1109/ISPSD.2019.8757633
- 14) Ryo Nagai, Yosuke Kataoka and Hironori Ogata, “Study on one-dimensional stacking structure of polycyclic aromatic hydrocarbon molecules encapsulated in single-walled carbon nanotubes by molecular dynamics simulations II”, The 57th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium (September 5th., 2019, Nagoya University, Nagoya).
- 15) Hironori Ogata, Masaru Ide, Yuichiro Otsuka, Masaya Nakamura, “Development and properties of novel functional materials using a metabolic intermediate of lignin, 2-pyrone-4,6-dicarboxylic acid”, 1st International Lignin Symposium (September 14th, 2019, Hokkaido University, Sapporo)
- 16) Yosuke Kataoka, Kiyoshi Goto, Hironori Ogata, Yusuke Moriyoshi, “The Compressive Strength of Sintered Alumina by Molecular Dynamics Simulation”, Unified International Technical Conference on Refractories (UNITECR 2019) (October 15th 2019, PACIFICO Yokohama, Yokohama).
- 17) Toshiya Kobayashi, Masato Gocho, Kazunori Ito, Yuki Fukazawa, Ryusuke Umeda and Hironori Ogata, “Fabrication and Properties of Inverted Perovskite Solar Cells with Surface-Treated Hole Transport Layer”, 2019 MRS Fall Meeting (Dec. 2nd. 2019, Boston MA, USA).
- 18) Yuki Fukazawa, Masato Gocho, Kazunori Ito, Toshiya Kobayashi, Ryusuke Umeda and Hironori Ogata, “Evaluation of Durability of Organic-Inorganic Perovskite Compound Films II”, 2019 MRS Fall Meeting (Dec. 4th 2019, Boston MA, USA).
- 19) Hironori Ogata, Tomoaki Nishimura, Ryusuke Umeda, Kazunori Ito, Masato Gocho, Toshiya Kobayashi and Yuki

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- Fukazawa, “Modification of the Electronic Properties of Lead Halide Perovskite Films by Low Energy Ion Irradiation”, 2019 MRS Fall Meeting(Dec. 4th 2019, Boston MA, USA).
- 20) Ryusuke Umeda, Kazunori Ito, Masato Gocho, Toshiya Kobayashi, Yuki Fukazawa and Hironori Ogata, “Fabrication and Characterization of All-Inorganic Lead Halide Perovskite Films”, 2019 MRS Fall Meeting (Dec. 5th 2019, Boston MA, USA).
- 21) Hironori Ogata, Tomoaki Nishimura, Yuki Fukazawa, Masato Gocho, Kazunori Ito, Toshiya Kobayashi, Ryusuke Umeda, “Effect of Low Energy Ion Irradiation on the Optical and Electronic properties of Perovskite Solar Cells”, Materials Research Meeting 2019(MRM2019), (Dec. 12th 2019, Yokohama).
- 22) Toshiya Kobayashi, Masato Gocho, Kazunori Ito, Yuki Fukazawa, Ryusuke Umeda and Hironori Ogata, “Fabrication and properties of inverted perovskite solar cells with surface-treated nickel oxide films”, Materials Research Meeting 2019 (MRM2019), (Dec. 13th 2019, Yokohama).
- 23) Yuki Fukazawa, Masato Gocho, Kazunori Ito, Toshiya Kobayashi, Ryusuke Umeda and Hironori Ogata, “Evaluation of durability of perovskite solar cells with mixed cations and halide anions”, Materials Research Meeting 2019(MRM2019), (Dec. 13th 2019, Yokohama).
- 24) Kazuyuki Takai, Takuya Isaka, Kentaro Tajima, Tomoki Yamashina, “Correlation between Chemical structure and reactivity for GO regarding oxidative amine coupling reaction”, The 11th International Conference on Recent Progress in Graphene Research (RPGR-2019), 6-10, October (2019), Kunibiki Messe, Shimane.
- 25) Yangzhou Zhao, Hiroki Yokata, Haruna Ichikawa, Kazuyuki Takai, “Effects of defect formation in monolayer MoS₂ by low energy Ar⁺ ion beam irradiation”, The 11th International Conference on Recent Progress in Graphene Research (RPGR-2019), 6-10, October (2019), Kunibiki Messe, Shimane.
- 26) Yasushi Ishiguro, Naoko Kodama, Kirill Bogdanov, Alexander Baranov, Kazuyuki Takai, “Layer-number dependence of NCCDW-ICCDW phase transition in 1T-TaS₂”, The 11th International Conference on Recent Progress in Graphene Research (RPGR-2019), 6-10, October (2019), Kunibiki Messe, Shimane.
- 27) Yudai Shigehisa, Yoshinori Obata, Yasushi Ishiguro, Kazuyuki Takai, “Effects of Hydrogen molecule adsorption and defects on the electronic properties of graphene”, MRS Fall Meeting 2019, 1-6, December (2019), Hynes Convention Center, Boston, USA.
- 28) Jianwei Fu, Genki Hirobe, Yasushi Ishiguro, Kazuyuki Takai, “Microfabrication of Graphite by Oxygen plasma etching”, MRS Fall Meeting 2019, 1-6, December (2019), Hynes Convention Center, Boston, USA.
- 29) Kazuyuki Takai, Ryutaro Suzuki, Takuya Isaka, Kentaro Tajima, Tomoki Yamashina, “Identifying chemical structure responsible for the reactivity of GO regarding oxidative amine coupling reaction”, MRS Fall Meeting 2019, 1-6, December (2019), Hynes Convention Center, Boston, USA.
- 30) Yangzhou Zhao, Hiroki Yokata, Haruna Ichikawa, Kazuyuki Takai, “Ion-beam irradiation effects on the structure and electronic properties of MoS₂”, 1&2DM 2020 International Conference, 28-29, Jan. (2020), Tokyo Big Sight, Tokyo.
- 31) Kazuyuki Takai, Yoshinori Obata, Koichi. Kusakabe, Gagus Ketut Sunnardianto, Toshiaki Enoki, Isao Maruyama, Tomoaki Nishimura, Yasushi Ishiguro, “Hydrogen adsorption on atomic vacancies in Epitaxial Graphene toward Hydrogen storage”, 1&2DM 2020 International Conference, 28-29, Jan. (2020), Tokyo Big Sight, Tokyo.
- 32) Masahiro Kawamura, Hiroyuki Kuwae, Takumi Kamibayashi, Juro Oshima, Takashi Kasahara, Shuichi Shoji, Jun Mizuno, “RGB all liquid-based microfluidic quantum dots light-emitting diodes using deep-blue liquid organic semiconductor backlight”, The 33rd IEEE International Conference on Micro Electro Mechanical Systems (MEMS 2020), pp. 1238-1241 (2020年1月21日, Vancouver, Canada).
- 33) Koji Okada, Takuya Nomura, Hiroyuki Kuwae, Jun Mizuno, Takashi Kasahara, “Microfluidic electrogenerated chemiluminescence cells with titanium dioxide nanoparticle-embedded channels”, The 10th Japan-China-Korea Joint Conference on MEMS/NEMS (JCK MEMS/NEMS 2019), pp. 88-89, (2019年7月17日, 大雪クリスタルホール, 旭川市).
- 34) Masahiro Kawamura, Hiroyuki Kuwae, Takumi Kamibayashi, Juro Oshima, Takashi Kasahara, Shuichi Shoji, Jun

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- Mizuno, “High-color-purity microfluidic quantum dots light-emitting diodes using the electroluminescence of the liquid organic semiconductor backlight”, The 20th International Conference on Solid-State Sensors, Actuators and Microsystems (Transducers 2019), pp. 724-727 (2019年6月27日, ベルリン, ドイツ).
- 35) 太田博, 浅井直美, 堀切文正, 成田好伸, 吉田丈洋, 三島友義, “転位上に形成した微小径 p-n 接合ダイオードにおける電流量減少”, 2020年春期応用物理学学会講演会、上智大学、2020/3/12-15
- 36) 望月 和浩, 堀切 文正, 太田 博, 三島 友義, “基板オフ角依存 GaN 中 C 濃度のステップ端偏析モデルに基づく解釈”, 2020年春期応用物理学学会講演会、上智大学、2020/3/12-15
- 37) 松田 陵, 堀切 文正, 福原 昇, 成田 好伸, 吉田 丈洋, 三島 友義, 塩島 謙次, “界面顕微光応答法によるコンタクトレス光電気化学エッチングした Ni/n-GaN ショットキーの 2 次元評価”, 2020年春期応用物理学学会講演会、上智大学、2020/3/12-15
- 38) 堀切 文正, 福原 昇, 太田 博, 浅井 直美, 成田 好伸, 吉田丈洋, 三島友義, 渡久地政周, 三輪和希, 佐藤威友, “GaN の光電気化学(PEC)エッチングが有する可能性 ③加熱によるエッチング速度の向上”, 2020年春期応用物理学学会講演会、上智大学、2020/3/12-15
- 39) 太田 博, 浅井 直美, 堀切 文正, 成田 好伸, 吉田 丈洋, 三島 友義, “低転位密度 GaN 基板による p-n 接合ダイオードのオン抵抗低減効果”, 2019年秋期応用物理学学会講演会、北海道大学、2019/9/18-21
- 40) 松田 陵, 堀切 文正, 成田 好伸, 吉田 丈洋, 三島 友義, 塩島謙次, “界面顕微光応答法による電気化学エッチングした Ni/GaN ショットキーの 2 次元評価 (II)--n 形と p 形の比較--”, 2019年秋期応用物理学学会講演会、北海道大学、2019/9/18-21
- 41) 西村智朗, 池田清治, 加地徹, “ GaN 基板へのチャネリングイオン注入(II)”, 第 67 回応用物理学学会春季学術講演会, 13a-PA9-14 (2020年3月12-15日, 上智大学四谷キャンパス, 東京都)
- 42) 石黒康志, 小幡吉徳, 西村智朗, 高井和之, “ エピタキシャルグラフェンに導入した欠陥の化学構造の制御および電子物性への影響”, 第 67 回応用物理学学会春季学術講演会, 12a-PA2-30 (2020年3月12-15日, 上智大学四谷キャンパス, 東京都)
- 43) 佐藤真一郎, 出来真斗, 李铄, 渡邊浩崇, 新田州吾, 本田善央, 西村智朗, “ 窒化ガリウムナノピラー中プラセオジウム(Pr)の室温での発光強度増幅”, 第 67 回応用物理学学会春季学術講演会, 14a-A303-1 (2020年3月12-15日, 上智大学四谷キャンパス, 東京都)
- 44) 西村智朗, 池田清次, 中村徹, 加地徹, “ GaN 基板への Mg のチャネリングイオン注入 “, 第 80 回応用物理学学会秋季学術講演会, 19p-PB3-17 (2019年9月19日, 北海道大学札幌キャンパス, 北海道札幌市)
- 45) 吉野理貴, 安藤悠人, 出来真斗, 鳥谷部達, 栗山一男, 本田善央, 西村智朗, 天野浩, 加地徹, 中村徹, “ イオン注入ノーマリーオフ GaN DMOSFET (2)”, 第 80 回応用物理学学会秋季学術講演会, 19a-E301-3 (2019年9月19日, 北海道大学札幌キャンパス, 北海道札幌市)
- 46) 安藤悠人, 中村徹, 出来真斗, 田岡紀之, 田中 敦之, 渡邊 浩崇, 久志本真希, 新田州吾, 本田善央, 山田永, 清水三聡, 天野 浩, “GaN 横型 MISFET チャネル移動度に対する界面準位密度の影響 2”, 2019年第80回応用物理学学会秋季学術講演会 [20a-E301-10] (2019年9月20日, 北海道大学, 北海道) .
- 47) Yangzhou Zhao, Hiroki Yokata, Haruna Ichikawa, Kazuyuki Takai, “Ion-beam irradiation effects on the structure and electronic properties of MoS₂ “, Annual Meeting of the Japan Society of Vacuum and Surface Science 2019, 28-30, October (2019), Tsukuba International Congress Center, Ibaraki.
- 48) Yudai Shigehisa, Yoshinori Obata, Yasushi Ishiguro, Kazuyuki Takai, グラフェンの電子物性における水素分子吸着と欠陥の効果, 第 46 回炭素材料学会年会, 28-30, November (2019), 岡山大学, 岡山
- 49) Ryutaro Suzuki, Takuya Isaka, Kentaro Tajima, Kana Nakahara, Yoshiaki Matsuo, Nobuyuki Akai, Kazuyuki Takai, 異なる酸化方法で合成した酸化グラフェンの触媒活性の比較, 第 46 回炭素材料学会年会, 28-30, November (2019), 岡山大学, 岡山
- 50) Yuki Minakawa, Taichi Umehara, Akinori Izumiyama, Yasushi Ishiguro, Kazuyuki Takai, グラフェンおよび MoS₂ の伝導度における基板化学修飾効果, 第 46 回炭素材料学会年会, 28-30, November (2019), 岡山大学, 岡山
- 51) Yudai Shigehisa, Yoshinori Obata, Yasushi Ishiguro, Kazuyuki Takai, グラフェンの電子物性における水素分子吸着と欠陥の効果, 第 38 回イオンビーム工学研究所シンポジウム, 18, December (2019), 法政大学, 東京

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- 52) Jianwei Fu, Genki Hirobe, Yasushi Ishiguro, Kazuyuki Takai, 酸素プラズマエッチングによるグラファイトへの微細加工, 第38回イオンビーム工学研究所シンポジウム, 18, December (2019), 法政大学, 東京
- 53) Takumi Hidaka, Tmoaki Nishimura, Kazuyuki Takai, MoS₂における鉄イオン照射による電子物性の変調, 第38回イオンビーム工学研究所シンポジウム, 18, December (2019), 法政大学, 東京
- 54) Yuki Minakawa, Taichi Umehara, Akinori Izumiyama, Yasushi Ishiguro, Kazuyuki Takai, MoS₂の伝導度における基板化学修飾効果, 第38回イオンビーム工学研究所シンポジウム, 18, December (2019), 法政大学, 東京
- 55) Zen Inoue, Yasushi Ishiguro, Baranov Alexander, Nabiev Igor, Kazuyuki Takai, グラフェンと量子ドットとの界面における相互作用の解明, 第38回イオンビーム工学研究所シンポジウム, 18, December (2019), 法政大学, 東京
- 56) Yangzhou Zhao, Hiroki Yokata, Haruna Ichikawa, Kazuyuki Takai, “Ion-beam irradiation effects on the structure and electronic properties of MoS₂”, The 38th Symposium on Materials Science and Engineering Research Center of Ion Beam Technology, 18th, December (2019), Hosei University, Tokyo
- 57) 大串叡壯, 中村俊博, ” Eu 賦活ストロンチウムアルミネート赤色蛍光体の発光特性”, 第80回応用物理学会秋季学術講演会, 21a-E302-6 (2019年9月21日, 北海道大学, 札幌).
- 58) 大坪準, 越田信義, 中村俊博, ” 多孔質Siの破碎により作製したナノ結晶Siコロイド粒子の発光特性と表面状態の影響”, レーザー学会学術講演会第40回年次大会, F02-20p-XI-05 (2020年1月20日, 仙台国際センター, 仙台市).
- 59) 小松 亮介, 山本 泰生, 中村俊博, ” 高強度レーザー照射により酸化亜鉛マイクロ粒子表面に形成したナノ構造からのランダムレーザー発振”, レーザー学会学術講演会第40回年次大会, F05-21p-XI-04 (2020年1月21日, 仙台国際センター, 仙台市).
- 60) 永井涼, 片岡洋右, 緒方啓典, “分子動力学シミュレーションによる単層カーボンナノチューブ内包多環芳香族炭化水素分子の一次元積層構造の研究”, 日本コンピュータ化学会2019年春季年会(2019年2019年6月7日, 東京工業大学, 東京).
- 61) 緒方啓典, 西村智朗, 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 梅田龍介, “ハロゲン化鉛ペロブスカイト化合物薄膜におけるイオン照射効果(III)”, 2019年第80回応用物理学会秋季学術講演会(2019年9月19日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 62) 深澤祐輝, 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 梅田龍介, 緒方啓典, “有機-無機ペロブスカイト化合物薄膜の耐久性評価(IV)”, 2019年第80回応用物理学会秋季学術講演会(2019年9月20日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 63) 小林敏弥, 伊東和範, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “表面処理を施した正孔輸送層を用いた逆構造型ペロブスカイト太陽電池の作製及び特性評価”, 2019年第80回応用物理学会秋季学術講演会(2019年9月20日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 64) 牛腸雅人, 伊東和範, 小林敏弥, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “ハロゲン化鉛ペロブスカイトナノ結晶薄膜の作成および物性評価II”, 2019年第80回応用物理学会秋季学術講演会(2019年9月20日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 65) 梅田龍介, 伊東和範, 牛腸雅人, 小林敏弥, 深澤祐輝, 緒方啓典, “ハロゲン化セシウム鉛ペロブスカイト薄膜の作製と特性評価”, 2019年第80回応用物理学会秋季学術講演会(2019年9月20日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 66) 伊東和範, 梅田龍介, 小林敏弥, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 緒方啓典, “ペロブスカイト太陽電池を構成する電子輸送層の表面処理効果(II)”, 2019年第80回応用物理学会秋季学術講演会(2019年9月20日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 67) 永井涼, 緒方啓典, 片岡洋右, “分子動力学シミュレーションによる単層カーボンナノチューブ内包多環芳香族炭化水素分子の一次元積層構造の研究(II)”, 日本コンピュータ化学会2019年秋季年会(2019年10月24日, JMSアステールプラザ, 広島市).
- 68) 緒方啓典, 長嶺侑史, 阿部雄帆, “単層カーボンナノチューブ薄膜のキャリアの種類および熱電特性の制御”, 第29回日本MRS年次大会(2019年11月27日, 横浜市).
- 69) 永井涼, 片岡洋右, 緒方啓典, “多環芳香族炭化水素分子カプセル化単層カーボンナノチューブの分子動力学シミュレーション(III)”, 第29回日本MRS年次大会(2019年11月27日, 横浜市).
- 70) 牛腸雅人, 伊東和範, 小林敏弥, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “ハロゲン化鉛ペロブスカイトナノ結晶薄膜の

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- 作成及び物性評価”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 71) 梅田龍介，伊東和範，小林敏弥，牛腸雅人，深澤祐輝，緒方啓典，“ハロゲン化セシウム鉛ペロブスカイト薄膜へのポスト処理効果”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 72) 深澤祐輝，伊東和範，小林敏弥，牛腸雅人，梅田龍介，緒方啓典，“混合有機-無機ペロブスカイト化合物薄膜の各種環境下における耐久性評価”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 73) 伊東和範，小林敏弥，牛腸雅人，深澤祐輝，梅田龍介，緒方啓典，“酸化亜鉛を電子輸送層に用いたペロブスカイト太陽電池の表面処理効果”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 74) 小林敏弥，伊東和範，牛腸雅人，深澤祐輝，梅田龍介，緒方啓典，“表面処理を施した正孔輸送層を用いた逆構造型ペロブスカイト太陽電池の作製および物性評価”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 75) 渕沢淳一，伊東和範，小林敏弥，牛腸雅人，深澤祐輝，梅田龍介，緒方啓典，“ビスマス系ペロブスカイト化合物薄膜の構造と物性”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 76) 横川聖一，伊東和範，小林敏弥，牛腸雅人，深澤祐輝，梅田龍介，緒方啓典，“ハロゲン化鉛ペロブスカイト単結晶の物性評価”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 77) 秦颯希，伊東和範，小林敏弥，牛腸雅人，深澤祐輝，梅田龍介，緒方啓典，“2D-3D ペロブスカイト化合物薄膜の作製と構造評価”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 78) 森井寛之，深澤祐輝，伊東和範，小林敏弥，牛腸雅人，梅田龍介，緒方啓典，“PbS 量子ドットの作製および同薄膜の物性評価”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 79) 永井涼，片岡洋右，緒方啓典，“分子動力学シミュレーションによる単層カーボンナノチューブ内包多環芳香族化合物の局所構造の研究”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 80) 阿部雄帆，長嶺侑史，緒方啓典，“単層カーボンナノチューブの金属-半導体分離と金属単層カーボンナノチューブの物性評価”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 81) 長嶺侑史，阿部雄帆，緒方啓典，“半導体単層カーボンナノチューブ薄膜への化学ドーピングによる物性制御”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 82) 沼田駿佑，緒方啓典，“プラズマCVD法により各種基板上に作製したナノカーボン薄膜の構造と物性”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 83) 井手克，緒方啓典，“非対称ドナーを用いた電荷移動錯塩の合成と物性評価”，第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日，法政大学，小金井市).
- 84) 渕沢淳一，梅田龍介，伊東和範，牛腸雅人，小林敏弥，深澤祐輝，秦颯希，緒方啓典，“ビスマス系化合物薄膜の構造と物性評価”，第67回応用物理学会春季学術講演会(2020年3月13日，上智大学四谷キャンパス，東京).
- 85) 秦颯希，伊東和範，小林敏弥，牛腸雅人，深澤祐輝，梅田龍介，緒方啓典，“二次元/三次元混合ハロゲン化鉛ペロブスカイト化合物薄膜の耐久性評価”，第67回応用物理学会春季学術講演会(2020年3月13日，上智大学四谷キャンパス，東京).
- 86) 梅田龍介，伊東和範，牛腸雅人，小林敏弥，深澤祐輝，緒方啓典，“ハロゲン化セシウム鉛ペロブスカイト薄膜への表面処理効果が耐久性およびキャリア輸送特性に与える効果”，第67回応用物理学会春季学術講演会(2020年3月13日，上智大学四谷キャンパス，東京).
- 87) 緒方啓典，西村智朗，梅田龍介，“ハロゲン化鉛ペロブスカイト化合物薄膜におけるイオン照射効果(IV)”，第67回応用物理学会春季学術講演会(2020年3月15日，上智大学四谷キャンパス，東京).

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- 88) 橋本賢弥, 野村拓哉, 大島寿郎, 水野潤, 笠原崇史, “液体有機半導体を含有する伸縮性薄膜の作製”, 令和2年電気学会全国大会, 3-137 (2020年3月13日, 東京電機大学, 東京).
- 89) 岡田紘治, 笠原崇史, 酸化半導体ナノ粒子を埋め込んだマイクロ流体電気化学発光デバイス, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, p. 14 (2019年12月18日, 法政大学, 小金井市)
- 90) 鯉沼祐伍, 水野潤, 笠原崇史, “マイクロ流体電気化学発光ディスプレイに向けたアントラセン誘導体ホストの検討”, 第36回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 20pm3-LN2-78, (2019年11月20日, アクトシティ浜松, 浜松市).
- 91) 山田悠太郎, 笠原崇史, 液状ピレン誘導体を用いたマルチカラーマイクロ流体有機EL, 高密度励起ナノ・マイクロ光材料研究会-スタートアップ集会-, (2019年9月6日, 法政大学, 小金井市).

<招待講演>

- 1) Tomoyoshi Mishima, “Vertical GaN p-n junction diodes fabricated on GaN substrates” (Invited), Materials Research Meeting 2019 (MRM2019), Yokohama Symposia, 2019/12/10-13
- 2) Tomoyoshi Mishima, “High Breakdown Voltage Vertical p-n Junction GaN Diodes” (Invited), 13th International Conference on Nitride Semiconductors 2019 (ICNS-13), Bellevue, Washington, USA, 2019/7/7-12
- 3) Fumimasa Horikiri, Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, and Tomoyoshi Mishima, “Fabrication of Gallium Nitride Deep-Trench Structures by Photoelectrochemical Etching” (Invited), CS MANTECH 2019 Conference, Minneapolis, USA, 2019/4/29-5/2
- 4) Fumimasa Horikiri, Noboru Fukuhara, Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tomoyoshi Mishima, Masachika Toguchi, Kazuki Miwa, and Taketomo Sato, “GaN Wet Etching Process for Power and RF Devices” (Invited), 2019 International Conference on Solid State Devices and Materials (SSDM2019), Nagoya University, 2019/9/2-5
- 5) Fumimasa Horikiri, Noboru Fukuhara, Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tomoyoshi Mishima, Masachika Toguchi, Kazuki Miwa, and Taketomo Sato, “GaN wet etching process” (Invited), 13th Topical Workshop on Heterostructure Microelectronics (TWHM 2019), Hotel Grand Terrace Toyama, 2019/8/26-29
- 6) Fumimasa Horikiri, Noboru Fukuhara, Hiroshi Ohta, Naomi Asai, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tomoyoshi Mishima, Masachika Toguchi, Kazuki Miwa, and Taketomo Sato, “GaN Wet Etching Process for Power and RF Devices” (Invited), 2019 Asia-Pacific Workshop on Fundamentals and Applications of Advanced Semiconductor Devices (AWAD 2019), Busan, Korea, 2019/7/1-3
- 7) 三島友義, “PEC エッチングによるメサ構造 GaN p-n 接合ダイオード” (招待講演), 2019年秋期応用物理学学会講演会、北海道大学、2019/9/18-21
- 8) 高井和之, 「原子層物質の電子物性における化学修飾効果と反応性」日本表面真空学会講演大会シンポジウム～2次元表面・界面が創出する特異場の理解と応用～, つくば国際会議場, 2019年10月30日
- 9) 高井和之, 「カーボンマテリアルの電気伝導の基礎とエレクトロニクス応用への課題」, 新化学技術推進協会電子情報技術部会講演会, 公益社団法人 新化学技術推進協会, 東京, 2019年11月22日
- 10) 笠原崇史, “液体有機ELとMEMSマイクロ流体技術とを融合した電界発光デバイスの開発”, 第16回色材IT(インクジェットテクノロジー)講座, (2019年11月28日, 日本大学理工学部, 東京). 依頼講演
- 11) 笠原崇史, 大島寿郎, 水野潤, “MEMSマイクロ流路と液体有機半導体とを用いた有機発光デバイスの開発”, 第26回電子デバイス実装研究委員会, (2019年7月10日, 日本橋ライフサイエンスビルディング, 東京). 依頼講演

<著書>

- 1) 高井和之, 「高熱伝導材料の開発～さらなる熱伝導率の向上のため～」技術情報協会, P524 (2019), ISBN: 978-4-86104-754-1.
- 2) Kazuyuki Takai, Seiya Tsujimura, Kang Feiyu, Inagaki Michio, “Graphene: Preparations, Properties, Applications and Prospects”, Elsevier, P620 (2019) ISBN: 978-0128195765.

<登録特許>

- 1) 出願番号: 特願 2015-167195、出願日: 2015年8月26日、登録番号: 特許第6644294号、登録日: 2020/1/10、発明の名称: 半導体装置、発明者: 中村徹、三島友義、太田博、山本康博、堀切文正、出願人: 法政大学、(株)サイオクス、住友化学(株)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- 2) 出願番号：特願 2015-167196、出願日：2015 年 8 月 26 日、登録番号：特許第 6644295 号、登録日：2020/1/10、発明の名称：半導体装置、発明者：中村徹、三島友義、太田博、山本康博、堀切文正、出願人：法政大学、(株)サイオクス、住友化学(株)
- 3) 出願番号：特願 2019-135780、出題日：2019 年 7 月 24 日、「アルカン脱水素触媒、及びこれを用いる水素製造方法」発明者：草部浩一、高井和之、西川正浩、劉明

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して 2019 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2019 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019 年度の web サイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

- ・2019 年度の被引用件数は延べ 702 件で活発に引用されていた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・SCOPUS を用いた被引用文献調査（主要研究者の 2009 年～2019 年に発表した論文に対する 2019 年度に引用された件数）。

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

数年に一度の頻度で第三者評価を実施しており、昨年度(2018 年度)に外部の専門家 3 名（群馬大学大学院理工学府電子情報部門 神谷富裕教授、京都大学複合原子力科学研究所 木野村淳教授、名古屋大学未来材料・システム研究所 加地徹特任教授）による書類評価を行って頂いた。おおむね高い評価を得ているが、より高度な技術開発や技術スタッフ不足が指摘された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・外部評価資料

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019 年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び 2019 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

- ・環境省「未来のあるべき社会・ライフスタイルを創造する技術イノベーション事業」再委託(9800 万円)
- ・文部科学省「省エネルギー社会の実現に資する次世代半導体研究開発」再委託(1100 万円)
- ・科研費 3 件(470 万円)
- ・受託研究（(株)サイオクス(100 万円)

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	1.1①

【この基準の大学評価】

2019 年度のイオンビーム工学研究所の研究活動に関して、シンポジウム（招待講演 3 件、一般講演 37 件、参加者 82 名）を開催し、シンポジウムプロシーディングスを刊行したことは評価に値する。また、NHK に対する実験協力が「NHK 高校講座」ベーシックサイエンスライブラリー「サイエンスヒストリー～原子の物語～」の中で使用されるとともに、番組ホームページからネット配信されており、研究成果のアピールに大きく貢献したことは特筆すべきである。学内の放射線業務従事者への教育訓練や登録手続き等の協力を行ったことも評価できる。

2018 年度の外部の第三者評価でおおむね高い評価を得ているが、より高度な技術開発や技術スタッフ不足が指摘されたことに対して今後の対応を期待したい。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

学部資金の応募・獲得状況については、環境省「未来のあるべき社会・ライフスタイルを創造する技術イノベーション事業」再委託(9800万円)、文部科学省「省エネルギー社会の実現に資する次世代半導体研究開発」再委託(1100万円)、科研費3件(470万円)、受託研究((株)サイオクス(100万円))など多くの外部資金を獲得していることを特に高く評価する。

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	省エネルギー半導体の研究開発
	年度目標	(1)環境省委託プロジェクトの遂行(超高効率電力変換機器用パワーデバイスの研究) (2)文科省委託プロジェクトの遂行(省エネルギー社会の実現に資する次世代半導体研究開発)
	達成指標	(1)高性能 GaN パワーダイオードの実証 (2)イオン注入技術とパワーデバイス構造作製技術の開発
	年度末報告	執行部による点検・評価
自己評価		(1) S (2) S
理由		(1)プロジェクトの年度実施項目を遂行した。 (2)プロジェクトの年度実施項目を遂行した。
改善策		—
No	評価基準	研究活動
2	中期目標	研究基盤の整備
	年度目標	イオン注入用加速器の制御部分の更新
	達成指標	不具合なく稼働出来ること
	年度末報告	執行部による点検・評価
自己評価		S
理由		イオン注入用加速器の制御部分の更新が完了し、現在問題なく稼働している。
改善策		—
No	評価基準	研究活動
3	中期目標	注入装置用新規スキャナーの開発
	年度目標	新規スキャナー用電源装置の整備
	達成指標	電源装置の導入
	年度末報告	執行部による点検・評価
自己評価		A
理由		新規スキャナー用の電源装置や任意波形発生器を導入した。今後開発を行っていく。
改善策		—
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	「法政大学イオンビーム工学シンポジウム」の開催や報道機関への取材協力
	年度目標	2019年度シンポジウムの開催
	達成指標	過去3年と同様の開催規模と参加者
	年度末報告	執行部による点検・評価
自己評価		S
理由		昨年と同程度の発表件数があった。
改善策		—
No	評価基準	社会連携・社会貢献
5	中期目標	環境放射線測定
	年度目標	福島原発に伴う環境放射線測定の継続
	達成指標	測定の継続
	年度末	教授会執行部による点検・評価

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	報告	自己評価	S	
		理由	継続して定期的な放射線測定を行っている。	
		改善策	—	
No	評価基準	社会連携・社会貢献		
6	中期目標	産学連携の推進		
	年度目標	受託研究の実施		
	達成指標	受託研究の受け入れ		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	窒化ガリウムを用いた研究開発に関係して、環境省や文部科学省からの受託研究、および企業からの受託研究を実施している。	
改善策		—		
【重点目標】 環境省委託プロジェクトの遂行（超高効率電力変換機器用パワーデバイスの研究）。 本プロジェクトはノーベル賞受賞者の天野教授らを代表として多数の大学、企業が参加するプロジェクトであり、持続可能な社会を実現するための省エネルギー化の観点からも完遂が望まれる課題である。研究所としても実験が行える環境を支える（2021年度に分光エリプソ、電子線描画装置、FE-SEM、AFMなどのリース品の買い取りを行うなど）ことで支援を行う。				
【年度目標達成状況総括】 加速器の制御機器の更新作業が無事完了した。研究活動、社会貢献・社会連携の各種項目とも高いレベルで目標を達成することが出来た。				

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

<p>省エネルギー半導体の研究開発において、2019年度は「(1) 超高効率電力変換機器用パワーデバイスの研究、(2) 省エネルギー社会の実現に資する次世代半導体研究開発」を年度目標として設定し、それぞれを遂行したことを高く評価する。研究基盤の整備については、「イオン注入用加速器の制御部を更新し、「不具合なく稼働する」という目標・指標に対し、更新を完了し問題なく稼働させたことを評価する。注入装置用新規スキャナーの開発に関しては、「電源装置の整備・導入」を目標・指標に設定し、問題なく整備・導入できたことを評価する。</p> <p>社会貢献・社会連携に関しては、「法政大学イオンビーム工学シンポジウム」の開催や報道機関への取材協力を積極的に行うという目標に対し、シンポジウムを開催し、過去3年と同様の規模と参加者、昨年と同程度の発表件数があったことは評価できる。福島原発に伴う環境放射線測定の継続という目標・指標に対し、継続して定期的な放射線測定を実施したことは社会貢献が極めて大きく特に高く評価する。また、産学連携の推進、受託研究の実施、受託研究受け入れという目標に対し、環境省や文部科学省からの受託研究、および企業からの受託研究を多数実施したことも評価する。</p>
--

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	省エネルギー半導体の研究開発
	年度目標	(1) 環境省委託プロジェクトの遂行（超高効率電力変換機器用パワーデバイスの研究） (2) 文科省委託プロジェクトの遂行（省エネルギー社会の実現に資する次世代半導体研究開発）
	達成指標	(1) 高性能 GaN パワーダイオードの実証 (2) イオン注入技術とパワーデバイス構造作製技術の開発
No	評価基準	研究活動
2	中期目標	研究基盤の整備
	年度目標	分析用加速器の真空排気系の一部更新
	達成指標	更新が完了し、不具合なく動作すること
No	評価基準	研究活動
3	中期目標	注入装置用新規スキャナーの開発
	年度目標	システム構築

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	達成指標	テスト用環境整備の完了
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	「法政大学イオンビーム工学シンポジウム」の開催や報道機関への取材協力
	年度目標	2020年度シンポジウムの開催
	達成指標	過去3年と同様の開催規模と参加
No	評価基準	社会連携・社会貢献
5	中期目標	環境放射線測定
	年度目標	福島原発に伴う環境放射線測定の継続
	達成指標	測定の継続
No	評価基準	社会連携・社会貢献
6	中期目標	産学連携の推進
	年度目標	受託研究の実施
	達成指標	受託研究の受け入れ
<p>【重点目標】 環境省委託プロジェクトの遂行（超高効率電力変換機器用パワーデバイスの研究）。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 本プロジェクトはノーベル賞受賞者の天野教授らを代表として多数の大学、企業が参加するプロジェクトであり、持続可能な社会を実現するための省エネルギー化の観点からも完遂が望まれる課題である。研究所としても実験が行える環境を支える（2021年度に分光エリプソ、電子線描画装置、FE-SEM、AFMなどのリース品の買い取りを行うなど）ことで支援を行う。</p>		

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

2020年度のイオンビーム工学研究所の年度目標の設定に関しては、省エネルギー半導体の研究開発における「(1)高性能GaNパワーダイオードの実証、(2)イオン注入技術とパワーデバイス構造作製技術の開発」という達成指標の設定は、これまでの成果と連続し、妥当と判断できるものの、昨年度の指標と全く同じであり、年度末の自己評価が「年度実施項目を遂行した」ためS評価であることを考えると、指標をより具体化することが望まれる。分析用加速器の真空排気系を更新させ不具合なく動作させるという目標設定は、現状課題を正しく認識しており適切な目標と言える。注入装置用新規スキャナーの開発・システム構築・テスト環境整備の完了という目標設定は、研究の継続性に配慮されており妥当である。「法政大学イオンビーム工学シンポジウム」の開催や報道機関への取材協力、シンポジウム開催の目標は、成果の外部への継続的かつ効果的なアピールであり重要と判断する。福島原発に伴う環境放射線測定の継続は社会貢献が大きく、極めて重要な目標設定と言える。

いずれの目標についても、年度末報告での具体的な記述を期待したい。

【大学評価総評】

イオンビーム工学研究所の研究活動全般について、継続的なシンポジウムの開催、多数の論文投稿・学会発表による先駆的な研究成果アピールするとともに、主要設備の管理・活用のための活動が実施されていることは評価に値する。主要設備の老朽化への対応や装置の運用・保守全般を担う技術スタッフ増員という課題に対し、具体的かつ効果的な対策案を策定するとともに、積極的に外部資金獲得のための活動を活発に行い、明確な成果が表れている。注入用加速器の新規スキャナーの開発・導入などの対策を行い、より高度な要求へ答えていくという対応は評価に値する。報道機関への取材協力は研究成果の効果的なアピールとして重要な活動と言える。福島原発に伴う環境放射線測定の継続は社会貢献が大きく、極めて重要な活動と考える。

以上により、私立大学における小型加速器を活用した先駆的な研究成果を期待されているイオンビーム工学研究所のこれまでの活動は高く評価されるとともに目標設定は妥当と考えるが、一部達成指標については、一層の具体化の検討が望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

情報メディア教育研究センター

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

情報メディア教育研究センターでは、2018年度大学評価委員会の評価結果に対し、研究プロジェクトの可視化と達成度の数値化に基づく管理方法を継続しており、所員会議や運営委員会による定期的な自己点検が行われていること、IMS 特集号の企画を行い、研究報告の投稿数、公表論文数が増加し、数値目標を達成したことから、対応が適切に行われていると判断できる。

2018年度の重点目標において、研究報告数が増加し、数値目標を達成した。シンポジウム、ハッカソン、カンファレンスの開催、研究プロジェクトの実施に取り組み、活発な研究活動が行われている。また、社会的評価では、高いWebサイト総ページビュー数を維持している。

2019年度の重点目標が、2018年度「研究報告の投稿数」から、「Webサイトの再構築」に変更された。教育支援ツールの公開等において、前年度と同様、目標達成を期待したい。

今後、第三者評価委員会の提言に基づく、ラボラトリシステムの運用をはじめとする研究センターの活動の広報活動の強化、データサイエンスを中心とした全学的な研究体制の構築が期待される。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

本研究センターでは、研究プロジェクトの可視化と達成度の数値化に基づく管理方法を確立しており、四半期ごとに所長、副所長、3名の専任所員からなる所員会議、加えて半年ごとに運営委員会で自己点検を行った。その結果、研究活動については93%、社会貢献・社会連携については100%の達成率となった。

重点目標「Webサイトの再構築」について、独自サイトから全学Webサイトへの移行により目標を達成した。同サイトにおいて教育支援ツールを公開することに加え、情報発信のワークフローを確立した。今後、ラボラトリシステムの運用をはじめとする本センターの活動の広報強化が期待される。

第三者評価委員会の提言に基づき、既存ユーザに限らずラボラトリシステムを利用する研究プロジェクトの募集を行った結果、前年度の2倍以上の57ユーザが同システムの利用を開始した。さらに、データサイエンス分野の研究を志望する学生の受入れを視野に入れ、専任所員が情報科学部と理工学部の講義を担当することとした。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

情報メディア教育研究センターにおいて、研究プロジェクトの可視化と達成度の数値化に基づく管理方法は高い評価ができる。四半期ごとに所長、副所長、3名の専任所員からなる所員会議や半年ごとに行われる運営委員会で自己点検を行うことで、研究活動については93%、社会貢献・社会連携については100%の達成率となっている点は高く評価できよう。

重点目標である「Webサイトの再構築」について、独自サイトから全学Webサイトへの移行により目標を達成した点や、同サイトにおいて教育支援ツールを公開することに加え、情報発信のワークフローを確立した点も評価できる。

第三者評価委員会の提言に基づき、既存ユーザに限らずラボラトリシステムを利用する研究プロジェクトの募集を行った結果、前年度の2倍以上の57ユーザが同システムの利用を開始した点も評価できる。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

・情報メディア教育研究センターシンポジウム(2020年2月25日開催予定であったが感染症リスクを鑑みて延期、市ヶ谷キャンパス、ITを活用した新たな教育方法の実践、7名の発表者による7件の報告、事前参加登録者130名)

・Open Apereo 2019 国際カンファレンスにおいて Ja Sakai セッションを主催(2019年6月5日、米国ロサンゼルス、“Sharing Practices - Sakai & Associated Tools”、授業支援システムに関連する活動報告、4名の発表者による4件の発表)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- ・Advanced Placement プログラム導入研究会 共同開催(2019年9月21日、市ヶ谷田町校舎5階T501教室、遠隔教育におけるLMSの活用について、6名の発表者による6件の発表)
- ・IMS Japan Conference におけるセッション主催(2019年9月24日、内田洋行、eラーニングやICT活用教育分野における技術標準に関する最新動向、5名の発表者による13件の発表)
- ・大学ICT推進協議会にて教育技術開発部会の企画セッションを主催(2019年12月12日、福岡国際会議場、大学におけるLMSの活用、4名の登壇者によるパネルディスカッション)
- ・情報メディア教育研究センター研究プロジェクト(16プロジェクト)
- ・ラボラトリシステムを利用した研究プロジェクト(31プロジェクト)
- ・法政大学研究所総体としてのWebサイトであるHURNを運営し、各研究センターのイベントを収録し、公開している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・<https://www.hosei.ac.jp/media/info/article-20200221164334/>
- ・<https://www.apereo.org/conferences/open-apereo-2019/>
- ・<https://apjapan.org/>
- ・http://imsjapan.org/information_imsjr2019.html
- ・<http://edtech.axes.jp/conf2019/>
- ・<https://www.hosei.ac.jp/media/research/project/2019/>
- ・<http://hurn.media.hosei.ac.jp/>
- ・情報メディア教育研究センター2019年度運営委員会議事録

②対外的に発表した研究成果(出版物、学会発表等)

※2019年度に研究所(センター)として刊行した出版物(発刊日、タイトル、著者、内容等)や実施した学会発表等(学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等)の詳細を記入。

- ・情報メディア教育研究センター研究報告(Vol.33、2019 ISSN 1882-7594)(9件)
- ・情報メディア教育研究センター研究報告(Vol.34、2019 ISSN 1882-7594)(15件)
- ・学会発表および公表論文は多数になるため根拠資料を参照(93件)

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・<https://www.hosei.ac.jp/media/publication/bulletin/>
- ・<https://www.hosei.ac.jp/media/publication/paper/2019/>

③研究成果に対する社会的評価(書評・論文等)

※研究所(センター)がこれまでに発行した刊行物に対して2019年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や2019年度に引用された論文(論文タイトル、件数等)、2019年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

- ・情報メディア教育研究センターWebサイト総ページビュー数: 351,592(2018年度は315,038)。

ビクター数の多かったコンテンツのTOP10を下表に示す。

- ・2010年以前に発行した研究報告が依然としてアクセスされており、研究所としてのサステナビリティが必要であることがわかる。

順位		種別	タイトル	発行年	ビクター数	
2019	2018				2019	2018
1	4	研究報告	片岡洋右, 山田祐理: ファンデルワールス状態方程式による実在気体の熱力学	2011	4,673	1,234
2	3	研究報告	雨宮 賢一, 田中 豊: 仮想空間内における装着型触覚ディスプレイの開発	2000	1,709	1,364
3	51以下	研究報告	菅井桂子 他: 音楽に伴う1/fゆらぎ周波数成分の抽出とその人間生理への応用	2010	1,634	—
4	1	研究報告	岩原光男 他: ステッピングモータの低騒音化	2010	1,481	1,748
5	37	研究報告	沼尻治樹: 月平均気温と昼の長さを用いた月可能蒸発散量推定法	2014	1,455	292
6	2	その他	ARCSモデルに基づいた授業チェックシート	2014	1,417	1516
7	19	研究報告	菅原 圭子 他: 数値シミュレーションによる乾暑地域における風土建築の温熱環境に関する研究—採風塔を有する住宅の風・温熱環境について—	2005	1,341	413
8	51以下	研究報告	末光涼太, 片岡洋右: 分子動力学シミュレーションによるダイヤモンドの融解	2009	1,141	—
9	7	研究報告	岡野裕征 他: 共鳴型サイレンサの高性能化に関する研究	2006	1,032	923
10	51以下	研究報告	大塚 亮, 片岡 洋右: NaCl水溶液における相転移の分子動力学シミュレーション	2011	1,007	—

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・情報メディア教育研究センターWebサイト2019年度アクセスログ

④研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

日時：2020年3月18日(水) 13:00 - 14:30、場所：小金井キャンパス南館 7F 会議室

第三者評価委員：喜多 一(京都大学 国際高等教育院教授/情報環境機構長)、深澤 良彰(早稲田大学 理工学術院教授/一般社団法人 大学 ICT 推進協議会会長)

評価コメントを受け、次のアクションプランが協議された。

- ・教育・学習データの利活用に関する研究のパイロットケースの発信
- ・実用を目指した適切なグラントの獲得

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・自己点検に関わる第三者評価委員依頼 (2020年3月5日発信)
- ・情報メディア教育研究センター 2019年度外部評価委員会議事録 (2020年3月22日)

⑤ 科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019年度中に研究所(センター)として応募した科研費等外部資金(外部資金の名称、件数等)及び2019年度中に採択を受けた科研費等外部資金(外部資金の名称、件数、金額等)を記入。

- ・基盤(C)代表研究者 3件 (4,940千円)
- ・基盤(S)研究分担者 1件 (36,270千円、うち分担金200千円)
- ・基盤(C)研究分担者 1件 (390千円、うち分担金10千円)

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・平成31年度科研費交付申請書

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

情報メディア教育研究センターの研究活動については、シンポジウム、Open Apereo 2019 国際カンファレンスにおいて Ja Sakai セッションを主催、Advanced Placement プログラム導入研究会 共同開催、IMS Japan Conference におけるセッション主催、大学 ICT 推進協議会にて教育技術開発部会の企画セッションを主催するなど、社会に向けて高い貢献をしている点で評価できる。

また、研究成果も、情報メディア教育研究センター研究報告(9件)、情報メディア教育研究センター研究報告(15件)をはじめ、93件の学会発表および公表論文など、幅広く活動していると言える。

外部からの組織評価(第三者評価等)も適切に受けており、科研費等外部資金の応募・獲得状況も基盤(C)代表研究者の3件をはじめ、基盤(S)研究分担者が1件、基盤(C)の研究分担者が1件と積極的に外部資金の獲得を行っている。この点も評価が高い。

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	「法政大学情報メディア教育研究センター規程」として目的や事業は定められているため、中期目標として設定しない。
	年度目標	—
	達成指標	—
	年度末報告	執行部による点検・評価
	自己評価	—
	理由	—

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

No	評価基準	改善策	—	
2	中期目標	<ul style="list-style-type: none"> ・別紙「2017-2020 中期計画」にて計画したそれぞれの実行計画の進捗状況に関する所員会議および運営委員会における定期的レビューの実施 ・第三者評価の実施 		
	年度目標	別紙「2017-2020 中期計画」にて計画した 2018 年度の実行計画の進捗状況を所員会議および運営委員会にて定期的にレビューする。 また、第三者評価を継続的に行う。		
	達成指標	2018 年度実行計画を 4 半期毎に所員会議にてレビューを行ない、半期毎に運営委員会にてレビューを行う。また、第三者評価を行う。 S: A に加え別視点からレビュー実施 A: 所員会議 4 回 & 運営委員会 2 回 & 第三者評価 1 回 B: 所員会議 4 回 OR 運営委員会 2 回以上 C: 所員会議 2 回 OR 運営委員会 1 回以下		
	年度末報告	執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
理由		下記のレビューを実施した。 ・所員会議によるレビュー 4 回(7/8)、(10/25)、(1/30)、(3/16) ・運営委員会によるレビュー 2 回(11/6)、(3/24) ・第三者評価委員会 1 回(3/18)		
改善策	特になし。			
No	評価基準	研究活動		
3	中期目標	【方針 1】教育支援システム開発と情報基盤の整備 1-1. 教育方法を改善するシステムの整備 1-2. 研究開発のための情報基盤の整備 【方針 2】教育支援システムと情報基盤の利用促進と成果の公開 2-1. 教育支援システムと情報基盤の利用促進 2-2. 研究成果の公開 【方針 3】HOSEI2030 を踏まえた教育および研究の共同実践 3-1. 大規模授業におけるオンライン教育方法の実現 3-2. アクティブラーニング教育方法の実現 3-3. 持続可能社会構築に向けた研究体制を通じた研究及び研究支援		
	年度目標	左記の方針を実現するためのプロジェクトとして 2019 年度は次の 12 のプロジェクトを実施する。 (1) 問題発見型グループ学習の意見形成過程を用いた評価支援システムに関する研究(科研費) (2) 教育支援ツール文書化 (3) Beyond LMS as a repository (4) lab2021 調達 (5) lab2016 支援ツール文書化 (6) 情報メディア教育研究センターシンポジウム開催 (7) 授業支援システムのデータ利活用に向けたポリシーの提案 (8) センター Web サイトの再構築 (9) 意図的なグループ形成による大規模授業のアクティブラーニング化(科研費) (10) 教育支援ツール利用ガイドの制作と配布 (11) 研究所ポータル(HURN)のリニューアル		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		(12)学部または研究科と連携した学生指導	
	達成指標	年度目標にて設定した実行計画達成率で評価する。 S: 90%以上 A: 80 - 89% B: 70 - 79% C: 70%未満	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	別紙、2019年度自己点検(情報メディア教育研究センター)にて ProjectNo.1~13の達成率が94%となった。
		改善策	特になし。
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
4	中期目標	ITを教育・研究に活かす人が集い協働するためのコミュニティの形成・推進	
	年度目標	(1)ITの教育活用に関わるコミュニティにおいてセッションを企画・開催する。 (2)共通LMSによるオンライン教育(科研費) (3)持続的サイバーセキュリティ教育コンテンツ作成	
	達成指標	年度目標にて設定した実行計画達成率で評価する。 S: 90%以上 A: 80 - 89% B: 70 - 79% C: 70%未満	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		別紙、2019年度自己点検(情報メディア教育研究センター)にて ProjectNo.14~16の達成率が100%となった。	
改善策		特になし。	
【重点目標】			
全学的なWebサイトリニューアルに合わせ、研究センターのWebサイトを再構築することを重点目標とする。Webサイトは研究報告をはじめとする研究センターの成果を公開するとともに、アクティビティを広報するための重要な手段であるが、当研究センターの活動が見えにくいとの指摘を受けている。この課題に対するアクションプランとして、年度目標に(8)センターWebサイトの再構築を設定している。このプロジェクトの具体的な施策は、これまで我々が開発してきた教育支援ツール等のセンターのアクティビティを多くのユーザに容易に到達できるようなサイトに発展させることを標榜し、月例で開催している所員会議にて検討を重ね、今年度中に新しいWebサイトを公開することを目指す。			
【年度目標達成状況総括】			
今年度の重点目標は「研究センターのWebサイトを再構築すること」であり、全学的なWebリニューアルを機に、独自のWebサイト (https://www.media.hosei.ac.jp/) から全学サイトに移行することとした。具体的には、同Webサイトのコンテンツを洗い出し全学Webサイトの構造にマッピングすること、移行過程でのコンテンツの確認を経て、3月18日にリニューアルされたWebサイト (https://www.hosei.ac.jp/media/) において研究センターのコンテンツを再構成し公開することができた。同サイトではこれまで実現できていなかったセンターからの情報発信を強化することができた。また、内部質保証、研究活動、社会貢献・社会連携の項目でそれぞれA, S, Sの自己評価を得たことから、期首の目標を達成できた。四半期ごとの所員会議によるプロジェクトレビューが有効に機能し、プロジェクト推進のための具体的な施策をディスカッションする機会となった。			

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

情報メディア教育研究センターの2019年度目標の達成状況に関しては、研究プロジェクトの可視化と達成度の数値化に基づく管理方法により、達成状況が把握しやすく、実際に同研究センターにおける高い達成率は、高く評価できる点である。これは所員会議や運営委員会による自己点検・フィードバックが適切に行われているからであると言える。研究活動の93%および社会貢献・社会連携の100%の達成率も評価できる点である。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

IV 2020 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	「法政大学情報メディア教育研究センター規程」として目的や事業は定められているため、中期目標として設定しない。
	年度目標	—
	達成指標	—
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	・別紙「2017-2020 中期計画」にて計画したそれぞれの実行計画の進捗状況に関する所員会議および運営委員会における定期的レビューの実施 ・第三者評価の実施
	年度目標	別紙「2017-2020 中期事業実行計画」にて計画した 2020 年度の実行計画の進捗状況を所員会議および運営委員会にて定期的にレビューする。 また、第三者評価を継続的に行う。
	達成指標	2020 年度実行計画を 4 半期毎に所員会議にてレビューを行い、半期毎に運営委員会にてレビューを行う。また、第三者評価を行う。 S: A に加え別視点からレビュー実施 A: 所員会議 4 回 & 運営委員会 2 回 & 第三者評価 1 回 B: 所員会議 4 回 OR 運営委員会 2 回以上 C: 所員会議 2 回 OR 運営委員会 1 回以下
No	評価基準	研究活動
3	中期目標	【方針 1】教育支援システム開発と情報基盤の整備 1-1. 教育方法を改善するシステムの整備 1-2. 研究開発のための情報基盤の整備 【方針 2】教育支援システムと情報基盤の利用促進と成果の公開 2-1. 教育支援システムと情報基盤の利用促進 2-2. 研究成果の公開 【方針 3】HOSEI2030 を踏まえた教育および研究の共同実践 3-1. 大規模授業におけるオンライン教育方法の実現 3-2. アクティブラーニング教育方法の実現 3-3. 持続可能社会構築に向けた研究体制を通じた研究及び研究支援
	年度目標	左記の方針を実現するためのプロジェクトとして 2020 年度は次の 13 のプロジェクトを実施する。 (1) Beyond LMS as a repository (2) ICT 活用型防災学習を支援するシステムの開発と実践 (3) 子育て支援のための携帯端末を利用したテストシステムの開発 (4) lab2021 調達 (5) Learning Record Storage の構築 (6) 情報メディア教育研究センターシンポジウム開催 (7) 授業支援システムのデータ利活用に向けたポリシーの提案 (8) 研究報告（紀要）の発信力の向上 (9) 研究報告（紀要）の信頼性向上 (10) 改正著作権法の情報収集と関係部門と連携した学内啓蒙 (11) 感染症対応を踏まえた教育支援ツールの実用性検証と事例発信 (12) 教育支援ツール利用ガイドの制作と配布 (13) 研究所ポータル(HURN)のリニューアル

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

	達成指標	年度目標にて設定した実行計画達成率で評価する。 S: 90%以上 A: 80 - 89% B: 70 - 79% C: 70%未満
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	ITを教育・研究に活かす人が集い協働するためのコミュニティの形成・推進
	年度目標	左記の方針を実現するためのプロジェクトとして2020年度は次の2つのプロジェクトを実施する。 (1) ITの教育活用に関わるコミュニティにおいてセッションを企画・開催する。 (2) 持続的サイバーセキュリティ教育コンテンツ作成
	達成指標	年度目標にて設定した実行計画達成率で評価する。 S: 90%以上 A: 80 - 89% B: 70 - 79% C: 70%未満
<p>【重点目標】 本学におけるオンライン授業の実施にあたり、他部局と連携し具体的な提言や取り組みの発信を行うことを重点目標とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 この重点目標に対するアクションプランとして、年度目標に「(11)感染症対応を踏まえた教育支援ツールの実用性検証と事例発信」「(12)教育支援ツール利用ガイドの制作と配布」を設定している。このプロジェクトの具体的な施策は、本センターで開発した教育支援ツールの利活用状況を把握する。また、オンライン授業実施にあたり本センターで利用可能なツールの利用方法を広報することである。</p>		

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

情報メディア教育研究センターの2020年度中期目標・年度目標の設定について、重点目標を「2020年のオンライン授業実施にあたり、他部局と連携し具体的な提言や取り組みの発信を行うこと」とした点は、具体的かつ適切であるといえる。

この重点目標に対するアクションプランとして、年度目標に「(11)感染症対応を踏まえた教育支援ツールの実用性検証と事例発信」「(12)教育支援ツール利用ガイドの制作と配布」を設定している点でも、喫緊の課題に対して、具体的に目標設定している点で高く評価できる。

また、研究活動の年度目標の設定も、これまでの進捗を踏まえて設定されていると判断できる。今後の貴センターの展開を期待したい。

【大学評価総評】

情報メディア教育研究センターは、研究プロジェクトの可視化と達成度の数値化に基づく管理方法を確立している点で、高く評価できる。四半期ごとに所長、副所長、3名の専任所員からなる所員会議や半年ごとに運営委員会で自己点検およびフィードバックすることで、目標達成に対してより具体的に行動できる点も評価に値する。研究活動や社会貢献・社会連携についても高い達成率となっており、上記の手法が効果的であることを示している。

2019年度の重点目標「Webサイトの再構築」についても独自サイトから全学Webサイトへの移行により目標を達成した。同サイトにおいて教育支援ツールを公開することに加え、情報発信のワークフローを確立した。今後、ラボラトリシステムの運用をはじめとする本センターの活動の広報強化が期待される。

また、研究成果も、情報メディア教育研究センター研究報告（9件）、情報メディア教育研究センター研究報告（15件）をはじめ、93件の学会発表および公表論文など、幅広く活動していると言える。

外部からの組織評価（第三者評価等）も適切に受けており、科研費等外部資金の応募・獲得状況も基盤(C)代表研究者の3件をはじめ、基盤(S)研究分担者が1件、基盤(C)の研究分担者が1件と積極的に外部資金の獲得を行っている。この点も評価が高い。

今年度の重点目標では、オンライン授業実施にあたり、他部局と連携し具体的な提言や取り組みの発信を行うことが掲

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

げられているが、その成果に期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

スポーツ研究センター

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

調査研究、学生の健康維持増進、体育施設の運営など、スポーツ研究センターの従前からの任務に加え、近年は体育会の強化、大学のイメージやプレゼンスの向上、社会や地域への貢献と還元などにも尽力されていると推察される。人的資源や予算も限られた厳しい環境下において、対外的に発表された研究成果は書籍・論文等 67 点をはじめとして多数に上る。また研究成果に対する社会的評価においても、2018 年度に引用された回数が 63 回であり、高く評価できる。科研費等外部資金の応募・獲得状況は科学研究費が 6 件、それ以外の公的研究費 2 件と組織規模に比して多数に上り、この点においても高く評価することができる。全体的にバランスの取れた運営のもと、今後の研究活動の連携と相互活性化という観点からの共同プロジェクト構築への取り組みは、貴センターの次の展開につながるものと思われ期待できる。

このような質・量ともに充実した研究・社会貢献活動について外部に発信するため、ホームページを充実したものにすることは貴センターの社会的プレゼンスを高めるために大変効果的だと考えられる。早期のホームページのバージョンアップが望まれる。

また、センターに対する外部からの組織評価については行われてはいないが、2019 年度よりセンター内に設置される質保証委員会が組織内の客観的立場から評価を行う予定とされており、今後の成果に期待したい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

昨年度の評価において、「ホームページのバージョンアップ」が挙げられているが、この点については、各所員の研究や社会貢献活動に関して頻度を高めながら発信するように努めていきたい。

また 2019 年度に質保障委員会が立ち上がり、一定の評価を受けている。今後も研究センターの活動の質が全般的に向上するように努めていきたい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

スポーツ研究センターが 2019 年度大学評価委員会の評価結果において指摘されていた 2 点、すなわち貴センターのホームページの充実化と質保証委員会の活動については達成されており、評価できる。また、この達成にとどまることなく、さらなる改善・向上に向けた持続的努力の姿勢が示されており、この点も評価できる。元来、貴センターは、多種多様な分野の所員を抱え、それに対応した多彩な研究とその成果が公表されており、外部資金獲得の努力とその実績、そしてそれに基づく成果の創出も見事である。そうした研究にはグローバル化への対応も見取れる。さらに、体育会の強化（アスリート育成）など大学ブランド化への貢献もあり、学内外に開かれた行事の主催や所員のマス＝メディアへの出演など持続的な社会貢献・社会連携もある。すでにそうした完備した体制の中で、さらなる向上をめざしており、その成果の検証が期待される。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2019 年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

【スポーツ研究センター内】

2019 年度は 8 つの研究プロジェクトを実施した。

- ①学生アスリートの心理社会的スキルの獲得状況に関する検討
- ②大学生アスリートの e スポーツ実施に関する実態調査
- ③アスリートが実感する一体感を高める有効な手立て
- ④ボクシング動作を用いたエクササイズプログラムの開発と運動強度検証
- ⑤スポーツイベントにおける社会的影響に関する調査研究
- ⑥小学生年代のサッカー選手におけるパフォーマンスおよびフィジカルチェックに関する調査・研究
- ⑦レジスタンス運動が血管内皮機能に及ぼす影響-性差に着目した検討-

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

⑧在学生の大学スポーツに対する認知度並びに評価が大学への帰属意識に与える影響

2019年度末からの新型コロナウイルス感染拡大を受け、年度末に開催予定であったプロジェクト報告会は開催できなかったが、各プロジェクトの報告書を作成し、所員間で情報共有を行った。

【対外的活動】

- (プロジェクト) 『レジスタンス運動が血管内皮機能に及ぼす影響 -性差に着目した検討-』, 2019年8月1日～2019年12月20日, 法政大学(東京都)
レジスタンス運動が血管内皮機能に及ぼす影響の性差を検討した。その結果, レジスタンス運動における血管内皮機能の低下は男性にのみで生じ, 女性では生じないことが明らかになった。また, この性差の機序には, レジスタンス運動中における血圧応答の違いが関与している可能性が示された。
本研究の成果は Journal of Applied Physiology に投稿した(現在査読中)。
- (研究会大会) 『日本野球科学研究会第7回大会』, 2019年11月30日～12月1日, 法政大学(スポーツ健康学部棟), 普及と育成そのカタチ, 一般研究発表77題とシンポジウム3・講演2, 野球の指導者と研究者 約280名, 平野裕一
- (セミナー) 『八王子スポーツカレッジ:メンタルトレーニング・ベーシックス』, 2019年5月23日・6月6日・八王子スポーツ整形外科(東京都), 内容:講師担当, 荒井弘和
- (セミナー) 『日本スポーツ協会共通科目Ⅲ集合講習会』, 2019年8月22日～25日・KFCホール(東京都), 内容:コーチデベロッパー担当, 荒井弘和
- (セミナー) 『グッドコーチング・セミナー』, 2019年9月17日・PHP研究所東京本部(東京都), 内容:講師担当, 荒井弘和
- (セミナー) 『日本スポーツ協会共通科目Ⅲ集合講習会』, 2019年10月17日～20日・ベルサール九段(東京都), 内容:コーチデベロッパー担当, 荒井弘和
- (セミナー) 『野球に役立つ走動作トレーニングおよび筋力トレーニング』, 2019年7月16・19・22日, 法政大学(神奈川県), 本学硬式野球部を対象に走動作および筋力トレーニングのレクチャーを行った。杉本龍勇
- (セミナー) 『実践!グッドコーチング』セミナー, 2020年2月26日, エステック情報ビル(東京都), テーマ:グッドコーチングの実践と普及を目指して, 内容:日本バレーボール協会に加盟する47都道府県協会と全国連盟の代表者を対象として, わが国のバレーボール界で未だ絶えない指導中のパワーハラメントを無くし, コーチが今日に求められるコーチングを実践する上で, 重要となる思考・判断や態度・行動に関する情報提供を行った。山田快
- (セミナー) 『アスレティック・トレーナー・キャリア・サポート・アカデミー』, 2019年2月6日, 国立スポーツ科学センター, AT活動およびATの現実と未来, 約20名, 泉重樹
- (セミナー) 『埼玉県鍼灸師会 第一回学術講習会』, 2019年7月21日, さいたま市, アスリートの腰痛に対する鍼治療～機能評価を指標とした鍼治療の例～, 約50名, 泉重樹
- (セミナー) 『湘南スポーツメディスン01』, 2019年9月29日, 横浜市, アスリートにおける体幹機能評価～アスレティックトレーナーの立場から～, 約60名, 泉重樹
- (セミナー) 『International Judo Seminar』, 2019年8月20日, 鹿屋体育大学, 国際柔道セミナー, 各国から訪れた柔道関係者を対象に, 日本柔道の文化的側面を講演するセミナー, 15名, 永木耕介
- 『CEHD INTERNATIONAL SPEAKER SERIES』, 2020年2月27日, ミネソタ大学(ミネソタ州), Physical fitness and

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は, 前年度から「S:さらに改善した, A:従来通り, B:改善していない」を意味する。

physical activity environment of preschool children in Japan, 内容：日本の子供たちの体力の推移を解説し、自身の研究成果も含めて体力向上を目指した我が国の取り組みについて、CEHD(College of Education and Human Development)の客員研究員、院生および教員に向けて解説した。高見京太

- (フォーラム)『多摩未来塾』, 2019年6月9日, ベネッセ多摩本社(多摩市), 「スポーツ, 教育とビジネスのコラボのあり方を考える」, パネリスト/スポーツ・教育・ビジネスの現代的関わりに関する将来像検討, 研究者/自治体関係者 約200名, 山本浩
- (フォーラム)『女性スポーツの集い』, 2019年7月13日, 川越市やまぶきホール(川越市), 「一人一人の声を聞け」, 講演/スポーツ選手育成の現場で大切にされている考え方, 女性スポーツ指導者・川越市民など, 400人, 山本浩
- (セミナー)『東京都教育庁八丈出張所管内夏期教員研修』, 2019年8月28日, 東京都八丈支庁(八丈町), 「ことばのパワーを感じて」, 講演/教育の現場で配慮すべきコミュニケーション, 島嶼部教職員 30人, 山本浩
- (セミナー)『JOC ナショナルコーチアカデミー』, 2019年9月11日, ナショナルトレーニングセンター(北区西が丘), 「ことばのパス」, 講演/指導者の知っておくべきコミュニケーション, JOC強化コーチ80人, 山本浩
- (セミナー)『北海道タレントアスリート発掘・育成事業』, 2019年9月22日, 大塚製薬札幌支店(札幌市), 「自己紹介を考えよう」, 講演/若きアスリートが身につけておくべきコミュニケーション能力, 北海道内ユースアスリート並びに指導者 40人, 山本浩
- (セミナー)『日本サッカー協会 S級ライセンス講習会』, 2019年11月7日, 北区西が丘(国立スポーツ科学センター), 講義/「プロの指導者が覚えておくべきコミュニケーションとメディア対応」, S級ライセンス取得希望サッカーコーチ 20人, 山本浩
- (セミナー)『横須賀サッカー協会指導者講演会』, 2019年11月10日, 横須賀市, 講義/「サッカーでつながる 横須賀」 横須賀サッカー協会登録指導者・協賛社 20人, 山本浩
- (セミナー)『秋田県スポーツ少年団指導者研究協議会』, 2019年11月16日, 秋田市, 講演/「勝負の石はこうして積まれる」(指導者と競技者の関係論), 秋田県少年スポーツ指導者 50人, 山本浩
- (シンポジウム)『玉名地域づくりシンポジウム』, 2019年12月7日, 熊本県玉名市, 講演/金栗スピリッツと玉名のこれから(地域おこしとスポーツ), 自治体, 地域スポーツ関係者 50人, 山本浩
- (セミナー)『東信五市議会議員研修会』, 2020年1月15日, 長野県千曲市, 講演/おもてなしの灯を点せ(東京五輪・パラリンピックと地域との連携はどうあるべきか), 長野県東部5市議会議員 80人, 山本浩
- (セミナー)『(公財)日本エアロビック連盟 JapanNationalCamp』, 2020年2月8日, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 講演/スポーツは社会に育つ スポーツの環境と指導との関わりについて, エアロビックプロコーチ 30人, 山本浩
- (シンポジウム)『滋賀県スポーツ協会加盟都市体育・スポーツ協会研修会』, 2019年7月10日, ピアザ淡海305号会議室(滋賀県), テーマ:国スポ・障スポにおける地域スポーツ団体の関わり方:イベントレガシーをマネジメントする, 内容:これまでの国民体育大会を通じて形成されたレガシーとその創出方法, 参加者:滋賀県の市町のスポーツ協会の関係者を対象に, 吉田政幸
- (セミナー)『筋力とパワーの科学』, 2019年7月21日, 法政大学(神奈川県), 本学硬式野球部を対象に, 筋力トレーニングおよびパワーの科学に関して基礎的理論から野球への応用までレクチャーした。森嶋琢真

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- (講演)『GSC アスリートクリニック』2019年4月27日, 御殿場市総合体育館, 御殿場市の小学生・中学生およびその保護者, 指導者を対象に走り方の指導方法を講演し, その後実技指導を実施した。杉本龍勇
 - (講演)『第39回大学職員セミナー』2019年7月5日 法政大学市ヶ谷キャンパスポアソナードタワー26階, 公益財団法人大学セミナーハウス主催のセミナーにおいて,「大学スポーツの現在」と題して, 大学スポーツが置かれている現状と今後の方向性について講演した。杉本龍勇
 - (講演)『野球に生きる走動作とトレーニング方法東』2019年8月22日 楽天生命パーク宮城 東北楽天ゴールデンイーグルス スクールコーチに対して野球のパフォーマンスと効果的な走動作の相互作用について講演した。また, 講演の内容に従って実技指導も実施した。杉本龍勇
 - (講演)『令和元年度「東京都障害者スポーツ選手育成事業」育成プログラム「トレーニング概論」』2019年11月23日 東京都多摩障害者スポーツセンター, パラアスリートを対象に, トレーニング方法の理論と具体的な内容について講演した。杉本龍勇
 - (講演)『第52回西置賜地区スポーツ協議会 指導者・育成母集団研修会』2019年11月30日 山形県長井市 青少年対象のスポーツ指導方法に関して講演。杉本龍勇
 - (講演)『神奈川県スポーツ指導者スキルアップ講座』2019年12月21日 川崎市高津スポーツセンター, 神奈川県のスポーツ指導者を対象に,「多様な種目に活用できる走り方とその指導方法」について講義を行い, その後実技指導を実施した。杉本龍勇
 - (講習)『スポーツ心理学』, 2020年1月11日, 戸田公園(埼玉県), 公益社団法人日本ボート協会が主催する平成31年度公認コーチ養成講習会において, 公認コーチの取得を目指す受講者に対してスポーツ心理学に関する講習会を実施した。中澤史
 - (講演)『おもてなしの日本 毅然としたドイツ』, 日本スポーツ歯科医学会, 2019年6月28日, 鹿児島市, 山本浩, スポーツと歯科医学の関わりを中心として日独競技者育成の比較講演
 - (講演)『三つ子の魂は社会が決める』, 福岡県小児科医会総会, 2019年7月6日, 福岡県久留米市, 山本浩, 乳幼児の育て方から始まるスポーツ環境の考え方の相違がアスリートの違いにどう影響するか
 - (講演)『アスリートは大地が作る』, 関西大学社会学部学術講演会, 2019年7月8日, 大阪府吹田市, 山本浩, 東京五輪を前にした諸外国の競技スポーツ育成環境の違いを比較
 - (講演)『実況アナウンサーの世界』, スポーツ言語学会総会, 2019年10月6日, 千代田区神田駿河台, 山本浩, スポーツ実況放送の準備から実行まで,
 - (講演)『アスリートは大地に生まれる』, Jリーグドクター会(Jクラブチームドクター50人), 2020年1月12日, 文京区本郷(JFAハウス), 山本浩, 欧米アスリートの身体作りから教育, 指導まで
5. コラム(新聞, 刊行物), テレビ出演, ラジオ出演
- (コラム) 静岡新聞社(朝刊)時評.『五輪, W杯名のスポーツ報道』2019年6月5日, スポーツの世界的メガイベント前の報道機関の情報提供に関して, スポーツ本来の魅力を全面に出した内容の重要性について説明した。杉本龍勇
 - (コラム) 静岡新聞社(朝刊)時評.『東京五輪・パラ開幕まで1年』2019年8月1日, 2020年7月開幕の東京五輪・パラ大会に向け, 開催期間中の内容を準備するだけでなく, 大会後の様々なレガシー効果の創出に向けたビジョンならびに準備, そして実践することの重要性を説明 杉本龍勇

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『企業スポーツの継続』 2019年10月2日, 多くのスポーツがプロ化する, あるいは目指す中で, これからの企業スポーツの意義について説明し, 現在我が国が政策として推進している働き方改革のモデルケースになれる可能性について示した。 杉本龍勇
- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『ラグビー「にわかファン」』 2019年11月28日, 2019年ラグビーW杯日本大会で生まれたラグビーの「にわかファン」に対する大会後の対応について, 長期的な視点からコアなファンにするための意見を述べた。 杉本龍勇
- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『道具の進化とパフォーマンス』 2020年2月12日, マラソンの「厚底シューズ」が注目を集める中, 選手のパフォーマンス進化は道具によるモノより, 自身のトレーニング内容およびその他の要素が大きな影響を与えていることを説明した。 杉本龍勇
- (コラム) 『一歩先を行くフィジトレ』 footies! solmeda, 高校サッカー選手向けのフィジカルトレーニングを紹介している。 杉本龍勇
- (コメント) 東京新聞・中日新聞 (朝刊) 2019年10月18日, 東京五輪において開催される競歩およびマラソンの札幌開催への変更に対して。 杉本龍勇
- (コメント) 毎日新聞 (朝刊) 2019年11月7日, 2019年ラグビーW杯日本大会での台風による試合開催の中止を受け, 2020年開催の東京五輪・パラ大会への教訓および対策についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 静岡新聞 (朝刊) 2020年1月6日, 2020年開催予定 (当時) の東京オリンピックに対する期待についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 東京スポーツ 2020年1月21日, 東京五輪出場が有力視され, そこでの活躍が期待されるサッカーU23代表の堂安律選手に関して, トレーニング内容などをコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 東京新聞 2020年3月4日, コロナウィルスの感染拡大を受け, 2020年東京五輪の開催可否 (中止や延期を含む) について, 経済的な視点ならびにアスリート側の考えに基づく対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 静岡新聞 (朝刊) 2020年3月24日, 2020年東京五輪・パラ大会の開催延期を受け, 延期日程の決定条件について現状分析をコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 静岡新聞 (夕刊) 2019年8月30日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 中日 (夕刊) 2019年8月30日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 信濃毎日新聞 (夕刊) 2019年8月30日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 東奥日報 2019年8月30日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 京都新聞 (夕刊) 2019年9月6日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 北海道新聞 (夕刊) 2019年9月2日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 北海道新聞 (夕刊) 2019年9月2日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 日本経済新聞 (夕刊) 2019年9月2日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

- (コメント) 河北新報 (夕刊) 2019年9月2日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 東奥日報 2019年12月12日, 2020年東京オリンピックの有給スタッフの対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 信濃毎日新聞 (夕刊) 2019年12月13日, 2020年東京オリンピックの有給スタッフの対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 沖縄タイムス 2019年12月13日, 2020年東京オリンピックの有給スタッフの対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 神戸新聞 (夕刊) 2019年12月13日, 2020年東京オリンピックの有給スタッフの対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 信濃毎日新聞 (夕刊) 2019年12月13日, 2020年東京オリンピックの有給スタッフの対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 日本経済新聞 (夕刊) 2020年2月29日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 信濃毎日新聞 (夕刊) 2020年2月29日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 秋田さきがけ新聞 2020年3月1日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 四国新聞 2020年3月1日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 愛媛新聞 (夕刊) 2020年3月2日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 琉球日報 2020年3月2日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメントした, 杉本龍勇
- (コメント) 愛媛新聞 (夕刊) 2020年3月2日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・【2019年研究プロジェクト】 プロジェクト

②対外的に発表した研究成果 (出版物、学会発表等)

※2019年度に研究所 (センター) として刊行した出版物 (発刊日、タイトル、著者、内容等) や実施した学会発表等 (学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等) の詳細を記入。

1. 書籍 (商業雑誌等含む)

- 『おうち筋トレ』「運動が苦手でもできる“ゆる筋トレ”」, 伊藤マモル, 2020年3月20日
日経ヘルス編, p. 34-39, 年齢とともに結果が出にくくなるダイエットの原因の一つに筋肉の硬さがあることを指摘。運動不足で急な運動が危険な人に向けた筋肉をほぐす軽度な運動の意義, 理論, 実践方法を表した。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- 『健康心理学事典』, 荒井弘和, 2019年10月, 丸善出版, P.486- P.487, 「運動行動, 身体活動のカウンセリング」の執筆を担当
- 『グッドコーチになるためのココロエ』, 平野裕一・土屋裕睦・荒井弘和 (編), 2019年7月, 培風館
- 『注意を向けるべき「場所」について』 中澤 史, 2019年4月5日, Tennis Classic Break No.486, P.46-P.47
- 『覚悟が集中力を高める』 中澤 史, 2019年4月15日, 月刊バレーボール第73巻第5号, P.68 - P.69.
- 『注意力の向け方でパフォーマンスは変わる! ?』 中澤 史, 2019年5月5日, Tennis Classic Break No.487, P.46-P.47.
- 『プレー中に注意を向けるべき場所』 中澤 史, 2019年5月15日, 月刊バレーボール第73巻第6号, P.70 - P.71.
- 『“読む力”を磨く方法』 中澤 史, 2019年6月5日, Tennis Classic Break No.488, P.106-P.107.
- 『予測力を強化するエキスパートシステム』 中澤 史, 2019年6月15日, 月刊バレーボール第73巻第7号, P.74 - P.75.
- 『手のひらの感覚』 中澤 史, 2019年7月5日, Tennis Classic Break No.489, P.11.
- 『一歩先ゆく予測力を向上させるには! ?』 中澤 史, 2019年7月5日, Tennis Classic Break No.489, P.104-P.105.
- 『予測力の向上に有効な知覚トレーニング』 中澤 史, 2019年7月15日, 月刊バレーボール第73巻第8号, P.82-P.83.
- 『予測力を創造するエキスパートシステム』 中澤 史, 2019年8月5日, Tennis Classic Break No.490, P.100-P.101.
- 『プレッシャーがパフォーマンスに与える影響』 中澤 史, 2019年8月15日, 月刊バレーボール第73巻第9号, P.142-P.143.
- 『プレッシャーとパフォーマンスの関係』 中澤 史, 2019年9月5日, Tennis Classic Break No.491, P.90-P.91.
- 『上級者が実戦するクワイエットアイ』 中澤 史, 2019年9月15日, 月刊バレーボール第73巻第10号, P.44-P.45.
- 『「ミスしてはいけない」と思うほどミスしてしまうのはなぜ?』 中澤 史, 2019年10月5日, Tennis Classic Break No.492, P.90-P.91.
- 『なぜ「ミスしてはいけない」と思うとミスしてしまうのか?』 中澤 史, 2019年10月15日, 月刊バレーボール第73巻第13号, P.46-P.47.
- 『ハイ・パワーポーズのススメ』 中澤 史, 2019年11月15日, 月刊バレーボール第73巻第15号, P.142 - P.146.
- 『悪いクセのなおし方』 中澤 史, 2019年12月15日, 月刊バレーボール第74巻第1号, P.160 - P.161.
- 『ホームアドバンテージは存在するのか?』 中澤 史, 2020年1月15日, 月刊バレーボール第74巻第2号, P.146 - P.147.
- 『なぜ人に見られるとパフォーマンスは低下するのか?』 中澤 史, 2020年2月15日, 月刊バレーボール第74巻第3号, P.138 - P.139.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- 『ユニフォームが与える心理的効果』中澤 史, 2020年3月15日, 月刊バレーボール第74巻第4号, P.156 - P.157.
- 『Extreme and Rare Sports:Performance Demands, Drivers, Functional Foods, and Nutrition』, Ochi, E., and Tsuchiya, Y., 2019年06月, Taylor and Francis pp.321-340, "Chapter 18 Skeletal Muscle Damage and Recovery from Eccentric Contractions"を担当
- 『筋肉研究最前線—代謝メカニズム, 栄養, 老化・疾病予防, 科学的トレーニング法』, 越智英輔, 2019年09月, エヌ・ティー・エス, pp.271-279 "第4章2節 筋損傷抑制するためのオメガ3脂肪酸の摂取について"を担当
- 『アスレティックトレーニング学』. 広瀬統一, 泉重樹, 上松大輔, 笠原政志 編集:文光堂. 東京. 2019/12
- 『グッドコーチになるためのココロエーWebアシスト付』. 平野裕一, 土屋裕睦, 荒井弘和 (編集):培風館. 東京. 2019/7 (分担: 泉重樹. 第4章 アスリートの休養・睡眠. 129-135, コラム6 熱中症対策. 136-137)
- 『健康運動指導士試験要点整理と実践問題』, 稲次潤子(監修), 上岡尚代, 野田哲由, 田辺達磨(編集), 2019年8月5日, 文光堂, p.61-p.82, 第IV章運動生理学の執筆を担当, 高見京太
- 『The legacy of Kano Jigoro :Judo and Education』, The Committee for the Commemoration of the 150th Anniversary of the Birth of Jigoro Kano (Translated by Tom Kain), Japan Library : Japan Publishing Industry Foundation for Culture, March 2020
本書は、「嘉納治五郎・生誕150周年記念委員会」が『気概と行動の教育者・嘉納治五郎』と題して2011年に筑波大学出版会より出版した書が「Japan Library」により選定され再出版された訳本であり, 永木耕介担当部はP.190-P.203である。
- 『リファレンスブック』, 平野裕一, 2019年6月13日, 日本スポーツ協会, pp156-176, pp192-201, 身体のしくみと働きとスキルトレーニングについて
- 『グッドコーチになるためのココロエ』, 平野裕一, 土屋裕睦, 荒井弘和共編, 2019年7月12日, 培風館, スポーツのコーチングに求められる人間力と知識技能について
- 『勝ちへのこだわり』, 「みんなのスポーツ」2019年7月号, 園山和夫編, 2019年7月1日発行, 日本体育社, 寄稿 VRを利用した勝敗の見極めがどう突き詰められてきたか, 山本浩
- 『グッドコーチになるためのココロエ』, 平野裕一, 土屋裕睦, 荒井弘和共編, 2019年7月12日, 培風館, コラム:スポーツのコーチングに求められる人間力と知識技能について, 山本浩
- 『大敗北から立ち上がる』, 体育の科学8月号, 荒井弘和編, 2019年8月10日, スポーツにおけるネガティブ体験の価値, 杏林書院, 山本浩
- (寄稿)『羅針盤』, 山陰中央新報, 山陰中央新報社, 2019年5月-2020年3月, スポーツに関するコラム(6週に一度掲載), 山本浩
- 『グッドコーチになるためのココロエ』, 平野裕一, 土屋裕睦, 荒井弘和共編, 2019年7月12日, 培風館, コラム:他種目に対するコーチング, 杉本龍勇

2. 論文

- 『大学野球選手のシーズン中の肩関節可動域』, 伊藤マモル, 森嶋琢真, 由井嶺太, 2020年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要第38号, p.45-54, 野球選手の肩関節周辺のスポーツ傷害の予防に資するセルフ・スクリーニングの情

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

報として指椎間距離測定法に着目し、シーズン中の変化の特徴を検討した。

- 『大学野球選手を対象とした無侵襲非観血的ヘモグロビン測定装置によるヘモグロビン濃度の継続的測定結果』, 伊藤マモル, 杉本恵子, 吉川恵美, 2020年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要第38号, 37-44, 大学野球選手のコンディショニング指導の基礎資料として, 試合期におけるヘモグロビン濃度の変動を把握する目的で, 無侵襲非観血型測定装置を用いて検討した。
- 『大学生アスリートは受傷したチームメイトをどう認知しているか?』, 鈴木郁弥・清水智弘・泉重樹・荒井弘和, 埼玉アスレチック・リハビリテーション研究会誌, 2019年10月, 10, P.21-P.25.
- 『単純反応課題との複合が垂直跳び高のグレーディングに及ぼす影響』, 宮本健史, 木塚朝博, 林容市, 小野誠司, 2019年6月10日, 体育学研究 64 (1), p. 49-p. 57, 任意のタイミング (優先条件) および単純反応 (高速条件) の両条件下における垂直跳びのグレーディング能力について検討し, 跳躍のグレーディング能力は優先条件と比較して高速条件でより低下する可能性を示した。
- 『感覚系の特性に関連した最近の課題』, 林容市・田中喜代次, 2019年8月1日, 電子情報通信学会 102 (8), P. 801-P. 804, 身体感覚がスポーツ種目や運動の種類, 個人の体力や過去の運動習慣などから影響を受けることを踏まえ, 身体活動やスポーツ時における全身的な努力感覚・疲労感覚の適切な測定や評価の重要性を解説した。
- 『病院内におけるメディカルフィットネスの実際と効果』, 田中喜代次, 林容市, 中垣内真樹, 2019年11月, 未病と抗老化 28, p. 44-P. 48, 特に虚血性心疾患患者らを対象とした約30年間の病院内監視型運動教室の効果について, 総合的体力指標などに着目して検討し, 運動種目, 強度, 頻度, などとの関係について解説した。
- 『在校生の大学スポーツに対する評価が大学への帰属意識に与える影響』, 杉本龍勇, 2020年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要 38 pp55-67, 大学スポーツが大学のブランディングに対するプロモーションツールとして活用されるケースが多く見られるようになっているが, その効果については多くは検証されていない。そこで本研究では, 大学スポーツの大学ブランディングに与える影響について検証した。結果として, 在校生における大学体育会の認知度は低く, 大学に対する満足度と大学体育会の活躍にはそれほど強い相関は見られなかった。しかし, スポーツ実施やスポーツ観戦に対する興味が強まると体育会への関心度も高まり, これらには相関関係があることが示された。こうした点から, スポーツ全般に対する興味や関心の醸成が大学スポーツの価値を高めと思われる。
- 『バレーボールが持っている魅力の可視化』, 山田 快・榎本恭介・荒井弘和, 2019年6月, バレーボール研究 P.7-P.13, バレーボールに携わった経験の少ない者がバレーボールに内在する, どのような点に魅力を感じるかについて調査を行った結果, それは大きく6つの魅力に集約されることが明らかになり, バレーボールの参画者増大に向けては, 今後抽出された6つの魅力を考慮したインストラクションが重要になることが示唆された
- 『チームの一体感が競技意欲の予測因となり得るか?』, 山田 快, 2020年3月, コーチング学研究 P.207-P.217, スポーツチームの一体感がチームに所属するアスリート個人の競技意欲を予測するかについて検討した結果, チームの一体感から直接的に競技意欲を予測することは難しいものの, コレクティブエフィカシーやスポーツコミットメントといった関連要因を介し, 間接的に予測することは可能であり, アスリートの競技意欲向上・改善に当たって, チームの一体感が貢献することが示唆された
- 『陸上長距離選手のパーソナリティに関する検討』中澤 史・梶内大輝・佐藤友哉・松岡悠太, 2020年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要第38号, P.15-P.18.
- 『バスケットボール選手における練習時のパフォーマンスに他者の存在が及ぼす影響』和田拓真・中澤 史・坂入洋右, 2020年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要第38号, P.19-P.23.
- 『Supplementation of eicosapentaenoic acid-rich fish oil attenuates muscle stiffness after eccentric

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

- contractions of human elbow flexors』, Tsuchiya, Y., Yanagimoto, K., Ueda, H., Ochi, E., 2019年04月, “Journal of the International Society of Sports Nutrition” 16(1), pp.19-
- 『Two and four weeks of b-Hydroxy-b-Methylbutyrate (HMB) supplementations reduce muscle damage following eccentric contractions』, Tsuchiya, Y., Hirayama, K., Ueda, H., Ochi, E., 2019年05月, “Journal of the American College of Nutrition” 38(4), pp.373-379
 - 『先端工学を活用した脚のむくみ(浮腫)の包括的評価とその応用 —スポーツ用弾性靴下の効果と作用機序の検討—』, 佐々木一茂, 越智英輔, 2019年06月, 『デサントスポーツ科学』 40, pp.155-164
 - 『Short-term cycling restores endothelial dysfunction after resistance exercise』, Takuma Morishima, Motoyuki Iemitsu, Eisuke Ochi, 2019年4月, Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sports. 29(8): 1115-1120. レジスタンス運動後における血管内皮機能の低下はレジスタンス運動後に 10 分間の有酸素性運動を行う事で回復できる事を明らかにした。
 - 『Effect of home-based high-intensity interval training and behavioural modification using information and communication technology on cardiorespiratory fitness and exercise habits among sedentary breast cancer survivors: habit-B study protocol』, Tsuji, K., Ochi, E., Okubo, R., Shimizu, Y., Kuchiba, A., Ueno, T., Shimazu, T., Kinoshita, T., Sakurai, N., Matsuoka, Y., 2019年08月, “BMJ Open” (8), e030911-
 - 『Eicosapentaenoic acid (EPA) and docosahexaenoic acid (DHA) in endurance performance and cardiovascular function』 (invited review), Tsuchiya, Y., Ochi, E., 2019年11月, “Exercise Science” 28(4), pp.317-323
 - 『Eight weeks of fish oil supplementation does not prevent sitting-induced leg endothelial dysfunction』, Takuma Morishima, Yosuke Tsuchiya, Jaume Padilla, Eisuke Ochi, 2019年5月, Applied Physiology, Nutrition, and Metabolism. 45(1):55-60. 8週間にわたる n-3 系脂肪酸の摂取は座位による血管内皮機能の低下を予防できない事を明らかにした。
 - 『Eccentric contraction-induced muscle damage in human flexor pollicis brevis is accompanied by impairment of motor nerve』, Ochi, E. (corresponding author), Ueda, H., Tsuchiya, Y., Kouzaki, K., Nakazato, K., 2020年03月, “Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports” 30(3), pp.462-471
 - 『Physical characteristics and fitness in elite collegiate baseball players in Japan: Comparison of pitchers vs. fielders』, Morishima, T., Ito, M., Tsuchiya, Y., Ueda, H., Ochi, E., 2020年03月, “Gazzetta Medica Italiana Archivio per le Scienze Mediche” 179(3), pp.136-42
 - 『腰椎椎間板変性を有する大学男子硬式野球選手の身体特徴』 . 田口直樹, 宮川俊平, 泉 重樹: 日本臨床スポーツ医学会誌. 27(3), 481-488, 2019
 - 『大学アスリートを対象とした脳震盪経験の実態調査』 . 泉 重樹, 鈴木郁弥, 荒井弘和, 梅下新介: 法政大学スポーツ健康学研究. (10), 1-7, 2019-03
 - 『大学サッカー一部に対する Jones 骨折検診の経験』 . 瀬戸宏明, 泉 重樹, 平野祐貴: 法政大学スポーツ健康学研究. (10), 9-14, 2019-03
 - 『野球打撃動作における腰部回旋挙動解析』 . 田口直樹, 金岡恒治, 泉 重樹, 宮川俊平: 日本臨床スポーツ医学会誌. 27(1), 11-19, 2019

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

●『The differing effects of promoting sport events on the destination image of a city around the world』(原著論文), Heere, B., Wear, H., Jones, A., Breitbarth, T., Xing, X., Salcines, J.L.P., Yoshida, M., & Derom, I., 2019年11月, Journal of Sport Management, 33 (6) : 506-517, 自転車競技大会(ツールドフランス)が開催地の観光イメージに与える影響の検証。

●『2019年度スポーツコーチング海外演習(欧州)報告書』, 井上尊寛・川田尚弘・久保田弓友, 2020年3月30日, 法政大学スポーツ健康学研究, 第11号, p49-58. 内容: 2019年9月12日から9月18日の7日間, ドイツとスペインにてスポーツコーチング海外実習を実施した。本稿においては, 具体的な内容と, 両国の比較などを報告として取りまとめたものである。

●『2019年度スポーツ研究センター主催 サッカー教室報告』, 井上尊寛・中澤史・中一尚斗, 2020年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要, 第38号, p73-76. 内容: 2019年度2回にわたり実施した。法政大学スポーツ研究センター主催のサッカー教室について, その概要を記すとともに, 併せて実施した調査に関する報告もおこなう。具体的には大学近隣に居住する小学生(4-6年生)のサッカー選手を対象とした身体的および心理的なテストを行った。

●『スポーツ観戦関与と消費者知識について: 精通性に着目して』井上尊寛・松岡宏高, スポーツ科学研究, (現在投稿中), 内容: 消費者は目的を達成するため, 問題が生じたときに多くの情報を収集し, それを処理し行動を決断するという情報処理をする必要があり, 製品に関連した経験量などの精通性が関与の程度に影響を与えることが示されている。そこで本研究では, (1) スポーツ観戦者の知識(消費者知識)の中でも特に精通性に着目し, それらを構成する要素を抽出し, モデルとしての妥当性や信頼性を検証すること, (2) 精通性とスポーツ観戦関与との関連性を検証し, 一連のモデルとしての妥当性に関する証左を得ることの2つを目的とした。調査は日本プロサッカーリーグに所属する3つのクラブのスタジアム観戦者に対して行い, 1,217票の回答が得られた。分析の結果から, 精通性モデルの妥当性および精通性とスポーツ観戦関与との関連妥当性が確認された。さらに, 精通性とスポーツ観戦関与との関係について, 精通性はスポーツ観戦関与に影響を与え, 特に抽象化水準の高い要因に対して強い影響を与えることが示唆された。

●『Prior cycling exercise does not prevent endothelial dysfunction after resistance exercise』, Takuma Morishima, Masahira Toyoda, Eisuke Ochi, 2019年5月, European Journal of Applied Physiology. 119(7): 1663-1669. レジスタンス運動後における血管内皮機能の低下は事前の有酸素性運動では予防できない事を明らかにした。

●『Sitting-induced endothelial dysfunction is prevented in endurance-trained individuals』, Takuma Morishima, Yosuke Tsuchiya, Hisashi Ueda, Katsunori Tsuji, Eisuke Ochi, 印刷中, Medicine and Science in Sports and Exercise. 有酸素性アスリートでは座位による血管内皮機能の低下は生じない事を明らかにした。

3. 学会発表

●『価値が明確な大学生アスリートは幸せか?』, 日本スポーツ心理学会47回大会, 2019年11月16日, 筑波大学(茨城県), 荒井弘和・深町花子・榎本恭介

●『把握の調整力発揮時の測定時間と運動習慣との関係』, 日本体育学会第70回大会, 2019年9月11日, 慶應義塾大学(東京都), 林容市・若田部瞬, 目標値に対して発揮された把握力の精度と測定時間を調べ, 精度は目標値が大きいほど小さくなる一方で測定時間は逆に延長することを示した。

●『学校現場が子どもの体力向上を能動的に進めるためのヒント』, 日本体育学会第70回大会, 2019年9月11日, 慶應義塾大学(東京都), 山田 稔・林容市・山田快, 関東圏にある小学校, 中学校の教員を対象に児童・生徒の体力に関する質問紙調査を実施し, 学校が子どもの体力向上を推進するために, 教員が体力を要素ではなく包括的かつ多角的に理解する必要性が高いことが示唆された。

●『運動中の意識の違いが運動に伴う努力感覚と感情に与える影響』, 日本体育測定評価学会第19回, 2020年3月1日,

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

福井大学（福井県）、若田部舜，土屋芽生，林容市，有酸素性運動中に異なる方法で聴取する音楽を意識させても，運動中の努力感覚において条件による有意な変化は認められず，各感情においても条件による有意な変化は認められないことを明らかにした。

●『音楽に合わせた高強度運動における音楽テンポが生理指標および心理指標に及ぼす影響』，日本体育測定評価学会第19回，2020年3月1日，福井大学（福井県），土屋芽生，若田部舜，林容市，宮本健史，白井祐介，健康な大学生に音楽テンポの異なる高強度のレスンプログラムを実践させたところ，心拍数や運動強度および気分尺度は運動によって変化した一方で，楽しさ，水分摂取量，および主観的作業量にはテンポの違いによる影響は認められなかった。

●『Team Unity as a Predictor of Athlete Competitive Motivation』，24th Annual Congress of the European College of Sport Science，2019年7月4日，The Prague Congress Centre（チェコ），Kai Yamada，上記論文「チームの一体感は競技意欲の予測因となり得るか？」の内容を国際学会（英語）にて報告した

●『グッドコーチ像の照合—アスリートはどのようなコーチを求めているのか—』，日本スポーツ心理学会・第46回大会，2019年11月16日，筑波大学（茨城県），山田 快・堀本菜美，コーチの卵である大学生アスリートがどのような特徴を備えたコーチを優れていると感じているのかについて調査を行ったところ，「アスリートへの理解を深める」といった81の特徴が抽出，それらは18に集約されることが示唆され，抽出された特徴は今日わが国のコーチ育成の指針となっている，モデル・コア・カリキュラムに示された「グッドコーチ像」の内容と概ね一致することが確認された

●『ソフトテニス選手におけるサーブ時のルーティンワークの介入効果についての検討』日本体育学会第70回大会，2019年9月12日，慶応義塾大学（神奈川県），佐藤友哉・松岡悠太・中澤 史。

●『中学生サッカー選手のパーソナリティ特性に関する検討』日本体育学会第70回大会，2019年9月12日，慶応義塾大学（神奈川県），松岡悠太・佐藤友哉・中澤 史。

●『ソフトテニス選手におけるサーブ時のルーティンワークの介入効果についての検討』日本スポーツ心理学会第46回大会，2019年11月17日，筑波大学（茨城県），佐藤友哉・松岡悠太・中澤 史。

●『中学生サッカー選手のパーソナリティに関する検討 —ポジションに着目して—』日本スポーツ心理学会第46回大会，2019年11月17日，筑波大学（茨城県），松岡悠太・中澤 史。

●『陸上長距離選手のパーソナリティに関する一考察』日本スポーツ心理学会第46回大会，2019年11月17日，筑波大学（茨城県），中澤 史・梶内大輝・佐藤友哉・松岡悠太。

●『構成的グループエンカウンターを取り入れたスポーツ実技系授業が大学新入生のコミュニケーション・スキルに与える影響について』日本スポーツ心理学会第46回大会，2019年11月17日，筑波大学（茨城県），福井邦宗・中澤 史。

●『中学生サッカー選手のパーソナリティ特性に関する一考察 - ポジションに着目して -』九州スポーツ心理学会第33回大会，2020年3月8日，福岡大学（福岡県），松岡悠太・中澤 史。

●『Short-term cycling restores endothelial dysfunction after resistance exercise』，66th Annual Meeting of American College of Sports Medicine (Orlando, USA) 2019-5, Morishima, T., Iemitsu, M., Ochi, E. レジスタンス運動後における血管内皮機能の低下はレジスタンス運動後に10分間の有酸素性運動を行う事で回復できる事を明らかにした。

●『Motor nerve conduction velocity with eccentric contractions of flexor pollicis brevis muscle』，66th Annual Meeting of American College of Sports Medicine (Orlando, USA) 2019-5, Ochi, E., Ueda, H., Tsuchiya, Y., Kouzaki, K., Nakazato, K.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し，回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は，前年度から「S：さらに改善した，A：従来通り，B：改善していない」を意味する。

- 『Fish oil supplementation attenuates muscle stiffness after eccentric contractions of human elbow flexors』, 2019 NSCA National Conference (Washington, D.C., USA) 2019-7, Ochi, E., Ueda, H., Tsuchiya, Y.
- 『Fast velocity eccentric cycling causes greater muscle damage than slow velocity eccentric cycling』, 2019 NSCA National Conference (Washington, D.C., USA) 2019-7, Ueda, H., Tsuchiya, Y., Ochi, E.
- 『持久性アスリートは長時間の座位後に血管内皮機能が低下しない』, 第74回日本体力医学会(於 茨城県), 2019-9, 森嶋琢真, 土屋陽祐, 植田央, 街勝憲, 越智英輔. 有酸素性アスリートでは座位による血管内皮機能の低下は生じない事を明らかにした。
- 『Effect of home-based high-intensity interval training and behavioral modification using information and communication technology on cardiorespiratory fitness and exercise habits among sedentary breast cancer survivors: the habit-B randomized controlled trial in progress』, 42nd Annual San Antonio Breast Cancer Symposium (SABCS), (San Antonio, TX, USA) 2019-12, Tsuji, K., Ochi, E., Shimizu, Y., Kuchiba, A., Narisawa, T., Ishino, Y., Okubo, R., Ueno, T., Shimazu, T., Kinoshita, T., Sakurai, N., Matsuoka, Y.
- 『Oncology care providers' attitudes, practices, barriers and facilitators of physical activity promotion in breast cancer survivors: A nation-wide cross sectional web-based survey』, 42nd Annual San Antonio Breast Cancer Symposium (SABCS), (San Antonio, TX, USA) 2019-12, Shimizu, Y., Tsuji, K., Ochi, E., Okubo, R., Shimazu, T., Tatematsu, N., Sakurai, N., Iwata, H., Matsuoka, Y.
- 『腰痛の既往歴と機能的な動作は関連するののか』. 第8回日本アスレティックトレーニング学会学術集会. 東京. 泉重樹, 平野莉奈, 春日井有輝, 瀬戸宏明: 2019.07.20-21
- 『女子新体操選手70名を対象にした傷害調査』. 第8回日本アスレティックトレーニング学会学術集会. 東京. 玉木涼祐, 泉重樹, 佐藤祐輔: 2019.07.20-21
- 『Muscle activity of lower extremities and the trunk while doing unilateral squats with ViPR』. European College of Sports Science, Prague. Shigeki Izumi, Kotoko Shirakawa, Naoki Taguchi, Yuki Kasugai: 2019/7/3-6
- 『スポーツ選手を対象とした鍼灸治療の有害事象調査 競技に支障をきたすトラブルに着目して』. 第68回全日本鍼灸学会学術大会, 名古屋. 藤本英樹, 金子泰久, 泉重樹, 櫻庭陽, 吉田行宏, 鳥海崇, 池宗佐知子, 玉地正則, 吉田成仁, 近藤宏, 古屋英治: 2019年5月10-12日.
- 『鍼灸治療直後の評価に着目したスポーツ選手の肉離れに対する鍼灸治療』. 第68回全日本鍼灸学会学術大会, 名古屋. 泉重樹: 2019年5月10-12日.
- 『フィジカルチェックの普遍化に向けて マーカーレス3Dセンシングデバイスを用いた試み』. 第36回スポーツ選手のためのリハビリテーション研究会研修会, 岡山市. 佐藤祐輔, 泉重樹, 水野敬太, 佐藤正紘, 織戸英佑: 2019年3月17日.
- 『スポーツ観戦と活力社会の実現』日本マーケティング学会カンファレンス2019: スポーツマーケティング研究会, 2019年10月, 法政大学市ヶ谷キャンパス, 東京, 吉田政幸, スポーツ観戦が人々の身体的ウェルビーイング(活力)に与える影響の検証.
- 『Integrating organizational social capital into team identification research: A longitudinal study』The annual conference of the Asian Association for Sport Management, 2019年8月, Tokyo, Japan, Yoshida, M., Gordon, B., & James, J.D., チームアイデンティフィケーションとソーシャルキャピタルの統合: 縦断的検証.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

● 『Service quality in spectator sports: A meta-analytic review and assessment of its impact on fan outcomes』
The 33th Conference of the North American Society for Sport Management, New Orleans, LA., USA, 2019, 年6月,
Biscaia, R., Kim, Y.K., & Yoshida, M., スポーツ観戦イベントにおけるサービスクオリティのメタ分析。

● 『スポーツ観戦関与と観戦知識について』 井上尊寛・吉田政幸・岩村聡・吉岡那於子・仲澤眞, 日本フットボール学会第
17回大会, 2019年12月, 大東文化大学東松山キャンパス (埼玉県)。

内容: 本研究は以下の2つを目的とした。①スポーツ観戦者の知識(観戦知識)を構成する要素を抽出し, モデルとしての
の妥当性や信頼性を検証すること。②観戦知識と観戦関与の関連性を検証し, 一連のモデルとしての妥当性に関する証左
を得ること。これらのことから, スポーツ観戦者に対する知識と関与の関係性を明らかにし, スポーツ消費者行動研究に
おける新たな知見を得ること, およびチームマネジメントに資する情報の収集及び分析を目的とする。本研究では, スタ
ジアム観戦者の観戦知識の構造と関与との関係を検証するために, 日本プロサッカーリーグ(以下Jリーグと略す)のそ
れぞれのカテゴリー(J1リーグ・J2リーグ・J3リーグ)に所属する3つのクラブのスタジアム観戦者に対して調査(自
計式質問紙調査)を実施した。モデルの妥当性の検証を行ったところ, モデルの適合度を判断する指標を満たしたことか
ら, その妥当性が確認された。次に, 観戦知識と関与との関係において, 娯楽性, 連帯性などの快楽的要因への影響より
も, 場所への帰属性, 象徴性などの自己表出的要因への影響が強く示された。ただし, 快楽的要因の一つである中心性は,
自己表出的要因への強い関連性が認められていることから(井上ら, 2018), 観戦知識は関与に影響を与え, 特に抽象化水
準の高い要因に対して強い影響を与えることが示唆された。

● 『Jリーグ杯決勝戦観戦者の動向』, 渡部海帆・射場雛子・吉岡那於子・吉田政幸・井上尊寛・岩村聡・仲澤眞, 日本フッ
トボール学会第17回大会, 2019年12月, 大東文化大学東松山キャンパス (埼玉県)。

● 『Jリーグ観戦者のアウェイスタジアムにおける観戦経験』吉岡那於子・岩村聡・吉田政幸・井上尊寛・仲澤眞, 日本フッ
トボール学会第17回大会, 2019年12月, 大東文化大学東松山キャンパス (埼玉県)。

● 『Jリーグ観戦者のスタジアム滞留時間』仲澤眞・吉田政幸・井上尊寛・村田真一・岩村聡・吉岡那於子, 日本フットボ
ール学会第17回大会, 2019年12月, 大東文化大学東松山キャンパス (埼玉県)。

● 『短時間のサイクリングはレジスタンス運動後における血管内皮機能の低下を回復させる』, 第27回日本運動生理学会
大会, 2019年7月, 広島大学(広島県), 森嶋琢真, 家光素行。レジスタンス運動後における血管内皮機能の低下はレジ
スタンス運動後に10分間の有酸素性運動を行う事で回復できる事を明らかにした。

以上

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

③研究成果に対する社会的評価(書評・論文等)

氏名: 荒井弘和

※2019年度に引用された論文

『グッドコーチになるためのココロエ』, 1件

氏名: 林 容市

※2019年度に引用された論文

『A single bout of exercise at higher intensity enhances glucose effectiveness in sedentary men』, 2件

※受賞

『就学段階ごとの運動経験が大学生における把握の調整力に及ぼす影響』日本体育測定評価学会 令和元年度学会賞

氏名: 杉本龍男

※2019年度に引用された論文

『学生の体育会活動に対する意識調査』法政大学スポーツ研究センター紀要, 36: 引用3件

氏名: 越智 英輔

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

※2019年度に引用された論文

Reseachgate : 79 件

Google Scholar : 117 件

氏名 : 永木 耕介

※2019年度に引用された論文

『嘉納柔道思想の継承と変容』 引用 3 件

氏名 : 森嶋 琢真

※2019年度に引用された論文

『Whole body, regional fat accumulation, and appetite-related hormonal response after hypoxic training』(論文), 引用 9 件

『4 Weeks of high-intensity interval training does not alter the exercise-induced growth hormone response in sedentary men』(論文), 引用 1 件

『Effects of different periods of hypoxic training on glucose metabolism and insulin sensitivity』(論文), 引用 2 件

『Effect of sprint training: Training once daily versus twice every second day』(論文), 引用 1 件

『Compression garment promotes muscular strength recovery after resistance exercise』(論文), 引用 7 件

『Impact of exercise and moderate hypoxia on glycemic regulation and substrate oxidation pattern』(論文), 引用 8 件

『Augmented carbohydrate oxidation under moderate hypobaric hypoxia equivalent to simulated altitude of 2500 m』(論文), 引用 2 件

『Endothelial dysfunction following prolonged sitting is mediated by a reduction in shear stress』(論文), 引用 13 件

『Ghrelin, GLP-1 and leptin responses during exposure to moderate hypoxia』(論文), 引用 2 件

『Prolonged sitting-induced leg endothelial dysfunction is prevented by fidgeting』(論文), 引用 4 件

『Prior exercise and standing as strategies to circumvent sitting-induced leg endothelial dysfunction』(論文), 引用 7 件

『High-intensity resistance exercise with low repetitions maintains endothelial function』(論文), 引用 3 件

『Eicosapentaenoic acid-rich fish oil supplementation inhibits the decrease in concentric work output and muscle swelling of the elbow flexors』(論文), 引用 2 件

『Short-term cycling restores endothelial dysfunction after resistance exercise』(論文), 引用 1 件

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

④研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等)

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

⑤ 科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019 年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び 2019 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

※2019 年度中に応募した科研費等外部資金

【科学研究費助成事業】 合計 8 件

- ・ 基盤研究（A） 1 件 越智（分担）
- ・ 基盤研究（C） 6 件 杉本・吉田（康）・越智（分担）・永木・泉・井上
- ・ 若手研究 1 件 山田

※2019 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（継続含む）

【科学研究費助成事業】 合計 8 件

- ・ 基盤研究（A） 1 件 越智（分担）
- ・ 基盤研究（B） 1 件 越智（分担）
- ・ 基盤研究（C） 3 件 荒井・越智・永木
- ・ 若手研究（B） 1 件 吉田（政）
- ・ 若手研究 1 件 森嶋
- ・ 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化) 1 件 越智

【科学研究費助成事業以外の公的研究費】 合計 1 件

- ・ (公財) 日本スポーツ協会 2019 年度スポーツ医・科学研究プロジェクト 1 件 平野

-----* 詳細 *-----

氏名： 荒井弘和

(継続) 『科学研究費補助金 基盤研究(C)』, 500,000 円

氏名： 山田 快

(応募) 『令和 2 年度科学研究費助成事業 (若手研究)』

氏名： 杉本龍勇

(応募) 『科学研究費 基盤 C 一般』

氏名： 吉田康伸

(応募) 『科学研究費 基盤 C 一般』

氏名： 越智 英輔

(応募) (研究分担者として：新規) 科学研究費補助金 基盤研究(A)

(応募) (研究分担者として：新規) 科学研究費補助金 基盤研究(C)

(継続) 『遺伝的要因が伸張性運動前後の筋・関節機能に及ぼす影響』 科学研究費補助金 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化) (代表研究者：継続)

(継続) 『弾性タンパク質コネクチン(タイチン)が伸張性収縮前後の筋・関節機能に及ぼす影響』 科学研究費補助金 基盤研究 C (代表研究者：継続)

(継続) 『伸張性収縮後の筋肉痛・筋力低下の神経科学的研究』 科学研究費補助金 基盤研究 B (分担研究者：継続)

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(採択)『サルコペニアに伴う骨格筋の質的变化：メカニズムと有効な対策』 科学研究費補助金 基盤研究 A (分担研究者:新規)

氏名：泉 重樹

(応募)『科学研究費 基盤 C 一般』

氏名：永木 耕介

(応募) → (採択)『科学研究費 基盤 C 一般』

研究課題「隠された？嘉納治五郎の柔道思想-オリンピックの柔道採用をめぐる戦前と戦後の変化」

(2020 年度～2022 年度 採択 研究代表者 2,658,000 円) →2019 年度末に決定

氏名：平野 裕一

(採択)『発育期のスポーツ活動のあり方に関する研究～アスリート育成モデルの構築～』(公財) 日本スポーツ協会 令和 2 年度日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究プロジェクト, 2,300,000 円

氏名：吉田政幸

(継続)『科学研究費, 若手研究 (B)』, 計 2,080,000 円.

氏名：井上尊寛

(応募)『科研費 基盤研究 C』

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・研究における所員の協働による包括的な研究テーマを決め、学術研究振興資金に申請した。残念ながら申請は採択されなかったが、所員同士による共同研究を今後も促進する。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・ホームページの運用。更新頻度を増すため、活動状況等を掲載するように努める。	

【この基準の大学評価】

2019 年度のスポーツ研究センターの研究その他の諸活動については、プロジェクト 8 件、対外的活動 71 件、出版物・学会発表・論文掲載など研究成果の公表 101 件、研究成果の引用および受賞の確認 268 件、科研費等外部資金獲得 9 件が報告されており、本学を代表する成果を上げていると言っても過言ではない。この点は、対外発信、社会的評価、外部資金への応募とその獲得という 3 つの観点から高く評価できる。外部評価の観点から見ても、学内の質保証委員会により一定の評価を得ていることが示されている。

しかし、外部資金獲得においては不採択とされた研究プロジェクトもあり、また、対外発信においてもホームページ上の情報発信のさらなる工夫をめざすとしており、それらへの取り組みと成果が期待される。

III 2019 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした研究センターとして包括的な研究プロジェクトを起ち上げ、社会問題解決に貢献する研究を促進する。
	年度目標	研究センター内での勉強会やセミナーを開催頻度を上げ、各所員の研究についての積極的な

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		意見交換を通じてさらに新たなアイデアの創出に努める。そして、研究における連携及び相互作用を創出する
	達成指標	共同プロジェクトの構築により、科研費等の外部資金獲得を目指す。
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	本年度の研究センター内での研究プロジェクトは9本が申請され、活発に研究が行われている。また研究センターとしての包括的なプロジェクトとして、日本私立学校振興・共済事業団の学術研究振興資金に応募しており、共同研究の面でも活性化している。
	改善策	研究センター内での勉強会やセミナーの頻度を昨年度よりも増やすことが出来なかった。所属している各研究員の所属学部都合などによって、日程調整が上手く調整できなかった。この点を来年度は改善したい。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	現在まで継続している公開講座を今後も継続し、地域のスポーツ活動の活性化に努める。また体育会強化を通じて法政スポーツの活性化に努め、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上を促し、大学のブランド力向上貢献する。
	年度目標	SSIのカリキュラムとして、昨年と同様に「オリンピック・パラリンピックを考える」が開講される。そこで2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、競技以外の側面でも社会貢献できるよう教育内容の向上を図る。
	達成指標	法政スポーツの競技力および社会性の両面における外部からの評価が高まるよう、強化・育成に努める。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	これまで継続してきた公開講座も開催することができ、地域スポーツの活性化に努めた。またSSIのカリキュラムとして開講された「オリンピック・パラリンピックを考える」に複数の研究員が登壇し、講義を行った。公開講座のため、体育会学生以外の学生にもオリンピック・パラリンピックを含めたスポーツについて啓蒙を行った。
改善策	公開講座の数を増やすだけでなく、講座の内容の向上に努め、参加者の満足度が向上するように努める。	
【重点目標】		
研究活動における連携および相互作用の活性化により、外部資金の獲得を目指す。本年度も学術研究振興資金に応募する事を予定している。		
【年度目標達成状況総括】		
年度目標については概ね達成することが出来た。研究センターの共同プロジェクトとして申請している外部資金の獲得は不採択となったが、今後も共同研究を更に促進していきたい。特に本学体育会への競技面ならびにキャリア構築の2つの側面に対する共同研究を活性化させ、体育会活動が競技力強化のみに留まらず、人間力の醸成にも機能を果たすことができる様にサポートをしていきたい。またこうしたサポートを通じて体育会の価値向上につながるようにしていき、これが大学のブランド価値向上に貢献できるように努めたい。		

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

2019年度のスポーツ研究センターの研究活動における年度目標は外部資金獲得にねらいを定めたものであったが、その達成指標に照らして、ほぼ適切に達成されたとしてA評価を下している。この点は評価できる。しかし、不採択1件を見たこと、また、所員の多忙な勤務の中での日程調整の困難さから主催事業の向上に支障を生じているとの問題点も示されている。これらの問題点は、貴センターが有する人的資源と2021年開催予定の東京オリンピック・パラリンピックとをふまえて、解消に向けた中長期的な取り組み、工夫・施策が期待される。社会貢献・社会連携における年度目標は学内外に向けた公開講座の開設をめざしたものであったが、その達成指標に照らして、適切に達成されたとしてS評価を下している。この点は、高く評価できる。そして、さらなる課題として、体育会を通してアスリートの育成・アスリートの人間力強化（セカンド・キャリア形成にも対応）・大学ブランド化への貢献意識と実践方針とが示されており、その成果が期待される。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

IV 2020 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした研究センターとして包括的な研究プロジェクトを起ち上げ、社会問題解決に貢献する研究を促進する。
	年度目標	昨年は、様々な事情により研究センター内での勉強会やセミナーの開催頻度を上げることができなかった。これを反省し、今年度はこれらの開催頻度を上げ、積極的な意見交換を通じて各所員の研究に役立てる。また、所員同士の研究における連携及び相互作用を創出するよう努める。
	達成指標	共同プロジェクトの構築により、科研費等の外部資金獲得を目指す。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	現在まで継続している公開講座を今後も継続し、地域のスポーツ活動の活性化に努める。また体育会強化を通じて法政スポーツの活性化に努め、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上を促し、大学のブランド力向上に貢献する。
	年度目標	SSI のカリキュラムとして、一昨年、昨年と同様に「オリンピック・パラリンピックを考える」が開講される。そこで2021年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、競技以外の側面でも社会貢献できるよう教育内容の向上を図る。
	達成指標	法政スポーツの競技力および社会性の両面における外部からの評価が高まるよう、強化・育成に努める。
<p>【重点目標】</p> <p>研究センター内でセミナーおよび勉強会の開催頻度を増やす。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>新型コロナウイルスの感染者数の状況次第で確定しにくい部分はあるが、各所員の都合にフレキシブルに対応し、オンラインミーティングなどを活用しながら開催する。</p>		

【2020 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

<p>スポーツ研究センターの研究活動における中期目標は所員一体となったプロジェクトを立ち上げ、社会問題解決に取り組むというものであり、2020 年度目標とその達成指標はそれをうけて、また 2019 年度までの取り組みをふまえて、所員参加の勉強会やセミナー開催頻度の上昇、共同プロジェクトの構築、外部資金獲得を定めている。それぞれが適切に対応し整合性が取れていることは評価できる。社会貢献・社会連携における中期目標は公開講座の持続、アスリートの育成とそのセカンドキャリア形成への取り組み、そして大学ブランド化への貢献を定め、年度目標とその達成指標はそれをうけて、また 2019 年度までの取り組みをふまえて、2021 年開催予定の東京オリンピック・パラリンピックの競技と競技以外への貢献を定めている。それぞれが適切に対応し整合性が取れていることは評価できる。研究活動、社会貢献・社会連携いずれも具体的であり、検証可能のみならず検証結果の明解性も読み取れるものとなっている。重点施策として、世界規模の問題となっている新型コロナウイルス感染問題への対応策が示され、貴センターの活動の持続性と質の維持に向けた姿勢が示されていることも、高く評価できる。</p> <p>年度末における成果を期待したい。</p>

【大学評価総評】

<p>スポーツ研究センターは、2019 年度の大学評価委員会の評価結果への対応、研究活動、年度目標の達成状況、いずれの観点から見ても優れた成果を上げていると評価できる。</p> <p>すでにほぼ完備した体制を構築しており、研究成果の公表（学術貢献）、アスリートというスポーツ・エリートの育成（国内外への貢献）、公開講座・一般向け指導や講習（社会貢献）、大学ブランド化と外部資金獲得（大学への貢献）、勉強会・セミナー（自己研鑽・自己検証）などにおいて学内外の評価を得てきている。その意味で、本学を代表する組織の一つであると言っても過言ではない。それでもなお問題点の洗い出しと課題の設定（たとえばホームページの充実化など）を持続的に行い、改善・向上をめざす姿勢は高く評価できる。2020 年度目標とその達成指標は適切に設定されている。上記東京オリンピック・パラリンピックとそれ以後の時代の本学と国内外とに貢献する貴センターの活躍に期待したい。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

ボアソナード記念現代法研究所

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

ボアソナード記念現代法研究所が、複数の研究領域におけるプロジェクトを遂行し、継続的に法政大学現代法研究所叢書をはじめ多くの業績を公表していることは、高く評価できる。8つのプロジェクトが運営され、3つのシンポジウムを実施したことは、対外的にも誇れる成果であると言うことができよう。さらに、科研費を積極的に獲得している実績も、素晴らしい。また、所蔵資料の整理・公開も、着実に進められていると考えられる。

また、昨年度の指摘を反映して、質保証委員が選出され、研究所としての具体的な目標等が整備されたことは、大きな進歩であると評価することができる。このうち、質保証委員会の活動が計画よりも約2年間遅れたことは残念であるものの、体制が整備されたことを受け、今後は、このような制度的運営を着実に実行して頂きたい。優れた研究者の集団が、適切なプロジェクト進捗管理体制の下で研究を遂行すれば、より着実な成果を生み出すことができると期待している。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

現代法研究所ではこれまでいくつかの分野でプロジェクトベースの研究活動を実施してきており、2019年度は、法史学(1)、社会法(2)、都市法(1)、現代法システム(4)、国際関係(1)、ボアソナード関係資料収集委員会という、10のプロジェクトが研究活動を実施し、研究成果を活発に発表した。質保証委員会の活動も開始した。これまで研究活動が着実に実施されてきているので、新型コロナウイルス禍の影響下においても、できるだけ安定的に研究活動を実施できる環境の保全に努めていきたい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

現代法研究所への2019年度大学評価委員会の評価結果において、問題点として指摘された質保証委員会の未活動については、2019年度に同委員会が活動を開始しており、この点は評価できる。また、多彩な、そして多量の研究成果の公表も持続的に行われており、この点も評価できる。これにより、2019年度大学評価委員会の評価結果への本研究所の対応は適切であったと評価する。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

【プロジェクト】

- ・法史学「判例を通じてみたイギリス法—歴史的経緯と現代との架橋—」
- ・社会法「クラウドソーシングの進展と社会法の近未来」
- ・社会法「裁判実務上確立したとされる最高裁判例法理の再検討」
- ・現代法システム「一般社団法人および一般財団法人に関する法律の逐条研究」
- ・現代法システム「現代国際社会における立憲主義をめぐる西欧と東アジアの対話」
- ・現代法システム「公的規制の法と政策—ネットワーク産業を中心に—」
- ・現代法システム「消費者紛争解決手段の発展に向けた実体法・手続法の役割」
- ・都市法「会社法と金融商品取引法との交錯とコーポレート・ガバナンス論の新展開」
- ・国際関係「現代国際秩序における正統性の相克」
- ・ボアソナード関係資料収集事業

【シンポジウム・セミナー等】 *印は外国人研究者招聘・参加企画

<社会法「クラウドソーシングの進展と社会法の近未来」>

- ・シンポジウム「労働者派遣者の均等均衡待遇」、2020年7月6日。
- ・国際シンポジウム*「第4次労働革命による働き方の多様化の進展」、2019年9月17日。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- ・国際シンポジウム*「ドイツの労働者の働き方の多様化と生活時間」、2019年11月15日。
 <現代法システム「消費者紛争解決手段の発展に向けた実体法・手続法の役割」>
- ・国際研究会*「債務法改正をめぐる日仏の対話」、法政大学現代法研究所、2019年10月28～29日。
 <国際関係「現代国際秩序における正統性の相克」>
- ・国際ワークショップ*「経済外交と東アジア地域秩序—1970年代の日本と台湾」、法政大学、2020年2月8日。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度活動報告書。

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

図書・論文等

- ・皆川宏之「最高裁判例法理の再検討① 横浜南労基署長（旭紙業）事件—労災保険法上の労働者」労働法律旬報 1951＝1952号（2020年）90頁以下。
- ・本久洋一「最高裁判例法理の再検討② ビクターサービスエンジニアリング事件—集团的労働関係における労働者」労働法律旬報 1953号（2020年）31頁以下。
- ・山本陽大「最高裁判例法理の再検討③ 朝日放送事件—集团的労働関係における使用者」労働法律旬報 1954号（2020年）30頁以下。
- ・早津裕貴「最高裁判例法理の再検討④ 名古屋中郵事件—労働基本権の制限」労働法律旬報 1955号（2020年）24頁以下。
- ・石田信平「最高裁判例法理の再検討⑤ 三菱樹脂事件—採用の自由」労働法律旬報 1956号（2020年）34頁以下。
- ・浜村彰「フランスにおける派遣労働者の均等・均衡待遇」労旬 1946号（2019年）
- ・浜村彰「なぜ今、かえせ☆生活時間か？」労旬 1954号（2020年）
- ・沼田雅之「労働者派遣改正法の同一労働同一賃金と理論・実務上の課題」同号
- ・毛塚勝利「個人就労者をめぐる議論に必要な視野と視座とは」季労 267号（2019年）
- ・毛塚勝利「日本におけるクラウドワークの現状と法的課題」労旬 1944号（2019年）
- ・石田眞「雇用によらない働き方と労働者性問題を考える」季刊労働者の権利 331号（2019年）
- ・川村洋子・柴田和史『一般社団（財団）法人法 逐条解説（上）』、法政大学現代法研究所叢書第46号、2020年。
- ・高橋滋『条解行政不服審査法〔第2版〕』（小早川光郎と共編著）（A5版、728頁）（弘文堂 令和2年）（分担執筆・同2条～6条）合計68頁）
- ・高橋滋「事故賠償制度の現状と課題 - 行政法の視点から」『論究ジュリスト』29号100頁、7頁（平成31年）
- ・高橋滋「東京都行政不服審査会の現況 - 審査会委員の立場から」（自治実務セミナー693号8頁、6頁 令和2年）
- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(13)-国家賠償法①・国賠法1条1項(その1)」(判例時報 2398号123頁、10頁 令和1年)
- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(14)-国家賠償②・国賠法1条1項(その2)」(判例時報 2401号137頁、10頁 令和1年)
- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(15)-国家賠償③・1条と2条の交錯・国賠法3条(その2)」(判例時報 2405号129頁、10頁 令和1年)
- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(16)-国家賠償④・国賠法3条(その2)・国家補償の谷間」(判例時報 2409号129頁、10頁 令和1年)
- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(17)-行政訴訟①・行政訴訟と民事訴訟・処分性(その1)」(判例時報 2412号120頁、10頁 令和1年)
- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(18)-行政訴訟②・処分性(その2)」(判例時報 2415号121頁、10頁 令和1年)
- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(19)-行政訴訟③・原告適格」(判例時報 2418号137頁、10頁 令和1年)
- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(20)-行政訴訟④・狭義の訴えの利益、執行停止」(判例時報 2421号136頁、10頁 令和1年)
- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(21)-行政訴訟⑤・義務付け訴訟と差止訴訟」(判例時報 2424号150頁、10頁 令和2年)
- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(22)-行政訴訟(6)当事者訴訟、行政訴訟の審理等(その1)」(判例時報 2427号153頁、10頁 令和2年)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(23) - 行政訴訟(7) - 行政訴訟の審理等(その2)」(判例時報 2430号153頁, 10頁令和2年)
- ・高橋滋「法曹実務のための行政法入門(24) - 行政訴訟(8)等 - 住民訴訟・行政不服申立て)」(判例時報 2433号予定, 10頁令和2年)
- ・栗田誠「独占禁止法のエンフォースメントの諸相」白鷗法学 26巻1号209-224頁(2019・6・28)
- ・多田英明「EU 国家補助規制における救済・事業再生支援の動向—2014年救済・事業再生支援ガイドラインを手がかりに—」東洋法学第63巻第2号(2020年1月)
- ・多田英明(書評) Pablo Ibáñez Colomo, *The Shaping of EU Competition Law* (Cambridge University Press, 2018)『日本国際経済法学会年報』第28号(2019年11月)
- ・建石真公子「フランスにおける私生活の尊重の権利の憲法規範化」、『憲法研究』、4号(2019年)、信山社、79-92頁。
- ・建石真公子(書評)「山元一・横山美夏・高山佳奈子編著『グローバル化と法の変容』」、『国際人権』30号、2019年、146-148頁。
- ・建石真公子「個人の尊重とゲノム(遺伝)情報保護—フランスにおける個人情報保護制度を例に」、山元一・只野雅人、・蟻川恒正・中林暁生編、『憲法の普遍性と歴史性—辻村みよ子古稀記念論集』、信山社、2019年。
- ・建石真公子「トランスジェンダーの権利論—ジェンダー・アイデンティティをめぐる個人の尊重の射程—」、公益財団法人日本体育協会『スポーツ・医・科学研究報告 II スポーツ指導に必要なLGBTの人々への配慮に関する調査研究—第2報—』、2019年6月、9-22頁。
- ・福田円、(分担執筆) IX-2「二つの中国」と台湾海峡危機、川島真、小嶋華津子編『よくわかる現代中国政治』、ミネルヴァ書房、2020年4月。
- ・福田円、(共訳)「第5章 国家統一をめぐる紛争」、テイラー・フレイヴェル著、松田康博監訳、『中国の領土紛争—武力行使と妥協の論理』、勁草書房、2019年7月。
- ・福田円、(分担執筆) 第3章のうち「台湾」の部分、平和安全保障研究所編、『アジアの安全保障 2019-2020』、朝雲新聞社、2019年7月。
- ・福田円、「台湾から見た香港—『今日の香港は、明日の台湾』か、『今日の台湾は、明日の香港』か」、倉田徹編、『香港の過去・現在・未来—東アジアのフロンティア』、勉誠出版、2019年6月。
- ・溝口修平、松尾秀哉、近藤康史、近藤正基編、『教養としてのヨーロッパ政治』、ミネルヴァ書房、2019年。
- ・溝口修平、「エリツィン大統領の機会主義—なぜロシアは「ショック療法」を実施したのか」、高橋直樹、松尾秀哉、吉田徹編、『現代政治のリーダーシップ—危機を生き抜いた8人の政治家』岩波書店、2019年、185-206頁。
- ・溝口修平、「ロシアの「大統領制化された大統領制」とその変容」、岩崎正洋編、『大統領制化の比較政治学』、ミネルヴァ書房、2019年、194-214頁。
- ・宮下雄一郎「フランスにとっての『ヨーロッパ』」、平野千果子編『新しく学ぶフランス史』(ミネルヴァ書房、2019年)、275-298頁
- ・宮下雄一郎、大矢根聡、佐々木卓也、葛谷彩「理論・歴史対話の諸相—日本、アメリカ、ドイツ、フランス」、大矢根聡編『国際関係理論と日本外交史—『分断』を乗り越えられるか』(勁草書房、2020年)、25-52頁。
- ・森聡、「米国の対中政策における競争と交渉(後編)」、『東亜』(2020年3月)、76-85頁。
- ・森聡、「米国の対中政策における競争と交渉(前編)」、『東亜』(2020年1月)、84-94頁。
- ・森聡、「ワシントンの対中競争路線への転換—その要因と諸相」、日本国際政治学会 2019年度研究大会、部会13報告論文、2019年10月20日。
- ・湯澤武、「ASEANの地域秩序構想とその実践」、佐橋亮編、『冷戦後の東アジア秩序—秩序形成をめぐる各国の構想』、勁草書房、2020年、171-200頁。
- ・Satoru Mori, “U. S. Technological Competition with China,” *Asia Pacific Review*, Vol. 26, No. 1 (2019), pp. 77-120.
- ・Satoru Mori, “The Promotion of Rules-based Order and the Japan-U.S. Alliance,” in Michael J. Green ed., *Ironclad: Forging a New Future for America's Alliances*, Rowman & Littlefield, 2019, pp. 97-112.
- ・Akio Torii, “Role of News Media in Cheap Talk Society,” 『経済学論纂』第60巻3・4号(2020年1月)、101-113頁。
- ・Akio Torii, “Two Agency Problems in Subcontracting Systems: The Case of Japan's Content Industry,” *Nordic Journal of Media Management*, Vol. 1, No. 1 (March 2020), pp. 103-19.

学会発表・研究会報告等

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- ・高橋和宏、(学会発表)「ブレトンウッズ体制の変容とアジア冷戦—1960年代後半のドル防衛をめぐる日米交渉を中心に」、2019年度日本国際政治学会(部会『北東アジア冷戦の再検討』)、新潟朱鷺メッセ(新潟県新潟市)、2019年10月20日。
- ・高橋和宏、(学会発表)「1960年代の日米同盟における負担分担—ベトナム戦争・沖縄返還・国際金融」国際関係史学会(CHIR-Japan)、青山学院大学、2019年4月20日。
- ・高橋和宏、(国際会議。研究発表)「『アジア太平洋経済圏』の形成と日本外交」、国際ワークショップ「経済外交と東アジア地域秩序 1970年代の日本と台湾」、法政大学、2020年2月8日。
- ・建石真公子(国際学会・招待講演)「ゲノム医療に関わる医学研究における個人情報保護と倫理—EUおよびフランスを参考に」、学術会議、東京大学理学部小柴記念ホール、2019年6月1日。
- ・鳥居昭夫、(学会報告)“Role of News Media in Cheap Talk Society,” Annual Conference of the European Media Management Association Cyprus, University of Technology, Cyprus, 2019年6月7日。
- ・福田円、(研究会報告)「蔡英文政権と日本」第十屆『中日關係中的台灣問題』学術研討会、東京大学東洋文化研究所、2019年7月29日。
- ・Madoka Fukuda、(国際学会発表)“The Hidden War Between the ROC and the PRC: Mainland Operations of the ROC’s Military Intelligence Bureau,” ICAS11 (The International Convention of Asia Scholars) Leiden University, 2019年7月16日。
- ・福田圓、(国際会議報告)「『一個中国』原則的国際意涵」、中国文化大学社会科学院專題講座、中国文化大学(台湾)社会科学院、2019年6月12日。
- ・福田円、(研究会報告)「中国の対台湾工作と台湾の『ナショナリズム』」、2019年度アジア政経学会春季大会、慶應義塾大学三田キャンパス、2019年6月9日。
- ・溝口修平、(研究会報告)「ロシアにおける憲法改正をめぐる言説の変遷」、日本国際問題研究所、第6回ロシア研究会、日本国際問題研究所、2019年11月21日。
- ・溝口修平、(学会発表)「権威主義体制における憲法改正のディレンマ—旧ソ連諸国の事例から—」、比較政治学会2019年研究大会、自由企画3、筑波大学、2019年6月30日。
- ・宮下雄一郎、(学会研究会討論)中村優介「フランス再興をめぐるイギリス外交、1940—45年—ウィンストン・チャーチルの戦後構想におけるフランスの役割に注目して—」、日本国際政治学会若手研究者・院生研究会(関東地区)2019年第1回定例研究会、早稲田大学早稲田キャンパス、2019年8月24日。
- ・Satoru Mori、(招待講演)“The Dynamics of U.S.-China Relations and Japan,” San Marcos University (ペルー・リマ市)、2020年3月13日。
- ・Satoru Mori、(招待講演)“U.S. Technological Competition with China: A Japanese Perspective,” Ministry of Foreign Affairs of Peru (ペルー・リマ市)、2020年3月12日。
- ・森聡、(研究会報告)「米国防省による先端技術の軍事利用の動向」、東京大学未来ビジョン研究センター、2020年2月21日。
- ・森聡、(研究会報告)「宇宙ドメインの軍事利用」、日本国際問題研究所(東京都港区)、2020年1月24日。
- ・Satoru Mori、(国際シンポジウム・招待講演)“U.S.-Japan Alliance at 60,” U.S.-Japan Security Seminar、戦略国際問題研究所(米国・ワシントンDC)、2020年1月15日。
- ・森聡、(研究会報告)「米中覇権競争—技術競争を中心として」、平和・安全保障研究所(東京都港区)、2019年12月21日。
- ・森聡、(研究会報告)「次世代の安全保障」、富士山会合ヤングフォーラム(東京都千代田区)、2019年12月13日。
- ・森聡、(研究会報告)「米国の対中政策における競争・非正統化・交渉」、みずほ総研(東京都港区)、2019年12月12日。
- ・森聡、(研究会報告)「米国の対中政策における競争と交渉」、中曽根平和研究所(東京都港区)、2019年12月9日。
- ・Satoru Mori、(国際会議報告)“Trump, Washington and the U.S. Technological Competition with China,” The 8th Japan-Korea Dialogue(第8回東京大学・ソウル国立大学日韓対話)、東京大学(東京都文京区)、2019年11月16日。
- ・森聡、(研究会報告)「米国の対中競争路線とトランプ—先端技術をめぐる米国の戦略と政治」、霞山会(東京都港区)、2019年11月15日。
- ・森聡、(招待講演)「ワシントンの対中競争路線とトランプ」、スマートニュースメディア研究所米中関係研究会(東京都渋谷区)、2019年10月31日。
- ・Satoru Mori、(国際共同研究会報告)“Gaps between Japanese and American Views on China Risks,” カーネギー国際平和財団(米国・ワシントンDC)、2019年10月22日。
- ・森聡、(学会発表)「ワシントンによる対中競争路線への転換—その要因と諸相」、日本国際政治学会(部会13)、新潟朱鷺

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

鷺メッセ（新潟県新潟市）、2019年10月20日。

- ・森聡、(研究会報告)「トランプ政権の国防政策」、日本国際問題研究所（東京都港区）、2019年10月16日。
- ・Satoru Mori、(国際シンポジウム・招待講演)“Russia and China: Security Challenges for the UK and Japan,” 第36回日英21世紀委員会（英国・カンタベリー市）、2019年9月7日。
- ・森聡、(招待講演)「米国の対中技術覇権競争」、日本記者クラブ（東京都千代田区）、2019年8月6日。
- ・Satoru Mori、(国際共同研究会報告)“Contemporary Trends in Game-changing Technologies,” Workshop on Game-changing Technologies (ゲームチェンジャー技術に関する慶應大学・台湾国立政治大学合同研究会)、国立政治大学（台湾台北市）、2019年7月26日。
- ・Satoru Mori、(国際シンポジウム・招待講演)“New Adjustments in Regional Security Order,” The Second Wanshou Dialogue on Global Security (中国北京市)、2019年7月2日。
- ・森聡、(研究会報告)「ワシントンの対中競争路線への転換」、政策研究大学院大学（東京都港区）、2019年6月26日。
- ・Satoru Mori、(国際会議・招待講演)“Changing US-China Relations and Its Implications,” The 6th Japan-Taiwan Strategic Dialogue、日本国際問題研究所（東京都港区）、2019年5月21日。

【その他対外発信等】

- ・高橋和宏、(書評)「Book Review 有賀貞『現代国際関係史 1945年から21世紀初頭まで』」、『外交』第56号（2019年7月）、140～143頁。
- ・福田円、(論評)「『新時代の対台湾工作』の行方」、『東亜』、633号、8-9頁、2020年3月。
- ・福田円、(論評)「台湾総統選・試される民主主義の成熟」、『外交』、59号、100-101頁、2020年1月。
- ・福田円、(論評)「総統選大勝も試練続く蔡英文氏」、Janet・e-World、2020年1月。
- ・福田円、(論評)「中国での邦人拘束に直面する日本と台湾」、『東亜』、618号、8-9頁、2019年12月。
- ・福田円、(論評)「台湾総統選の対立軸—国際情勢から読み解く」、『世界』、2019年10月号、18-22頁、2019年9月。
- ・福田円、(論評)「蔡英文政権と日本」『東亜』627号、8-9頁、2019年9月。
- ・福田円、(論評)「台湾総統選挙に波及した二つの誤算」、『ウェッジ』、2019年9月号、44-45頁、2019年8月。
- ・福田円、(論評)「香港デモと台湾総統選挙の力学」、Janet・e-World、2019年7月。
- ・福田円、(論評)「『光陰似箭』の台湾政治」、『中国研究月報』、73巻6号、47頁、2019年6月。
- ・福田円、(論評)「中国からの圧力を追い風とする蔡英文政権」、『東亜』、624号、8-9頁、2019年6月。
- ・福田円、(論評)「学会動向—日台関係史研究の現状と展望」、『日本台湾学会ニュースレター』、36号、22-24頁、2019年4月。
- ・福田圓、(メディア)「抗武漢肺炎 日台的3個差異」『蘋果日報(台湾)』、2020年3月5日、論壇版。
- ・福田円、(メディア)「台湾総統選挙について」文化放送 ニュースワイドSAKIDORI、2020年1月10日。
- ・Madoka Fukuda、(メディア)“Taiwan’s Presidential Election,” NHK RADIO JAPAN、2020年1月10日
- ・福田圓、(メディア)「世界擁唎看! 外國觀選團看臺灣大選」、公共電視台(台湾語チャンネル)、台湾新眼界、2020年1月9日。
- ・福田圓、(メディア)「2020 總統立委選舉的多重對立」、『自由時報』、2019年11月25日。
- ・福田円、(メディア)「外交関係失う台湾」朝日新聞デジタル・今さら聞けない世界、2019年10月10日。
- ・福田圓、(メディア)「中日関係顕現不尋常跡象 習与安倍尚有難題未解」、多維新聞網(中国)、2019年7月13日 インターネットメディア。
- ・福田圓、(メディア)「美中較勁亜太 日中関係“同床異夢”?」、『多維TW』043号、2019年5月30日。
- ・宮下雄一郎、(書評)「レイモン・アロン—フランス国際関係論の源流」『アステイオン』90号（2019年5月）、212-218頁
- ・宮下雄一郎、(書評)「鶴岡路人『EU 離脱—イギリスとヨーロッパの地殻変動』(ちくま新書、2020年)」『外交』60号（2020年3月）、140-143頁
- ・森聡、(論評)「米中貿易戦争の本質」、『學士會会報』、2020年1月号。
- ・森聡、(論評)「米国の対中技術競争の行方」、『月刊・経団連』、2020年1月号。
- ・森聡、(論評)「経済教室—米中貿易戦争の行方(下) 技術覇権巡る対立 長期化も」、『日本経済新聞』、2019年5月27日。
- ・森聡、(論評)「抜き差しならない米中技術覇権競争」、『中央公論』、2019年5月号。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度活動報告書。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して 2019 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2019 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019 年度の web サイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。
 ・廣瀬克哉編著『自治体議会改革の固有性と普遍性』、現代法研究所研究叢書第 45 号（2018 年 3 月発行）が、『月刊・地方自治職員研修』（2018 年 9 月号）で紹介された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし。

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。
 質保証委員会（2020 年 2 月 21 日開催）からは、資料の整理・公開が順調に進んでいること、研究所主催の公開研究会について研究所のホームページで告知するなどして、研究成果を社会に還元しようとしていることについて高く評価された。また、研究成果に対する社会的評価（書評等）を集約する方法について工夫を図ってみてはどうかという建設的な提案も出された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし。

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019 年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び 2019 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

<2019 年度中の応募>

科研費：10 件（うち分担者として 6 件）

<2019 年度中の採択>

科研費：7 件

- ・基盤研究 B 他機関研究代表者 2 件 ・基盤研究 B（特設）（基金） 研究代表者 1 件
- ・基盤研究 C（基金）他機関研究代表者 1 件 ・基盤研究 C（基金） 研究代表者 1 件
- ・若手研究（基金）研究代表者 1 件 ・学術図書 研究代表者 1 件

<2019 年度継続>

科研費：15 件

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

現代法研究所の研究教育活動実績について、「プロジェクト」（10 件）、「シンポジウム・セミナー等」（5 件）、「図書・論文等」（51 件）、「学会発表・研究報告等」（33 件）、「その他対外発信等」（26 件）、いずれも本学の歴史を象徴する研究機関として見事な成果を上げている。そうした成果は、所員個人の研究教育活動のみならず組織的取り組みによるものであり、数値による把握ができ、公開性を伴い、国外研究者との交流・連携や英語による研究成果の発信などグローバル化に対応するものである。さらに、本研究所の原点に関わるボアソナード関係資料の調査・収集・整理・分析作業・公開についても成果を出し、加えて研究者育成の効果を含めて大学のブランド化に貢献するものでもある。こうした点は高く評価できる。一方で、研究成果に対する社会的評価については、確認できているものが 1 件にとどまっていることは貴研究所が生み出している優れた成果をふまえると残念なことであり、情報発信など何らかの工夫が望まれる。外部評価（第三

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

者評価)としては質保証委員会がその機能を果たしている。外部資金への応募と獲得については、科研費が2019年度10件の応募に対して7件が採択され、継続中のものを15件抱えており、高く評価できる。

Ⅲ 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動	
1	中期目標	<ul style="list-style-type: none"> ・法学・政治学・国際政治学の分野におけるプロジェクト・ベースの高度な研究の推進 ・ボアソナード博士記念研究所として相応しい近代日本における法・政治制度に関する研究の実施 	
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトごとの研究活動の着実な実施 ・外部研究者との連携等を含む開かれた研究の実践 ・各種資料等の収集・分析(特にボアソナード博士関連の資料) 	
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・各プロジェクトにおける研究活動の実施 ・各種資料等の収集・分析作業の実施 	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		<ul style="list-style-type: none"> ・各プロジェクトが研究活動を着実に実施した。 ・各種資料等の収集・分析作業を着実に実施した。 	
改善策		<ul style="list-style-type: none"> ・運営委員会等を通じて研究活動を適切に管理・運営していく。 	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	<ul style="list-style-type: none"> ・研究成果の公開 ・所蔵資料等の公開 	
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> ・研究書の刊行 ・公開研究会・シンポジウム等の開催 ・所蔵資料等の整理・公開 	
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・研究叢書を2冊刊行 ・公開研究会・シンポジウムを2回程度開催 ・所蔵資料等の整理・公開作業の実施 	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		<ul style="list-style-type: none"> ・やむを得ない事情により研究叢書の刊行を延期した。 ・公開研究会・シンポジウムは4回開催した。 ・所蔵資料等の整理・公開を実施した。 	
改善策		<ul style="list-style-type: none"> ・研究叢書の刊行スケジュールを適切に管理する。 ・各プロジェクトで研究成果を公開する取り組みを引き続き着実に実施する。 ・所蔵資料等の公開を適切に進めていく。 	
<p>【重点目標】 <重点目標> 質保証委員会の活動を開始し、その成果を活かすプロセスを作り上げる <目標を達成するための施策等> 質保証委員会を開催して点検作業を実施し、今後取り組むべき課題などを所長に提出する。所長は質保証委員会の提言を受けて、要すれば対応策を検討し、必要に応じて運営委員会に諮る。</p>			
<p>【年度目標達成状況総括】 現代法研究所は、研究活動と社会貢献・連携をともに着実に進め、年度目標を達成したと評価できる。また、重点目標である質保証委員会の活動開始も実現した。研究叢書の刊行はやむを得ず延期したが、来年度の刊行を視野に入れた実質的な作業は進捗しており、公開研究会・シンポジウムは予定の2倍にあたる4回開催することができたので、活発な社会貢献が行われたと評価できる。</p>			

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

現代法研究所の研究活動については、中期目標として法学・政治学・国際政治学にわたる高度な研究を推進するプロジェクトを展開すること、学祖ボアソナード関係の研究の展開を定め、それをうけて、2019年度の目標を各プロジェクトの活動実施、学外研究者との連携、ボアソナード関係資料の収集・分析とし、達成指標としてそれぞれの実態・成果の把握を定めたが、それらは年度末に達成されたとしてS評価が下されている。上記「研究活動の評価」をふまえるならば、この評価が適切なものであると評価できる。社会貢献・社会連携については、中期目標として研究成果および所蔵資料の公開を定め、それをうけて年度目標を本研究所独自の刊行物である研究叢書の刊行、学内外に開かれた研究会等の開催とし、達成指標としてそれぞれの結果の把握を定めたが、ほぼ達成されたとしてA評価が下されている。この評価は妥当なものと評価できる。研究叢書刊行の未達成がS評価に至らない理由と考えられるが、今後、その事情の解明と認識共有、そして打開策への組織的取り組みが期待される。重点目標には質保証委員会の活性化（問題の発見）と活用（課題設定、改善策への取り組み）が定められたが、達成できなかった研究叢書の刊行実現にも同委員会が寄与するよう、なお持続的に見守り評価する必要がある。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	<ul style="list-style-type: none"> ・法学・政治学・国際政治学の分野におけるプロジェクト・ベースの高度な研究の推進 ・ボアソナード博士記念研究所として相応しい近代日本における法・政治制度に関する研究の実施
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトごとの研究活動の着実な実施 ・外部研究者との連携等を含む開かれた研究の実践 ・各種資料等の収集・分析（特にボアソナード博士関連の資料）
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・各プロジェクトにおける研究活動の実施 ・各種資料等の収集・分析作業の実施
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	<ul style="list-style-type: none"> ・研究成果の公開 ・所蔵資料等の公開
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> ・研究書の刊行 ・公開研究会・シンポジウム等の開催 ・所蔵資料等の整理・公開
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・研究叢書を2冊刊行 ・公開研究会・シンポジウムを2回程度開催 ・所蔵資料等の整理・公開作業の実施
<p>【重点目標】 新型コロナウイルスの影響下においても、プロジェクトごとの研究活動を着実に実施する</p> <p>【目標を達成するための施策等】 各プロジェクトによる研究活動の実施</p>		

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

現代法研究所における目標達成状況報告書における評価基準である、研究活動および社会貢献・社会連携のいずれも2020年度目標・達成指標は前年度の記述を継承しているが、その点は、本研究所が持続的に優れた新研究成果を生み出し公表していること、グローバル化に対応し大学のブランド化に貢献する活動を行っていること、外部資金への応募に積極的でありそれを獲得していることなどをふまえるならば、適切であると評価できる。ただし、滞っている研究叢書刊行事業や社会的評価拡大のための工夫については今後の対応が期待される。

【大学評価総評】

現代法研究所は、法学部と並んで本学の歴史を象徴する組織の一つである。上記I～IVの記述との重複を避けるが、2019年度の大学評価委員会の評価結果に対する対応状況、研究活動、年度目標の達成状況いずれの観点から見ても、貴研究所の上記位置付けにふさわしい成果を上げていると評価できる。その点で、本学においてほぼ完備した組織の一つであると言える。そうであればこそ、未達成の事業という問題解消のための取り組みがなおさら期待される。また、社会的評価を

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

高めるための施策への取り組みも期待される。その意味では、2020年度目標とその達成指標は適切なものとなっている。重点施策として、世界規模の新型コロナウイルス感染問題への対応策を考え、研究所の機能と活動の低下を招かないようめざしていることは評価できる。今後とも、諸課題を把握しつつ、研究所の研究活動を着実に進められるよう期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

野上記念法政大学能楽研究所

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

能楽研究所の研究・教育活動は、研究集会やシンポジウムの開催、特別展示、能楽資料デジタルアーカイブの拡充、プロジェクトごとの研究会など活発な活動が実施されており、高く評価できる。対外的な研究成果の発表に関しても、『能楽研究』や能楽資料叢書の刊行、2名の専任所員による研究成果など、評価できる。立命館大学アート・リサーチセンター、コーネル大学、京都産業大学、カリフォルニア大学サンタバーバラ校などの研究者と JPARC を組織し、活動を始めたことは優れた取り組みであり、その成果が期待される。

能楽研究所は、1952年に能楽研究の発展と能楽の振興を目指して設立され、3年後には創設70周年を迎える。学際的・国際的な能楽研究の拠点としての能楽研究所の存在を、国内外に広めることが望まれる。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

共同利用・共同研究拠点の第二期認定を受け、気持ちをあらたに、学際的・国際的な能楽研究拠点としての活動を進めたつもりである。とはいえ、小所帯の研究所であり、我々の力だけでは、早稲田大学の演劇博物館や立命館大学アートリサーチセンターと同レベルの活動をおこなうのはそもそも無理であることを、再認定前のヒアリングや機能強化支援の不採択等を通じて再認識している。そのため、2019年度は、豊富な能楽資料をよりいっそう使い易い形で公開しつつ、学外の研究者と広く手を組んで研究活動を活性化させることをめざすこととした。2019年度は数多くの学外共同研究を募集し、わずかながら研究費も付けて拠点としての活動を推進した。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

野上記念法政大学能楽研究所は、2019年度の評価結果において高い評価を得ておりながら、研究所の規模からくる限界も自ら自覚し、何が可能で何が不可能かを見定めようとしている姿勢は、評価できる。共同利用・共同研究拠点の第二期認定を受け、学外共同研究という方向により、研究員の少なさからくる限界を超えようとしておられるが、研究所自体の魅力なしには、学外共同研究は実現しない。これまでの実績から、貴研究所との共同研究は学外組織にも魅力的なものとして認識されているものと思われる。今後の研究の推進に期待したい。

他方で、評価結果では「学際的・国際的な能楽研究の拠点としての」存在についての広報活動の充実が求められているが、能楽資料の公開のみでなく、研究活動についての一層の広報活動の強化についても期待されるであろう。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

・貴重資料データベースの拡充に向けた作業

○伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブ

2019年11月 動作の不具合修正

○能楽資料デジタルアーカイブ

2020年2月 「名女川本狂言台本・伝書」「名女川家番組留帳」解題作成とアップ

2020年3月 「十番綴喜多流型付」撮影

・セミナー・シンポジウムの開催

○シンポジウム「家元のアーカイブ」(能楽学会と共催)

日時:2019年10月19日(土)14:00~17:30

会場:法政大学 ボアソナーDタワー26階 スカイホール

・研究集会「近世初期出版文化の中の謡本」

日時:2020年3月7日(土)13:30~17:00

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

会場：法政大学 ボアソナードタワー26階 スカイホール

→新型コロナウイルスの流行により中止。

- ・セミナー「千変万化 狂言《附子》—過去・現在・未来—」（手話狂言実演）

日時：2020年3月14日（土）13：30～17：00

会場：法政大学 ボアソナードタワー26階 スカイホール

→新型コロナウイルスの流行により中止。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

拠点サイト <http://kyoten-nohken.ws.hosei.ac.jp/uncategorized/2020/3731/>

能楽研究所サイト <http://nohken.ws.hosei.ac.jp/archives/index.html>

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

◎研究所の刊行物 『能楽研究』44号 2020年3月25日刊行 全300頁

◎学会発表等

日本文学や演劇、芸能史研究等の学会では、パネル発表などを行う場合以外、共同研究の発表をおこなうことは稀である。以下には、研究所としての成果を主な担当者個人が示した発表と、研究所としての活動の一環として個人がおこなった発表を掲げる。

- ・山中玲子「いくさと能」（招待講演）2019年9月13日 Gettysburg Symposium（ピッツバーグ大学）
- ・宮本圭造「金春家文書の再検討」 2019年5月10日 芸能史研究会
- ・宮本圭造「金春家文書の形成と流転」 2019年10月19日 能楽学会

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2019年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2019年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。研究所がこれまでに発行した刊行物は多数に及ぶため、その引用数を全て把握することは困難であるが、学会誌『芸能史研究会』227号（2019年）所収の論文に本研究刊『近代日本と能楽』（2017年）が、日本芸術文化振興会『能狂言絵コレクション』（2019年）に本研究所紀要『能楽研究』37号（2013年）が引用されているのが目に入った。

本研究所専任所員の研究成果については以下の通り。

書籍に関しては、著名な能楽研究者の退官記念論集『中世に架ける橋』（森話社。2020年）所収の論文に専任所員1名の論文1本、『日本の舞台芸術における身体』（晃洋書房。2019年）所収の論文に同人の論文3本が引用されているほか、先の『中世に架ける橋』には、能楽研究所のデジタルアーカイブの取り組みについても詳しい言及がなされている。また、日本美術史研究の泰斗がまとめた大著『日本の仮面』下巻（中央公論美術出版。2019年）に専任所員1名の論文12本、『万葉集を読む』（青土社。2019年）に同人の論文1本、『古典文学の常識を疑うII』（勉誠出版。2019年）に同人の論文2本が引用されている。

学会誌では、中世文学会の『中世文学』64号（2019年）所収の論文に専任所員1名の論文1本、芸能史研究会の『芸能史研究』226号（2019年）、『藝能史研究』229号（2020年）に専任所員1名の論文がそれぞれ1本、2本引用されている。

そのほか、『三重県史』通史編第2巻中世（三重県。2020年）において専任所員1名が論文で提示した新説が採用されるなど、関連学界において高く評価されていることが窺える。

なお、能楽研究所が公開している能楽資料デジタルアーカイブ、金春家旧伝文書デジタルアーカイブ、伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブへのアクセス数については、新型コロナウイルスの流行による学内立ち入り制限のため、正確なアクセス数を把握することが出来なかった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

定期的な外部評価は受けていないが、文科省の共同利用・共同研究拠点として、学内外の構成員から成る運営委員会の細かなチェックを受けている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>
<p>⑤ 科研費等外部資金の応募・獲得状況</p> <p>※2019 年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び 2019 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。</p> <p>2019 年度中に応募した科研費等外部資金</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学研究費補助金基盤（B）「大名家道具帳の網羅的収集とデータベース化を通じた古典籍伝来の文化史的研究」（研究代表者：宮本圭造） ・科学研究費補助金基盤（A）「文化の交差領域としての能楽—外部との相互影響および技艺伝承の総合的研究」（研究代表者：山中玲子） <p>2018 年度中に採択を受けた科研費等外部資金</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学研究費補助金基盤（B）「能楽及び能楽研究の国際的的定位と新たな参照標準確立のための基盤研究」（研究代表者：山中玲子、2019 年度直接経費 390 万円）
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

能楽研究所は、データベース拡充、シンポジウムの開催などの活発な研究活動、豊富な研究実績、海外での招待講演に招かれるなどの学外評価、大型の科学研究費補助金の獲得など、優れた研究所として、研究活動全般について大いに評価できる。

それも、研究実績について、単に出版実績のみならず引用実績にまで言及しているのは特筆に値する。

III 2019 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。
	年度目標	研究所を拠点とする多様なスタイルの共同研究をみずからも推進し、かつサポートする。貴重資料の整理・公開を進め、研究成果を、研究発表、論文、能楽研究叢書、能楽資料叢書等で発信していく。
	達成指標	能楽研究叢書または能楽資料叢書を 1 冊以上刊行。研究所主体または公募による共同研究を 10 件以上実施する。
1	執行部による点検・評価	
	自己評価	B
年度末報告	理由	共同研究は 12 件応募があり 11 件を採択して活動している。 能楽資料叢書の年度末刊行に向け、印刷会社と連絡を取り合い作業を進めていたが、ベテラン編集者の急逝や熟練技術者の退職、システムの入替え等が重なって例年のように無理がきかず、年度末に間に合わせるができなかった。
	改善策	能楽研究所の紀要や出版物は年度末ギリギリの綱渡りで刊行することが多く、「我々の中でほしいこのペースでなんとか間に合う」という基準が出来てしまっていたが、それは印刷

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

			会社の多大な努力と犠牲の上に成り立っていたことが判ったので、今後は、原稿の締め切り厳守を徹底し、刊行期日も早めに設定するよう最大限の努力をする。
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。	
	年度目標	主催するセミナーまたはシンポジウムで研究成果還元をはかるほか、国立能楽堂、アーツカウンシル東京をはじめとした各地の博物館や演能団体等に協力し、資料展示や講演、外国人を含めた新しい能楽の観客層拡大に向けての講座・解説等を行う。	
	達成指標	セミナーまたはシンポジウムを1回以上開催。学外機関での催しへの学術的協力、能楽界と協力しての観客層拡大等を、3回以上実施する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A	
	理由	3月に、研究集会「近世初期出版文化の中の謡本」、セミナー「千変万化 狂言《附子》一過去・現在・未来」を企画し準備を進めていたが、それぞれ延期・中止となった。学外機関への学術的協力・観客層拡大の協力としては、NHKの能楽放映に際しての副音声解説、アーツカウンシル東京主催の外国人向け能楽公演のパンフレット及び解説監修、能楽公演の字幕解説執筆、オリンピック記念能のパンフレット解説等がある。	
	改善策	セミナーの中止と研究集会の延期は外的要因によるもので、いたしかたなかったと思っており、特に改善策はない。	
【重点目標】			
研究活動 共同利用・共同研究拠点にふさわしい多様な共同研究を進めていく。 従来の研究資金支給型の共同研究に加え、施設や資料を提供するタイプの共同研究も公募する。理工系・社会学系の研究者たちに共同研究を呼びかける。			
【年度目標達成状況総括】			
今年度は、研究資金をほとんど提供しない（0～5000円）研究グループ4件、10万～30万円の研究資金を提供した研究グループ7件、が共同研究活動を行った。従来から続く仏教学と能楽研究の学際的研究の成果は、今年度末、別の研究プロジェクトとの協同でウェブサイトから発信できるところまできている。研究所の新蔵資料の調査・整理を基盤にした共同研究や、実演者も含めての研究会を重ねて演出資料を読み解いている共同研究もあり、成果は順次、研究所の紀要である『能楽研究』にも掲載していく。今年度は狂言の新出資料の解題と翻刻が載る。理工系、社会学系の研究者たちが呼掛に応じてくれて始まった共同研究は、未だ端緒についたばかりで、今年度は目立った成果は出ていないが、まずは人が繋がっていくことが重要と考えている。			

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

能楽研究所における2019年度の年度目標に関して、「研究活動」については、共同研究の件数には達成指標を上回ったが、能楽資料叢書の年度内刊行は間に合わなかった。とはいえ、年度目標が達成できなかった理由を明確に把握されており、また改善策が大変具体的であるため、今後の改善が大いに期待できる。

2019年度の重点目標は、「理工系・社会学系の研究者たちに共同研究を呼びかける」であるが、情報工学修士の能役者との共同研究を開始し、科研費を採択され、また経営情報学、人材育成などを専門とする経営学者のグループと、能楽における情報発信、観客の満足度に関する共同研究を開始しているなど目標を達成している。今後さらなる成果を期待したい。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。
	年度目標	昨年度に引き続き、多様な分野の研究者との共同研究を進め、成果の確実な発信に努める。また、共同研究が若手研究者の育成につながるよう努める。
	達成指標	・共同研究の成果を一つ以上『能楽研究』に掲載。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		・拠点としての研究成果を一冊以上刊行。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。
	年度目標	能楽に関する良質なコンテンツを、SNSや独自のウェブサイト等を通して公開できるよう、能楽界との強力体制を構築していく。
	達成指標	・能楽に関する情報発信のためのサイトをあらたに立ち上げる。
<p>【重点目標】 共同研究を進めるとともに、その成果の確実な発信に努める。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 本年度は人が集まっての共同研究がどの程度進められるか不明だが、すでに蓄積されている研究成果を形にして公表できるよう、対面がかなわない場合でも、オンラインでの研究会議等を重ねて成果物の刊行をめざす。</p>		

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

能楽研究所のこれまでの実績からしても、2020年度の「研究活動」の目標は適切かつ具体的であると評価できる。また、本年度は確かに、対面活動が難しいが、【重点目標】そのものも、適切かつ具体的であるように思われる。

「社会貢献・社会連携」については、「SNSや独自のウェブサイト等」を通じた公開が年度目標とされており、既存のウェブサイトより高い機能を備えた「能楽に関する情報発信のためのサイト」となる予定であり、研究成果の一層の発信が期待できる。

【大学評価総評】

能楽研究所は、データベース拡充、シンポジウムの開催などの活発な研究活動、豊富な研究実績、海外での招待講演に招かれるなどの学外評価、大型の科学研究費補助金の獲得など、小世帯ながら優れた研究所として、大いに評価できる。それも、研究実績について、単に出版実績のみならず引用実績にまで言及しているのは特筆に値する。また、海外にまでまたがる研究活動は、日本文化の発信や国際交流という点でも、日本ひいては世界に貢献するものであり、本学の社会貢献の重要な部分をなしているものと評価できる。

また、理工系・社会学系の研究者たちの共同研究も、大変興味深く、研究所の発展という面からは素晴らしいことであるように思われる。

貴研究所は、「学際的・国際的な能楽研究の拠点」として、能楽資料の公開のみでなく、研究活動についての一層の広報活動の強化についても期待される。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

日本統計研究所

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

日本統計研究所は、官学連携の「学」側の拠点施設として自らを位置づけ、研究ならびに実践の両面において多面的な活動を展開することを目標として示している。2018年度は、従来の偏りを是正するため、2つの統計分野（国民経済計算と歴史統計に関する研究）を中心として展開され、兼担所員が拡充され、国際ワークショップの開催や海外との共同研究、研究成果の旺盛な発表など、着実に成果を上げており、評価できる。官学連携の「学」側の拠点という研究所の理念の追求も、総務省政策統括官（統計基準担当）により、「サービス分野の生産物分類」の策定に大きな貢献をしたと評価されたことをみても、その役割を十分に果たしていると考えられる。また、統計調査実施の困難化への対策として注目されるネット情報の活用に関する研究が進められていることは注目に値する。「ネット情報を活用することで何がどこまで明らかとなるのか」を含め、成果を期待したい。2019年度は、昭和10年産業連関表推計の再現と、昭和15年産業連関表の推計にめどをつけることが目指されており、成果が期待される場所である。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

ネット情報の活用に関しては、飲食店ウェブ（ぐるなび）データを用いて、新型コロナウイルスが飲食店に与えた影響をQGISを用いて詳細に分析する予定である。すでに2020年4月分を購入しており、分析に着手している。昭和10年産業連関表の推計に関しては農業部門の推計が完了した。これによって推計のめどがたった。現在は鉱工業の推計に移行しており、2020年度末には全部門の推計を完了する見通しである。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

日本統計研究所では、「2019年度大学評価結果総評」で「注目に値する」と指摘されたネット情報の活用に関する研究については、飲食店ウェブ（ぐるなび）データを用いて、新型コロナウイルスが飲食店に与えた影響を詳細に分析する予定であることが明記され、すでに分析に着手していることが報告されており、適切な対応がなされていることが見てとれる。また、同総評では、昭和10年産業連関表推計の再現および昭和15年産業連関表の推計について「成果が期待される場所である」と記されている。前者についてはすでに農業部門の推計が完了し、2020年度末には全部門の推計が完了する見込みであることが「対応状況」のなかで報告されている。具体的な成果に向けてすでに動きは始めていることがうかがわれ、高く評価できる。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2019年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

・第18回国際ワークショップ

開催日：2019年5月30日・31日

場所：法政大学市ヶ谷校舎ボアソナードタワー25階会議室（30日）、総務省統計局（31日）

テーマ：米国のビジネスレジスターと経済センサス

1. ブランディー・ヤーボロー氏、Brandy L. Yarbrough（米国センサス局）「2017年米国経済センサスの概要」「米国のビジネスレジスター：税務記録の利活用」

2. キンバリー・ムーア氏、Kimberly Moore（米国センサス局）「2017年経済センサス」

3. スコット・ダール氏、Scot Dahl（米国センサス局）「2017年米国経済センサスの生産物補完」

参加者：16人

・第19回国際ワークショップ

開催日：2020年1月25日

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

場所：法政大学市ヶ谷校舎ボアソナードタワー19階D会議室

テーマ：米国のLGBTQセンサス統計：歴史と現在の挑戦

1. ジョン・ルイス氏 John Lewis (米国弁護士)

2. スチュアート・ガフニー氏 Stuart Gaffney (カリフォルニア大学サンフランシスコ校)

参加者：15人

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・日本統計研究所『年次活動報告書』（2019年度）

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

(1) 『研究所報』

No. 51 「全市区町村産業連関表（平成23年表）の推計」、菅 幹雄、2019.10

(2) 『オケーショナルペーパー』

No. 98 「最近隣マッチングによるヴァーチャルな世帯の合成-夫婦のみ共働き世帯のケース-」、菅 幹雄/中谷 安男、2019.4

No. 99 「甲斐国現在人別調の職業分類とわが国における職業分類の展開-職分表から昭和30年国勢調査の職業分類まで-」森 博美、2019.5

No. 100 「第1回国勢調査が記録した社会移動-生涯移動から見た転入移動圏の特徴を中心に-」、森 博美、2019.09

No. 101 「第1回国勢調査の出生地データによる県間生涯移動分析」、森 博美、2019.08

No. 102 「わが国の1980年代後半期以降の社会移動に関する一考察-純移動選好度の

人口加重平均値による地域の転入・転出超過状況の評価-」、森 博美、2019.09

No. 103 「QGISによる西武国分寺線沿線の産業構造分析Ⅱ」、城 宏樹/菅 幹雄、2020.02

No. 104 「明治2年駿河国人別調における静態把握と動態把握」、森 博美、2020.02

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・日本統計研究所『年次活動報告書』（2019年度）

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2019年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2019年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。本研究所の菅、中村による生産物分類の研究は、政府の生産物分類策定に直接反映され、高く評価された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

以下の2名の外部有識者により外部評価を依頼した。

廣松毅氏（東京大学名誉教授、情報セキュリティ大学院大学教授）

清水雅彦氏（慶応義塾大学名誉教授、横浜商科大学理事長・学長）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・日本統計研究所『年次活動報告書』（2019年度）

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2019年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

・研究環境省 第四期 環境経済の政策研究に採択された研究プロジェクト（研究課題名：「食品ロス削減による経済便益に関する調査・分析」、研究代表者：小島理沙 京都経済短期大学准教授）に参画。日本統計研究所は研究代表者が所属する研究機関（京都経済短期大学）と再委託契約を結んだ。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・日本統計研究所『年次活動報告書』（2019年度）

(2) 長所・特色

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・(都道府県産業連関表の蒐集と災害の経済影響評価への応用) 政府が産業連関表から供給・使用表への移行を進めていることから、今後の動向については多くの統計関係者の関心が高い。また地方自治体では、産業連関表を観光、災害の分析に活用したいという要望が強くなる。そこで本研究所を産業連関表に関する研究拠点としての役割を充実させていく。その新しいプロジェクトとしてこれまで公表された全ての都道府県産業連関表の蒐集を開始する。さらには、それらを活用して災害の経済影響評価への応用した分析を実施する。 ・(飲食業ウェブデータを活用した QGIS 分析) 本研究所が購入してきた飲食店ウェブデータは既に 12 時点を超えており、経済センサス及びビジネスレジスターに関するシミュレーションを行うための重要なパネルデータとなっている。引き続きこのデータを購入、過去の時点とのパネル化を進めるとともに、これを用いた分析手法を開発する。具体的には飲食店ウェブデータと QGIS (地理情報システムの閲覧、編集、分析機能を有するクロスプラットフォームのオープンソースソフトウェア・GIS ソフト) を連携させて、新型コロナウイルスによって鉄道路線沿線の飲食店舗数がどのように変化したのかを視覚化する分析を考えている。 ・なお新型コロナウイルスの経済的影響は多くの人々の関心があると思われ、研究所として積極的に分析に取り組み、情報発信を行う。 	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・利用者数が少ないことが問題である。そこで 3 月には研究所の図書の配架替えを行い「卒業論文作成支援コーナー」を設置した。これは初心者向けのやさしい統計書、および統計分析の入門書を置いた配架したコーナーであり、学生が興味深くかつやさしい統計書を見つけ、かつそれを用いて自分で分析できるように設置したコーナーである。ただし、学生向けの統計書、統計分析の入門書は十分ではないので整備していく。また、学生が研究所の図書を見つけやすくするために、研究所の所蔵図書の図書館の検索システムへの登録を進める。 	

【この基準の大学評価】

<p>日本統計研究所の研究・教育活動実績については、2019 年度に 2 回、日本統計研究所により国際ワークショップが開催されている。研究成果については、『研究所報』と『オケージョナルペーパー』が発表されており、具体的な研究成果の発表が着実に実行されている点で高く評価できる。研究成果に対する社会的評価については、日本統計研究所員による研究が政府の生産物分類策定に直接反映され、高い評価を得ていることが報告されており、特筆に値する。外部からの組織評価については、すでに 2 名の外部有識者へ評価が依頼されており、評価体制が整えられていることがうかがえる。外部資金の応募・獲得状況については、環境省が実施している「第Ⅳ期 環境経済の政策研究」に採択された研究プロジェクトへ参画しており、高く評価できるものである。</p> <p>また、「長所・特色」に挙げられている「都道府県産業連関表の蒐集と災害の経済影響評価への応用」は、産業連関表に関する研究拠点としての役割を充実させていくという高い志にもとづくものであり、特記に値する。さらに、新型コロナウイルスがおよぼす経済的影響を分析し、社会に発信していくという目標も掲げられており、時宜にかなった有意義な試みとして高く評価できる。</p> <p>「問題点」に挙げられている利用者数の伸び悩みについては、すでに改善に向けた取り組みがなされており、今後の具体的な成果が待たれるところである。</p>

III 2019 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	統計分野における総合的調査研究機関として、研究ならびに実践の両面において、官学連携の「学」側の拠点施設としての多面的な活動を展開する。
	年度目標	統計分野における総合的調査研究機関として、研究ならびに実践の両面において、官学連携の「学」側の拠点施設としての多面的な活動を展開する。
	達成指標	政府委員会への出席、国際ワークショップの開催。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	所員が政府の統計委員会の委員及び臨時委員として出席、統計の改善についての提言を行った。また米国センサス局、米国人弁護士を招聘して国際ワークショップを開催した。
		改善策	—
No	評価基準	内部質保証	
2	中期目標	外部評価委員による評価を実施する。	
		外部評価委員による評価を実施する。	
		外部評価委員による評価。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		外部評価委員からの評価を受けた。	
改善策	—		
No	評価基準	研究活動	
3	中期目標	国民経済計算、歴史統計に関する研究を拡充する。	
		国民経済計算、歴史統計に関する論文を刊行する。	
		国民経済計算、歴史統計に関する論文数。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		中村教授から国民経済計算、牧野教授から歴史統計に関する論文を受領した。だが、予算の関係上、次年度の発行となった。	
改善策	次年度すぐ(4月)にオケージョナルペーパーとして発行する。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
4	中期目標	わが国の政府統計機関に対し、国際水準の統計データを作成、提供できるようなシステム構築や技術面での対応に関する各種助言を政府委員会等で行うことで、研究成果を現実の統計行政へ反映させる活動を行う。	
		政府委員会への出席・助言、国際ワークショップの開催。	
		政府委員会への出席・助言、国際ワークショップの開催数。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		所員が政府の統計委員会の委員及び臨時委員として出席、統計の改善についての提言を行った。また米国センサス局、米国人弁護士を招聘して国際ワークショップを開催した。	
改善策	—		
【重点目標】			
・昭和10年産業連関表推計の再現、昭和15年産業連関表の推計を最も重視し、今年度中にめどをつけたい。そのため学生アルバイトを雇用し、資料収集に全力をあげる。			
【年度目標達成状況総括】			
昭和10年産業連関表の推計に関しては、いろいろと試行錯誤に時間を要したが、農業部門の推計が完了した。推計の筋道が立ったので昭和10年表の推計をなるべく早く完了し、昭和15年表の推計に移行したい。			

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

2019年度目標の達成状況に関する、日本統計研究所ではいずれの評価基準においても、年度目標および達成指標はおおむね達成されており、高く評価できる。「国民経済計算、歴史統計に関する論文を刊行する」との年度目標については、予算の関係上、その実現が次年度に先送りされたが、2020年4月にオケージョナルペーパーとして発行される見込みであることが明記されている。

重点目標に掲げられた「昭和10年産業連関表推計の再現」および「昭和15年産業連関表の推計」については、前者に関する農業部門の推計が完了したことは高く評価できる。また、後者については、昭和10年表の推計の完了後、ただちに

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

着手する旨が「年度目標達成状況総括」に記されており、今後の進展が期待される。

IV 2020 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	統計分野における総合的調査研究機関として、研究ならびに実践の両面において、官学連携の「学」側の拠点施設としての多面的な活動を展開する。
	年度目標	統計分野における総合的調査研究機関として、研究ならびに実践の両面において、官学連携の「学」側の拠点施設としての多面的な活動を展開する。
	達成指標	政府委員会への出席・提言、産業連関表から供給・使用表への移行に関するシンポジウムを環太平洋産業連関分析学会と共催。
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	外部評価委員による評価を実施する。
	年度目標	外部評価委員による評価を実施する。
	達成指標	外部評価委員による評価の実施。
No	評価基準	研究活動
3	中期目標	国民経済計算、歴史統計に関する研究を拡充する。
	年度目標	国民経済計算、歴史統計に関する論文を刊行する。
	達成指標	国民経済計算、歴史統計に関する論文。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	わが国の政府統計機関に対し、国際水準の統計データを作成、提供できるようなシステム構築や技術面での対応に関する各種助言を政府委員会等で行うことで、研究成果を現実の統計行政へ反映させる活動を行う。
	年度目標	政府委員会への出席・提言。
	達成指標	政府委員会への出席・提言、産業連関表から供給・使用表への移行に関するシンポジウムを環太平洋産業連関分析学会と共催。

【重点目標】

産業連関表から供給・使用表への移行に関するシンポジウムを環太平洋産業連関分析学会と共催。

【目標を達成するための施策等】

シンポジウムの準備として、政府統計の第一人者に講演を依頼。あわせてシンポジウムの成果を確実なものとするため広報に力を入れる。

【2020 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

日本統計研究所では中期目標で示された大枠にしたがって、2019 年度の年度目標がひきつづき 2020 年度の年度目標として掲げられている。これは、「統計分野における総合的調査研究機関として、研究ならびに実践の両面において、官学連携の〈学〉側の拠点施設としての多面的な活動を展開する」という理念・目的にむけた継続的な取り組みの姿勢を示すものであろう。昨年度にひきつづき、シンポジウムの開催や論文の発行、外部評価委員による評価の実施が予定されており、十分な成果が期待される。また、重点目標には、「産業連関表から供給・使用表への移行に関するシンポジウムの共催」が掲げられており、具体的かつ有意義な成果が待たれるところである。

【大学評価総評】

日本統計研究所の取り組みは、研究・教育活動実績、研究成果、研究成果に対する社会的評価、外部からの組織評価、外部資金の応募・獲得状況すべての項目にわたって、着実に成果を積み上げていることがうかがわれ、満足すべき水準に達している。2019 年度目標の達成状況についても、年度目標および達成指標いずれも所期の目的が果たされており、高く評価できる。2020 年度中期目標、年度目標についても、さらなる成果の積み上げを見据えた適切な内容となっている。あわせて、「2020 年度 自己点検・評価シート」の「長所・特色」によると、新型コロナウイルスがおよぼす経済的影響を分析し、社会に発信していくという目標も掲げられており、社会の要請にこたえる研究所としての役割を果たそうとする意欲的な試みとして特筆に値する。「問題点」に挙げられている利用者数の少なさについては、研究所の図書の配架を変え、「卒業論文作成支援コーナー」を設けるなど、具体的な取り組みがすでに行われており、その様子は、日本統計研究所の「年

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

次活動報告」5頁に写真付きで報告されている。問題点の克服に向けた前向きな姿勢として高く評価できる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

比較経済研究所

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

比較経済研究所の研究・教育活動は、国際シンポジウムや比較研公開講演会、比較研サロンの開催、比較研シリーズプロジェクトや兼担プロジェクトの実施、八王子市学園都市大学(いちょう塾)での講演など活発な活動が実施されており、評価できる。対外的な研究発表に関しても、書籍や英文叢書の刊行、英文ジャーナルの発行、多数の論文発表や学会等での報告など、評価できる。

比較経済研究所は、1984年に設立され、国内およびアジアを中心に国際比較の観点からの研究を行っており、国内外で安定した高い評価を得てきている。これからも、国内外の研究機関や研究者との連携を強化し、研究成果を広く社会に還元することが望まれる。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

研究成果の発表については、例年どおりの実績を残すことができた。より広い社会への還元ということでは、専任研究員の日本経済新聞『経済教室』への寄稿、兼担研究員の『週刊エコノミスト』への寄稿をはじめ、さまざまな一般向け・実務者向けの講演会や報告会において研究成果の発表に努めた(詳細は年次活動報告を参照されたい)。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

比較経済研究所の研究成果の発表については、例年通りの実績を残すことができおり評価できる。その中でも、専任研究員の日本経済新聞『経済教室』への寄稿、兼担研究員の『週刊エコノミスト』への寄稿は、研究成果の一般社会への周知という観点から特筆に値する。それに加えて、一般向け・実務者向けの講演会や報告会における研究成果の発表も多数にのぼり評価できる。とくに、学生を対象とした2回の講演会(「日本財政の現状と課題:「財政再建」は必要か」と、「ゲーム産業と人工知能」)は、研究と現実世界の関連を学生に示すことができるものとして優れた取り組みである。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2019年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

【比較経済研究所主催の国際コンファレンス】

開催日:2019年12月14・15日 開催場所:法政大学市ヶ谷キャンパスボアソナードタワー19階イノベーション・マネジメント研究センター会議室、参加者14名

テーマ:Changing Dynamics of the Great-Sphere Asian Economy: Industry and Development

報告者:Choorikkadan Veeramani(インディラ・ガンジー開発研究所)、Prabir De(開発途上国研究情報システムセンター(RIS))、藤田麻衣(アジア経済研究所)、荒木祥太(経済産業研究所)、倪彬(法政大学)、胥鵬(法政大学)、Vu Tuan Khai(法政大学)、武智一貴(法政大学)

【講演会・セミナー等】

・第40回比較研公開講演会、

開催日:2019年6月25日、開催場所:法政大学多摩キャンパス、参加者102名

比較研シリーズNo.33『公共経済学と政治的要因—経済政策・制度の評価と設計』出版記念講演会

テーマ:日本財政の現状と課題:「財政再建」は必要か?

講演者:宮崎智視(神戸大学)

・第41回比較研公開講演会

開催日:2019年10月17日、開催場所:法政大学多摩キャンパス、参加者65名

テーマ:ゲーム産業と人工知能

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

講演者：三宅陽一郎（(株) スクウェア・エニックス リードAI リサーチャー）

・第37回比較研サロン

開催日：2019年6月7日、開催場所：法政大学比較経済研究所、参加者9名

報告者：倪 彬（経済学部）

テーマ：Productivity gap and vertical technology spillover from FDI: evidence from Vietnam

・第38回比較研サロン

開催日：2019年11月8日、開催場所：法政大学比較経済研究所、参加者11名

報告者：Jess Diamond（経済学部）

テーマ：The Formation of Consumer Inflation Expectations: New Evidence From Japan's Deflation Experience

・八王子市学園都市大学（いちよう塾）

開催日：2019年10月18日、会場：学園都市センター 第1セミナー室、参加者50名

テーマ：「2040年を見据えた安心社会の実現のために～少子高齢化に伴う社会変化とこれからの社会保障～」

講師：菅原琢磨（比較研専任研究員）

【その他】

・各共同研究プロジェクトにおいて実施されている研究会の詳細については、比較経済研究所「年次活動報告2019年度（令和元年度）」を参照されたい。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・比較経済研究所「年次活動報告2019年度（令和元年度）」

※ホームページ上にて公表

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

・図書（共同研究比較研シリーズプロジェクトの成果）の刊行

法政大学比較経済研究所・濱秋純哉編『少子高齢社会における世代間移転と家族（法政大学比較経済研究所 研究シリーズ34）』日本評論社、2020年3月20日刊。

・英文ジャーナルの発行

比較研の英文紀要“Journal of International Economic Studies”、No. 34、発行日：2020年3月。4本の論文を収録（特集論文4本）。

・ワーキング・ペーパーおよびディスカッション・ペーパーの刊行

ワーキング・ペーパー2本、ディスカッション・ペーパー1本を刊行した。

・その他、各共同研究プロジェクトにおいて公表した研究成果については、比較経済研究所「年次活動報告2019年度（令和元年度）」を参照されたい。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・比較経済研究所「年次活動報告2019年度（令和元年度）」

※ホームページ上にて公表予定

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2019年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2019年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。
不明

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

2020年2月19日（杉本義行・成城大学経済学部教授）および2月20日（廣松悟・明治大学政治経済学部教授）に外部評価を実施した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「比較経済研究所2018-19年度外部評価の報告」

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※2019年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2019年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

- ・2019年度の科学研究費補助金への応募は4件、うち採択3件、交付額（直接経費）は合計で2,000千円。
- ・2019年度の科学研究費補助金を交付された課題は24件。配分額は、基盤A：660千円、基盤B：6,300千円、基盤C：5,250千円、若手B：1,700千円。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

比較経済研究所の2019年度の研究・教育活動実績については、国際コンファレンスを主催し、2つの比較研シリーズプロジェクトと11の兼担プロジェクトの実施、学生を対象とした2回の比較研公開講演会と経済学部学会と共催の2回の比較研サロン、そして八王子市学園都市大学（いちょう塾）での講演などの研究・教育活動を精力的に実施しており、高く評価できる。

研究成果の対外的発表についても、図書を1冊刊行し、英文ジャーナルを発行して4編の論文を刊行し、ワーキング・ペーパーおよびディスカッション・ペーパーを計3編を刊行し、それらをHP上に掲載している点は、成果を広く周知している点で評価できる。

外部からの組織評価については、2名の外部評価者から8つの評価項目において、S（目標を十分に達成し、質の向上が顕著である）あるいはA（目標をほぼ達成し、質の向上が見られる）という評価を得ており、大変優れている。

科研費等の外部資金の応募・獲得状況は、2019年度の科研費への応募は4件で、うち3件が採択されており、同年度に交付された課題は24件と、前年の20件から増加しており高く評価できる。

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的							
1	中期目標	国際比較の観点から、わが国を中心とするアジア諸国と先進諸国の経済社会分析を推進する							
	年度目標	内外の研究者とのネットワークを構築しつつ、研究成果の一部を書籍等で社会に公開する							
	達成指標	書籍を2冊以上刊行する							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>B</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>比較研シリーズ1冊を刊行した。もう1冊、2017年度の国際カンファレンスの成果を英文叢書として刊行する予定であったが、本年度の国際カンファレンスの成果と合わせて1冊とすることにしたため。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	B	理由	比較研シリーズ1冊を刊行した。もう1冊、2017年度の国際カンファレンスの成果を英文叢書として刊行する予定であったが、本年度の国際カンファレンスの成果と合わせて1冊とすることにしたため。	改善策
執行部による点検・評価									
自己評価	B								
理由	比較研シリーズ1冊を刊行した。もう1冊、2017年度の国際カンファレンスの成果を英文叢書として刊行する予定であったが、本年度の国際カンファレンスの成果と合わせて1冊とすることにしたため。								
改善策	—								
No	評価基準	内部質保証							
2	中期目標	定期的に内部評価を行う							
	年度目標	質保証委員会を開催し、その結果を研究所の運営にフィードバックする							
	達成指標	質保証委員会報告書を作成し、運営委員会に報告する							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>2月28日に質保証委員会を開催し、報告書を作成し、3月3日の運営委員会で報告した。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	A	理由	2月28日に質保証委員会を開催し、報告書を作成し、3月3日の運営委員会で報告した。	改善策
執行部による点検・評価									
自己評価	A								
理由	2月28日に質保証委員会を開催し、報告書を作成し、3月3日の運営委員会で報告した。								
改善策	—								

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

No	評価基準	研究活動
3	中期目標	理念・目的に沿った研究を推進する
	年度目標	学内・学外と連携し、研究を推進する
	達成指標	①外部研究資金の獲得件数を前年度と同数以上にする②コンファレンスまたはシンポジウム等を開催する
	年度末報告	執行部による点検・評価
自己評価		S
理由		専任・兼任研究員の科研費の交付件数は、2018年度の20件から2019年度は24件に増加した。また、国際シンポジウムを開催した（12月14・15日）。
	改善策	－
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	研究成果を学部生や一般市民に公開する
	年度目標	①学内で講演会を実施する②学外でセミナーを実施する
	達成指標	①学内で講演会を2回開催する②学外で一般市民向けのセミナーを1回実施する
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価
自己評価		A
理由		計画通り講演会およびセミナーを実施した。
	改善策	－
【重点目標】		
「研究活動」の年度目標「コンファレンスまたはシンポジウム等を開催する」		
【年度目標達成状況総括】		
12月に国際コンファレンスを開催した		

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

比較経済研究所における2019年度目標に対する年度末の自己評価は、理念・目的がB、内部質保証がA、研究活動がS、社会貢献・社会連携がAと概ね達成できている。理念・目的については、「書籍を2冊以上刊行する」という達成目標に対し2019年度は1冊の刊行にとどまるが、残る1冊は本年度以降に刊行予定となっており、引き続いての努力が望まれる。研究活動の重点目標である「コンファレンスまたはシンポジウム等を開催する」については、海外からの報告者を含む多数の報告者による国際コンファレンスの開催は高く評価できる。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	国際比較の観点から、わが国を中心とするアジア諸国と先進諸国の経済社会分析を推進する
	年度目標	内外の研究者とのネットワークを構築しつつ、研究成果の一部を書籍等で社会に公開する
	達成指標	書籍を2冊以上刊行する
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	定期的に内部評価を行う
	年度目標	質保証委員会を開催し、その結果を研究所の運営にフィードバックする
	達成指標	質保証委員会報告書を作成し、運営委員会に報告する
No	評価基準	研究活動
3	中期目標	理念・目的に沿った研究を推進する
	年度目標	学内・学外と連携し、研究を推進する
	達成指標	①外部研究資金の新規獲得件数を前年度と同数以上にする ②コンファレンスまたはシンポジウム等を開催する
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	研究成果を学部生や一般市民に公開する
	年度目標	①学内で講演会を実施する②学外でセミナーを実施する

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

達成指標	①学内で講演会を1回開催する②学外で一般市民向けのセミナーを1回実施する
【重点目標】	「研究活動」の年度目標「コンファレンスまたはシンポジウム等を開催する」
【目標を達成するための施策等】	比較研シリーズプロジェクトにおいてコンファレンスまたはシンポジウムを開催する

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

比較経済研究所では、評価基準の理念・目的、内部質保証、研究活動、社会貢献・社会連携について、中期目標を設定し、具体的な2020年度の目標と達成指標を掲げている。とくに、研究活動の達成指標「①外部研究資金の新規獲得件数を前年度と同数以上にする」は、すでに十分な水準の交付件数（24件）であることを鑑みると、特筆に値する。社会貢献・社会連携の年度目標および達成指標についても、メンバーの大多数が兼担、兼任の研究員であることから十分なリソースを配分することが難しい中で、コンファレンスまたはシンポジウムの実施が確保されている点は高く評価できる。年度末における達成状況について期待したい。

【大学評価総評】

比較経済研究所の研究・教育活動は、国際コンファレンスや比較研公開講演会、比較研サロンの開催、比較研シリーズプロジェクトは兼担プロジェクトの実施、そして八王子市学園都市大学（いちょう塾）での講演や、多くの外部的資金の獲得など、活発な活動が実施されており、高く評価できる。対外的な研究発表についても、書籍や英文ジャーナルの発行、多数の論文発表や学会等での報告を行っており、大変優れている。研究成果に対する社会的評価については、書評や論文の被引用件数、webサイトアクセス件数、表彰・受賞歴等の把握が望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

イノベーション・マネジメント研究センター

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

イノベーション・マネジメント研究センターの研究活動は活発に行われている。研究・教育活動実績では、18の研究プロジェクトがあり、2018年度は複数回のシンポジウム、セミナー、公開講座を開催した。対外発表では、学術雑誌1冊、研究叢書2冊、ワーキングペーパー13編を発行した。外部資金の獲得状況は、2019年度科研費の獲得35件、民間企業からの受託研究2件がある。

2018年度の重点目標「研究プロジェクトの推進と研究成果の公開」について、オンラインジャーナルへの登載という新しい取り組みも含め、目標を達成したことは評価できる。しかし、「社会貢献・社会連携」の資料収集・目録データの作成(B評価)は、システム移行が原因で、達成指標の1000件に対し598件に留まった。システムの移行作業は完了したことなので、今後は資料収集・目録データの完了に向けた取り組みが期待される。

2019年度中期・年度目標は、適切に設定されている。重点目標は、「研究プロジェクト推進と研究成果の公開」が継続される。叢書、学術雑誌、ワーキングペーパーの発刊、シンポジウム、公開講座の開催等により、質と量の向上が期待される。

なお、研究所(センター)の質向上のため、内部に質保証委員会を設置したり、外部評価により研究活動等の客観的評価を行う仕組みを取り入れている研究所も一部見受けられる。運営委員会により適正な運営がなされているとのことではあるが、他研究所の取り組みなども参考にしつつ、質保証に向けたさらなる取り組みを期待したい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

当センターの活動について、十分に評価して頂いている。資料収集・目録データ構築については、当センターとしての資料収集・保存方針を検討しながら進めていく必要があるが、登録するものについては直ちに実施したい。質保証については、運営委員会により適切な運営がされていると考えているが、さらなる取り組みとして所員懇談会を実施している。引き続き適切で活発な研究活動が行われるよう、他研究所の取り組みなども参考に運営していく。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

イノベーション・マネジメント研究センターでは、2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況について、幅広い分野の見解の共有、成果の社会的還元が適切に行われている。資料・目録データ構築(作成)については、資料収集・保存方針を検討しながら進めていただき、登録が必要なものについては速やかな実施を期待したい。また、内部質保証については、これまでの運営委員会による適切な運営に加えて、所員懇談会を実施しているが、今後は、他の研究所の取り組みなども参加にしつつ、更なる取り組みが期待される。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

1. 研究プロジェクト

- ①「企業家史研究会」 長谷川 直哉
- ②「日仏労働市場の比較」 奥西 好夫
- ③「新興国企業の国際化」 安藤 直紀
- ④「地理的表示研究会」 木村 純子
- ⑤「保険におけるフィンテック」 浦谷 規
- ⑥「起業家教育プログラム研究会」 田路 則子
- ⑦「ロジスティクス・クラスター研究会」 李 瑞雪
- ⑧「ブランド・コミュニティ研究会」 竹内 淑恵
- ⑨「機能横断型チームの形成史：トヨタ自動車を対象に」 梅崎 修

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ⑩「スポーツビジネスと社会的アイデンティティ：観戦者を対象とした多次元の尺度の開発」 吉田 政幸
- ⑪「スポーツコーチング・イノベーション研究会」 荒井 弘和
- ⑫「クラウドソーシング研究会」 西川 英彦
- ⑬「AI を用いた学習分析とその周辺に関するビジネス調査」 児玉 靖司
- ⑭「ESG 投資研究会」 長谷川 直哉
- ⑮「比較経営史研究会」 竹原 正篤
- ⑯「産業クラスターの知的高度化とグローバリゼーション」 洞口 治夫
- ⑰「プロ・スポーツチームにおける社会的影響と関与の関係について」 井上 尊寛
- ⑱「消費者行動とマーケティング研究会」 新倉 貴士
- ⑲「金融イノベーションと新しいファイナンス理論」 山崎 輝
- ⑳「金融市場における情報伝播とその周辺に関する統計分析」 高橋 慎
- ㉑「日本における新たな鉄道経営史の構築」 二階堂 行宣
- ㉒「組織メンバーの日常行動とイノベーション創出」 永山 晋
- ㉓「イノベーションプロセス研究会」 豊田 裕貴
- ㉔AI を用いた学習分析とその周辺に関するビジネス調査 (児玉靖司)

2. シンポジウム・セミナー等

- ①公開セミナー「一带一路構想と日本・世界の対応」
2019年6月1日 法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5
- ②国際セミナー「企業活動をめぐる法制度の日米比較
(Comparison of the Corporate Law between the U.S. and Japan)」
2019年6月7日 法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5
- ③「G-SHOCKの世界とCASIOのDNA」(第1回法政大学MBAセミナー&進学相談会2019)【協力】
2019年7月20日 法政大学 富士見ゲート4階 G401教室、外濠校舎5~6階 S501~S503、S601~S602教室
- ④国際シンポジウム「想像力とマーケティング—マーケティングにおける想像力の役割とは— (Imagination and Marketing: What are the Roles of Imagination in Marketing?)」
2019年7月21日 法政大学 ボアソナード・タワー26階 スカイホール
- ⑤出版記念シンポジウム「創発型責任経営—新しいつながりの経営モデル—」【東京会場】
2019年7月26日 法政大学 ボアソナード・タワー26階 スカイホール
- ⑥「ブランドマーケティングの本質に迫る」(第2回法政大学MBAセミナー&進学相談会2019)【協力】
2019年10月19日 法政大学 外濠校舎3階 S306教室、5~6階 S501~S503、S601~S602教室
- ⑦「Organisation Level Translation of SDGs and Accounting」(2019年度第3回経営学会研究会)【協力】
2019年12月18日 法政大学 大内山校舎7階 Y702教室
- ⑧国際セミナー「圧縮された経済発展—英国・日本・中国の経験を比較して—」
2020年1月10日 法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5
- ⑨コーネル大学リテール・マネジメント・プログラム・オブ・ジャパン[第10期]【協力】
2019年度の本学開催=2019年4月17日・18日、5月15日・16日、6月12日・13日、7月24日・25日
法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5
- ⑩コーネル大学リテール・マネジメント・プログラム・オブ・ジャパン[第11期]【協力】
2019年度の本学開催=2019年11月13日・14日、2020年1月15日・16日
法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5

3. 公開講座

「社会課題に挑んだ企業家たち」2019年11月16日、12月14日、2020年1月25日 (全3部)
法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- 1. 研究プロジェクト <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/project.html>
- 2. シンポジウム・セミナー等
<http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/symposium-2.html>
- 3. 公開講座 <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/lecture.html>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

1. 学術雑誌 1冊
イノベーション・マネジメント No.17
2. 研究叢書 1冊
 - ①No.19 起業プロセスと不確実性のマネジメント
—首都圏とシリコンバレーの Web ビジネスの成長要因—
3. ワーキングペーパー
 - ①No.204 ミドル層の中途採用における「採用後マッチング」
 - ②No.205 続・栗山泰史 オーラル・ヒストリー
 - ③No.206 佐野清明 オーラル・ヒストリー
 - ④No.207 豊島達哉 オーラル・ヒストリー
 - ⑤No.208 続・有吉孝一 オーラル・ヒストリー
 - ⑥No.209 Interfirm Relationship between Automobile Firms
and Tire Firms in the U.S., 1900-1940
 - ⑦No.210 Intraregional Diversification and Individual Subsidiaries
 - ⑧No.211 A Study About What Led Japanese Pharmaceutical Industry into 20th Century
 - ⑨No.212 Evaluation Index System for Railway Hub Logistics Base
System Layout Planning, Taking Hefei Railway Hub in China as an Example
 - ⑩No.213 アフリカにおける日本企業の事例研究 I
 - ⑪No.214 アフリカにおける日本企業の事例研究 II
 - ⑫No.215 アフリカにおける日本企業の事例研究 III
 - ⑬No.216 非営利組織における予算の機能と編成プロセス
 - ⑭No.217 明治・大正期における大阪薬業界の変遷 —道修町薬業者の活動を中心として—
 - ⑮No.218 Sustainability Management Under Sumitomo: The CEOs' Decision-making Process Regarding Smoke
Pollution at the Besshi Copper Mine in Japan 1
Teigo Iba: A Pioneer of Management Aimed at Creating Shared Value (CSV)
 - ⑯No.219 Sustainability Management Under Sumitomo: The CEOs' Decision-making Process Regarding Smoke
Pollution at the Besshi Copper Mine in Japan 2
Masaya Suzuki: Management Through "Itoku-shori", Aiming for a Sustainable Society
 - ⑰No.220 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective
of SDGs and ESG 1 Magosaburo Ohara: The Pioneer of CSR Who Challenged the Realization of Labor
Idealism
 - ⑱No.221 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective
of SDGs and ESG 2 Tsurukichi Hatano: Regeneration of Community Through Innovation of Conventional
Industries
 - ⑲No.222 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective
of SDGs and ESG 3 Kenkichi Kagami: Founder of Insurance Business in Japan
 - ⑳No.223 The Mechanism of Formation of Logistics Clusters

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

1. 学術雑誌 <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/journal.html>
2. 研究叢書 <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/publication.html>
3. ワーキング・ペーパー http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/working_paper.html

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して 2019年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2019年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019年度の web サイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。
・多くの学会、学術雑誌等で書評・引用の対象となっていると思われるが、数は把握していない。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

<p>・叢書の書評については、当センター発刊の学術雑誌で書かれている。</p> <p>①イノベーション・マネジメント No. 17 「公文溥・糸久正人 編著『アフリカの日本企業 ― 日本的経営生産システムの移転可能性―』2020年3月」(評者：藤本隆宏)</p> <p>②イノベーション・マネジメント No. 17 「長谷川直哉 編著『企業家に学ぶ ESG 経営 ― 不連続な社会を生き抜く経営構想力―』2020年3月」(評者：四宮正親)</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・イノベーション・マネジメント No. 17</p> <p>http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/journal.html</p>
<p>④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）</p>
<p>※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。</p> <p>特に第三者評価は受けていない。年5回の運営委員会を実施し適正な運営を行う。また、所員懇談会を実施する。</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>
<p>⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況</p>
<p>※2019年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2019年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。</p> <p>・所員の科研費の応募は、定年延長者等の特段の事情を除き専任教員に要請している。2019年度に応募した2020年度の科研費の獲得は、分担者、基金、補助金を含め所員66人（専任・兼担所員46名、客員研究員20名）中40人であり、61件であった。また、民間企業からの受託研究が継続1件（富士ソフト株式会社、2019年9月1日～2020年3月31日）あった。</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>当センターは、様々な研究分野を専門とした所員で構成されている。専任・兼担所員は11学部・研究科の教員から成り、幅広い分野の見解を共有できるよう積極的に取り組んでいる。また、運営委員も複数学部・キャンパスの教員に委嘱し多様な意見交換が出来るようにしている。</p> <p>研究活動は活発で、研究プロジェクト等で研究力を高め、セミナー・シンポジウム等で研究成果を公表し、学術雑誌や叢書等の定期刊行物を発行することで、外部への認知を高めている。所員に対しては、研究プロジェクト資金の助成、セミナー・シンポジウムのサポート（助成金含む）や、ワーキングペーパー発行の際の英文校閲料一部補助等、様々な研究支援体制を整えている。</p> <p>2019年度においては、グローバルな取組が目立った。学術雑誌13本中1本、ワーキングペーパー20本中10本が英文で寄稿された。また、外国人客員研究員の委嘱や外国人講師を招聘した国際セミナーも4件あった。今後も研究ニーズや社会の期待に応えられるよう、支援していく。</p>	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>・特になし</p>	

【この基準の大学評価】

<p>イノベーション・マネジメント研究センターにおける2019年度の研究・教育実績は、研究プロジェクトが23件、シンポジウム・セミナーなどが10件実施され、また、全3部3日間からなる公開講座が実施された。また、対外的に発表した研究成果として、学術雑誌1冊、研究叢書1冊、ワーキングペーパー20編が発行された。2019年度は、学術雑誌13本中1本、ワーキングペーパー20本中10本が英文で寄稿され、外国人客員研究員の委嘱や外国人講師を招聘した国際セミナーも4件開催されるなど、国際的な取り組みが目立った。</p> <p>研究成果に対する社会的な評価として、貴研究センターが発行する学術雑誌において、叢書の書評が掲載されている。</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

外部からの組織評価として、第三者の評価は受けていないが、年5回の運営委員会や所員懇談会が実施されており、適切な運営が行われているといえる。2020年度の科研費の獲得状況では、分担金、基金、補助金を含め所員66人中40人(61件)が獲得しており、民間企業からの受託研究(継続)も1件あった。

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動	
1	中期目標	研究プロジェクトを公募し、研究のサポートを行うとともに、所員の研究成果を学術雑誌、研究叢書、およびワーキングペーパーの形で積極的に発信することで、学界に貢献する。さらに、特色あるデポジット・ライブラリーを構築し、他に類のない体系的な図書・資料をコレクション方式により重点収集、整理、公開利用を行うと共に、収集した図書・資料の活用を通じて調査・研究の向上に寄与する。	
	年度目標	研究成果物の質と量の向上をはかる。所員で研究チームを形成して研究プロジェクトの推進をはかる。	
	達成指標	叢書2冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数10本(研究ノートや寄稿等も含む)、ワーキングペーパー10本を目指す。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		叢書は予定していた1冊が、英文で外国の出版社から助成金なしで出版できることになり叢書の形態を取らないことにしたこと、代替の書籍も叢書の仕様と合わなかったことから1冊の発刊となった。学術雑誌に掲載する論文数は13本(研究ノートや寄稿等も含む)、ワーキングペーパー20本(うち英文10本)を発刊し、所員の研究成果を積極的に発信することができた。	
改善策	叢書2冊を刊行できるよう所員に申請を促す。また、承認後進捗状況を確認する。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	継続的な資料収集を通じて、流通産業ライブラリーの充実を図ると共に、研究者また学生への資料提供を行うことで、流通・消費財産業の研究の促進、また人材の育成に貢献する。	
	年度目標	継続的な資料収集に加え、これらの貴重資料の適切な保管、長期的な維持を目指した取組を行う。	
	達成指標	これまで収集した資料・書棚の状態を確認し、適切な保管方法・配列を検討し、実行する。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		現状調査を行い、書庫のカビの状況が酷いことが分かったため、カビ除去及び発生防止事業の実施と予備費の申請を行った。10月の常務理事会で承認され、業者によるカビ除去作業を12月～3月に行った。また、当センターの特色としている社史・団体史(約8,000冊)について、コリブリ装着作業を完了させ、保管耐性を強めた。	
改善策	資料を保管している書庫はBT地下にあり、カビが発生しやすい環境にあるため、来年度以降も環境保全・発生防止事業を継続して行う。 また、資料収集・保存方針についても検討していく。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
3	中期目標	公開講演会、シンポジウムを開催することを通じて最新の研究成果を社会に還元する。	
	年度目標	継続的な研究活動の推進につながるシリーズ講演の実行や、海外の研究機関との関係づくりに尽力する。	
	達成指標	シンポジウムまたは講演会5回を目標とし、講演録やサマリーを残せるようにレベルの充実をはかる。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		シンポジウムまたは講演会を10回開催(協力含む)し、大幅な目標達成となった。そのうち外国人講師を招聘した国際セミナーも4件あった。研究成果の社会への還元と研究者同士お	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		よび研究者と実務家の交流ができた。	
	改善策	—	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
4	中期目標	公開講座や寄付講座の継続実施に向け、適切なテーマ・開催方法等を検討する。	
	年度目標	学外研究者を対象とした公開講座を実施する。寄付講座については、企画に時間を要するため、来年度（隔年）実施を目指し、準備を行う。	
	達成指標	所員の教育活動も支援できるような公開講座を実施する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		公開講座は1回目（10/12）が台風19号のため事前に中止の判断をしたが、振替開催を即座に決定し、予定通り全3回を実施した。本講座は2007年度から毎年実施しており、2016年度から受講料を無料としている。毎年行われる公開講座として認知度も高く、参加者からも高評価を得ている。	
改善策	—		
【重点目標】			
2019年度については、研究プロジェクトが23件と昨年度から更に5件多い。これらの研究プロジェクトが適切に活発に活動され、良い成果が出されることを目標とする。研究活動の成果として、叢書および学術雑誌、ワーキングペーパーの発刊や、シンポジウムの開催について質と量の向上をはかる。そのために、所員への周知と運営委員会での報告・改善点があれば検討することを積極的に行う。			
【年度目標達成状況総括】			
2019年度イノベーション・マネジメント研究センターとしては目標をほぼ達成し、活発な研究活動と成果の発信ができたと考える。検討・報告すべき議題が発生した際には臨時運営委員会（メール審議）も含め、速やかに運営委員会に上程し、適切に運営することができた。資料収集に関しては、カビ発生防止の観点からも何をどれだけ収集しどのように保管していくかを学術支援本部全体で検討していく必要があり、来年度以降の新たな課題となった。			
2020年度は所長、副所長および運営委員の多くが入れ替わり、新規に委嘱する所員もいるが、適切で活発な研究活動が引き続き行われるよう運営したい。			

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

イノベーション・マネジメント研究センターにおける2019年度の目標は適切に設定され、ほぼ全ての目標を達成している。特に、シンポジウムまたは講演会については10回開催され、目標の5回を大幅に上回った。そのうち外国人講師を招聘した国際セミナーも4回開催され、国際的に研究活動と成果を発信し、社会への還元、研究者同士の交流、研究者と実務家の交流が行われたことは高く評価できる。また、2007年度から毎年実施されている学外研究者を対象とした公開講座を2019年度も開催（全3回3日間）した。引き続き、活発な研究活動と積極的な発信が期待される。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	研究プロジェクトを公募し、研究のサポートを行うとともに、所員の研究成果を学術雑誌、研究叢書、およびワーキングペーパーの形で積極的に発信することで、学界に貢献する。さらに、特色あるデポジット・ライブラリーを構築し、他に類のない体系的な図書・資料をコレクション方式により重点収集、整理、公開利用を行うと共に、収集した図書・資料の活用を通じて調査・研究の向上に寄与する。
	年度目標	研究成果物の質と量の向上をはかる。所員に広く申請を促し、進捗管理を行う。
	達成指標	叢書2冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数10本（研究ノートや寄稿等も含む）、ワーキングペーパー10本を目指す。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	継続的な資料収集を通じて、流通産業ライブラリーの充実を図ると共に、研究者また学生への資料提供を行うことで、流通・消費財産業の研究の促進、また人材の育成に貢献する。
	年度目標	継続的な資料収集と、これらの貴重資料の適切な保管、長期的な維持を目指した取組を行う。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	達成指標	特に貴重資料を中心に資料収集を行い、配置の際には除菌を施すこととする。また資料を保管している BT 地下書庫の環境保全・発生防止事業を行う。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
3	中期目標	公開講演会、シンポジウムを開催することを通じて最新の研究成果を社会に還元する。
	年度目標	継続的な研究活動の推進につながるシリーズ講演の実行や、海外の研究機関との関係づくりに尽力する。
	達成指標	シンポジウムまたは講演会 5 回を目標とし、講演録やサマリーを残せるようにレベルの充実をはかる。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	公開講座や寄付講座の継続実施に向け、適切なテーマ・開催方法等を検討する。
	年度目標	学外研究者を対象とした公開講座を実施する。
	達成指標	所員の教育活動も支援できるような公開講座を実施する。
<p>【重点目標】 研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献</p> <p>【目標を達成するための施策等】 2020 年度は所長、副所長および運営委員の多くが入れ替わり、新規に委嘱する所員もいるが、適切で活発な研究活動が行われるよう周知・運営する。 また、既存の組織・分野の枠を超えた学内外の研究者との交流により、研究を活発化させ、研究成果を広く発信する。</p>		

【2020 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

2020 年度中期目標・年度目標は、研究活動、社会貢献・社会連携ともに適切に設定されている。重点目標は「研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献」である。既存の組織・分野の枠を超えた学内外の研究者との交流により研究を活発化させ、叢書（2 冊）、学術雑誌（掲載論文数 10 本）、ワーキングペーパー（10 本）の発刊、シンポジウムまたは所員の教育活動も支援できるような公開講座（5 回）の開催等により、研究成果物の量と質の向上を図るとした。具体的な方策の実行が期待される。

【大学評価総評】

イノベーション・マネジメント研究センターの研究活動は活発に行われている。研究・教育実績は、研究プロジェクトが 23 件、シンポジウム・セミナーなどが 10 件実施され、また、全 3 部 3 日間からなる公開講座が実施された。また、対外的に発表した研究成果は、学術雑誌 1 冊、研究叢書 1 冊、ワーキングペーパー 20 編の発行である。2019 年度は、学術雑誌、ワーキングペーパーで英文による寄稿があり、また、外国人客員研究員の委嘱や外国人講師を招聘した国際セミナーも開催されるなど、国際的な研究活動と成果が発信されたことは高く評価できる。

2020 年度中期目標・年度目標は、研究活動、社会貢献・社会連携ともに適切に設定されている。重点目標は「研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献」であり、学術雑誌（掲載論文数 10 本）、ワーキングペーパー（10 本）の発刊、シンポジウムまたは所員の教育活動も支援できるような公開講座（5 回）の開催等により、研究成果物の量的・質的向上が期待される。

なお、外部からの組織評価として、第三者の評価は受けていないが、年 5 回の運営委員会や所員懇談会が実施されており、適切な運営が行われているといえる。今後は、他の研究所の取り組みなども参加にしつつ、更なる取り組みが期待される。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

国際日本学研究所

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

国際日本学研究所においては、多様な日本研究の諸分野を、国際日本的視角から位置づけ直し豊富な実績を積み重ねている。プロジェクト、シンポジウム、セミナー等の研究・教育活動実績は申し分なく、出版物、学会発表等の研究成果も優れている。研究成果に対する社会的評価も水準を保っており、科研費等外部資金の応募・獲得状況もめざましい。

一方、海外における日本研究の衰退傾向は懸念される材料であるが、国際的な研究所や企業との連携などを通じて、本研究所がいつもの役割を果たすことが期待される。また、第三者評価の導入に関しては、その実現のための具体的な一歩を踏み出すことが望まれる。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

海外における日本研究の可能性をさぐるべく、アルザス・欧州日本学研究所で若手研究者からの聞き取りを行い、韓国、アフリカ諸国との研究者との共同研究会を開催するなど、国際的な研究上の連携を強めることができた。第三者評価は予算の問題と関係者の「江戸東京研究センター」での兼務による負担の問題から実現できていないが、引き続き検討する。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

国際日本学研究所においては、新たな日本研究の可能性を探るため、アルザス・欧州日本学研究所の若手研究者からの聞き取り調査を行った。また、韓国、アフリカ諸国の研究者と研究会を開催し、成果があった。

第三者評価については、予算のほかに、「江戸東京研究センター」の兼務の問題がある。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

1. 「新しい「国際日本学」を目指して」と題して公開研究会等を開催

(1) 新しい「国際日本学」を目指して6 第2回アルザス・ワークショップ

2019年11月1日(金)・11月2日(土)。アルザス・欧州日本学研究所(フランス)。テーマ:「ヨーロッパにおける日本研究の現状と拠点形成のためにー若手研究者たちに聞く」。安孫子信、小口雅史(以上法政大学)、楠綾子(国際日本文化研究センター)、鈴木裕輔(名城大学)、黒田昭信(ストラスブール大学)他5名、欧州若手研究者6名。

(2) 「新しい日本学」を目指して7 公開研究会

2019年12月4日(水)17:00~19:00。法政大学ボアソナード・タワー25階 B会議室。テーマ:「東京大空襲を考えるーその政治的影響を中心にー」。法政大学国際日本学研究所主催、法政大学江戸東京研究センター共催。報告者:鈴木多聞(法政大学)。司会:小口雅史(法政大学)

(3) 「新しい日本学」を目指して8 公開研究会

2020年1月28日(月)17:00~19:00。法政大学ボアソナード・タワー26階 A会議室。テーマ:「心とはいかなるものか?ー古代日本人の形而上学的思想ー」。報告者:ツバタナ・クリステワ(国際基督教大学)。司会:小口雅史(法政大学)

2. 「国際日本学」関係の国際フォーラムを開催

(1) 日韓連帯文学フォーラム「文化・文学でつながる、韓国と日本」前夜祭

2019年11月29日(土)18:30~20:00。法政大学富士見ゲート6階 G602教室。法政大学国際日本学研究所主催、日本近世文学会後援。挨拶:田中優子(法政大学)。座談:[実行委員会(五十音順)]加藤敦子(都留文科大学)、小林ふみ子(法政大学)、染谷智幸(茨城キリスト教大学)、中沢けい(作家/法政大学)、韓京子(青山学院大学)。

(2) 日韓連帯文学フォーラム「文化・文学でつながる、韓国と日本」フォーラム

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

2019年11月30日(土) 10:00から17:10。法政大学富士見ゲート2階 G201 教室。法政大学国際日本学研究所主催，日本近世文学会後援。基調講演：小峯和明(立教大学・中国人民大学)。発表者：袴田光康(静岡大学)，金蘭珠(檀国大学)，鄭敬珍(東京福祉大学)，遠藤星希(法政大学)，崔泰和(群山大学)。討論：講演・発表者，司会：染谷智幸。ソヘグム(小奚琴)演奏：河明樹。対談：中沢けい×きむふな(翻訳家)。

3. 本研究所王敏研究室主催・協力の研究会等

- (1) 2019年4月19日(金)。20時～22時。日中友好会館後楽寮内。王敏研究室協力〈日中「混成文化」の現代的価値を考える〉講座
- (2) 2019年9月19日(木) 14時～16時30分。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。王敏研究室主催〈日中「混成文化」の現代的価値を考える〉講座。
- (3) 2019年9月26日(木) 14時～17時。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。王敏研究室主催〈日中「混成文化」の現代的価値を考える〉講座。
- (4) 2019年10月10日(木) 10時～16時。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。王敏研究室主催〈日中「混成文化」の現代的価値を考える〉講座。
- (5) 2020年2月3日(月) 13時～16時。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。王敏研究室主催〈日中「混成文化」の現代的価値を考える〉講座。

4. 当研究所による共催事業

- (1) ローザ・カーロリ氏講演会「江戸・東京における佃島の誕生と発展」(The origin and development of Tsukudajima in Edo-Tokyo)
2019年5月14日(火) 15時～17時。法政大学ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5。共催：法政大学江戸東京研究センター，エコ地域デザイン研究センター，国際日本学研究所。報告者：ローザ・カーロリ(ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学教授，法政大学江戸東京研究センター客員研究員，法政大学国際日本学研究所客員所員)。
- (2) 第7回アフリカ開発会議・パートナー事業 国際セミナー「発展途上のアフリカ諸国における社会経済的変革と日本」
2019年8月29日(木) 10時～19時。法政大学ボアソナード・タワー26階スカイホール。共催：フェリックス・ウフェ・ボアニ大学政治経済研究センター，法政大学国際日本学研究所。挨拶：熊田泰章(法政大学)，アルバン・アウレ(フェリックス・ウフェ・ボアニ大学 [コートジボワール])。総合司会：安孫子信(法政大学)。水野和夫，ジョン・カレンガ，公文溥(以上法政大学)，大湾秀雄(早稲田大学)，長谷部葉子(慶應義塾大学)，オーギュスタン・ロワダ(ワガ第二大学 [ブルキナファソ])，ギー・コル(アラッサヌ・ウアタラ大学 [コートジボワール])，ジュール・ザヌ(アボメイ・カラヴィ大学 [ベナン])，ババトゥンデ・イギユ(アボメイ・カラヴィ大学 [ベナン])，ママドゥ・ティメラ(シェイク・アンタ・ジョップ大学 [セネガル])，ママン・マラム(アブドゥ・ムムニ大学 [ニジェール])

5. 当研究所による後援事業

- (1) 日本文化人類学会主催公開シンポジウム「アイヌ民族と博物館—文化人類学からの問いかけ」
2020年1月26日(日) 13時～17時30分。法政大学富士見ゲート4階 G401 教室。主催：日本文化人類学会，共催：法政大学国際日本学研究所，日本人類学会，日本考古学協会，公益財団法人北海道アイヌ協会，後援：文部科学省。
- (2) 平成29年度科学研究費若手研究(B)採択「まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡の比較—歌われる童謡を巡って」日韓国際童謡フォーラム「童謡を子どもの心に」
2020年1月31日(金) 13時～18時。[韓国] 国立子ども青少年図書館4階講堂。主催：[日本] 張晟喜(平成29-31年度科学研究費助成事業(若手研究(B))「まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡の比較—歌われる童謡を巡って」[研究課題番号：17K13437]，[韓国] 方定煥研究所。後援：[日本] 法政大学国際日本学研究所/日本児童文学者協会/こすもすの会/ (有) ユージンプランニング [韓国] 国立子ども青少年図書館/韓国児童文学人協会/韓国児童文学学会(社)新芽の会。
報告者：張晟喜(法政大学)，畑中圭一(児童文学研究者)，キム・ヨンヒ(韓国児童文学学会会長)，チャン・ユジョン(檀国大学教授)，シン・ヘスン(延世大学教授)/田中修二(ピアニスト)。司会：張貞姫(方定煥研究所所長)，鄭善恵(韓国児童文学学会副会長)，パク・サンジェ(韓国児童文学人協会首席副会長)

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

1. (1) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20191101-02report.html>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

1. (2) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20191204report.html>
1. (3) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20200128report.html>
2. (1) (2) 当日配付資料 (*開催案内: <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20191129-30info.html>)
3. (1) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20190419report.html>
3. (2) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20190919report.html>
3. (3) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20190926report.html>
3. (4) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20191010report.html>
3. (5) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20200203report.html>
4. (1) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20190514report.html>
4. (2) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20190829report.html>
5. (1) 当日配付資料 (*開催案内: <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20200126info.html>)
5. (2) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20200131report.html>

②対外的に発表した研究成果 (出版物、学会発表等)

※2019年度に研究所 (センター) として刊行した出版物 (発刊日、タイトル、著者、内容等) や実施した学会発表等 (学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等) の詳細を記入。

1. 出版物等

(1) 本研究所の紀要にあたる研究成果報告集『国際日本学』第17号を2020年3月25日に刊行。国際日本学に関する一般的な研究成果報告3本、「小特集 日本・朝鮮近世の文学における「医者」表現」の報告論文3本、本研究所が公募している若手研究者研究論文採用論文2本、などを掲載した。そのうち小特集は2019年2月20日に法政大学国際日本学研究所公開研究会「なぜ朝鮮王朝の文学は藪医者を描かなかったのか」における高永爛氏 (全北大学校) の報告と、そのときの福田安典氏 (日本女子大学)、吉丸雄哉氏 (三重大学) との対話をもとにそれぞれに書き下ろしていただき構成したもの。論文名は下記の通り。

- ・「名医伝と藪医譚との間」福田安典
- ・「近世における名医—『志都能石屋』『近世畸人伝』『皇国名医伝』をてがかりに—」吉丸雄哉
- ・「なぜ朝鮮王朝期の文学は藪医者を描かなかったのか」高永爛

- (2) 『証言 戦後日中関係秘史』(2020年3月、菱田雅晴・天児慧・高原明生)
- (3) 『風土 (Fudo) から江戸東京へ』(2020年3月、安孫子信 他)
- (4) 『新・江戸東京研究: 近代を相対化する都市の未来』(2019年4月、安孫子信・陣内秀信 他)
- (5) 『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集 北斎館編』(2019年10月、小林ふみ子・浅野秀剛・瀬戸めぐり・松村真佐子・森山悦乃・安村敏信)
- (6) 『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史 長島弘明編』(2019年5月、小林ふみ子 他)
- (7) 『中世に架ける橋/「能とオラトリオ試論 合唱・ナレーション・宗教的機能という観点から」』(2020年3月、竹内晶子(分担執筆))

2. 論文

- (1) 「在欧美術館・博物館所蔵の日本仏教美術を訪ねて (4) —ドイツ・ハイデルベルク ポルトハイム基金民族学博物館の巻 (2)、—ポルトガル・リスボンの巻」(2019年9月『法政史学』小口雅史ほか)
- (2) 「在欧美術館・博物館所蔵の日本仏教美術を訪ねて (5) —ドイツ・ブレーメン 海外博物館の巻 (2)、—ドイツ・ハンブルク 美術工芸博物館の巻、—ギリシア・コルフ島 アジア美術館の巻」(2020年3月『法政史学』小口雅史ほか)
- (3) 『文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として』(2020年1月、小林ふみ子)
- (4) 『狂歌に文芸性はあるのか』(2019年9月、小林ふみ子)
- (5) 『近代の名所図会にみる江戸イメージ』(2020年3月、米家志乃布)
- (6) 『古作の能が教えてくれること—〈鶺鴒〉を手がかりに—』(2019年6月、山中玲子)

3. 学会発表等

- (1) 高田 圭: 公開講演『「68年運動」は何を生んだか、残したか?—現在・未来の視点から』 会議名「カルチャー・カフェ・デュッセルドルフ」 2020年1月17日 (言語: 日本語)
- (2) 高田 圭: 口頭発表 (一般) “Radical Cosmopolitan Publics in the Japanese Global Sixties”

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

会議名「SNS International Conference, The Nation and the Radical Left」 2019年11月29日

(言語：英語)

(3)高田 圭：口頭発表（一般）“Combining Particularity with Universality in Japanese Studies: Historical Sociology of Japan’s Global Sixties” 会議名「EU-Japan Workshop」 2019年11月1日（言語：英語）

(4)高田 圭：公開講演「日本の『グローバルな60年代』とコスモポリタン・パブリクス」

会議名「慶応義塾大学大学院文学研究科コロキウム」2019年10月1日（言語：日本語）

(5)小林ふみ子：シンポジウム・ワークショップ パネル（指名） Descriptions forming Memories : The History of Geographic Records of Edo-Tokyo and water Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives 2020年1月13日 江戸の地誌の発達を論じた。

(6)小林ふみ子：口頭発表（招待・特別） 天明狂歌研究と石川淳 日本女子大学文学部・文学研究科 学術交流企画シンポジウム「1980年代の〈石川淳〉と〈江戸〉」 2019年12月27日 石川淳の江戸文化観、とりわけ天明狂歌についての論が研究に与えた影響をまとめた。

(7)小林ふみ子：口頭発表（招待・特別） 狂文の骨法—俳文への意識と差異化 俳文学会東京例会 2019年12月21日 大田南畝が俳文を参照しながら狂文を意識化したことについて、その差異を考察した。

(8)米家志乃布：シンポジウム・ワークショップ パネル（指名） Mapping Tokyo:Cartography and the Representation of the Capital of Japan in the 20th Century International Conference Tokyo and Venice as Cities on Water. Past Memories and Future Perspectives Baratto Hall - Ca’ Foscari University of Venice 13-14 January 2020 2020年1月13日

(9)米家志乃布：シンポジウム・ワークショップ パネル（指名） 近代の名所図会・絵地図からみる江戸イメージ 法政大学江戸東京研究センター・法政大学地理学会シンポジウム「東京と江戸をつなぐ - 風景と場所」 2019年7月6日

(10)西塚俊太：シンポジウム・ワークショップ パネル（指名） 三木清の社会論の意義——西田哲学に対する独自性の探究—— 法政哲学会第39回大会シンポジウム「三木清の人生と思想-新資料を参考にして-」 2019年5月25日

(11)山中玲子：口頭発表（基調） いくさと能 “Gettysburg” シンポジウム 2019年9月14日

(12)宮本圭造：口頭発表（一般） 金春家文書の再検討 藝能史研究会 2019年5月10日

4. その他

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・出版物本体および学会配付資料
- ・本学学術研究データベース

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2019年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2019年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

- ・書評

小口雅史氏の編著『北方世界と秋田城』における出土文字資料を活用した新しい古代北方史料学研究についての著書についての詳細な書評論文が、『法政史学』93号（2020年3月）に掲載された（執筆者・渡辺晃宏氏）。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・出版物等本体

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

本研究所では、おもに予算問題から特別な第三者評価は導入できていない。その代替措置として内部評価の充実をはかっている。運営委員会で相互評価・批判の学術的議論が行われるように継続的作業を行っている。ここでは、各事業の研究責任者からなされる研究成果報告に対して、毎回その検証評価の議論を行っている。この方式は以前の大学評価委員会から認めていただいた経緯があり、この方式を継続している。また、本研究所は現在エコ地域デザイン研究センターと連携し、江戸東京研究センターでも調査研究活動を行っているため、本研究所の所員の研究成果は部分的に江戸東京研究センターの研究成果と重複している。その重複部分に関しては江戸東京研究センターの第三者評価を参考している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・国際日本学研究所事務室保管の運営委員会議事録

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・江戸東京研究センターの自己点検・外部評価委員会資料

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2019年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

1. 2019年度中に応募した外部資金7件（全て科研費）

(1) 研究代表者 4件

- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 江戸狂歌資料による大衆的作者=読者の教養の研究
- ・西塚俊太 若手研究 法政大学所蔵「三木清文庫」未整理資料の調査と貴重書保存登録
- ・山中玲子 基盤研究(A) 文化の交差領域としての能楽—外部との相互影響および技芸伝承の総合的研究
- ・宮本圭造 基盤研究(B) 近世大名家道具帳の網羅的収集とデータベース化を通じた古典籍伝来の文化史的研究

(2) 研究分担者 3件

- ・竹内晶子 基盤研究(A) 文化の交差領域としての能楽—外部との相互影響および技芸伝承の総合的研究
- ・山中玲子 基盤研究(C) 音楽的分析のための能楽の謡の多層的なモデル化
- ・宮本圭造 基盤研究(A) 文化の交差領域としての能楽—外部との相互影響および技芸伝承の総合的研究

2. 2019年度中に採択を受けた外部資金21件（全て科研費）

(1) 研究代表者 10件

- ・菱田雅晴 基盤研究(A) 現代中国における腐敗パラドックスに関するシステム／制度論的アプローチ 2017-04-01～2022-03-31 1,100,000円（研究課題番号：17H01638）
- ・安孫子信 基盤研究(C) オーギュスト・コント『実証哲学講義』の歴史的意義をめぐる学際的研究 2019-04-01～2022-03-31 1,120,000円（19K00116）
- ・安孫子信 基盤研究(C) 西周の「哲学」の再検討を通じて実証哲学を新たに展望する 2016-04-01～2019-03-31 0円（2018年度完了）（16K02140）
- ・小口雅史 基盤研究(B) 古代末期防御の集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築 2019-04-01～2023-03-31 3,310,000円（19H01297）
- ・米家志乃布 基盤研究(C) 民間地図作製史からみたフロンティア像の日露比較研究 2017-04-01～2021-03-31 900,000円（17K03257）
- ・大塚紀弘 基盤研究(C) 資料調査に基づく日本中世における渡来人の基礎的研究 2019-04-01～2024-03-31 900,000円（19K01001）
- ・松本剣志郎 基盤研究(C) 近世都市インフラ維持管理の社会史的研究 2018-04-01～2021-03-31 500,000円（18K04545）
- ・山本真鳥 基盤研究(C) オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究 2019-04-01～2023-03-31 900,000円（19K01208）
- ・山中玲子 基盤研究(B) 能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基盤研究 2016-04-01～2020-03-31 2,900,000円（16H03369）
- ・張晟喜 若手研究(B) まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡の比較—歌われる童謡を巡って 2017-04-01～2020-03-31 1,200,000円（17K13437）

(2) 研究分担者 11件

- ・菱田雅晴 基盤研究(A) 現代中国の政治エリートに関する総合研究：選抜と競争の在り方、ガバナンス能力 2018-04-01～2022-03-31 400,000円（18H03626）
- ・安孫子信 基盤研究(B) ベルクソン『時間と自由』の総合的研究—国際協働を型とする西洋哲学研究の深化 2019-04-01～2022-03-31 220,000円（19H01190）
- ・小口雅史 基盤研究(A) 平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境のグローバル資源化 2018-04-01～2022-03-31 150,000円（18H03597）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・小口雅史 基盤研究(B) 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究 2016-04-01～2020-03-31 1,000,000 円 (16H05669)
- ・小口雅史 基盤研究(B) 中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究 2017-04-01～2021-03-31 490,000 円 (17H02377)
- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践 2019-04-01～2024-03-31 100,000 円 (19K00530)
- ・大塚紀弘 基盤研究(B) 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究 2016-04-01～2020-03-31 20,000 円 (16H05669)
- ・竹内晶子 基盤研究(B) 能楽及び能楽研究の国際的的定位と新たな参照標準確立のための基盤研究 2016-04-01～2020-03-31 50,000 円 (16H03369)
- ・山中玲子 基盤研究(A) 伝統芸能文楽の技をヒューマンロボットインタラクション技術へ適応させるデザイン研究 2016-04-01～2021-03-31 100,000 円 (16H01804)
- ・山中玲子 基盤研究(C) 能楽の謡の客観的な分析基盤のための新しい旋律記法 2017-04-01～2020-03-31 100,000 円 (17K02295)
- ・宮本圭造 基盤研究(B) 能楽及び能楽研究の国際的的定位と新たな参照標準確立のための基盤研究 2016-04-01～2020-03-31 100,000 円 (16H03369)

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究開発センター市ヶ谷事務課作成資料および科学研究費データベース KAKEN による。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>・上記した多くの研究業績は、各所員の多様な業績の中から国際日本学構築に貢献するものを中心に選んでいる。ここに氏名があげられていない他の所員の研究業績ならびに、所員が兼務する江戸東京研究センターでの研究業績をも含めると、本研究所での相対的な研究レベルは特記できると考えている。</p>	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>・近年の海外における日本研究の衰退傾向は深刻な問題であり、国際日本学の学問のありようが問われている。一研究所の努力で解決できる問題ではないが、国際日本研究コンソーシアムに加わり、他の組織と連携しながら、対策を講じたい。本研究所としてはアルザス欧州日本学研究所での研究会を通じて、ヨーロッパにおける日本研究の現状と将来の展望について若手研究者から直接聞き取りを行ったが、引き続き若手研究者との交流につとめたい。なお、2020年度は新しい専任所員を迎えることができた。この専任所員は人文科学と社会科学をつなぐ分野をこれまで主たる研究対象としており、従来なかった研究分野での研究の可能性が期待されている。</p>	

【この基準の大学評価】

国際日本学研究所の研究活動に関しては、公開研究会、国際フォーラム、本研究所王敏研究室主催・後援の研究会が開かれた。これに共催・後援事業も含めると、質・量ともに十分で、評価できる。懸案であった海外の若手研究者の発掘や、欧州の日本学研究との連携についても実施できたことは大いに評価できる。研究成果についても、出版物、論文、学会発表の点数だけを見ても、活発な研究活動が認められ、成果の公表として十分評価でき、書評等を通じた外部からの評価も得られている。

他方、予算が確保できず、依然として第三者評価等による外部からの組織評価は得られておらず、代替措置として内部評価の充実を図っている。江戸東京研究センターと研究や成果が重複していること、江戸東京研究センターの第三者評価を参考にしていることから、それぞれの組織の位置づけを明確化する検討がなされるべきであろう。

科研費等外部資金については、研究代表者 10 件、研究分担者 11 件の科研費による外部資金を獲得しており、昨年度同様の研究活動の活発さがうかがえる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動							
1	中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、試行錯誤を経ながら、その対象分野を拡大充実させていくことを目指す。その際に、国際日本学研究所と深く関わる、国内外の他の機関との連携をも模索する。							
	年度目標	これまで研究対象として扱って地域・分野と日本との関係をさらに拡大し、国際日本学的手法で日本の姿をよりゆたかに描けるようにする。とくに海外の若手研究者との連携を深める。							
	達成指標	研究対象および連携研究者の増加。							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>S</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>昨年度から開始した「新しい国際日本学をめざして」は、今年度も3回開催することができ、通算8回実施となった。新たな可能性を確実に展開できる見通しが立った。またアルザスでの海外在住若手シンポも昨年度以上に盛会裡に終わり、「国際日本研究」コンソーシアムからその成果を評価され、次年度以降は日文研との共催が決定した。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	S	理由	昨年度から開始した「新しい国際日本学をめざして」は、今年度も3回開催することができ、通算8回実施となった。新たな可能性を確実に展開できる見通しが立った。またアルザスでの海外在住若手シンポも昨年度以上に盛会裡に終わり、「国際日本研究」コンソーシアムからその成果を評価され、次年度以降は日文研との共催が決定した。	改善策
執行部による点検・評価									
自己評価	S								
理由	昨年度から開始した「新しい国際日本学をめざして」は、今年度も3回開催することができ、通算8回実施となった。新たな可能性を確実に展開できる見通しが立った。またアルザスでの海外在住若手シンポも昨年度以上に盛会裡に終わり、「国際日本研究」コンソーシアムからその成果を評価され、次年度以降は日文研との共催が決定した。								
改善策	—								
No	評価基準	社会連携・社会貢献							
2	中期目標	社会貢献・社会連携を進めるために、研究会の一般への公開を進め、また成果とりまとめの後には、電子化を通じて簡便な方法で広く公開することを目指す。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。社会連携・社会貢献を進めるために、電子化などを通じて研究成果を広く簡便に公開できるようにするとともに、本務に影響の出ない範囲で、刊行物・所蔵史資料の閲覧を可能にする。							
	年度目標	本研究所自設HPの構成をさらに検討しなおし、情報発信をより分かりやすい形で推進するとともに、研究成果物の電子的公開を促進する。							
	達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。電子的に公開された刊行物の増加。データベースの搭載数の拡大。							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">教授会執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>上記の特別研究会に加えて、一般の研究会も数回開催し、また連携している江戸東京研究センターとの共催研究会も開催できた。常連と目される一般市民に加えて、新しいテーマを設定したことによる新規参加者も増加した。とくに日韓関係の政治的現状を意識した学術シンポでは一般市民にも文化交流の重要性を認識してもらうことができた。研究所刊行物については、法政大学学術機関リポジトリを通じて、紀要『国際日本学』16号（論文11本）・17号（論文9本）をPDFの形で全文テキスト付で公開することができた。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	教授会執行部による点検・評価		自己評価	A	理由	上記の特別研究会に加えて、一般の研究会も数回開催し、また連携している江戸東京研究センターとの共催研究会も開催できた。常連と目される一般市民に加えて、新しいテーマを設定したことによる新規参加者も増加した。とくに日韓関係の政治的現状を意識した学術シンポでは一般市民にも文化交流の重要性を認識してもらうことができた。研究所刊行物については、法政大学学術機関リポジトリを通じて、紀要『国際日本学』16号（論文11本）・17号（論文9本）をPDFの形で全文テキスト付で公開することができた。	改善策
教授会執行部による点検・評価									
自己評価	A								
理由	上記の特別研究会に加えて、一般の研究会も数回開催し、また連携している江戸東京研究センターとの共催研究会も開催できた。常連と目される一般市民に加えて、新しいテーマを設定したことによる新規参加者も増加した。とくに日韓関係の政治的現状を意識した学術シンポでは一般市民にも文化交流の重要性を認識してもらうことができた。研究所刊行物については、法政大学学術機関リポジトリを通じて、紀要『国際日本学』16号（論文11本）・17号（論文9本）をPDFの形で全文テキスト付で公開することができた。								
改善策	—								
<p>【重点目標】</p> <p>国際日本学の新しい形を模索するために、新たな対象分野の開発と海外における若手研究者の育成が必須だと考える。そのためにこれまで国際日本学研究所が対象としてこなかった地域や時代、あるいは対象物を専門的に扱っている人材を国内で確保するとともに、アルザス欧州日本学研究所を拠点に、海外での人材をさらに発掘し、新たに協力関係を深めていくことを考えている。</p> <p>またすでに兼担所員となっている研究者についても、これまでと違った切り口で国際日本学研究所に取り組んでいくことが可能であるか引き続き検討してもらうことにする。</p>									
<p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>年度末報告にも記したように、今年度も新規研究会を繰り返し開催したことによって、研究対象を大幅に拡充することができた。また国内外において人材の発掘にも成功した。例えばアルザスの欧州国際日本学研究所での若手シンポジウムでは、欧州内各地からこれまで研究所とは接点を持っていなかった人材をさらに追加して見出すことができ、国内でも、法政大学内外で同様に新しい人材を発掘することができ、研究所の客員所員、兼担所員としてお迎えすることができた。</p> <p>研究分野においても、これまで扱ってこなかった現代史や中古文学の成果にも踏み込み、新しい研究視点を獲得することができ、外国人による日本古代文化の新視角の可能性も切り開かれた。</p>									

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

さらには長期にわたって継続している在欧日本仏教美術データベースの調査過程においても新しい素材の発掘が続けられている。引き続き、こうした分野での国際交流拡大に取り組んでいきたい。

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

国際日本学研究所の2019年度の年度目標は、若手研究者との連携という点では十分に達成されている。海外での人材発掘と若手の育成は、日本研究にとっては不可欠である。ただし、国際日本学であるためには、個々の研究者の成果を上げるだけでは必ずしも十分とは言えず、背景の異なる複数の研究者による国際共同プロジェクトを行う必要がある。史学一つをとっても、日中韓の研究成果には大きな隔たりが存在する。新たな国際日本学の構築に向けて、さらなる検討が望まれる。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、試行錯誤を経ながら、その対象分野を拡大充実させていくことを目指す。その際に、国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をも模索する。
	年度目標	これまで研究対象として扱ってこなかった地域と日本との関係の調査研究をすすめるとともに、社会科学的な視点も加味した新たな研究分野を開拓することを目標とする。
	達成指標	研究対象および連携研究者の増加
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	社会貢献・社会連携を進めるために、研究会の一般への公開を進め、また成果とりまとめの後には、電子化を通じて簡便な方法で広く公開することを目指す。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。 社会連携・社会貢献を進めるために、電子化などを通じて研究成果を広く簡便に公開できるようにするとともに、本務に影響の出ない範囲で、刊行物・所蔵史資料の閲覧を可能にする。
	年度目標	本研究所自設HPを充実をはかるとともに、オープン予定のHOSEIミュージアムに協力し、よりわかりやすい形で情報発信を行う。
	達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。電子的に公開された刊行物の増加。データベースの搭載数の拡大。

【重点目標】

これまで研究対象として扱ってこなかった地域と日本との関係の調査研究ならびに社会科学的な視点も加味した新たな研究分野を開拓することを目標とする。

【目標を達成するための施策等】

新たな人材を研究所に迎え、研究活動を促進する。アルザス欧州日本学研究所を拠点に海外での人材をさらに発掘し、国内の研究機関とも組んで協力関係を深める。

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

2020年度の目標については、これまで扱ってこなかった地域を研究対象にすることに加え、新たな研究分野の創出も掲げている。昨年度と同様に、引き続き海外での人材発掘にも力を入れるとある。しかし、アルザス・欧州日本学研究所と国内の研究機関の協力関係については2020年度目標に具体的な記述はないため、年度末報告にて記載が望まれる。また、個々の研究促進を図るだけでなく、新たな国際日本学のため、国際的な共同研究も検討することを期待したい。

【大学評価総評】

国際日本学研究所においては、活発な研究活動が行われている。公開研究会、国際フォーラム、研究会を複数回開催し、出版物、学会発表等の研究成果についても、量・質ともに十分評価できる。研究成果に対する社会的評価もあり、科研費等外部資金の応募・獲得状況もめざましい。但し、江戸東京研究センターと研究や成果が重複していることから、それぞれの組織の位置づけの検討が望まれる。

海外の人材発掘を積極的に行い、国際日本学研究を支援する努力も評価できる。今後は、研究者の人材発掘と並行して、国際的な共同研究実施に向けた検討や、年度目標・達成指標の明確化にも期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

地域研究センター

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

地域研究センターは、複数の自治体と協同し、研究・教育活動を積極的に実施、委託研究費など多くの外部資金の獲得しており、その活動は高く評価できる。また、紀要をはじめ、対外的に広く研究成果を発表している点で評価できる。

内部質保証として、6月および秋に開催するシンポジウムにおいて行う予定の満足度アンケート調査の着実な実施を期待したい。資金不足という問題はありますが、外部からの評価を高めるとともに広報体制の構築にも着手し、地域研究センターのさらなる認知度向上に努めていただきたい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

内部保障に関しては、第三者外部委員会を立ち上げるべきだと考えているが、資金不足等により実現には至っていない。今後は、シンポジウムにおける満足度アンケートのみならず、受託研究を行った地方自治体による評価や満足度調査を行っていききたい。

広報に関しては、昨年度に研究所独自のHPを作成した。今後このHPを利用し積極的に地域研究センターの広報活動を推進していきたい。特に活動成果を情報発信していくことによって、今後の受託研究や研究資金獲得に結び付け、また同時に「紀要」や「ワーキングペーパー」など研究員の研究成果も発表していきたい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

地域研究センターが2019年度に開設した研究所独自のウェブページは評価できる。

あえて贅沢な希望を言うならば、

「地域研究センターについて」>「まちおこし・まちづくり事業」および

「地域研究センターについて」>「受託事業」といった箇所、

具体的な事例が並べられていると、まちおこし・まちづくり支援依頼や事業の受託が増え、それがまた具体的な事例のリストの事業を成長させ、また支援依頼や受託の増加につながる……という好循環が期待できるものと思われる。それがまた、資金不足の解消にもつながり、内部質保証に関する第三者外部委員会の設置にもつながっていくものと期待される。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

1. (受託研究) SI-CAT 事業_文部科学省「気候変動適応技術社会実装プログラムにおける社会実装の着実な推進」【研究プロジェクト・リーダー】: 田中充

国立研究開発法人科学技術振興機構(以下「JST」)からの委託契約に基づき、法政大学において「気候変動適応技術社会実装プログラムにおける社会実装の着実な推進」(略称SI-CAT)の業務の一部を実施した。

2019年度の具体的な業務実施内容として、JSTが文部科学省との間で締結した平成31年4月1日付委託契約書(業務題目「気候変動適応技術社会実装プログラムにおける社会実装の着実な推進」)に基づく業務のうち、本学では、気候変動影響および適応策に関する地方自治体のニーズの収集と分析(地方自治体適応策アンケート調査等の実施)、ニーズ分析結果等に基づく地方自治体における社会経済シナリオの作成、本プログラムで得られた成果の導入支援及び普及として「適応自治体フォーラム」等を実施し、研究成果を得た。

2. 地域の消費者政策関連の人材育成プラットフォームとの連携事業

【研究プロジェクト・リーダー】樋口一清

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- ・2019年6月24日、消費者庁、環境省の協力の下、地域の消費者政策、環境政策に関連した人材育成を推進するため、信州大学、広島大学、香川大学、長岡技術科学大学の4大学が連携して「サステイナブル経営研究推進機構」を設立（同機構運営委員長は、地域研究センター樋口一清プロジェクト・リーダー）した。
- ・地域研究センターにおいても、地域のサステイナブルな人材育成の観点から、上記プロジェクトと積極的に連携し、地方大学の共同事業に、適宜参画していく予定。当面、以下の事業の具体化を検討中。
- ・地方大学間の推進体制の整備。
- ・オンディマンド教材等の教育コンテンツの開発、実証。
- ・遠隔教育、単位互換制度の実施。

なお、上記事業に関連して、2020～2022年度、科研費基盤研究B「消費者政策における高度専門人材育成プログラムの開発に関する実証研究」を申請中（法政大学など6大学及び1研究機関が参加した共同研究、約1,966万円）。

3. (寄付研究) シェアリングエコノミーを活用した高齢者と地域をつなぐ社会参加プログラム

【研究プロジェクト・リーダー】 樋口一清

本研究では、つくば市在住の認知症高齢者等を対象として、①多世代交流プログラムの実践や②新たなコミュニティケアの構築に関連した実証研究を行っている。2019年度の事業概要は以下の通り。

- ・食を通じた地域の子供たちとの交流の場作り。
- ・アート、ICTを活用した社会参加プログラムのマニュアル化、継続的な活動体制の整備。

4. (受託事業) (日本商工会議所) 2019年度地域力活用新事業創出支援事業「事業評価事業」 岡本義行

2006年以来、日本商工会議所が全国515の商工会議所を通して募集してきた地域振興事業のうち、「地域力活用新事業∞全国展開プロジェクト」(中小企業庁補助事業) 役1千件について、全国商工会議所に対するアンケート調査をもとに、事業評価を実施する研究である。回収されたアンケートのデータを統計的に分析処理して、事業評価をするというものである。

前年度まで大手シンクタンクに依頼していた成果が乏しいということで、データの多変量解析を用いて分析し、多面的な事業評価をして欲しいと言うことで、現在分析および報告書作成に取り組み2020年3月13日までに報告書を提出した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

②対外的に発表した研究成果(出版物、学会発表等)

※2019年度に研究所(センター)として刊行した出版物(発刊日、タイトル、著者、内容等)や実施した学会発表等(学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等)の詳細を記入。

1. 紀要『地域イノベーション 2019 vol.12』2020年3月31日発行。
2. 岡本 義行・山本 祐子・その他(2019)「中山間地域の観光地域づくり：自然体験型観光の可能性」『地域活性学会研究大会論文集 11』
3. 岡本義行(2019) 巻頭言「地域の発展」、『商工金融』、2019年11月号、商工総合研究所
4. 岡本義行(2020)「第8章 地域社会と産業集積」、『地域創生への招待』、大正大学
5. 岡本義行(2020)「新刊紹介：シルクとイタリアン・ファッションの経済史」、『日伊文化研究』、第58号
6. Atsunori Matsumoto (2019) The evolution of industrial district of Prato in Italy
 -Whether foreign companies are the resources of regional innovation-,
 Unlocking the Potential of Regions Through Entrepreneurship and Innovation
 Irene Bernhard (ed.), University West, Sweden, pp.297-307.
7. 吉川智教、今瀬政司、松本敦則、鶴飼宏成(2019)「Kinds of Regional Resources that Contribute Innovation and Creation of New Industries」『地域活性学会研究大会論文集 11』
8. 岩永 洋平(2019)「長崎の観光レポートと関係人口の形成のために -レポート循環モデルによる検証」『地域活性学会研究大会論文集 11』

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

③研究成果に対する社会的評価(書評・論文等)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して 2019 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2019 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019 年度の web サイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。
特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。
外部評価を受けることは課題として認識しているが、体制やコストなど根本的に解決しなくてはならない問題がある。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019 年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び 2019 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

1.（受託研究）SI-CAT 事業_文部科学省「気候変動適応技術社会実装プログラムにおける社会実装の着実な推進」【研究プロジェクト・リーダー】：田中充

JST からの委託契約金額（2019 年度）：3,360 万 8,757 円

2.（寄付研究）シェアリングエコノミーを活用した高齢者と地域をつなぐ社会参加プログラム

【研究プロジェクト・リーダー】樋口一清

寄付研究として

獲得者名：樋口一清

獲得源：一般財団法人冠婚葬祭文化振興財団社会貢献基金助成（競争的資金）

獲得金額：150 万円

3.（受託事業）（日本商工会議所）2019 年度地域力活用新事業創出支援事業「事業評価事業」

岡本義行

日本商工会議所地域振興部受託研究：「地域力活用新事業∞全国展開プロジェクト」

（中小企業庁補助事業）事業評価事業

契約金額：298 万 1,000 円

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>・当研究センターの長所・特色としては、これまでに 20 もの地方自治体、公的金融機関、公的産業財団などと協定を締結している。地域的にも北海道（伊達市・室蘭市）から鹿児島県（薩摩川内市）に及んでおり全国的に活動している。</p> <p>当センターのみならず、法政大学の社会的評価を高めていると考える。</p> <p>今後は新規自治体等との協定の締結を獲得するとともに、これまで既に協定を結んでいる自治体等に改めて担当者を配置し、深い関係を構築し新規の外部資金の獲得を目指していきたい。</p>	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>・当センターは移行期にある。人的、資金的なリソースも不足しているが、今年度は早く体制を確立していきたい。</p>	

【この基準の大学評価】

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

地域研究センターは、受託研究、連携事業、寄付研究、受託事業などの様々な研究活動を行い、研究成果を出している点は、高く評価できる。しかし、それぞれの研究または事業が、「対外的に発表した研究成果」のどれと対応しているのかが見えにくく、それが、個々の研究または事業の正確な評価を難しくしている点については改善が望まれる。また、国立研究開発法人科学技術振興機構からの受託研究については、国内外のジャーナル・学会等への研究成果を発表し、関係学会において論文賞、学術賞、奨励賞を受賞するなど、研究業績面、政策面、社会貢献面のいずれにおいても多大な業績を残しているため、自己点検・評価シートや添付資料を通じて、具体的な記述が望まれる。

2020年4月に新たなセンター長が就任し新センター長の元、外部資金の獲得を増やすことが目標とされ、「プロジェクト研究の活性化・体制強化」が図られている。今後の成果が期待される。

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的	
	中期目標	従来の理念・目標を変えない。	
	年度目標	新しい地域研究センター体制の確立に向けた取り組み。	
	達成指標	外部資金の獲得と研究員の活動向上。	
	1	年度末報告	執行部による点検・評価
自己評価			A
理由			2020年度から新しい体制の確立をするべく取り組みを行った。具体的には、センター長の若返りを行うこと、研究員をプロジェクトごとに配置し外部資金獲得のための研究体制を整えたことなどを行った。
改善策			—
No	評価基準	内部質保証	
	中期目標	シンポジウム等でアンケート調査を行う。	
	年度目標	6月および秋に予定しているシンポジウムでのアンケート調査。	
	達成指標	150名程度のアンケート調査の結果を取り纏める。	
	2	年度末報告	執行部による点検・評価
自己評価			B
理由			SI-CAT（文部科学省）プロジェクトにおいて、「適応自治体フォーラム」と「西日本豪雨気候変動適応シンポジウム」を開催したが、アンケート調査は行えなかった。
改善策			シンポジウムでの体制強化と研究員間の意思疎通を図り、アンケート等での内部質保証の目標を達成していきたい。
No	評価基準	研究活動	
	中期目標	研究成果の発表の手段である紀要の定期発行、主催するシンポジウム及びセミナーの報告書を取り纏める。尚、公表は費用を抑えた電子的公表を検討する。	
	年度目標	今年度予定しているシンポジウムなどの報告書、および受託事業などの報告書の発刊。	
	達成指標	年度末に発刊予定の紀要『地域バージョン』に本年度の事業成果を掲載する。	
	3	年度末報告	執行部による点検・評価
自己評価			A
理由			紀要『地域イノベーション2019vol.12』を発行した。ここに、2本の研究員の論文を掲載している。また、受託研究の報告書の作成を行った。
改善策			2020年に入ってから、センターの新しいHPを作成した。2020年度より、本格的に運用を開始するが、研究成果を電子的公表をできる体制を整えたので、これまで以上に研究活動を推進していきたい。
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
	中期目標	自治体等とのネットワークをさらに拡充する。	
	年度目標	少なくとも1自治体等と新たに連携する	
	達成指標	本学との協定ばかりでなく事業協力も含めて2つ以上実現する。	
	年度末	教授会執行部による点検・評価	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	報告	自己評価	A
		理由	「日本商工会議所の受託研究」と「冠婚葬祭文化振興財団社会貢献基金からの寄付研究」の2つの事業協力を実現した。
		改善策	2020年度からは、各自治体の協定ごとに地域研究センター側の担当者の割り振りを行うなどの体制を更に整え、社会貢献・社会連携を推進していきたい。
<p>【重点目標】 自治体との連携や提携は自治体の政治状況に影響を受けることが少なくない。それは地域の政治そのものであり、民度の反映でもある。そうした観点を踏まえた地域研究を実施したい。</p>			
<p>【年度目標達成状況総括】 2019年度の活動目標の達成は現時点ではほぼ十分であると考えている。地域活性化が叫ばれる中、地域研究センターの役割は大きく、地域の自治体からの要望も増えている。しかしながら、課題も多い。地域研究センターの内部環境に関しては、研究費やシンポジウムなど日常的な活動費がほとんど無く、新たにネットワークを構築するため地域に訪問する出張費すらないのが現状である。外部環境に関してはどの地方自治体も予算がなく、なかなか地域活性化のための資金が拠出できない状況である。これらの環境の変化を踏まえ、地域研究センターも柔軟に活動していきたいと考えている。2020年への新たな体制に向けて、今年度はそのための布石が打てたのではないかと考えている。</p>			

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

<p>地域研究センターの2019年度末報告について、「理念・目的」の達成指標では「外部資金の獲得と研究員の活動向上」が挙げられているが、2019年度の実績がどうであったかの記載がない。「理由」の欄に記述されている研究体制の強化策については、「改善策」に書くべき内容と思われるので、今後は留意願いたい。</p> <p>「内部質保証」での「中期目標」、「年度目標」がともにアンケート調査の実施であったが、各プロジェクトの管理体制の問題により実施できなかったようである。今後の改善につなげていただきたい。</p> <p>「社会貢献・社会連携」での年度目標が「少なくとも1自治体等」なのに、達成指標が「事業協力も含めて2つ以上実現」となっている。年度目標と達成指標が意味するところが同じなのか異なっているのか、記述に工夫が必要であったように思う。ただいずれにしても掲げた目標ないし指標に照らせば、A評価でなくS評価と言っても良いのではないかと。質問事項の回答内容を確認すると、研究成果は十分に評価できるものである。新たに就任したセンター長のもとで、いっそうの研究成果が期待される。</p>
--

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	従来の理念・目標を変えない。
	年度目標	地域研究センターの新体制確立
	達成指標	外部資金の獲得、研究体制の構築
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	内部品質保証の体制を確立する。
	年度目標	資金不足等により第三者評価は行えないが、それに代わる、他の方法で内部質保証を図る。
	達成指標	シンポジウムにおける満足度アンケートや、受託研究を行った地方自治体による評価や満足度調査を行う。
No	評価基準	研究活動
3	中期目標	研究成果の発表の手段である紀要の定期発行、主催するシンポジウム及びセミナーの報告書を取り纏める。尚、公表は費用を抑えた電子的公表を検討する。
	年度目標	紀要『地域イノベーション 2020 vol.13』の発行、ワーキングペーパーの発行、シンポジウム等の報告書の作成を着実に進行。
	達成指標	『地域イノベーション』は単に発行するだけではなく、論文は広く外部から公募し、水準の維持・向上に努める。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	自治体等とのネットワークをさらに拡充する。
	年度目標	新規自治体等との連携を増やすとともに、これまで既に協定を結んでいる自治体等に改め

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	て、深い関係を構築していく。
達成指標	本学との協定ばかりではなく事業協力を含めて2つ以上実施する。

【重点目標】

1. 研究体制の確立、2. 外部資金の獲得、3. 地方自治体との連携強化、4. 地域研究センターの社会的評価の向上を目指す。

【目標を達成するための施策等】

プロジェクト研究の活性化・体制強化を行う。各プロジェクト事に担当リーダーを決め、研究員をその傘下に置くという施策を新たに実行する。その中で研究論文、ワーキングペーパーの作成、外部資金獲得の営業、広報などを行う。

【2020 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

地域研究センターの年度目標は、中期目標を達成するための1ステップのはずだが、「理念・目的」についての中期目標が「従来の理念・目標を変えない」というなら、掲げられた年度目標「地域研究センターの新体制確立」は、その中期目標に矛盾するように見える。「従来の理念・目標を達成するための新体制の確立」ということであるならば、その旨記載すべきである。また、「達成指標」の「外部資金の獲得」については、件数なり金額なりを数値目標として掲げることが望ましい。

また、「達成指標」は、目標が達成できたとみなせるかどうかを判断するための物差しではなく、「こういう風にしたい」ということではないので、「研究活動」の達成指標の箇所に記入されているものは、達成指標ではなく、「年度目標（の一部）」として記述されたほうが良いと思われる。「達成指標」は、『地域イノベーション』が公募論文を含む形で発行できている」などで良いのではないだろうか。

【大学評価総評】

地域研究センターは、複数の自治体と協同したり、外部からの委託研究を受託するなど、学外の社会の様々なセクターとつながった研究活動・事業を積極的に行っており、大変魅力的な研究センターとなっている。また、紀要の出版などとどまらず、ウェブ・ページでの情報発信を積極的に行い始めたことも、高く評価できる。地域の課題の解決という面で本学がより一層、社会に貢献するために、今後より一層、研究活動および広報を充実させていくことを期待する。

各プロジェクトの管理体制の問題により、シンポジウム等でのアンケート調査が行なえなかった件については、新センター長のもとで、今年度こそアンケート調査を確実に実施していただきたい。また、「プロジェクト研究の活性化・体制強化」を図ることにより、外部資金の獲得を増やすことが目標とされているが、今後の成果に期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

マイクロ・ナノテクノロジー研究センター

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターは、設立以来、研究が積極的に推進されてきた。これまでの予定とは別の競争的大型資金を獲得しなければならないという慌しい状況の中で、2018年度から新たな学内プロジェクトの研究が進められたことは評価できる。更に、対外的なセミナーが開催され、研究成果が数多くの論文や学会等において発表されたことは、高く評価できる。同時に、招待講演・論文の引用という形で、センターでの研究が社会的評価を受けていることも忘れてはならず、こちらも高く評価できる。センターにおける更なる研究の推進が期待される。今後の課題としては、中期目標に掲げられている社会連携・社会貢献に対する取り組みが挙げられる。研究者や産学連携活動に対する取り組みは既に行われているが、一般の方を対象とした取り組みは、セミナーの回数や参加者数等から判断すると、まだ低調であると言わざるをえない。段階を踏んで中期目標が達成できるような効果的な年度目標と、その達成指標を設定する必要があるであろう。今後の学内外に向けた活動展開に期待したい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

学内プロジェクトとして、「グリーンソサエティーを実現する 3D 先端材料プロセス」の研究を進めた。競争的大型資金の獲得をめざし、科研費、NEDO 事業等比較的大型の外部資金への応募申請を積極的に行った。文科省の私立大学助成の大型研究資金に関しては、プログラムの募集が途切れた。センターとしてのポストドクターの雇用ができなかったにもかかわらず、出版物掲載論文は少し増加し、研究が活発に行われたことを示した。社会連携・社会貢献に対する取り組みのため、第1回法政科学技術フォーラムに、当センターおよびセンター構成員の講演・出展を行った(計8件)。また、「エコプロ2018」等、学外展示会に出展した(計3件)。本研究センターの公開セミナーであるグリーンソサエティーセミナーの学外への開催通知は、従来 HP にセミナーの案内を掲載していたが、さらに外部機関に開催メールを送り参加者の増加に努めた。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

2019年度のマイクロ・ナノテクノロジー研究センターについての大学評価結果の総評では、「研究者や産学連携活動に対する取り組みは既に十分行われているが、社会連携・社会貢献に対する取り組みが不十分であり、効果的な年度目標と適切なマイルストーンを設定する必要がある」との指摘があった。これに対し、社会連携・社会貢献に対する取り組みのために、法政科学技術フォーラムで8件の講演・出展、3件の学外展示会に出展したことを特に高く評価する。また、貴研究センターの公開セミナーであるグリーンソサエティーセミナーの学外への開催通知は、HPでの広報に加えて外部機関に開催メールを送り参加者の増加に努めたことも評価する。学内プロジェクトとして、「グリーンソサエティーを実現する 3D先端材料プロセス」の研究を遂行したことや、競争的大型資金の獲得をめざし、科研費、NEDO 事業等比較的大型の外部資金への応募申請を積極的に行ったことも評価に値する。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

・研究プロジェクトの遂行

2018年度から学内プロジェクトとして開始した、「グリーンソサエティーを実現する 3D 先端材料プロセス」を、「A: Additive Manufacturing」、「B: Biologically mediated (inspired) Control」、「C: Chemically mediated Control」という3つの基本テーマのもと進めた。テーマごとの研究成果は以下の通りである。

A: Additive Manufacturing

・マルチマテリアル 3D プリンティングによる高機能スマート機械部品の実現: 近年、3D プリンタの基本特許切れにより、

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

世界中で 3D プリンタの試作開発が進んでいる。最も汎用的な FDM 方式による 3D プリンタは、固体の樹脂（フィラメント）を供給し、ノズルで熱溶解させて吐出し、積層造形する原理であるが、異種材料への適用も検討されている。本研究では、セメント系材料を用いた ME (Material Extrusion) 方式小型 3D プリンタ開発の一環として、最適な造形パラメータの検討と評価を行った。本研究で試作した 3D プリンタを用いて、ノズル送り速度と積層ピッチの関係を材料が過不足なく供給される条件の下で定義した。ここでは、積層ピッチをノズル径よりも小さくするオーバーラップ積層を基本として、材料が潰れることによって積層面が平滑になり、積層性が格段に向上することを目指している。なお本研究により得られた知見は、受託研究先との特許出願を 1 件行っている。また、近年、輸送手段の高速化が一段と進み、それに伴う騒音増大の懸念があり、従来の防音壁による遮音に加えて、道路面や軌道表面の吸音性能を向上させる必要があるが、一般にこれらはアスファルトやコンクリート構造であり、多孔性材料による吸音性能が与えられるが、低周波数域の騒音防止にはさらなる工夫が必要と考えられる。ここでは連結した 3D 構造ヘルムホルツ共鳴器を利用したセメント系材料の消音ブロックを開発するための基礎実験として、インピーダンスチューブを自作して供試体の音響特性を評価した。その結果、共鳴構造の配列を変化することで共鳴周波数を変化させることが可能であることを確認した。

- 高度積層造形技術を実現する超高精度デジタル直接制御技術の開発**：高度積層造形技術を実現するには、積層物を生成する機械部分に加え、これを駆動する電気系の高精度化が不可欠である。従来のアナログ方式に代えてデジタル信号で直接アクチュエータを駆動することにより、電気系および機械系の製造ばらつき等に起因する誤差要因の影響を低減することができれば、全体システムの精度を高めることが可能となる。本研究はデジタル信号で直接アクチュエータを駆動し、高精度積層造形を実現する方法の開発を目的とする。本年度は、高精度な加工に必要なモータの制振動化に関わる研究を進めた。モータには、トルクの変動によるトルクリップルに加え、回転軸に対する重量のアンバランスにより発生する振動が問題となる。従来は、このアンバランスの影響を低減するためには、カウンターウェイトを用いる方法が広く使われている。しかし、この方法は、アンバランス量が変化した場合などに対応できない。電気的にアンバランスによる振動を低減できれば、非常に有効な低振動化の手法となる。本年度は、軸方向に力を発生させるメカニズムを考案し、その精度向上方法を検討した。その他、ドライブ回路の制消費電力か、フェイルセーフ化、低 EMI 化の研究を進めた。
- 製品製造に適した革新的な多次元制御方式による積層造形技術の開発**：モノづくりの革新技術として AM (Additive Manufacturing: 付加製造) 技術が注目されている。AM 技術のひとつである 3D プリンティングは、レイヤーごとに材料を積み重ねて立体物にする積層造形工法である。中でも、材料噴射型 (material jetting) は、フルカラー化が容易であること、高精度な造形が可能であること、多様な材料が扱えることなどの特徴があり、技術の発展と用途の拡大が期待されている。しかし従来の積層法による立体の造形は、モデル材の他に形状を保持するサポート材が必要であり、積層造形後にこのサポート材の除去が必要となり、この作業に多くの時間を要する。本研究では、インクジェット 3D プリンティングによりサポート材を用いずに、高いアスペクト比の微細な円柱の形成のため、積層工程の検討を行った。またインクジェットヘッドを固定したままでパラレルリンクメカニズムを用いて造形ステージを可動にする新しい積層造形方式について検討した。造形ステージ可動用パラレルリンクメカニズムを設計試作し、2018 年度の課題を解決するための改良を施した新しい回転運動形パラレルメカニズムを試作し、その動作精度の検討を行った。
- 3D 先端材料プロセスを活用したターボ機械の新たな高性能化技術の開発**：3D 積層造形技術の各種ターボ形流体機械の製造分野への導入が拡大している。また、災害時の非常用電源としても利用可能なマイクロガスタービンのタービン側には薄翼のラジアル型の羽根車が一般的に搭載されている。そのため、空気冷却などの冷却技術の適用により実現可能な、タービン入口温度の高温化による高効率化は困難な状況にある。本研究は低流量係数域で高負荷性能を有すると共に、3D 積層造形技術により製作可能な厚翼中空冷却構造の超高負荷軸流タービン翼の開発を目的としている。今年度は負圧面側の翼面形状の異なる 2 種類の超高負荷軸流タービン円環翼列を対象に、小型円環翼列風洞試験装置を用いて実験を行い、負圧面形状が段効率などの空気力学的性能に及ぼす影響を明らかにした。また、実機での広範囲の運転条件を考慮して、入射角が遷音速条件下での超高負荷軸流タービン翼列の形状損失に及ぼす影響を数値解析の手法により解明した。さらに、タービン翼列の出口マッハ数が、馬蹄形渦や流路渦などの二次流れに起因する二次損失の生成に及ぼす影響について、数値解析の手法により調査を開始した。
- 付加積層技術を用いた 3D 複雑形状を有する多機能セラミックス系傾斜機能構造体の作製**：放電プラズマ焼結法 (Spark Plasma Sintering, SPS) は、成形型に機械的圧力とパルス電圧を加えることより焼結する方法であり、熱的および機械的エネルギーに加え、電磁的エネルギー、被加工物の自己発熱、粒子間に発生する放電プラズマエネルギーなどを複合的に焼結の駆動力として用いる。セラミックスをはじめ高融点材料、超耐熱合金の焼結、また、これらの複合材料、傾斜機能材料 (FGMs) の作製、さらには異種材料接合等にも威力を発揮する。本研究では、この SPS 技術を付加積層 3D プリンタに応用することを考えており、その基礎研究として、可燃かつ難冷間加工性を有するマグネシウム (Mg) を母相とした

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

高性能複合材料の作製を試みた。優れた力学的・機能的特性を有するカーボンナノチューブ (CNT) を分散相とした。CNT の分散性を向上させるために、ジメチルアセトアミドに炭酸カリウム (分散剤) を添加した有機溶媒を用い、さらにこの CNT の分散性を維持するために ZrO_2 ナノ粒子を添加した。作製した CNT・ ZrO_2 強化 Mg 基複合材料に関して、電子顕微鏡を使ったマイクロ組織観察、元素分析さらに機械的特性評価 (硬さ、3 点曲げ試験等) を行い、Mg に比べて、遥かに優れた性質を有する材料であることを確認した。

B: Biologically mediated (inspired) Control

- 心筋細胞ネットワークによる心臓 3D 構造の再構成**: 研究概要: 心臓は血液を体中の臓器に送り出すことができる重要な器官であり、心筋細胞や線維芽細胞等が規則正しく整列した三次元 (3D) 構造をしている。この心臓の 3D 構造を再構成するためには、心臓組織の特性を知り、心筋細胞や線維芽細胞をネットワーク状に配置することが必要である。そこで、我々が開発した微細加工技術であるアガロースマイクロチャンバ (AMC) を多電極電位計測 (MEA) システム上に形成し、ネットワーク状に配置した心筋細胞の細胞外電位を計測し、心臓と同等の電位変化を示す細胞ネットワークの構築を目指している。本年度は心臓組織や心筋細胞に対する薬剤や温度、電気、物理刺激に対する応答反応を細胞外電位計測した。その結果、心臓組織の大きさと薬剤の応答性には相関が無いことが示唆された。さらに、温度変化に対する心筋細胞の拍動周期変化に特異点があることを見出し、不整脈と温度に関する新たな知見を得た。最後に、MEA 上に作製した AMC を用いて、異なる幅の直線状心筋細胞ネットワークを作製し、細胞外電位伝播速度を測定することにより、直線の幅が狭くなるほど細胞外電位伝播速度が速くなることを見出し、1 細胞レベルでの心筋細胞ネットワークにより実際の心臓内の活動電位伝播を再現することが可能になることが分かった。したがって、将来的に 1 細胞レベルで細胞配置が可能になれば心臓に匹敵する 3D 構造の構築が可能であるとの知見を得た。
- 細菌胞子の積層構造の解析と応用**: 枯草菌胞子糖タンパク質候補として昨年度報告した CgeA (133 aa) の詳細な deletion 解析と糖鎖結合部位のアミノ酸残基の改変を行った。まず、CgeA の N 末端側から段階的に欠かさせた CgeA-GFP を用いて、胞子への局在を調べた結果、N 末端側から少なくとも 60 アミノ酸が胞子表層への局在に必要であることが明らかになった。一方、C 末端側からの deletion では、5 アミノ酸の欠失により、不安定な糖鎖形成が観察された。さらに、Thr112 を Ala 置換で糖鎖形成が消失することが確認されたため、この部位のアミノ酸を Ser, Glu, Asn に改変したところ、Glu, Asn への改変は糖鎖ができなかったが、Ser においては形成された。これは、Ser の -OH 基に糖鎖が付加されたことを示唆し、Thr112 が糖鎖付加の標的アミノ酸残基であることが示された。また、*cgeA* に隣接する *cgeB* はグリコシルトランスフェラーゼをコードしており、CgeB が CgeA に糖鎖を付加する役割を持つ可能性が考えられた。本研究により胞子積層構造における、タンパク質層と糖鎖との結合様式が明らかとなった。
- 生物ナノマシン設計原理の理解と新機能付加**: 生物ナノマシンであるべん毛モーターは、モーター駆動部、軸受、スクリュー、スクリューとモーターを連結するユニバーサルジョイントから構成される。それぞれの部品は、数十種類におよぶ大きさ数ナノメートルのタンパク質素子が自己組織化することで構築される。このボトムアップ型構築の理解は、ナノ材料を積層して構造制御する次世代テクノロジー基盤技術の創出につながると期待できる。本研究では、べん毛モーター分子構築原理の解明するために、モーター駆動部の基盤構造に緑色蛍光タンパク質 (GFP) を融合させ、その蛍光輝度を解析することでモーター重合過程の解析を進めた。昨年度までは全反射照明蛍光顕微鏡を用いて分子計数に焦点を当てた研究を行ってきたが、本年度はモーター回転計測と蛍光計測を同時に実現するための手法の開発を行った。回転計測にはビーズアッセイを用いたが、計測系の特性上、全反射照明による観察は実現できないため、落射照明と全反射照明を組み合わせる新規計測で高 SN 比を達成した。また、モーター回転機能を操作する方法として光駆動型ポンプを用いて、細胞システムとしての新機能付加を目指して研究をおこなった。
- 光合成装置の安定化の研究**: 天然の光合成装置を産業的に利用するためには、光合成生物の光合成装置を安定化する必要がある。特に、水を酸化分解して酸素を発生する光化学系 II と呼ばれる光合成装置は不安定化しやすい。この安定化には、装置を構成する蛋白質や電子伝達担体の結合界面に存在する脂質が関わっていると考えられている。本年度は脂質の 1 つホスファチジルグリセロール (PG714) の配位に関係する反応中心蛋白質のアミノ酸残基を配位できない残基に置換した変異株を用いた解析により、PG714 は光捕集や反応中心還元側の電子伝達、水の酸化触媒 Mn クラスターの安定化に寄与する表在性蛋白質の安定化など、多面的な役割をもっていることを明らかにした。また、シアノバクテリアを中程度の乾燥ストレスを模した高張ストレスに曝すと、細胞が高張ストレス適応能を獲得することを明らかにした。現在、高張ストレス処理した細胞から光化学系 II 標品を単離し、ストレス処理前後の特性変化を解析しようとしている。さらに、単独では光合成を駆動しない光である遠赤色光が、光の強さを頻繁に変化させた変動光環境下では、光合成の効率を上昇させる役割をもつことを明らかにした。
- 細菌由来の人工機能を付加した新規加工材料の開発**: 包括的に理解された生物機能であるバイオプロセスは、産業上の低環境負荷・省エネルギー・低コストのメリットから様々な分野で活用されている。レアメタルであるパラジウムは、

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

その需要の 40%が燃焼系自動車の排気ガス触媒として利用され、EV や電気自動車の普及によって、近い将来に大量の排気ガス触媒パラジウム含有廃棄物が生じることが想定されている。すなわち、排気ガス触媒廃棄物からパラジウムを分離・再利用することは緊近の課題である。パラジウムに対する細菌メタルバイオロジーの分析を通して、細菌由来のパラジウム資源化を目指した。元来生体で利用されないとされてきたパラジウムを、大腸菌細胞で $0.1 \mu\text{M}$ 存在させることに成功し、その機能に關与する金属輸送システムの知見を得た。実際に、この金属取り込み輸送システム遺伝子機能を破壊した大腸菌株では、基準株と比較して細胞内パラジウム濃度が増加することが確認できた。

- ・高機能生物設計—人工内耳・神経補綴装置：本研究では、人工内耳や神経補綴装置などへの応用を目指した生物模倣ハードウェアの設計、解析、実装、検証などに取り組む。哺乳類の内耳において主に音声信号処理を担っているのは蝸牛である。哺乳類の蝸牛は、非線形粘性流体であるリンパ液、非線形性を有する基底膜、非線形動力学を有する内・外有毛細胞、非線形動力学を有する螺旋神経節細胞などの非線形性が強い構成要素が複雑な境界条件で相互作用している非線形複雑システムである。本研究では、非線形力学系理論や複雑系理論を駆使して蝸牛の集積回路モデルを設計することにより、従来モデルに比べて少数のトランジスタで実装でき、かつ低消費電力な人工蝸牛回路を設計する。一方、脳は神経細胞の結合系で構成されており、神経細胞はその部位や種類に依存して様々な非線形動力学を持つ。本研究では、非線形力学系理論や複雑系理論を駆使して神経細胞ネットワークの集積回路モデルを設計することにより、従来モデルに比べて少数のトランジスタで実装でき、かつ低消費電力なニューラルネットワーク回路を設計する。2019 年度は特に蝸牛及び神経細胞の非線形動力学の効率的な集積回路化手法の開発に取り組んだ。
- ・ナノ構造を制御した無機イオン交換体を用いた新規土壌浸透浄化システムの開発：無機イオン交換体である粘土鉱物やゼオライトはその層間や細孔を利用した様々な有害物質の吸着能を有する。本研究では、これらの特性を応用した新規汚水浄化システム（土壌浸透浄化法）の開発に関する検討を行っている。本年度は、湖沼等の富栄養化の主因である窒素（アンモニウムイオン）とリン酸イオンの除去を目的に、含水アルミノケイ酸塩と粘土鉱物との複合材料（ハスクレイ）の合成条件の検討と窒素・リン除去性能を評価した。その結果、以下の成果が得られた。1. Si/Al モル比を 0.5～1.2 になるようにオルトケイ酸ナトリウムと塩化アルミニウムを調整し、pH7、98°C で反応させることにより、ハスクレイを効率良く合成できることが明らかになった（特に Si/Al モル比 0.8 が最適であった）。2. 合成したハスクレイは、高いアンモニウムイオンとリン酸イオンの吸着性能を有することが明らかになった（アンモニウムイオン 1.8 mmol/g (pH 6.0)、リン酸イオン 0.71 mmol/g (pH 5.3))。またいずれの吸着等温線もラングミュア型と良く一致し、イオン交換反応による化学吸着であることが示唆された。

C: Chemically mediated Control

- ・マイクロ・ナノ構造体中の有機-無機ハイブリッド化合物の物性制御とエネルギーデバイスへの応用：次世代太陽電池の有力候補として現在注目されている有機-無機ペロブスカイト太陽電池は、25 %を超える高いエネルギー変換効率が報告され、実用化に向けた研究が世界的に活発に行われている。2019 年度は、電子輸送層の候補となる金属酸化物の中で、ZnO に注目し、sol-gel 法及び燃焼合成法により作製した ZnO 層に表面処理を行った際の電子輸送特性の変化および太陽電池特性に与える影響を系統的に評価した。その結果、ZnO 薄膜表面に適切な条件下で H_2O_2 処理を行うことにより ZnO の成膜方法によらず電子輸送効率が向上することを明らかにした。また、比較的大気雰囲気下における安定性が高いことが報告されている CsFAMAPbIBr から構成されるトリプルカチオン型ペロブスカイト化合物に着目し、同化合物薄膜における無機カチオン(Cs)と有機カチオン(FA, MA)混合割合がペロブスカイト薄膜の結晶構造、モロフォロジーおよび各種雰囲気下(高湿度下、大気雰囲気 85°C化)での耐久性に与える影響を明らかにするとともに、その劣化機構について検証を行った。その結果、 $\text{Cs}_x(\text{FA}_{0.83}\text{MA}_{0.17})_{1-x}\text{Pb}(\text{I}_{0.83}\text{Br}_{0.17})_3$ が高湿度環境下で生成される分解生成物を同定した。逆構造型ペロブスカイト太陽電池における正孔輸送層として V_2O_5 、 NiO_x および PEDOT:PSS を取り上げ、 $\text{Cs}_{0.05}(\text{FA}_{0.83}\text{MA}_{0.17}\text{Pb}(\text{I}_{0.83}\text{Br}_{0.17})_3)_{0.95}$ とのヘテロ接合薄膜における正孔輸送能の比較を行った。さらに、 NiO_x 層の表面状態を評価し、正孔輸送に最適な条件を検討した。その結果、pH を調整した塩酸処理により表面再結合を減少させ、効率的な電荷輸送を可能にすることを明らかにした。
- ・酸化物・水酸化物微粒子の 3D 構造制御合成と環境・エネルギー材料への応用：高温熱処理により可視光下の光触媒活性を発現するニオブドープ酸化チタンをメカノケミカル法により TiNb_2O_7 添加- TiO_2 の作製および光触媒活性を目的として研究をすすめた。メカノケミカル処理後、および続くアニール処理後の試料について光触媒活性を評価した。処理温度を調整することで紫外光及び可視光の両活性をもつ、より広範囲の波長域を利用可能な光触媒が設計可能であることを示した。水浄化フィルターのパフォーマンス向上に資するため、ハイドロキシアパタイト(HAp)の多孔体を作製した。HAp は *ab* 面が結晶構造である。ウィルスは主に負に帯電しているため、*ab* 面を露出させることでウィルスを吸着除去可能である。また、多孔構造にすることで、内部まで処理水を浸透させることができ、フィルター特性の向上が見込まれる。澱粉水溶液中に HAp 粒子を均一に分散し、加熱により糊化した。糊化スラリーを鋳込み充填し、液体窒素中で凍結した。真

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

空凍結乾燥により得た固化成形体を加熱しデンプンを消失させて、さらに 1200°C で焼結した。得られた多孔質体には気孔径が約 5 μm の連続孔が導入され、気孔率が約 75%、気孔の 99.9% が開気孔の連通性の良い多孔構造を作製することができた。

- 光反応型ソフトマテリアルの開発**：ポリ乳酸(PLA)は、代表的な生分解性プラスチックの一つであり、天然由来の乳酸を原料とすることから、カーボンニュートラルの観点で近年、特に注目を集めている。しかし、PLA のガラス転移温度(Tg)は 50°C と低く、用途拡大のためには耐熱性の向上が求められる。本研究では、新規ポリマーである、鎖末端に可逆的光反応性を示すクマリン基を有する 4 本鎖星形 PLA を分子設計した。得られたポリマーに UV(365nm)を照射したところ、Tg は 63°C まで上昇し、耐熱性が向上した。これは、クマリン基の光二量化反応によるポリマー鎖間の架橋反応が起きたためである。架橋のため、このポリマーの生分解率は 9% まで減少した。興味深いことに、架橋ポリマーに UV(254nm)を照射したところ、クマリン基の光開裂反応が進行することで、ポリマーが脱架橋され、Tg が 53°C まで低下するとともに、酵素分解率が 58% まで上昇した。以上のことから、クマリン基の可逆的光二量化反応を利用することで、PLA の耐熱性と生分解性の制御に成功した。
- セラミック粒子の積層実装による合金の表面改質プロセスの開発**：様々な分野で摩擦を低減させるために用いられる軸受をターゲットとして、セラミック粒子の積層実装の手法を用いて、軸受用鋼の潤滑性と耐摩耗性を向上させるための表面改質プロセスを開発する。本研究では、高炭素クロム軸受鋼の表面に、アルミニウムの層と、ナノ CeO₂ 粒子を分散させたイットリア安定化ジルコニア(YSZ)の層を積層させ、その後熱処理を行なっている。2019 年度の研究では、ゾルゲル法によるナノ CeO₂ 粒子分散 YSZ 層を積層させる工程において、亀裂発生と亀裂伝播を引き起こすコーティング膜の乾燥と焼成の手順の検討を行なった。その結果、スピコートと乾燥と焼成を複数回繰り返すことにより、亀裂のない膜を形成させることに成功した。また、その後の熱処理により、膜に比較的多数のマイクロクラックを導入させた。現時点までの研究において、マイクロクラックを導入させた膜は、十分な耐摩耗性を有していなかったが、摩耗試験後の試料の微細組織観察により、マイクロクラックが摩耗試験における亀裂伝播の抑制に寄与したことを確認した。
- 高耐圧 GaN 縦型 p-n 接合ダイオードの開発・評価**：縦型 GaN パワーデバイス、順方向の低いオン抵抗と逆方向耐圧の高さから SiC を超える超高効率パワー変換素子と期待され、国家プロジェクト体制で開発が進められている。本学では世界最高耐圧の 5 kV 耐圧 GaN p-n ダイオードの開発に成功しているが、内外の研究を含め 3 kV 以上の高耐圧ダイオードは降伏時に完全破壊してしまうという問題があった。これを解決するため、新たに 2 段メサ構造を考案し検討を行った。アノード電極周辺の p-GaN 層の一部が ICP ドライエッチングにより除去された 2 段メサ構造となっているのが特徴である。試作の結果、従来のシングルメサ構造のダイオードでは、逆方向耐圧の評価において約 4.8 kV で降伏時に全て破壊が生じたが、2 段メサ構造では破壊が生じず繰返し評価にも優れた耐性を示した。また、素子歩留まりも 95% 以上と高いことも示された。この効果は p-GaN 層の一部を除去することで、メサ端部分の電界集中が緩和されたことによると考えられ、TCAD シミュレーションでも確認できた。一方、順方向の電流-電圧特性においては、シングルメサ構造と同じ低いオン抵抗を示し、トードオフの問題もないことも確認された。
- シリコン量子ドット発光材料の高効率生成プロセスの開発**：近年、LED、ディスプレイ向けの発光材料として半導体ナノ結晶粒子(量子ドット)が注目されている。しかし、現在市販されている量子ドットは、化合物系半導体であり、カドミウムなどの有害な金属を含む場合が多く、環境に優しい材料での半導体ナノ結晶が期待されている。近年、環境にやさしい半導体量子ドット材料として、地殻中に豊富に存在し、安全なシリコンが注目されている。シリコン量子ドットは様々な手法で作製され、代表的なトップダウン作製手法として、液中レーザー照射法がある。本研究テーマでは、レーザー照射法を実用的な量子ドット生産プロセスとするために、化学的な手法で簡便に作製可能なポーラス(多孔質)シリコンを、液中レーザー照射法のターゲットとして用い、シリコン量子ドットコロイドを生成する。ポーラスシリコンは、ポーラスナノ構造に起因した特異な物理的特性(低熱伝導性、大表面積)を有するため、シリコン量子ドットコロイドの生成効率の大幅な向上、サイズ制御が期待できる。また、ポーラスシリコンはポーラスナノ構造の制御が可能であり、この制御性を通して量子ドットの発光(サイズ)特性の改善も期待できる。

・セミナーの開催

プロジェクト主催セミナーである「グリーンソサエティセミナー」を開催した。プロジェクトを構成する 3 つの基本テーマ横断セミナー。プロジェクト構成員の担当研究テーマの進捗状況の発表、およびその関連トピックに関する外部講師による講演と討論を行うことにより、プロジェクト構成員の相互理解を深め、また研究成果の相互検証を行った。

第 4 回：2019 年 5 月 16 日(木)

微粒子のナノ・マイクロ集積技術と次世代ものづくりへの展開

(講師：武藤 浩行、豊橋技術科学大学)

セラミック材料の孔と穴(講師：打越 哲郎、物質・材料研究機構/法政大学)

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

参加者：29名（学生：18名、教職員：9名、一般：2名）

第5回：2019年10月9日（水）

低侵襲な外科手術を支援するロボット（講師：川嶋 健嗣、東京医科歯科大学）

流体を用いたマイクロアクチュエータの研究動向（講師：田中 豊、法政大学）

参加者：37名（学生：29名、教職員：7名、一般：1名）

第6回：2019年12月19日（木）

お椀形状微粒子を応用した1細胞計測技術の開発（講師：金 賢徹、産業技術総合研究所）

アガロースマイクロチャンバーを用いた1細胞配置計測技術（講師：金子 智行、法政大学）

参加者：16名（学生：8名、教職員：7名、一般：1名）

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・運営委員会議事資料（2019年度第1回～11回）
- ・ホームページ セミナーのお知らせ (<http://www.hosei.ac.jp/nano/>)

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

<研究所報告>

年報2018（2019年4月）

<雑誌論文>

安田 彰

- 1) S. Saikatsu, A. Yasuda, “Delta-Sigma ADC Based on Switched-Capacitor Integrator with FIR Filter Structure”, IEICE Trans. Fundamentals, Vol. E102-A, No. 3, pp. 498-506, March, 2019. 査読有
- 2) S. Moriyama, T. Tsuchiya, K. Wakasugi, M. Yoshino, A. Yasuda, “Minimal EDA for Open-source-minded LSI developments”, International Conference on Analog VLSI Circuits, Oct., 2019. 査読有
- 3) T. Yamamoto, T. Kobayashi, A. Yasuda, “Axial Vibration Reduction Method using Multi-Coil-Motor”, International Conference on Analog VLSI Circuits, Oct., 2019. 査読有
- 4) Seijiro Moriyama, Tadaaki Tsuchiya, Katsuhiko Wakasugi, Michitaka Yoshino, Akira Yasuda, “Analog IP Reuse Support for Minimal EDA”, TJCAS, 2019. 査読有

田中 豊

- 1) J. Peng, T. Togawa, T. Tachibana, Y. Tanaka, “Numerical and Experimental Investigation on Braking Characteristics of an Electro-Rheological (ER) Micro Brake”, JFPS International Journal of Fluid Power System, 2019 Volume 11 Issue 3 pp. 124-129, DOI: <https://doi.org/10.5739/jfpsij.11.124> 査読有

辻田 星歩

- 1) T. Hirano, H. Tsujita, “Effect of Double Air Injection on Performance Characteristics of Centrifugal Compressor (Influence on the Pressure Recovery in the Diffuser)”, Proceedings of International Gas Turbine Congress 2019, IGTC-2019-182(2019-11). 査読有
- 2) H. Tsujita, M. Kaneko, “Influence of Incidence Angle on Two-Dimensional Aerodynamic Performance of Ultra-Highly Loaded Turbine Cascade at Transonic Condition”, Proceedings of the 14th International Symposium on Experimental Computational Aerodynamics of Internal Flows, ID69(2019-7). 査読有
- 3) H. Tsujita, M. Kaneko, “Profile Loss of Ultra-Highly Loaded Turbine Cascades at Transonic Condition”, Proceedings of ASME 2019 Turbo Expo, GT2019-91264(2019-6). 査読有

塚本 英明

- 1) H. Tsukamoto, “Carbon Nanotube Reinforced Aluminum Composites Fabricated by Powder Metallurgical and Hot-Rolled Techniques”, Proceedings of ICSMR2019 (6 pages). 査読有
- 2) H. Tsukamoto, “Thermo-Mechanical Properties of ZrO₂/Ti Functionally Graded Materials Fabricated Using Various Consolidation Techniques”, Proceedings of JISSE-16 symposium (4 pages). 査読有
- 3) C. Sun, H. Tsukamoto, “SiC Whisker/Particle-Reinforced Magnesium Composites Fabricated by Spark Plasma Sintering Techniques”, Proceedings of JISSE-16 symposium (3 pages). 査読有

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- 4) G Toma, T. Suzuki, H. Tsukamoto, “Characterization of Carbon Nanotube Reinforced Aluminum Composites Fabricated by Hot Rolling Techniques”, Proceedings of JISSE-16 symposium (4 pages). 査読有
- 5) M. Ueno, H. Tsukamoto, “Magnesium - Based Composites Fabricated by Spark Plasma Sintering Techniques”, Proceedings of JISSE-16 symposium (3 pages). 査読有

佐藤 勉

- 1) M. Ogura, T. Sato, K. Abe. “*Bacillus subtilis* YlxR, which is Involved in Glucose-Responsive Metabolic Changes, Regulates Expression of *tsaD* for Protein Quality Control of Pyruvate Dehydrogenase”, Front. Microbiol. **10**:923 (2019). 査読有
- 2) B. Shuster, M. Khemmani, Y. Nakaya, G. Holland, K. Iwamoto, K. Abe, D. Imamura, N. Maryn, A. Driks, T. Sato, P. Eichenberger, “Contributions of Crust Proteins to Spore Surface Properties in *Bacillus subtilis*”, J. Bacteriol., **201**(19) pii: e00321-19 (2019). 査読有
- 3) S. Suzuki, M. Yoshikawa, D. Imamura, K. Abe, P. Eichenberger, T. Sato. “Compatibility of Site-Specific Recombination Units between Mobile Genetic Elements”, iScience, **23**(1)100805 (2020). 査読有

曾和 義幸

- 1) T. Ishida, R. Ito, J. Clark, N. J. Matzke, Y. Sowa, M. A. B. Baker. Sodium-powered stators of the bacterial flagellar motor can generate torque in the presence of phenamil with mutations near the peptidoglycan-binding region. Mol Microbiol. **111**, 1689-1699 (2019). 査読有

水澤 直樹

- 1) M. Kono, H. Kawaguchi, N. Mizusawa, W. Yamori, Y. Suzuki, I. Terashima, “Far-Red Light Accelerates Photosynthesis in the Low-Light Phases of Fluctuating Light”, Plant Cell Physiol., **61**, 191-202, (2020) 査読有

山本 兼由

- 1) Y. Yamanaka, H. Watanabe, E. Yamauchi, Y. Miyake, K. Yamamoto, “Measurement of the promoter activity in *Escherichia coli* by using a luciferase reporter”, Bio Protoc. **10**(2): e3500. (2020). 査読有
- 2) 山本兼由, 渡邊宏樹, “微生物バイオプロセスを用いたレアメタル資源の確保 クリーンテクノロジー”, **30**(1), 43-49. (2020).
- 3) T. Shimada, Y. Yokoyama, T. Anzai, K. Yamamoto, A. Ishihama, “Regulatory role of PlaR (ViaJ) for utilization of plant-derived nutrients in *Escherichia coli* K-12”, Sci. Rep. **9**(1), 20415(2019). 査読有
- 4) 山本兼由, “大腸菌ゲノム機能を用いたバイオプロセスによる金属資源の確保”, 分離技術, **49**(4), 232-237. (2019).
- 5) 山本兼由, “微生物ゲノムを活用したバイオプロセスによる金属資源化”, 月刊BIO INDUSTRY, 6月号 72-80.
- 6) Y. Miyake, T. Inaba, H. Watanabe, J. Teramoto, K. Yamamoto, A. Ishihama, “Regulatory roles of pyruvate-sensing two-component system PyrSR (YpdAB) in *Escherichia coli* K-12”, FEMS Microbiol. Lett. **366**(2). doi: 10.1093/femsle/fnz009. (2019). 査読有

鳥飼 弘幸

- 1) T. Naka, H. Torikai, “A Novel Generalized Hardware-Efficient Neuron Model based on Asynchronous CA Dynamics and its Biologically Plausible On-FPGA Learnings”, IEEE Transactions on Circuits and Systems II, Vol. 66, No. 7, pp. 1247-1251 (2019) 査読有
- 2) 鳥飼弘幸, “非同期順序回路における確率共鳴などの非線形現象とその生物模倣ハードウェアへの応用”, システム制御情報学会学会誌, Vol. 64, No. 3, pp. 98-103 (2020)
- 3) K. Takeda, H. Torikai, A novel hardware-efficient CPG model for a hexapod robot based on nonlinear dynamics of coupled asynchronous cellular automaton oscillators, Proc. IEEE-INNS IJCNN, 2019 査読有

渡邊 雄二郎

- 1) K. Tamura, R. Kawashiri, N. Iyi, Y. Watanabe, H. Sakuma, M. Kamon, “Rosette-like Layered Double Hydroxides: Adsorbent Materials for the Removal of Anionic Pollutants from Water”, ACS Applied Materials & Interface, **11**, 27954-27963 (2019). 査読有
- 2) Y. Kobayashi, H. Nakamura, S. Kawano, S. Oshima, Y. Watanabe, G. W. Stevens, Y. Komatsu, K. Fujinaga, “Homogeneous Liquid-Liquid Extraction of Metal Ion Utilizing Upper Critical Solution Temperature of Propylene Carbonate” Solvent Extraction and Ion Exchange, **37**, 518-525 (2019). 査読有

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- 3) T. Fukuoka, Y. Harada, A. Okubo, Y. Moriyoshi, K. Tamura and Y. Watanabe, "Microstructure and Grain Growth of Mullite by Reaction Sintering of α -alumina with Rhyolite" Proceedings of 16th Biennial Worldwide Congress UNITECRA 2019, 30-33 (2019).

緒方 啓典

- 1) E. Inami, T. Ishigaki, H. Ogata, Sol-gel processed Nb₂O₅ thin-film for a scaffold layer in perovskite solar cells", *Thin Solid Films*, **674**, 7-11(2019). 査読有
- 2) W. Gong, Bunshi Fugetsu, Z. Wang, T. Ueki, I. Sakata, H. Ogata, F. Han, M. Li, L. Su, X. Zhang, M. Terrones, M. Endo, "Thicker carbon- nanotube/manganese-oxide hybridized nanostructures as electrodes for creation of fiber-shaped high-energy-density supercapacitors", *Carbon*, **154**, 169-177(2019). 査読有
- 3) 緒方 啓典, "セラミックス/ナノカーボン複合材料の高機能化", *耐火物***71**, 385-387(2019). 査読有
- 4) T. Ishigaki, Y. Nakada, N. Tarutani, T. Uchikoshi, Y. Tsujimoto, M. Isobe, H. Ogata, C. Zhang, D. Hao, "Enhanced visible light photocatalytic activity of anatase-rutile mixed-phase nano-size powder given by high-temperature heat treatment", *R. Soc. Open Sci.*, **7**, 191539 1-14(2019). 査読有

石垣 隆正

- 1) T.S. Suzuki, S. Takahashi, T. Uchikoshi, T. Ishigaki, K. Kobayashi, "Anisotropic Oxide-ionic Conductivity and Fuel Cell Performance of c-axis Oriented Lanthanum Silicate Oxyapatite Prepared by Slip Casting in a Strong Magnetic Field", *Mater. Trans.*, **60**, 1949-1953 (2019). 査読有
- 2) T. Ishigaki, Y. Nakada, N. Tarutani, T. Uchikoshi, Y. Tsujimoto, M. Isobe, H. Ogata, C. Zhang, D. Hao, "Enhanced Visible Light Photocatalytic Activity of Anatase-rutile Mixed-phase Nano-size Powder Given by High-Temperature Heat Treatment ", *R. Soc. Open Sci.*, **7**(1), 191539 1-14(2020). 査読有

明石 孝也

- 1) H. Alhussain, T. Mise, Y. Matsuo, H. Kiyono, K. Nishikiori, T. Akashi, "Influence of Ammonia Gas Exposure on Microstructure of Nanocrystalline Titanium Nitride Powder Synthesized from Titanium Dioxide", *J. Ceram. Soc. Japan*, **127**, 824-829 (2019). 査読有
- 2) A. A. Galhoum, E. A. Elshehy, D. A. Tolan, A. M. El-Nahas, T. Taketsugu, K. Nishikiori, T. Akashi, A. S. Morshedy, E. Guibal, "Synthesis of Polyaminophosphonic Acid-functionalized Poly(glycidyl methacrylate) for the Efficient Sorption of La(III) and Y(III)", *Chemical Engineering Journal*, **375**, 121932 (2019). 査読有

三島 友義

- 1) H. Ohta, N. Asai, F. Horikiri, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, "Two-Step Mesa Structure GaN p-n Diodes with Low On-resistance, High Breakdown Voltage and Excellent Avalanche Capabilities", *IEEE Electron Device Letters*, **41**, 123-126 (2020/01). 査読有
- 2) K. Shiojima, T. Sagawa, F. Horikiri, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, "Effect of Wafer Off-Angles on Defect Formation in Drift Layers Grown on Freestanding GaN substrates", *Phys. Status Solidi B*, **2019**, 1900561 1-5 (2019). 査読有
- 3) F. Horikiri, N. Fukuhara, H. Ohta, N. Asai, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, M. Toguchi, K. Miwa, T. Sato, "Photoelectrochemical Etching Technology for Gallium Nitride Power and RF Devices", *IEEE Trans. Semiconductor Manufacturing*, **32**, 489-495 (2019). 査読有
- 4) N. Asai, H. Ohta, F. Horikiri, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, "Impact of damage-free wet etching process on fabrication of high breakdown voltage GaN p-n junction diodes", *Jpn. J. Appl. Phys.*, **58**, SCD05 (2019). 査読有
- 5) H. Ohta, N. Asai, F. Horikiri, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, "4.9 kV breakdown voltage vertical GaN p-n junction diodes with high avalanche capability", *Jpn. J. Appl. Phys.*, **58**, SCD03 (2019). 査読有
- 6) K. Shiojima, M. Maeda, T. Mishima, "Scanning internal photoemission microscopy measurements of n-GaN Schottky contacts under applying voltage", *Jpn. J. Appl. Phys.*, **58**, SCD02 (2019). 査読有

中村 俊博

- 1) Z. Yuan, T. Nakamura, S. Chinnathambi, Y. Pu, N. Shirahata, K. Matsuishi "Facile Formation of Stable Water-Dispersed Luminescent Silicon Nanocrystals by Laser Processing in liquid: Toward Fluorescent Labeling

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

for Bio-imaging”, ChemNanoMat **5**, 1137 (2019). 査読有

- 2) K. Sawada, T. Nakamura, “Dynamics of Resonance Energy Transfer Process from Tb³⁺ to Eu³⁺ in Ga₂O₃ Phosphor”, J. Lum. **215**, 116616 (2019). 査読有
- 3) K. Koshida, T. Nakamura, “Emerging Functions of Nanostructured Porous Silicon - With a focus on the emissive properties of photons, electrons, and ultrasound -”, Frontiers Chem. **7**, 273 (2019). 査読有
- 4) S. Sakurai, T. Nakamura, S. Adachi, “Unusual Near-infrared Luminescence from Ti-doped MgSiF₆ · 6H₂O Powder”, J. Lum. **211**, 157 (2019). 査読有

<学会発表>

御法川 学

<一般講演>

- 1) C. Kamio, T. Aihara, G. Minorikawa, “VIBRATION ANALYSIS OF BABY CARRIAGE USING THE MULTI-BODY DYNAMICS”, 2nd International Conference on Mechanical and Production Engineering, No. 30, pp.156-161(2019.7, Pattaya, Thailand)
- 2) T. Nakano, G. Minorikawa, “Study on the evaluation index of the tonal noise components generated from small fan”, 23RD INTERNATIONAL CONGRESS ON ACOUSTICS (ICA2019), No. 22C (2019.9, Aachen Germany)
- 3) R. Shinohara, G. Minorikawa, T. Nakano, R. Maki, “Experiment and simulation of influence of distorted inlet flow on aerodynamic noise in small axial fan”, Proceedings of Inter-Noise 2019, (USB) (2019.7, Madrid, Spain)
- 4) 平野利幸, 大高敏男, 御法川学, “マイクロ遠心ファンの性能向上に関する研究”, 日本設計工学会2019年度秋季大会研究発表講演会講演論文集, pp. 155 - 156, (2019年5月).
- 5) 平野利幸, 大高敏男, 御法川学, “マイクロ軸流ファンのチップクリアランスが性能に及ぼす影響”, 日本設計工学会2019年度秋季大会研究発表講演会講演論文集, pp. 155 - 156, (2019年9月).
- 6) 中野武史, 御法川学, “小型ファン騒音のトーン性評価に関する研究”, 騒音制御工学会2019年度春季研究発表会, No. 1-1-15, p. 47-50 (2019年7月)
- 7) 土志田卓, 吉永隼人, 三國恒文, 御法川学, “ルーバー型制気口の流体音低減に関する実験および数値解析”, 日本機械学会第29回環境工学総合シンポジウム, No. J-114, pp. 71-74 (2019年7月)
- 8) 吉永隼人, 土志田卓, 三國恒文, 御法川学, “ダクト内流体音の基礎現象を対象とした数値解析の精度評価”, 日本機械学会第29回環境工学総合シンポジウム, No. J-116, pp. 79-82 (2019年7月)

安田 彰

<一般講演>

- 1) 郜文参, 西勝聡, 安田彰, “周波数掃引を用いた位置検出装置における SNR 改善の一手法”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-5-8, 9月10日~13日, 2019年, (大阪府豊中市)
- 2) 森山誠二郎, 吉野理, 安田彰, 若杉雄彦, 土屋忠明, “アナログ IP 共有のためのオープンソース EDA 活用”, 電気学会電子回路研究会, ECT-019-100, 12月18日, 2019年, (東京都千代田区)
- 3) 島史也, 江馬健太郎, 安田彰, “温度計コード出力 ΔΣ 変調器による低ビット相互相関処理を用いた距離推定法”, 電気学会電子回路研究会, ECT-020-20, 1月23日-24日, 2020年, (大阪府)
- 4) 千代間光, 安田彰, “マルチコイルモータの力行時電力回生法の提案”, 電気学会電子回路研究会, ECT-020-21, 1月23日-24日, 2020年, (大阪府)
- 5) 江馬健太郎, 大島史也, 安田彰, “音声認識技術を用いた端末における音声検出部の低消費電力化”, 電気学会電子回路研究会, ECT-020-006, 1月23日-24日, 2020年, (大阪府)

田中 豊

<招待講演>

- 1) Y. Tanaka, “Bubble elimination technology toward high performance of hydraulic systems”, Proc. The 8th International Conference on Fluid Power and Mechatronics (FPM2019), 2019-04-12, p.17.

<一般講演>

- 1) R. Takamizawa, R. Funachi, S. Sakama, Y. Tanaka, “Performance Evaluation for Bubble Eliminator with CFD -Effect of Computational Model and Mesh-”, The 8th International Conference on Manufacturing, Machine Design and Tribology (ICMDT2019), TH-P0-15, April 24-27, 2019, Kagoshima, Japan. 『Best Poster Award』
- 2) T. Tachibana, T. Togawa, Y. Tanaka, “Design and Fabrication of ER Braking Device for Small Mobile Robot”,

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

The 8th International Conference on Manufacturing, Machine Design and Tribology (ICMDT2019), TH-P0-43, April 24-27, 2019, Kagoshima, Japan.

- 3) 田中豊, 田沼千秋, 細田夏未, ”パラレルメカニズムを用いたステージ可動式プリンタの試作と評価”, 日本機械学会 2019 年度年次大会講演論文集 DVD, No. 19-1, J11104, 秋田大学, 2019-09-11.
- 4) 外川貴規, 橋 拓真, 田中豊, ”小形ロボット搭載用 ER ブレーキの試作と評価”, 日本機械学会 2019 年度年次大会講演論文集 DVD, No. 19-1, J11111, 秋田大学, 2019-09-11.
- 5) 渡邊幸泉, 細田夏未, 田沼千秋, 田中豊, ”パラレルメカニズムを用いたインクジェットヘッド固定ステージ可動式プリンティングシステムの開発”, 日本画像学会 4DFF (4D and Functional Fabrication) 研究会 (Conference on 4D and Functional Fabrication 2019), p. 47, 2019-10-10.
- 6) 外川貴規, 橋拓真, 嶋原瑞貴, 田中豊, ”小形ロボット搭載用 ER ブレーキの性能シミュレーション”, 2019 年秋季フルードパワーシステム講演会講演論文集, pp. 87-89, 2019-11-21.

辻田 星歩

<一般講演>

- 1) 陳子豪, 張驥軒, 辻田星歩, ”小型円環翼列風洞による超高負荷軸流タービンの空力性能評価(翼端間隙高さの影響)”, 第82回ターボ機械協会岡山講演会, (2019年9月20日, 岡山大学津島キャンパス, 岡山市).
- 2) 平野利幸, 辻田星歩, ”2重吹込みが遠心圧縮機の低流量作動域に及ぼす影響”, 第47回日本ガスタービン学会定期講演会(函館)講演論文集, B-19, (2019年9月19日, 函館アリーナ, 函館市).

塚本 英明

<一般講演>

- 1) H. Tsukamoto, ”Carbon Nanotube Reinforced Aluminum Composites Fabricated by Powder Metallurgical and Hot-Rolled Techniques”, The 4th International Conference on Frontiers of Composite Materials (ICFCM2019) The 5th International Conference on Smart Material Research (ICSMR2019), The University of Queensland, Brisbane, Australia, 2019. 11.13-16.
- 2) H. Tsukamoto, ”Thermo-Mechanical Properties of ZrO₂/Ti Functionally Graded Materials Fabricated Using Various Consolidation Techniques”, JISSE-16 symposium, Tokyo.
- 3) C. Sun, H. Tsukamoto, ”SiC Whisker/Particle-Reinforced Magnesium Composites Fabricated by Spark Plasma Sintering Techniques”, JISSE-16 symposium, Tokyo.
- 4) G. Toma, T. Suzuki, H. Tsukamoto, ”Characterization of Carbon Nanotube Reinforced Aluminum Composites Fabricated by Hot Rolling Techniques”, JISSE-16 symposium, Tokyo.
- 5) M. Ueno, H. Tsukamoto, ”Magnesium-Based Composites Fabricated by Spark Plasma Sintering Techniques”, JISSE-16 symposium, Tokyo.
- 6) J. Ueda, T. Suzuki, G. Toma, H. Tsukamoto, ”Fabrication and Characterization of Carbon Nanotube Reinforced Aluminum Matrix Composites,” ISPlasma 2019, (2019. 3. 17-22)
- 7) H. Tsukamoto, S. Kawasaki and R. Masuda, ”Microwave-Assisted Sintering and Characterization of Zirconia/Titanium Functionally Graded Materials,” ISPlasma 2019, (2019. 3. 17-22)
- 8) 當麻彦樹, 鈴木智晴, 塚本英明, ”熱間圧延法によるカーボンナノチューブ/アルミニウム基複合材料の作製と性能評価”, 第10回日本複合材料会議 (JCCM-10) (2019. 3. 6-8)
- 9) 塚本英明, 川崎秀太, 増田怜, ”マイクロ波加熱によるジルコニア/チタン系傾斜機能平板の作製と熱・機械的特性評価”, 第10回日本複合材料会議 (JCCM-10) (2019. 3. 6-8)
- 10) 鈴木智晴, 當麻彦樹, 亀谷恭子, 塚本英明, ”粉末焼結・圧延によるカーボンナノチューブ/Al基複合材料の作製と評価”, 日本金属学会 第164回講演大会 (2019. 3. 20-22) .
- 11) 孫暢, 塚本英明, 放電プラズマ焼結によるSiCw・SiCp 分散マグネシウム基複合材料の作製と評価, 日本複合材料学会 第44回複合材料シンポジウム, 2019 年 9 月 5, 6 日, 岡山.
- 12) 上野光洋, 塚本英明, ”カーボンナノチューブ・ジルコニア粒子分散マグネシウム基複合材料の作製と評価”, 日本複合材料学会 第44回複合材料シンポジウム, 2019 年 9 月 5, 6 日, 岡山.

金子 智行

<一般講演>

- 1) M. Hayashi, S. Tanaka, T. Kaneko, K. Takiguchi, ”Light-induced morphological change and displacement of filamentous-actin encapsulating giant liposome,” OKINAWA COLLOIDS 2019, 5F16 (2019 年 11 月 8 日, 万国津梁

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

館, 名護市)

- 2) K. Emura, T. Kaneko, “Extracellular Potential Measurement of Heart Tissue Pieces for Cardiotoxicity Testing Technology,” 2019 ASCB/EMBO Annual Meeting, P744 (Washington DC, USA, Dec. 8, 2019).
- 3) K. Fujii, T. Kaneko, “Electrophysiological Property Evaluation of Reconstructed Cardiac Tissue-like Cell Community,” 2019 ASCB/EMBO Annual Meeting, P1628 (Washington DC, USA, Dec. 9, 2019).
- 4) T. Nakamura, T. Kaneko, “Synchronization of Beating Between Dispersed Cardiomyocytes and Cardiac Tissue Piece,” 2019 ASCB/EMBO Annual Meeting, P1631 (Washington DC, USA, Dec. 9, 2019).
- 5) N. Tadokoro, T. Kaneko, “Improvement Of High Throughput Cardiotoxicity Testing System Using Multielectrode Array With Agarose Microchambers,” 2019 ASCB/EMBO Annual Meeting, P1796 (Washington DC, USA, Dec. 10, 2019).
- 6) H. Toriumi, T. Kaneko, “Construction of neural network with arrangement of single cerebral cortical neuron,” 第57回日本生物物理学会年会, 1Pos199, (2019年9月24日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市).
- 7) T. Nakamura, C. Nihei, T. Kaneko, “Synchronization of electrophysiological signal between dispersed cardiomyocytes and cardiac tissue piece,” 第57回日本生物物理学会年会, 1Pos283, (2019年9月24日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市).
- 8) T. Yoshida, K. Fujii, T. Kaneko, “Conduction Pathway Analysis of Line-Networked Cardiomyocytes By using Multi-Electrode Array System,” 第57回日本生物物理学会年会, 2Pos158, (2019年9月25日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市).
- 9) T. Irisawa, N. Morizono, T. Saito, T. Kaneko, “Analysis of Physical Effect on Macrophage with Agarose Microchamber,” 第57回日本生物物理学会年会, 2Pos160, (2019年9月25日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市).
- 10) K. Fujii, T. Kaneko, “Reconstruction of cardiac tissue-like cell structure and electrophysiological property evaluation,” 第57回日本生物物理学会年会, 2Pos161, (2019年9月25日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市).
- 11) K. Emura, T. Kaneko, “Beating rate change of heart tissue piece by infrared laser irradiation using Multi Electrode Array system,” 第57回日本生物物理学会年会, 2Pos162, (2019年9月25日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市).
- 12) K. Oyama, W. Wang, T. Kaneko, “Beating rate change of chick embryonic cardiomyocytes heated up from low temperature,” 第57回日本生物物理学会年会, 2Pos163, (2019年9月25日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市).
- 13) R. Kobayashi, K. Emura, T. Kaneko, “Analysis of sensitivity for drugs depending size of cardiac tissue,” 第57回日本生物物理学会年会, 2Pos164, (2019年9月25日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市).
- 14) M. Hayakawa, H. Terajima, M. Hayashi, T. Kaneko, “Morphological changes of liposomes depending on density of encapsulated E. coli,” 第57回日本生物物理学会年会, 2Pos169, (2019年9月25日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市). 『学生発表賞』
- 15) T. Kaneko, A. Oguri, S. Shiomi, M. Hayakawa, M. Hayashi, “Morphological changes of liposomes by infrared laser irradiation,” 第57回日本生物物理学会年会, 2Pos177, (2019年9月25日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市).
- 16) M. Hayashi, T. Kaneko, K. Takiguchi, “Emergence of spindle-shaped nematic domains of filamentous actin during polymerization induced by phase-separation from methylcellulose,” 第57回日本生物物理学会年会, 3Pos168, (2019年9月26日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市).
- 17) N. Tadokoro, T. Kaneko, “Improvement of high-throughput chamber for cardio-toxicity testing with multi-electrode array system,” 第57回日本生物物理学会年会, 3Pos172, (2019年9月26日, シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市).
- 18) 林真人, 瀧口金吾, 金子智行, “アクチン蛋白質と嵩高い高分子で創る異方性膜無しオルガネラもどきの生成と融合”, 「細胞を創る」研究会 12.0, P-42 (2019年10月17日~18日, 愛媛大学南加記念ホール, 松山市)
- 19) 早川舞, 寺島葉月, 林真人, 金子智行, “大腸菌の推進力を用いてリポソームの形態変化を創り出す”, 「細胞を創る」研究会 12.0, P-48 (2019年10月17日~18日, 愛媛大学南加記念ホール, 松山市)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- 20) 早川舞, 林真人, 金子智行, “大腸菌の推進力が引き起こすリポソームの形態変化”, 非線形ソフトマター研究会 2019 (2019年12月1日, 上郷・森の家, 横浜市)
- 21) 田所直樹, 早川舞, 林真人, 金子智行, “心筋細胞の細胞数依存性によるコミュニティ・エフェクトの変化”, 非線形ソフトマター研究会 2019 (2019年12月1日, 上郷・森の家, 横浜市)
- 22) 林真人, 滝口金吾, 金子智行, “分子混雑環境下での相分離と自発配向が生み出すアクチン線維紡錘形液晶ドメインの単分散性”, 非線形ソフトマター研究会 2019 (2019年12月1日, 上郷・森の家, 横浜市)

佐藤 勉

<招待講演>

- 1) 佐藤勉, “枯草菌の孢子形成”, 日本細菌学会・シンポジウム (S02-05) (2019年4月23日, 札幌コンベンションセンター, 札幌).

<一般講演>

- 1) 宮寄悠貴, 鈴木祥太, 佐藤勉, “枯草菌新規溶原性ファージの探索”, グラム陽性菌ゲノム機能会議 (0-7/P-27) (2019年9月6日, 筑波山江戸屋, つくば市).
- 2) 中谷優星, 安部公博, 岩本敬人, 佐藤勉, “枯草菌最外層形成に関与するタンパク質の解析”, グラム陽性菌ゲノム機能会議 (0-8/P-28) (2019年9月6日, 筑波山江戸屋, つくば市). 『優秀発表賞』
- 3) 小笠原太軌, 新木翔之, 鈴木祥太, 佐藤勉, “枯草菌ファージの $\phi 105$ の機能解析”, グラム陽性菌ゲノム機能会議 (P-26) (2019年9月6日, 筑波山江戸屋, つくば市).
- 4) 茶谷朋哉, 鈴木祥太, 佐藤勉, “枯草菌ファージの SP β の相同組換えによる溶原化”, 微生物研究会 (P-18) (2019年11月9日, 立教大, 池袋).
- 5) 小笠原太軌, 鈴木祥太, 佐藤勉, “枯草菌ファージの $\phi 105$ の機能解析”, 微生物研究会 (P-31) (2019年11月9日, 立教大, 池袋).
- 6) 桂美貴, 中谷優星, 今村大輔, 鈴木祥太, 佐藤勉, “枯草菌母細胞への異種タンパク質の蓄積”, 微生物研究会 (P-41) (2019年11月9日, 立教大, 池袋).
- 7) 宮寄悠貴, 濱野菜里, 鈴木桜花, 河原光辰, 鈴木祥太, 佐藤勉, “遺伝子を分断する新規溶原性ファージの探索”, 微生物研究会 (P-42) (2019年11月9日, 立教大, 池袋).
- 8) 高知晴, 鈴木祥太, 佐藤勉, “枯草菌ファージの SP β とその類縁ファージ $\phi 3T$ との競合”, 微生物研究会 (P-73) (2019年11月9日, 立教大, 池袋).
- 9) 中谷優星, 安部公博, 今村大輔, 鈴木祥太, 佐藤勉, “枯草菌多糖層形成に関与するタンパク質の解析”, 微生物研究会 (P-80) (2019年11月9日, 立教大, 池袋).
- 10) 越智郁, 佐藤勉, 今村大輔, “コレラ流行株が放出する細胞外物質の解析”, 微生物研究会 (P-90) (2019年11月9日, 立教大, 池袋).
- 11) 鈴木祥太, 茶谷朋哉, 吉川実季, 安部公博, 佐藤勉, “可動性遺伝因子における部位特異的組換え機構の互換性” (2020年3月6日, ウィンクあいち, 名古屋).

曾和 義幸

<一般講演>

- 1) 田島寛隆, 三浦勇輝, 西川正俊, 曾和義幸, 川岸郁朗. “周毛性・極毛性細菌べん毛モーター回転方向制御における協同性”, 第16回21世紀大腸菌研究会(2019年5月29-30日, 琵琶湖ホテル, 大津市).
- 2) 遠藤貴秀, 西川正俊, 田島寛隆, 曾和義幸, 川岸郁朗. “二成分制御系転写因子 AtoC の2つの部位のリン酸化による活性調節”, 第16回21世紀大腸菌研究会(2019年5月29-30日, 琵琶湖ホテル, 大津市).
- 3) 石田翼, 吉多美祐, 南野徹, 曾和義幸. “極低負荷条件下においても大腸菌べん毛モーター回転速度は固定子ユニット数に依存する”, 第16回21世紀大腸菌研究会(2019年5月29-30日, 琵琶湖ホテル, 大津市).
- 4) T. Ishida, M. Yoshida, T. Minamino, Y. Sowa. “Load-dependent speed regulation of the bacterial flagellar motor”, 第57回日本生物物理学会年会 (2019年9月24-26日, 宮崎県シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市)
- 5) N. Ito, M. Nishikawa, Y. Sowa, I. Kawagishi. “Chemoreceptor clustering of Escherichia coli in lateral regions of the cytoplasmic membrane”, 第57回日本生物物理学会年会 (2019年9月24-26日, 宮崎県シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市)
- 6) M. Kato, T. Ishida, M. Yoshida, Y. Sowa. “Analysis of the bacterial flagellar switch using mutant rotor components”, 第57回日本生物物理学会年会 (2019年9月24-26日, 宮崎県シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- 7) Y. Kumazaki, T. Ishida, M. Yoshida, Y. Sowa. “Analysis of shaft-bearing interactions that support the smooth rotation of bacterial flagellar motors”, 第 57 回日本生物物理学会年会 (2019 年 9 月 24-26 日, 宮崎県シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市)
- 8) S. Hasegawa, R. Abe-Yoshizumi, K. Inoue, H. Kandori, Y. Sowa. “Controlling the rotation speed of the bacterial flagellar motor with light-driven rhodopsin”, 第 57 回日本生物物理学会年会 (2019 年 9 月 24-26 日, 宮崎県シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市)
- 9) S. Onoe S, M. Yoshida, M. Ito, Y. Sowa. “Ion specificity of chimeric stator proteins between *Paenibacillus* sp. TCA20 MotB1 and *Escherichia coli* MotB”, 第 57 回日本生物物理学会年会 (2019 年 9 月 24-26 日, 宮崎県シーガイアコンベンションセンター, 宮崎市)
- 10) 石田翼, 吉多美祐, 南野徹, 曾和義幸. “負荷に依存した大腸菌べん毛モーター回転速度の調節因子”, 第 18 回微生物研究会 (2019 年 11 月 9 日, 立教大学, 豊島区).
- 11) T. Ishida, M. Yoshida, T. Minamino, Y. Sowa. “FliL works as a speed regulator of the *Escherichia coli* flagellar motor at low load”, The 1st International Symposium on Molecular Engine (2020 年 1 月 8 日, 千葉大学, 千葉市)

水澤 直樹

<一般講演>

- 1) 菅原佑斗, 藤田勇二, 松原真由, 遠藤嘉一郎, 篠田稔行, 鞆達也, 沈建仁, 石井麻子, 神保晴彦, 和田元, 水澤直樹, “ホスファチジルグリセロール (PG714) と相互作用する D1-R140 を Leu または Tyr に置換した *Synechocystis* sp. PCC 6803 変異株の光合成特性”, 第 10 回日本光合成学会年会 (2019 年 5 月 25 日-26 日, 京都産業大学むすびわざ館, 京都市)
- 2) 菅原佑斗, 藤田勇二, 松原真由, 遠藤嘉一郎, 篠田稔行, 鞆達也, 沈建仁, 石井麻子, 神保晴彦, 和田元, 水澤直樹, “ホスファチジルグリセロールと相互作用する PSII 反応中心蛋白質の部位特異的アミノ酸置換が PSII に与える影響”, 日本植物学会第 83 回大会, 1aC06 (2019 年 9 月 15 日-17 日, 東北大学川内北キャンパス, 仙台市)
- 3) 篠田稔行, 新井啓史, 田伏廣輝, 水澤直樹, 秋本誠志, 鞆達也, “長波長型 Chlorophyll をもつシアノバクテリアの光環境適応について”, 第 18 回微生物研究会「微生物研究の新しい潮流」, P78 (2019 年 11 月 9 日, 立教大学池袋キャンパス, 豊島区)
- 4) 菅原佑斗, 藤田勇二, 松原真由, 遠藤嘉一郎, 篠田稔行, 鞆達也, 沈建仁, 石井麻子, 神保晴彦, 和田元, 水澤直樹, “ホスファチジルグリセロールと相互作用する光化学系 II 反応中心タンパク質のアミノ酸残基を置換したシアノバクテリア変異株の光合成特性”, 第 18 回微生物研究会「微生物研究の新しい潮流」, P9 (2019 年 11 月 9 日, 立教大学池袋キャンパス, 豊島区)
- 5) 菅原佑斗, 篠田稔行, 遠藤嘉一郎, 鞆達也, 沈建仁, 神保晴彦, 和田元, 水澤直樹, “ホスファチジルグリセロール (PG714) と相互作用する D1-R140 および T231 の部位特異的置換が PSII の機能に与える影響”, 第 61 回日本植物生理学会年会, PF-010 (2020 年 3 月 19 日-21 日, 大阪大学吹田キャンパス, 吹田市)

山本 兼由

<招待講演>

- 1) 山本兼由, “大腸菌核様体タンパク質 H NS の増殖における役割”, 2019 年度 (令和元年度) 国立遺伝学研究所研究会「環境中の DNA 循環」(2019 年 8 月 19-20 日, 国立遺伝学研究所, 三島市).

<一般講演>

- 2) 渡邊宏樹, 山本兼由, “大腸菌を用いたパラジウム回収技術の開発”, 日本農芸化学会 2020 年度大会 (2020 年 3 月 25-28 日, 九州大学, 福岡). (予定)
- 3) 田島玖美子, 山本兼由, “大腸菌の増殖開始における核様体タンパク質の役割”, 第 42 回日本分子生物学会年会 (2019 年 12 月 3-6 日, 福岡国際会議場・マリンメッセ福岡, 福岡).
- 4) 三宅裕可里, 山本兼由, “大腸菌全二成分制御系遺伝子プロモーターの機能発現による分類”, 第 42 回日本分子生物学会年会 (2019 年 12 月 3-6 日, 福岡国際会議場・マリンメッセ福岡, 福岡).
- 5) 大野友嗣, 山本兼由, “腸内少数派細菌のビフィズス菌と大腸菌の分子相互作用 第 41 回日本分子生物学会年会”, 第 42 回日本分子生物学会年会 (2019 年 12 月 3-6 日, 福岡国際会議場・マリンメッセ福岡, 福岡).
- 6) 山本兼由, 山内えりか, 三宅裕可里, “細菌ジーンサイレンサーの溶原化による適応増殖での役割”, 第 42 回日本分子生物学会年会 (2019 年 12 月 3-6 日, 福岡国際会議場・マリンメッセ福岡, 福岡).
- 7) 岩崎倅千, 坂本明彦, 佐原潤平, 河合剛太, 山本兼由, 石浜明, 植村武史, 五十嵐一衛, 柏木敬子, 照井祐介, “細

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

胞増殖因子スペルミジンの過剰蓄積が起こす細胞毒性の機序解析”，第42回日本分子生物学会年会（2019年12月3-6日，福岡国際会議場・マリンメッセ福岡，福岡）。

- 8) 渡邊宏樹，小島文歌，山本兼由，“大腸菌バイオプロセスによる金属資源化技術の開発”，第18回微生物研究会（2019年11月9日，立教大学，東京）。
- 9) 境晋史，吉村美歩，渡邊宏樹，山本兼由，“大腸菌ニッケル恒常システムの包括的な金属応答に関する研究”，第18回微生物研究会（2019年11月9日，立教大学，東京）。
- 10) 菅原真悟，三宅裕可里，山本兼由，“高濃度EDTA存在下における大腸菌の増殖に必須な二成分制御系 第5回法政大学・立教大学微生物研究会”，第5回法政大学・立教大学微生物研究会（2019年8月30日，立教大学，東京）。
- 11) 飯野響歌，三宅裕可里，山本兼由，“大腸菌 Mar/Sox/Rob レギュロンによる適応増殖への寄与”，第5回法政大学・立教大学微生物研究会（2019年8月30日，立教大学，東京）。
- 12) 千野仁誉，山本兼由，“*Pseudomonas putida*の二成分制御系によるマンガン酸化の制御”，第5回法政大学・立教大学微生物研究会（2019年8月30日，立教大学，東京）。
- 13) M. Miyake, H. Watanabe, K. Yamamoto, A. Ishihama, “REGULATORY ROLES OF PYRUVATE-SENSING TWO-COMPONENT SYSTEM PyrSR (YpdAB) IN ESCHERICHIA COLI K-12”, 8th Congress of European Microbiologists (FEMS2019) (2019年7月7-11日, Glasgow, UK). 『FEMS Congress Attendance Grant for 8th Congress of European Microbiologists』
- 14) 三宅裕可里，菅原真悟，山本兼由，“大腸菌二成分制御系遺伝子多重欠失株の構築”，第16回21世紀大腸菌研究会（2019年5月29-30日，琵琶湖ホテル，大津市）。
- 15) 田島玖美子，山本兼由，“大腸菌の増殖開始初期における核様体タンパク質 Fis の役割”，第16回21世紀大腸菌研究会（2019年5月29-30日，琵琶湖ホテル，大津市）。

鳥飼 弘幸

<招待講演>

- 1) 鳥飼弘幸，“非同期セルオートマトンを用いた生物・神経模倣回路の設計”，電子情報通信学会複雑コミュニケーションサイエンス研究会，（2020年3月25日，法政大学，市ヶ谷）

渡邊 雄二郎

<一般講演>

- 1) 渡邊雄二郎，渡邊聖央，田村堅志，“ゼオライトA/アパタイト複合体によるアンモニウムイオンとリン酸イオンの同時除去”，無機マテリアル学会第138回学術講演会，(2)（2019年6月6日，八王子市学園都市センター イベントホール，八王子市）。
- 2) 渡邊雄二郎，“粘土鉱物の高機能化”，2019年度第1回 粉体工学会 関東談話会（2019年6月12日法政大学小金井キャンパス西館地下1階マルチメディアホール，小金井市）。
- 3) 緑川慶，山田武，田村堅志，渡邊雄二郎，“粘土/無水マレイン酸変性ポリプロピレンナノコンポジットの中性子準弾性散乱”，第63回粘土科学討論会，(P21)（2019年9月11日，埼玉大学全学講義棟1号館，さいたま市）。
- 4) 渡邊雄二郎，須貝彩夏，田村堅志，“アパタイト被覆天然ゼオライト及び雲母による Cs と Sr の吸着”，第63回粘土科学討論会，(P8)（2019年9月11日，埼玉大学全学講義棟1号館，さいたま市）。
- 5) 田村堅志，加藤智穂，渡邊雄二郎，井伊伸夫，加門真純，“粘土/無水マレイン酸変性ポリプロピレンナノコンポジットの中性子準弾性散乱”，第63回粘土科学討論会，(A2)（2019年9月10日，埼玉大学全学講義棟1号館，さいたま市）。
- 6) T. Fukuoka, Y. Harada, A. Okubo, Y. Moriyoshi, K. Tamura and Y. Watanabe ” Microstructure and grain growth of mullite by reaction sintering of α -alumina with rhyolite” 16th Biennial Worldwide Congress UNITECRA 2019, 14A-15. (2019年10月14日，パシフィコ横浜，横浜市）。
- 7) 不破一，戸口美佳，渡邊雄二郎，“天然ゼオライト/アパタイト複合粒子及びシートを用いた植物生育評価”，第34回日本イオン交換研究発表会，(IP-02)（2019年10月24日，山形大学工学部，米沢市）。
- 8) 山中隆蔵，緑川慶，田村堅志，渡邊雄二郎，“セシウム吸着モルデナイトのポルサイト転換条件の検討”，無機マテリアル学会第139回学術講演会，(22)（2019年11月14日，東北大学大学院環境科学研究科本館（大講堂、2F04），仙台市）。

緒方 啓典

<招待講演>

- 1) T. Ishigaki, T. Uchikoshi, Y. Tsujimoto, H. Ogata, C. Zhang, D. Hao, “Enhancing Visible light Photocatalytic Activity of High Concentration Nb-doped TiO₂ through High-Temperature Heat Treatment”，The 11th Int. Conf.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

on Science and Technology for Advanced Ceramics, 1p-202B-12 (2019年7月9日, つくば国際会議場, つくば市).

<一般講演>

- 1) 永井涼, 片岡洋右, 緒方啓典, “分子動力学シミュレーションによる単層カーボンナノチューブ内包多環芳香族炭化水素分子の一次元積層構造の研究”, 日本コンピュータ化学会 2019 年春季年会(2019 年 2019 年 6 月 7 日, 東京工業大学, 東京).
- 2) R. Nagai, Y. Kataoka, H. Ogata, “Study on one-dimensional stacking structure of polycyclic aromatic hydrocarbon molecules encapsulated in single-walled carbon nanotubes by molecular dynamics simulations II”, The 57th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium (September 5th., 2019, Nagoya University, Nagoya).
- 3) H. Ogata, M. Ide, Y. Otsuka, M. Nakamura, “Development and properties of novel functional materials using a metabolic intermediate of lignin, 2-pyrone-4,6-dicarboxylic acid”, 1st International Lignin Symposium(September 14th, 2019, Hokkaido University, Sapporo)
- 4) 緒方啓典, 西村智朗, 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 梅田龍介, “ハロゲン化鉛ペロブスカイト化合物薄膜におけるイオン照射効果(III)”, 2019 年第 80 回応用物理学会秋季学術講演会(2019 年 9 月 19 日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 5) 深澤祐輝, 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 梅田龍介, 緒方啓典, “有機-無機ペロブスカイト化合物薄膜の耐久性評価(IV)”, 2019 年第 80 回応用物理学会秋季学術講演会(2019 年 9 月 20 日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 6) 小林敏弥, 伊東和範, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “表面処理を施した正孔輸送層を用いた逆構造型ペロブスカイト太陽電池の作製及び特性評価”, 2019 年第 80 回応用物理学会秋季学術講演会(2019 年 9 月 20 日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 7) 牛腸雅人, 伊東和範, 小林敏弥, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “ハロゲン化鉛ペロブスカイトナノ結晶薄膜の作成および物性評価 II”, 2019 年第 80 回応用物理学会秋季学術講演会(2019 年 9 月 20 日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 8) 梅田龍介, 伊東和範, 牛腸雅人, 小林敏弥, 深澤祐輝, 緒方啓典, “ハロゲン化セシウム鉛ペロブスカイト薄膜の作製と特性評価”, 2019 年第 80 回応用物理学会秋季学術講演会(2019 年 9 月 20 日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 9) 伊東和範, 梅田龍介, 小林敏弥, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 緒方啓典, “ペロブスカイト太陽電池を構成する電子輸送層の表面処理効果(II)”, 2019 年第 80 回応用物理学会秋季学術講演会(2019 年 9 月 20 日, 北海道大学札幌キャンパス, 札幌).
- 10) Y. Kataoka, K. Goto, H. Ogata, Y. Moriyoshi, “The Compressive Strength of Sintered Alumina by Molecular Dynamics Simulation”, Unified International Technical Conference on Refractories(UNITECR 2019)(October 15th 2019, PACIFICO Yokohama, Yokohama).
- 11) 永井涼, 緒方啓典, 片岡洋右, “分子動力学シミュレーションによる単層カーボンナノチューブ内包多環芳香族炭化水素分子の一次元積層構造の研究(II)”, 日本コンピュータ化学会 2019 年秋季年会(2019 年 10 月 24 日, JMSアステールプラザ, 広島市).
- 12) 緒方啓典, 長嶺侑史, 阿部雄帆, “単層カーボンナノチューブ薄膜のキャリアの種類および熱電特性の制御”, 第 29 回日本 MRS 年次大会(2019 年 11 月 27 日, 横浜市).
- 13) 永井涼, 片岡洋右, 緒方啓典, “多環芳香族炭化水素分子カプセル化単層カーボンナノチューブの分子動力学シミュレーション(III)”, 第 29 回日本 MRS 年次大会(2019 年 11 月 27 日, 横浜市).
- 14) T. Kobayashi, M. Gocho, K. Ito, Y. Fukazawa, R. Umeda, H. Ogata, “Fabrication and Properties of Inverted Perovskite Solar Cells with Surface-Treated Hole Transport Layer”, 2019 MRS Fall Meeting(Dec. 2nd. 2019, Boston MA, USA).
- 15) Y. Fukazawa, M. Gocho, K. Ito, T. Kobayashi, R. Umeda, H. Ogata, “Evaluation of Durability of Organic-Inorganic Perovskite Compound Films II”, 2019 MRS Fall Meeting(Dec. 4th 2019, Boston MA, USA).
- 16) H. Ogata, T. Nishimura, R. Umeda, K. Ito, M. Gocho, T. Kobayashi, Y. Fukazawa, “Modification of the Electronic Properties of Lead Halide Perovskite Films by Low Energy Ion Irradiation”, 2019 MRS Fall Meeting(Dec. 4th 2019, Boston MA, USA).
- 17) R. Umeda, K. Ito, M. Gocho, T. Kobayashi, Y. Fukazawa, H. Ogata, “Fabrication and Characterization of All-Inorganic Lead Halide Perovskite Films”, 2019 MRS Fall Meeting(Dec. 5th 2019, Boston MA, USA).
- 18) H. Ogata, T. Nishimura, Y. Fukazawa, M. Gocho, K. Ito, T. Kobayashi, R. Umeda, “Effect of Low Energy Ion Irradiation on the Optical and Electronic properties of Perovskite Solar Cells”, Materials Research Meeting

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- 2019(MRM2019), (Dec. 12th 2019, Yokohama).
- 19) T. Kobayashi, M. Gocho, K. Ito, Y. Fukazawa, R. Umeda, H. Ogata, “Fabrication and properties of inverted perovskite solar cells with surface-treated nickel oxide films”, Materials Research Meeting 2019(MRM2019), (Dec. 13th 2019, Yokohama).
 - 20) Y. Fukazawa, M. Gocho, K. Ito, T. Kobayashi, R. Umeda, H. Ogata, “Evaluation of durability of perovskite solar cells with mixed cations and halide anions”, Materials Research Meeting 2019(MRM2019), (Dec. 13th 2019, Yokohama).
 - 21) 牛腸雅人, 伊東和範, 小林敏弥, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “ハロゲン化鉛ペロブスカイトナノ結晶薄膜の作成及び物性評価”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 22) 梅田龍介, 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 緒方啓典, “ハロゲン化セシウム鉛ペロブスカイト薄膜へのポスト処理効果”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 23) 深澤祐輝, 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 梅田龍介, 緒方啓典, “混合有機-無機ペロブスカイト化合物薄膜の各種環境下における耐久性評価”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 24) 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “酸化亜鉛を電子輸送層に用いたペロブスカイト太陽電池の表面処理効果”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 25) 小林敏弥, 伊東和範, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “表面処理を施した正孔輸送層を用いた逆構造型ペロブスカイト太陽電池の作製および物性評価”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 26) 沢田淳一, 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “ビスマス系ペロブスカイト化合物薄膜の構造と物性”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 27) 横川聖一, 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “ハロゲン化鉛ペロブスカイト単結晶の物性評価”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 28) 秦颯希, 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “2D-3D ペロブスカイト化合物薄膜の作製と構造評価”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 29) 森井寛之, 深澤祐輝, 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 梅田龍介, 緒方啓典, “PbS 量子ドットの作製および同薄膜の物性評価”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 30) 永井涼, 片岡洋右, 緒方啓典, “分子動力学シミュレーションによる単層カーボンナノチューブ内包多環芳香族化合物の局所構造の研究”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 31) 阿部雄帆, 長嶺佑史, 緒方啓典, “単層カーボンナノチューブの金属-半導体分離と金属単層カーボンナノチューブの物性評価”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 32) 長嶺佑史, 阿部雄帆, 緒方啓典, “半導体単層カーボンナノチューブ薄膜への化学ドーピングによる物性制御”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 33) 沼田駿佑, 緒方啓典, “プラズマCVD法により各種基板上に作製したナノカーボン薄膜の構造と物性”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 34) 井手克, 緒方啓典, “非対称ドナーを用いた電荷移動錯塩の合成と物性評価”, 第38回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム(2019年12月18日, 法政大学, 小金井市).
 - 35) 沢田淳一, 梅田龍介, 伊東和範, 牛腸雅人, 小林敏弥, 深澤祐輝, 秦颯希, 緒方啓典, “ビスマス系化合物薄膜の構造と物性評価”, 第67回応用物理学会春季学術講演会(2020年3月13日, 上智大学四谷キャンパス, 東京).
 - 36) 秦颯希, 伊東和範, 小林敏弥, 牛腸雅人, 深澤祐輝, 梅田龍介, 緒方啓典, “二次元/三次元混合ハロゲン化鉛ペロブスカイト化合物薄膜の耐久性評価”, 第67回応用物理学会春季学術講演会(2020年3月13日, 上智大学四谷キャンパス, 東京).
 - 37) 梅田龍介, 伊東和範, 牛腸雅人, 小林敏弥, 深澤祐輝, 緒方啓典, “ハロゲン化セシウム鉛ペロブスカイト薄膜への表面処理効果が耐久性およびキャリア輸送特性に与える効果”, 第67回応用物理学会春季学術講演会(2020年3月13日, 上智大学四谷キャンパス, 東京).
 - 38) 緒方啓典, 西村智朗, 梅田龍介, “ハロゲン化鉛ペロブスカイト化合物薄膜におけるイオン照射効果(IV)”, 第67回応用物理学会春季学術講演会(2020年3月15日, 上智大学四谷キャンパス, 東京).

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

石垣 隆正

＜招待講演＞

- 1) T. Ishigaki, T. Uchikoshi, Y. Tsujimoto, H. Ogata, C. Zhang, D. Hao, “Enhancing Visible light Photocatalytic Activity of High Concentration Nb-doped TiO₂ through High-Temperature Heat Treatment”, The 11th Int. Conf. on Science and Technology for Advanced Ceramics, 1p-202B-12 (2019年7月9日, つくば国際会議場, つくば市).
- 2) N. Tarutani, Y. Tokudome, M. Takahashi, T. Ishigaki, “Synthesis of Hydroxide-based Organic-Inorganic Hybrid Nanoclusters towards Functional Porous Materials”, 3rd International Symposium of Silsesquioxane-based Functional Materials, IL-2 (2019年7月25日, 桐生市市民文化会館, 桐生市)

＜一般講演＞

- 1) 牧野広季, 樽谷直紀, 石垣隆正, 打越哲郎, “六角板状酸化亜鉛微粒子を種とした水熱法配向成長”, 無機マテリア学会第138回学術講演会, (4) (2019年6月6日, 八王子市学園都市センター, 八王子).
- 2) R. Kato, N. Tarutani, T. Ishigaki, T. Uchikoshi, “Synthesis of Visible Light-Active Nb-doped TiO₂ Photocatalyst by a Mechanochemical Method”, The 11th Int. Conf. on Science and Technology for Advanced Ceramics, 1P-08 (2019年7月9日, つくば国際会議場, つくば市).
- 3) T. Ohsawa, T. Hosaka, T. Ishigaki, N. Ohashi, “Investigation of Intrinsic Defects in Titanium Oxide Surfaces using High-temperature Photoemission Spectroscopy”, The 11th Int. Conf. on Science and Technology for Advanced Ceramics, 3a-405-11 (2019年7月10日, つくば国際会議場, つくば市).
- 4) T. Hosaka, T. Ohsawa, H. Montigaud, T. Ishigaki, N. Ohashi, “Electronic States and Polar Structures of ZnO/Ag Junctions by X-ray Photoelectron Spectroscopy”, The 11th Int. Conf. on Science and Technology for Advanced Ceramics, 2P-37 (2019年7月10日, つくば国際会議場, つくば市).
- 5) 中村さくら, 樽谷直紀, 石垣隆正, “液相レーザーアブレーション法による炭酸カルシウム微粒子合成の試み”, 第1回酸素酸塩材料科学研究会, (9) (2019年7月27日, 日本大学理工学部, 文京区).
- 6) N. Tarutani, R. Sato, M. Hashimoto, T. Ishigaki, “Layered metal hydroxide crystals in single-nanometer scale for nano-building approach toward ordered mesoporous materials”, XX International Sol-Gel Conference, 106 (2019年8月25日, ITMO University Congress Area, St. Petersburg, Russia)
- 7) 保坂拓己, 大澤健男, H. Montigaud, 石垣隆正, 大橋直樹, “スパッタリング法により作製した ZnO/Ag 接合の極性と電子状態変化の評価”, 第35回日本セラミックス協会関東支部研究報告会, 2p-16 (2019年9月4日, つくば国際会議場, つくば市). 『優秀ポスター賞』
- 8) 中村さくら, 樽谷直紀, 石垣隆正, “液相レーザーアブレーション法による炭酸カルシウム微粒子合成”, 無機マテリア学会第139回学術講演会, (28) (2019年11月15日, 東北大学, 仙台市).
- 9) T. Ishigaki, S. A. Al-Mamun, “Phase Formation of Y₂O₃ Nano-size Powders through Rapid Cooling Process”, The 16th Unified Int. Technical Conf. on Refractories (UNITECR 2019), 14-A-20 (2019年11月14日, パシフィコ横浜, 横浜市).
- 10) T. Ishigaki, T. Kanemaru, A. Watanabe, “Synthesis of Mn-doped TiO₂ Nanoparticles by Laser-Induced Plasma in Aqueous Solutions”, The 11th Asia-Pacific International Symposium on the Basics and Applications of Plasma Technology (APSPT-11), C-6 (2020年12月12日, 金沢商工会議所, 金沢市)
- 11) 加藤龍磨, 樽谷直紀, 小安智士, 石垣隆正, 打越哲郎, “メカノケミカル法合成 Nb-TiO₂ 光触媒の高温熱処理と可視光活性”, 第58回セラミックス基礎科学討論会, 1E15 (2020年1月9日, ウィンクあいち (愛知県産業労働センター), 名古屋市)
- 12) 村上大晟, 保坂拓己, 大澤健男, 大垣武, 上田茂典, 石垣隆正, 大橋直樹, “金属/Nb:SrTiO₃ ショットキー接合の電流-電圧特性と水素不純物添加効果”, 応用物学会2020年春季学術講演会, 12p-D411-3 (2020年3月12日発表予定, 上智大学, 千代田区)

杉山 賢次

＜一般講演＞

- 1) 田村大河, 杉山賢次, “ポリ[2-(N,N-ジメチルアミノ)エチルメタクリレート]含有感温性ブロック共重合体の合成と溶液挙動”, 第68回高分子学会年次大会, 3Pd016 (2019年5月31日, 大阪府立国際会議場, 大阪市)
- 2) 丹波美月, 中村公美, 佐藤友紀, 杉山賢次, “ポリ(メタクリル酸パーフルオロアルキル)含有ブロック共重合体の表面構造解析”, 第68回高分子学会年次大会, 3Pd020 (2019年5月31日, 大阪府立国際会議場, 大阪市)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- 3) 中村公美, 杉山賢次, ”側鎖にパーフルオロアルキル基, ステアリル基, オキシエチレン鎖を有するポリメタクリル酸エステル共重合体の表面特性”, 第68回高分子討論会, 2Pb014 (2019年9月26日, 福井大学, 福井市)
- 4) 橋本理沙, 椎橋祐太, 杉山賢次, ”オリゴフルオレン含有ポリスチレンの合成と蛍光特性”, 第68回高分子討論会, 2Pa023 (2019年9月26日, 福井大学, 福井市)
- 5) 柗田洗樹・杉山賢次, ”(PCL-graft-PHEMA)-b-POEGMA の合成と溶液挙動”, 第68回高分子討論会, 2Pf010 (2019年9月26日, 福井大学, 福井市)
- 6) 廣瀬和朋・仲宗根花南・杉山賢次, ”鎖末端にパーフルオロアルキル基を有するポリカプロラク톤の表面特性と生分解性”, 第68回高分子討論会, 2Pe011 (2019年9月26日, 福井大学, 福井市)

明石 孝也

<一般講演>

- 1) 小野裕一, 片山英樹, 明石孝也, 佐藤妃奈, 長澤慎, ”鉄鋼材料の大気腐食挙動に及ぼすNi添加の影響”, 腐食防食学会・材料と環境2019, B-105 (2019年5月21~23日, 大宮ソニックシティ, さいたま市).
- 2) 明石孝也, ”噴流床を用いた熱還元-酸化による廃LED素子からの酸化ガリウム分離・回収”, 2019年度第1回粉体工学会関東談話会, (2019年6月12日, 法政大学, 小金井市). 招待講演
- 3) T. Yamashita, H. Watanabe, T. Akashi, ”Carbon Nanotube Growth on Discontinuous Alumina Buffer Layer”, The 57th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, 3P-17 (2019年9月3~5日, 名古屋大学, 京都市).
- 4) Y. Nishimoto, K. Kobayashi, T. Akashi, T. S. Suzuki, ”Phase Relationship in the Quasi-Ternary LaO_{1.5}-SiO₂-NiO System at 1573 K”, 1P-27 (The 11th International Conference on the Science and technology for Advanced Ceramics (STAC11), 2019年7月9~11日, つくば国際会議場 (EPOCHAL), つくば市).
- 5) 小野裕一, 片山英樹, 明石孝也, 佐藤妃奈, 長澤慎, ”鉄鋼材料の初期大気腐食挙動におけるNi添加効果”, 腐食防食学会 第66回材料と環境討論会, 108S (2019年10月20~23日, 札幌市教育文化会館, 札幌市).
- 6) T. Akashi, Y. Sakai, ”Separation and Recovery of Gallium Oxide from Discarded LED Device by Thermal reduction and Oxidation using Spouted Bed”, 16-A-1, Unified International Technical Conference on Refractories (UNITECR2019), (2019年10月13~16日, パシフィコ横浜, 横浜市).
- 7) S. Takano, K. Kobayashi, T. Uchikoshi, T. Akashi, T. S. Suzuki, ”Crystalline-oriented Silicate Oxyapatite Ceramics Fabricated by Electrophoretic Deposition under a Strong Magnetic Field”, The 13th Pacific Rim Conference of Ceramic Societies (PACRIM13), 28-P-S11-03 (2019年10月27日~11月1日, 沖縄コンベンションセンター, 宜野湾市) .
- 8) Y. Nishimoto, K. Kobayashi, T. Akashi, T. S. Suzuki, ”Phase Relationship in the Quasi-Ternary LaO_{1.5}-SiO₂-NiO System at 1573 K”, The 13th Pacific Rim Conference of Ceramic Societies (PACRIM13), 29-P-S02-14 (2019年10月27日~11月1日, 沖縄コンベンションセンター, 宜野湾市).
- 9) N. Hamada, N. Iwata, T. Akashi, T. Mori, ”Thermal Expansion and Shrinkage during a Heating Stage of Firing of BaTiO₃ Powder Compact at Various Heating Rates”, The 13th Pacific Rim Conference of Ceramic Societies (PACRIM13), 29-P-S13-17 (2019年10月27日~11月1日, 沖縄コンベンションセンター, 宜野湾市) .

三島 友義

<招待講演>

- 1) 三島友義, ”PEC エッチングによるメサ構造 GaN p-n 接合ダイオード”, 2019年秋期応用物理学会講演会、北海道大学、2019/9/18-21.
- 2) F. Horikiri, N. Fukuhara, H. Ohta, N. Asai, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, M. Toguchi, K. Miwa, T. Sato, ”GaN Wet Etching Process for Power and RF Devices”, 2019 International Conference on Solid State Devices and Materials (SSDM2019), Nagoya University, 2019/9/2-5.
- 3) F. Horikiri, N. Fukuhara, H. Ohta, N. Asai, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, M. Toguchi, K. Miwa, T. Sato, ”GaN wet etching process”, 13th Topical Workshop on Heterostructure Microelectronics (TWHM 2019), Hotel Grand Terrace Toyama, 2019/8/26-29.
- 4) T. Mishima, ”High Breakdown Voltage Vertical p-n Junction GaN Diodes”, 13th International Conference on Nitride Semiconductors 2019 (ICNS-13), Bellevue, Washington, USA, 2019/7/7-12.
- 5) F. Horikiri, N. Fukuhara, H. Ohta, N. Asai, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, M. Toguchi, K. Miwa, T. Sato, ”GaN Wet Etching Process for Power and RF Devices”, 2019 Asia-Pacific Workshop on Fundamentals and Applications of Advanced Semiconductor Devices (AWAD 2019), Busan, Korea, 2019/7/1-3.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- 6) F. Horikiri, H. Ohta, N. Asai, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, "Fabrication of Gallium Nitride Deep-Trench Structures by Photoelectrochemical Etching", CS MANTECH 2019 Conference, Minneapolis, USA, 2019/4/29-5/2.
- 7) T. Mishima, "Vertical GaN p-n junction diodes fabricated on GaN substrates", Materials Research Meeting 2019 (MRM2019), Yokohama Symposia, 2019/12/10-13.
- <一般講演>
- 1) 太田博, 浅井直美, 堀切文正, 成田好伸, 吉田丈洋, 三島友義, "転位上に形成した微小径 p-n 接合ダイオードにおける電流量減少", 2020 年春期応用物理学会講演会、上智大学、2020/3/12-15.
- 2) 望月和浩, 堀切文正, 太田博, 三島友義, "基板オフ角依存 GaN 中 C 濃度のステップ端偏析モデルに基づく解釈", 2020 年春期応用物理学会講演会、上智大学、2020/3/12-15.
- 3) 松田陵, 堀切文正, 福原昇, 成田好伸, 吉田丈洋, 三島友義, 塩島謙次, "界面顕微光応答法によるコンタクトレス光電気化学エッチングした Ni/n-GaN ショットキーの 2 次元評価", 2020 年春期応用物理学会講演会、上智大学、2020/3/12-15.
- 4) 堀切文正, 福原昇, 太田博, 浅井直美, 成田好伸, 吉田丈洋, 三島友義, 渡久地政周, 三輪和希, 佐藤威友, "GaN の光電気化学(PEC)エッチングが有する可能性 ③加熱によるエッチング速度の向上", 2020 年春期応用物理学会講演会、上智大学、2020/3/12-15.
- 5) H. Ohta, N. Asai, F. Horikiri, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, "High breakdown-capability vertical GaN p-n junction diodes", Materials Research Meeting 2019 (MRM2019), Yokohama Symposia, 2019/12/10-13.
- 6) H. Ohta, N. Asai, F. Horikiri, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, "High Breakdown Voltage Vertical GaN p-n Junction Diodes with Reversible Characteristics", The 9th Asia-Pacific Workshop on Widegap Semiconductors (APWS2019), OIST Okinawa, 2019/11/10-15.
- 7) 太田博, 浅井直美, 堀切文正, 成田好伸, 吉田丈洋, 三島友義, "低転位密度 GaN 基板による p-n 接合ダイオードのオン抵抗低減効果", 2019 年秋期応用物理学会講演会、北海道大学、2019/9/18-21.
- 8) 松田陵, 堀切文正, 成田好伸, 吉田丈洋, 三島友義, 塩島謙次, "界面顕微光応答法による電気化学エッチングした Ni/GaN ショットキーの 2 次元評価 (II)--n 形と p 形の比較--", 2019 年秋期応用物理学会講演会、北海道大学、2019/9/18-21.
- 9) K. Shiojima, T. Sagawa, F. Horikiri, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, "Effect of Wafer Off-Angles on Defect Formation in Drift Layers Grown on Freestanding GaN substrates", 2019 International Conference on Solid State Devices and Materials (SSDM2019), Nagoya University, 2019/9/2-5.
- 10) H. Ohta, N. Asai, F. Horikiri, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, "High breakdown voltage vertical GaN p-n junction diodes with excellent breakdown capabilities by application of a two-step mesa structure", 13th International Conference on Nitride Semiconductors 2019 (ICNS-13), Bellevue, Washington, USA, 2019/7/7-12.
- 11) F. Horikiri, N. Fukuhara, H. Ohta, N. Asai, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, M. Toguchi, K. Miwa, T. Sato, "Simple Wet-etching for GaN using an Electrodeless Photo-assisted Electrochemical Reaction with a Luminous Array Film as the UV Source", 13th International Conference on Nitride Semiconductors 2019 (ICNS-13), Bellevue, Washington, USA, 2019/7/7-12.
- 12) J. Takino, T. Sumi, Y. Okayama, M. Nobuoka, A. Kitamoto, M. Imanishi, M. Yoshimura, N. Asai, H. Ohta, T. Mishima Y. Mori, "Vertical GaN p-n diodes on low dislocation and low resistive GaN wafer produced by OVPE method", 13th International Conference on Nitride Semiconductors 2019 (ICNS-13), Bellevue, Washington, USA, 2019/7/7-12.
- 13) H. Ohta, N. Asai, F. Horikiri, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, "Impact of Lowering Threading Dislocation Density on Performances of Vertical GaN p-n Junction Diodes", Compound Semiconductor Week 2019, Kasugano International Forum, Nara, 2019/5/19-23.
- 14) F. Horikiri, H. Ohta, N. Asai, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, "The Effect of Tetramethylammonium Hydroxide Treatment on Photoelectrochemically Etched Gallium Nitride Trench Structures", Compound Semiconductor Week 2019, Kasugano International Forum, Nara, 2019/5/19-23.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

中村 俊博

<一般講演>

- 1) 大串聡壮, 中村俊博, ” Eu 賦活ストロンチウムアルミネート赤色蛍光体の発光特性”, 第 80 回応用物理学会秋季学術講演会, 21a-E302-6 (2019 年 9 月 21 日, 北海道大学, 札幌) .
- 2) 大坪準, 越田信義, 中村俊博, ” 多孔質 Si の破碎により作製したナノ結晶 Si コロイド粒子の発光特性と表面状態の影響”, レーザー学会学術講演会第 40 回年次大会, F02-20p-XI-05 (2020 年 1 月 20 日, 仙台国際センター, 仙台市) .
- 3) 小松 亮介, 山本 泰生, 中村俊博, ” 高強度レーザー照射により酸化亜鉛マイクロ粒子表面に形成したナノ構造からのランダムレーザー発振”, レーザー学会学術講演会第 40 回年次大会, F05-21p-XI-04 (2020 年 1 月 21 日, 仙台国際センター, 仙台市) .

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究所 HP : <https://www.hosei.ac.jp/application/files/4015/7041/5715/2019.pdf>
- ・掲載誌の目次, 学会開催資料。

③研究成果に対する社会的評価 (書評・論文等)

※研究所 (センター) がこれまでに発行した刊行物に対して 2019 年度に書かれた書評 (刊行物名、件数等) や 2019 年度に引用された論文 (論文タイトル、件数等)、2019 年度の web サイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

ニュースリリース

- ・2020 年 9 月 13 日に、ペロブスカイト太陽電池における電子輸送層の材料および 成膜方法に関する研究が、工業的に注目すべき研究成果として、カナダのリサーチ会社 Advances in Engineering 社のホームページに掲載された。
(<https://advanceseng.com/sol-gel-processed-niobium-oxide-thin-film-scaffold-layer-perovskite-solar-cells/>)
- ・2019 年 10 月 16 日に「光合成を駆動しない遠赤色光が光合成を促進する」の題目で東京大学, 法政大学, 神奈川大学の 3 大学で共同ニュースリリースした。
(<https://www.u-presscenter.jp/2019/10/post-42400.html>)
- ・2020 年 2 月 27 日に「新しいゲノム編集技術 HoSeI 法を開一HoSeI 法により細菌適応増殖は複数遺伝子が相互作用するエピスタシス現象であることを実証」の題目で法政ニュースリリースに掲載された。
(<http://www.hosei.ac.jp/NEWS/newsrelease/200227.html>)

学術雑誌の表紙掲載

- ・2020 年 8 月 19 日に、レーザー照射法により簡易に作製可能なナノ結晶 Si コロイド粒子のバイオイメージング応用に関する論文が、Wiley 社出版の学術雑誌 ChemNanoMat の Cover picture に選出された。
(<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/abs/10.1002/cnma.201900449>)

受賞

- ・2019 年 6 月 7 日に生命科学部環境応用化学科、石垣隆正教授が、日本セラミックス協会フェロー表彰を受賞した。
- ・2019 年 4 月 26 日に鹿児島市・SHIROYAMA HOTEL Kagoshima で開催された The 8th International Conference on Manufacturing, Machine Design and Tribology における大学院生の発表「Performance Evaluation for Bubble Eliminator with CFD -Effect of Computational Model and Mesh-」が、『Best Poster Award』を受賞。
- ・2019 年 7 月 7-11 日にイギリス・グラスゴーで開催された 8th Congress of European Microbiologists (FEMS2019) における大学院生の発表「Regulatory Roles of Pyruvate-Sensing Two-Component System PyrSR (YpdAB) in Escherichia coli K-12」が、『FEMS Congress Attendance Grant for 8th Congress of European Microbiologists』を受賞。
- ・2019 年 9 月 4 日につくば市・つくば国際会議場で開催された第 35 回日本セラミックス協会関東支部研究報告会における大学院生の発表「スパッタリング法により作製した ZnO/Ag 接合の極性と電子状態変化の評価」が、『優秀ポスター賞』を受賞。
- ・2019 年 9 月 6 日につくば市・筑波山江戸屋で開催されたグラム陽性菌ゲノム機能会議における大学院生の発表「枯草菌最外層形成に関与するタンパク質の解析」が、『優秀発表賞』を受賞。
- ・2019 年 9 月 26 日に宮崎市・シーガイアコンベンションセンターで開催された日本生物物理学会における大学院生の

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

発表「Morphological changes of liposomes depending on density of encapsulated *E. coli*」が、『学生発表賞』を受賞。

招待講演

- ・国内学会 4 件、国際会議 8 件

センター員が学術雑誌に掲載した論文の引用件数（文献データベース SCOPUS による 2019 年の引用件数）

1,540 件

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・掲載誌の目次、学会開催資料。
- ・SCOPUS のウェブサイト (<https://www.scopus.com/search/form.uri?display=basic>)

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

2019 年度は外部評価を受けなかった。

- ・法政大学の「法政大学サステナビリティ実践知研究機構規程」に従い、研究センターの運営委員会が内部質保証推進の役割を担った。
- ・構成：センター長、事務担当で構成、計 9 名。
- ・運営：センター長が招集し毎月一回開催される。基本テーマの進捗状況等を各テーマの担当者が報告・協議し、各基本テーマの連携を確認・検証し、センター長が各基本テーマ間の調整および研究統括を行った。センター構成員の研究推進の確認・検証とともに、新たな外部資金申請のための理念・目的の検証・立案を行った。
- ・運営委員会の中に年報編纂、ホームページ更新のためのワーキンググループを設置して、年報編纂、ホームページ更新のためのデータ収集作業を通じて、研究成果をチェックし、PDCA サイクル整備と内部質保証のためのシステムを構築している。
- ・研究センター主催の公開セミナーにおいて、発表・討論を行うことにより、構成員の研究成果の相互検証につとめた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・運営委員会議事資料（2019 年度第 1 回～11 回）
- ・ホームページ データベース・研究所報告（<https://www.hosei.ac.jp/nano/press/achievement/>）
セミナーのお知らせ（<https://www.hosei.ac.jp/nano/>）

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

外部資金獲得状況（省庁競争的資金・受託研究・寄付研究等）

- ・2019 年度中に応募した科研費等外部資金
NEDO 事業、科研費の基盤 A 等比較的大型の外部資金への申請を積極的におこなった。
科研費：19 件（基盤 A への 2 件の申請を含む）
NEDO 事業：1 件

- ・2019 年度中に採択を受けた科研費等外部資金

①科学研究費助成事業（科研費）

2019 年 新規採択課題

【代表】

曾和 義幸	（生命）	4,500,000 円	H31～R2	合計
渡邊 雄二郎	（生命）	480,000 円	H31	合計
笠原 崇史	（理工）	3,300,000 円	H31～R2	合計
田島 寛隆	（客員）	1,900,000 円	H31～R3	合計

2019 年継続課題

【代表】

安田 彰	（理工）	3,700,000 円	H29～H31	合計
------	------	-------------	---------	----

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

水澤 直樹	(生命)	3,700,000 円	H29~H31	合計
明石 孝也	(生命)	3,700,000 円	H29~H31	合計
川岸 郁朗	(生命)	14,300,000 円	H29~H31	合計
石黒 亮	(客員)	3,800,000 円	H29~H31	合計
鈴木 祥太	(客員)	3,300,000 円	H29~H31	合計
鳥飼 弘幸	(理工)	3,400,000 円	H30~R2	合計
廣野 雅文	(生命)	13,500,000 円	H30~R2	合計
田中 豊	(デ工)	3,400,000 円	H30~R2	合計
【分担】				
曾和 義幸	(生命)	500,000 円	H31	研究代表者：廣野 雅文
西村 智朗	(イオン)	600,000 円	H31	研究代表者：学外
②受託研究費：新規受入れ 10 件				
辻田星歩	(理工)	1,200,000 円	(1 件)	
安田彰	(理工)	20,120,040 円	(合計額 3 件)	
笠原崇史	(理工)	500,000 円	(1 件)	
明石孝也	(生命)	9,140,846 円	(合計額 2 件)	
三島友義	(イオン)	98,000,000 円	(1 件)	
西村智朗	(イオン)	11,000,046 円	(1 件)	
田中豊	(デ工)	2,780,000 円	(1 件)	
③共同研究：新規受入れ 8 件				
御法川学	(理工)	500,000 円	(1 件)	
安田彰	(理工)	4,334,000 円	(合計額 4 件)	
渡邊雄二郎	(生命)	2,729,000 円	(1 件)	
山本兼由	(生命)	4,000,000 円	(1 件)	
三島友義	(イオン)	1,000,000 円	(1 件)	
④寄付研究：新規受入れ 13 件				
御法川学	(理工)	1,500,000 円	(合計額 2 件)	
安田彰	(理工)	500,000 円	(1 件)	
中村俊博	(理工)	2,000,000 円	(1 件)	
明石孝也	(生命)	1,050,000 円	(合計額 2 件)	
石垣隆正	(生命)	50,000 円	(1 件)	
緒方啓典	(生命)	50,000 円	(1 件)	
杉山賢次	(生命)	800,000 円	(1 件)	
常重アントニオ	(生命)	1,300,000 円	(1 件)	
山本兼由	(生命)	2,000,000 円	(1 件)	
渡邊雄二郎	(生命)	550,000 円	(合計額 2 件)	
⑤その他競争的資金：新規受入れ 2 件				
山本兼由	(生命)	14,040,000 円	(1 件)	JKA
渡邊雄二郎	(生命)	550,000 円	(1 件)	NEDO 再委託
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。				
・研究開発センター登録資料				

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・研究発表は、論文 41 件、学会発表 202 件（うち招待講演 14 件）となり、過去 5 年間の高い水準を維持した。学術雑誌に発表した多くの論文が引用され、引用数が増加した。外部資金の獲得数も多く、研究の発展に寄与した。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・新型コロナウイルスの影響により、キャンパス、センター施設の閉鎖状況が続いており、研究活動が制限されている。同様に、研究発表の場となる学会、学内外の社会連携活動の開催、あるいはその内容が制限をうけている。	

【この基準の大学評価】

<p>マイクロ・ナノテクノロジー研究センターでは、2018年度から学内プロジェクトとして開始した、「グリーンソサエティーを実現する3D先端材料プロセス」を3つの基本テーマ「A: Additive Manufacturing」、「B: Biologically mediated (inspired) Control」、「C: Chemically mediated Control」で効率的に進捗させたことを評価する。年報2018(2019年4月)を発行、雑誌論文48件、学会発表202件、ニュースリリース3件、雑誌表紙1件、表彰6件、被引用件数1540件は、外部へのアピール活動が活発に行われており、特に高く評価できる。外部資金獲得状況については、NEDO事業、科研費の基盤Aなど比較的大型の外部資金への申請を積極的に行い、継続課題を含めて、総件数48件、総研究費24376万円を獲得したことを極めて高く評価する。</p>
--

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動							
1	中期目標	①法政大学サステナビリティ実践知研究機構規程第2条「競争的資金を原資として活動を行う研究センター」として、研究活動を遂行しつつ、外部資金の獲得をめざす。当研究センター設置以来15年遂行してきたマイクロ・ナノテクノロジー研究を続けながら、学部生・院生の教育、研究の場として活用する。							
	年度目標	昨年度申請予定であった「私立大学研究ブランディング事業」の共通テーマとして示した3Dマテリアル&プロセスイノベーション研究の、共通テーマとしての検証と基礎構築を行う。また、個々のセンター構成員が外部資金獲得をめざす。							
	達成指標	「私立大学研究ブランディング事業」に換わる競争的資金の申請、あるいは申請準備のための基礎構築。センター構成員の科研費等外部資金への応募件数。							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>「グリーンソサエティーを実現する3D先端材料プロセス」に関する研究を発展させて、成果の発信につとめた。メディアから注目される成果が質・量ともに向上した。外部資金として、科研費15件(新規4件、継続11件)、受託研究費10件(NEDO事業等)、共同研究8件、寄付研究13件、その他2件を獲得した。来年度科研費申請19件を含む外部資金申請を積極的に行った。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>文科省補助金、「私立大学研究ブランディング事業」(2018年度にて新規募集停止)の後継事業は発足しなかった。センター内の複数の研究テーマを統合した研究費申請を引き続き試みる。</td> </tr> </tbody> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	A	理由	「グリーンソサエティーを実現する3D先端材料プロセス」に関する研究を発展させて、成果の発信につとめた。メディアから注目される成果が質・量ともに向上した。外部資金として、科研費15件(新規4件、継続11件)、受託研究費10件(NEDO事業等)、共同研究8件、寄付研究13件、その他2件を獲得した。来年度科研費申請19件を含む外部資金申請を積極的に行った。	改善策
執行部による点検・評価									
自己評価	A								
理由	「グリーンソサエティーを実現する3D先端材料プロセス」に関する研究を発展させて、成果の発信につとめた。メディアから注目される成果が質・量ともに向上した。外部資金として、科研費15件(新規4件、継続11件)、受託研究費10件(NEDO事業等)、共同研究8件、寄付研究13件、その他2件を獲得した。来年度科研費申請19件を含む外部資金申請を積極的に行った。								
改善策	文科省補助金、「私立大学研究ブランディング事業」(2018年度にて新規募集停止)の後継事業は発足しなかった。センター内の複数の研究テーマを統合した研究費申請を引き続き試みる。								
2	中期目標	②研究センターで得られた研究成果を広く一般の人たちに公開する。							
	年度目標	年報の定期的刊行、ホームページの継続的な更新を行い、公開型セミナーやシンポジウムを積極的に開催する。							
	達成指標	前年度の研究成果年報を刊行し、ホームページ上にもアップロードすること。また、公開型セミナーの開催件数。							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>S</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>2018年度の年報を発行し、ホームページにアップロードした。公開型セミナーである「グリーンソサエティセミナー」を3件開催した。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	S	理由	2018年度の年報を発行し、ホームページにアップロードした。公開型セミナーである「グリーンソサエティセミナー」を3件開催した。	改善策
執行部による点検・評価									
自己評価	S								
理由	2018年度の年報を発行し、ホームページにアップロードした。公開型セミナーである「グリーンソサエティセミナー」を3件開催した。								
改善策	—								
No	評価基準	社会連携・社会貢献							

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

3	中期目標	研究センターのホームページの充実と更新、産学連携活動への参加、民間企業からの委託研究の受け入れ、一般を対象とした見学会や公開講座の開設を目指す。	
	年度目標	①ホームページの内容充実と継続的な更新をすすめる。	
	達成指標	ホームページに最新の研究成果が記述されていること。セミナーの案内が掲載されていること。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		S	
理由		① 2018年度の年報のアップロード、公開型セミナーの開催案内の掲載など、ホームページの継続的な更新をすすめた。今年度末からの大学HP改訂に合わせて、HPの大幅な改訂作業をすすめた。	
改善策		-	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
4	中期目標	研究センターのホームページの充実と更新、産学連携活動への参加、民間企業からの委託研究の受け入れ、一般を対象とした見学会や公開講座の開設を目指す。	
	年度目標	②産学連携活動に積極的に参加する。	
	達成指標	産学連携活動の推進。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		S	
理由		②「エコプロ2018」等展示会への出展3件、第1回法政科学技術フォーラム等産学連携事業等での講演8件。	
改善策		-	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
5	中期目標	研究センターのホームページの充実と更新、産学連携活動への参加、民間企業からの委託研究の受け入れ、一般を対象とした見学会や公開講座の開設を目指す。	
	年度目標	③公開型セミナーの企画、開催を行う。	
	達成指標	積極的に公開型セミナーを開催すること。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		S	
理由		③「グリーンソサエティセミナー」を5月、10月、12月の3回開催した。	
改善策		-	
【重点目標】			
<p>「私立大学研究ブランディング事業」に換わる競争的資金の申請、あるいは申請準備のための基礎構築。グリーンソサエティを実現する3Dマテリアル&プロセスイノベーション研究の理系ブランド発信としての検証を行い、劇的に変革する産業構造やエネルギーフローを見据えた基盤技術として重要な内容を検討する。また、個々のセンター構成員が外部資金獲得をめざす。</p>			
【年度目標達成状況総括】			
<p>グリーンソサエティを実現する3Dマテリアル&プロセスイノベーション研究の発信を積極的に行い、論文発表、学会発表は質・量ともに向上した。基盤技術として重要な内容を検討し、プレスリリース等で優れた成果のメディア発信を試みた。さらに、メディア側からのコンタクトにより広く発信につながった研究成果もあった。「私立大学研究ブランディング事業」の後継事業は発足しなかったが、競争的外部資金の獲得をめざして、NEDO事業、科研費の基盤Aなど比較的大型の外部資金への申請を積極的におこなった。</p>			

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターは、研究活動を遂行しながら外部資金の獲得をめざし、学部生・院生の教育、研究の場として活用し、「私立大学研究ブランディング事業」の後継事業へ申請をめざして、3Dマテリアル&プロセスイノベーション研究の共通テーマとしての検証と基礎構築を行うという2019年度目標に対し、メディアから注目される研究成果を質・量ともに向上させ成果の発信に務めたことは評価に値する。また、外部資金として、科研費15件（新規4件、継続11件）、受託研究費10件（NEDO事業等）、共同研究8件、寄付研究13件、その他2件を獲得したことを高く評価

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

する。

社会貢献に関して、ホームページの継続的な更新を行い、公開型セミナーやシンポジウムを積極的に開催することで、研究成果を広く一般に公開するという目標に対し、年報を発行し、ホームページにアップロードしたこと、「エコプロ 2018」等展示会への出展 3 件、法政科学技術フォーラムでの講演 8 件、「グリーンソサエティセミナー」を 3 回開催したことを特に高く評価する。

IV 2020 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	①法政大学サステナビリティ実践知研究機構規程第 2 条「競争的資金を原資として活動を行う研究センター」として、研究活動を遂行しつつ、外部資金の獲得をめざす。当研究センター設置以来 15 年遂行してきたマイクロ・ナノテクノロジー研究を続けながら、学部生・院生の教育、研究の場として活用する。
	年度目標	2018 年度から進めている「グリーンソサエティを実現する 3D 先端材料プロセス」研究を進展させ、共通テーマの基礎構築を行う。また、個々のセンター構成員が外部資金獲得をめざす。
	達成指標	「3D マテリアル&プロセスイノベーション研究」にかかわる研究発表件数。センター構成員の科研費等外部資金への応募件数。
No	評価基準	研究活動
2	中期目標	②研究センターで得られた研究成果を広く一般の人たちに公開する。
	年度目標	年報の定期的刊行、ホームページの継続的な更新を行い、公開型セミナーやシンポジウムを積極的に開催する。
	達成指標	前年度の研究成果年報を刊行し、ホームページ上にもアップロードすること。公開型セミナーの開催件数。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
3	中期目標	研究センターのホームページの充実と更新、産学連携活動への参加、民間企業からの委託研究の受け入れ、一般を対象とした見学会や公開講座の開設を目指す。
	年度目標	①ホームページの内容充実と継続的な更新をすすめる。
	達成指標	前年度の研究成果年報を刊行し、ホームページ上にもアップロードすること。また、公開型セミナーの開催件数。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	研究センターのホームページの充実と更新、産学連携活動への参加、民間企業からの委託研究の受け入れ、一般を対象とした見学会や公開講座の開設を目指す。
	年度目標	②産学連携活動に積極的に参加する。
	達成指標	産学連携活動への参加状況。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
5	中期目標	研究センターのホームページの充実と更新、産学連携活動への参加、民間企業からの委託研究の受け入れ、一般を対象とした見学会や公開講座の開設を目指す。
	年度目標	③公開型セミナーの企画、開催を行う。
	達成指標	公開型セミナーの企画・開催記録。

【重点目標】

- ①ホームページの内容充実と継続的な更新をすすめる。
- ②産学連携活動に積極的に参加する。
- ③公開型セミナーの企画、開催を行う。

【目標を達成するための施策等】

新型コロナウイルスの影響により、センター施設の閉鎖状況が続いており、研究活動が制限される。同様に、研究発表の場となる学会、学内外の社会連携活動の開催が制限をうけている状況下である。可能な範囲の研究遂行を支援する方策を随時検討し、適時センター内で迅速に周知することで円滑なセンター運営を模索する。また、Web を活用したセンターの研究活動の発信に努める。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【2020 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターの 2020 年度の目標は、「競争的資金を原資として活動を行う研究センター」として、研究活動を遂行しつつ、外部資金の獲得をめざすこと、マイクロ・ナノテクノロジー研究を続けながら、学部生・院生の教育、研究の場として活用し、「グリーンソサエティーを実現する 3D 先端材料プロセス」研究を発展させ、共通テーマの基礎構築を行うという目標設定は、これまでの研究成果と整合性があり極めて高く評価できる。年報の定期的刊行、ホームページの継続的な更新を行い、公開型セミナーやシンポジウムを積極的に開催するという目標設定は、研究センターで得られた研究成果を広く一般の人たちに公開することに効果的であり妥当と判断する。

【大学評価総評】

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターは、学内プロジェクトとして、「グリーンソサエティーを実現する 3D 先端材料プロセス」の研究を遂行しつつ、外部資金の積極的な獲得活動を行っていることを評価する。なかでも競争的大型資金の獲得をめざし、科研費、NEDO 事業など比較的大型の外部資金への応募申請を積極的に行った結果、外部資金として、科研費 15 件（新規 4 件、継続 11 件）、受託研究費 10 件（NEDO 事業等）、共同研究 8 件、寄付研究 13 件、その他 2 件を獲得したことは特筆すべきである。

社会連携・社会貢献に対する取り組みとしては、法政科学技術フォーラムで 8 件の講演・出展、3 件の学外展示会に出展したことを高く評価する。また、年報 2018（2019 年 4 月）、雑誌論文 48 件、学会発表 200 件、ニュースリリース 3 件、雑誌表紙 1 件、表彰 6 件、被引用件数 1540 件があり、研究成果の効果的アピールは特に高く評価できる。研究活動を遂行しつつ、積極的に外部資金の獲得をめざしながら、学部生・院生の教育、研究の場として活用するという目標は極めて重要と判断する。年報の定期的刊行、ホームページの継続的な更新を行うとともに、公開型セミナーやシンポジウムを積極的に開催するという目標設定は、研究成果を広く一般の人たちに公開する重要な活動と考える。

今後の貴研究センターの更なる発展を期待したい。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

エコ地域デザイン研究センター

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

エコ地域デザイン研究センターでは、総じて、高い研究活動とその成果を社会に還元する活動を維持している。外部資金の獲得は継続的に行われているが、民間助成金も視野に入れた広範囲での獲得努力が望まれる。従来のプロジェクト体制はプロジェクト間の連携が弱く、エコ地域デザイン研究センター全体として寄り合い所帯的なイメージをぬげなかったが、新たな領域概念「テリトリー」のもとにそれらのプロジェクトを整理・統合することが計画され、そのための準備活動まで加味して考えると、2018年度の活動成果は高く評価される。この結果、エコ地域デザイン研究センターの社会的イメージがより明確化・強化され、新たな資金調達にもつながることを期待したい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2019年度は「テリトリー」の概念整理の議論を通してエコ地域デザインセンター全体の連携を強めた点を評価いただいた。「テリトリー」に関しては開かれた議論の場を設け、戦略的に発信することでさらなる社会的認知の獲得を目指している。

外部資金の調達に関しては、2019年度は「千代田学」にて獲得した。申請した科研費は残念ながら採択には至らなかったが、更に議論を深めるとともに対外的な発信を続け、エコ地域デザイン研究センターの社会的イメージをより強化することで、外部資金の獲得につなげたい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

エコ地域デザイン研究センターでは、2019年度の大学評価委員会の評価結果を受け、新たな領域概念である「テリトリー」に関して、開かれた議論の場を設け、戦略的に内外に発信することで社会的認知を獲得する努力をされており、評価できる。また、外部資金の調達に関しては、「千代田学」事業において獲得している。科研費においては不採択であったが、センターの社会的イメージを高めるために対外的な情報発信を継続するなど外部資金の獲得に努めており、適切に対応している。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

【シンポジウム】

- ・「佐原『江戸優り』フォーラム」
 - 日時；2019年3月9日
 - 会場；千葉県香取市佐原の与倉屋大土蔵
 - テーマ内容；『江戸はネットワーク』再論、「近世在方町佐原と伊能忠敬」、「佐原の現在と未来」
- ・江戸の基層シンポジウム「古代・中世の府中から武蔵国を探る」
 - 日時；2019年3月23日
 - 会場；法政大学 富士見ゲート校舎
 - テーマ内容；「古代武蔵国府とその周辺」、「江戸の基層としての中世武蔵府中~祭礼・古戦場・歌枕~」、「武蔵国の古代・中世から江戸の基層を探る」
 - 主催；法政大学江戸東京研究センター・エコ地域デザイン研究センター
- ・水都交流セミナー「エクハルト・ハーン先生を囲んで/ベルリン近郊のエコシティと東京のグリーンインフラ」
 - 日時；2019年4月3日
 - 会場；法政大学 富士見ゲート校舎
 - テーマ内容；エクハルト・ハーン先生は、ドイツドルトムント大学教授として長年ドイツやEUのエコロジカルな都

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

市計画を主導してこられた。法政大学エコ地域デザイン研究センターの客員研究員としても長く交流を続けており、今回は、ベルリン近郊で計画されている大規模なエコシティについて話題提供をしていただいた

■主催；エコ地域デザイン研究センター

・ローザ・カーロリ教授講演会「江戸・東京における佃島の誕生と発展 The origin and development of Tsukudajima in Edo-Tokyo」

■日時；2019年5月14日

■会場；法政大学 ボアソナードタワー

■テーマ内容；イタリアにおける日本近現代史研究の第一人者であり、江戸東京研究センターの客員研究員であるローザ・カーロリ教授(ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学)による講演会。氏のこれまでの沖縄史の研究からさらに幅を広げ、「江戸・東京における佃島の誕生と発展(The origin and development of Tsukudajima in Edo-Tokyo)」というテーマの発表が行われた

・日本サウンドスケープ協会 2019 シンポジウム：音風景は文化遺産となりうるか

■日時；2019年5月26日

■会場；青山学院アスタジオ地下ホール

■テーマ内容；

・第1回「テリトリー研究会 ー重要文化的景観とテリトリーオー」

■日時；2019年11月27日

■会場；法政大学市ヶ谷田町校舎 T205 教室

■テーマ内容；「京都北山杉の里・中川の文化的景観と京都」/「葛飾柴又の文化的景観と東京」

■主催；法政大学エコ地域デザイン研究センター、法政大学江戸東京研究センター

【イベント】

・「中高大院のオール法政で考える江戸東京ー江戸東京チャレンジ 2018」発表会

■日時；2019年3月9日

■会場；法政大学市ヶ谷キャンパス

■テーマ内容；法政大学の附属中学から大学院まで「オール法政」で横断的に江戸東京をテーマにワークショップを行った。

・「伊東建築塾／子ども建築塾」公开发表会

■日時；2019年3月16日

■会場；法政大学外濠校舎

■テーマ内容；2018年度の「まち」の授業は「みんなの川のまちをつくらう！」というテーマのもと、恵比寿のまちなかを流れる「渋谷川」の一角が舞台。川を中心にどのように人が集まるのか、川と建物のつながり、まちを訪れる多様な人々を意識しながら、「楽しい川のまち」を設計し、模型やプレゼンボードを制作。一年間の集大成となる公开发表会では、子どもたちがみんなでつくったまちなみを発表し、講師による講評。

・第10回外濠市民塾「外濠浚渫工事見学会」

■日時；2019年8月7日

■会場；法政大学 富士見ゲート校舎

■テーマ内容；牛込濠から小石川橋までまち歩きを実施。浚渫工事の見学は、牛込濠でヘドロの吸引作業、小石川橋では土運船にヘドロを積み込む様子を見学。実際に採取されたヘドロを間近で体感した。

・玉川の語源を探る夕べ

■日時；2019年8月17日

■会場；二子玉川ライズ・ルーフガーデン5階 原っぱ広場

■テーマ内容；法政大学エコ地域デザイン研究センター・江戸東京研究センター

■主催；創作神楽「玉姫」の上演と玉川の語源と玉川文化に関する対談。

・御嶽山で語る島山重忠～父と娘 玉川が紡ぐ魂の邂逅～

■日時；2019年9月21日

■会場；武蔵御嶽神社 神楽殿

■テーマ内容；創作神楽の上演と重忠奉納の赤糸威大鎧にめぐむ対談。

■主催；法政大学江戸東京研究センター、法政大学エコ地域デザイン研究センター

・池の畔の遊歩音楽会 2019: 音のすむ森に捧ぐ！ Vol.10 「トロールの森 2019」参加プロジェクト

■日時；2019年11月17日

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- 会場；都立善福寺公園
- テーマ内容；池の畔を歩きながら体験する各種の活動・パフォーマンス

・トーク&ライブ 池の囁きを聴く！（池の畔の遊歩音楽会）10周年特別企画 「トロールの森 2019」参加プロジェクト

- 日時；2019年11月22日
- 会場；葉月ホールハウス
- テーマ内容；池の畔を歩きながら体験する各種の活動・パフォーマンス

・音風景で辿るまちの記憶と今：「渋谷の元」を探す神泉・円山町のまちあるき

- 日時；2019年11月29日

・展覧会『ブルーインフラがつくる都市～東京港湾倉庫論～』

- 日時；2019年7月5日～27日
- 会場；Re-SOHKO GALLERY(リソーコ・ギャラリー)

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

【刊行書籍】

- ・『新・江戸東京研究—近代を相対化する都市の未来』（法政大学出版局）
- ・発刊日；2019年3月
- ・著者；陣内秀信監修 法政大学江戸東京研究センター編
- ・内容；オリンピック開催をひかえ国際的な関心の高まる都市・東京の歴史に学び、東京の魅力を未来に向けて発信すべく構想された法政大学江戸東京研究センター（EToS）。本書は建築から歴史学、社会学、人類学へと領域を越えて濃密な議論が展開された設立記念シンポジウムの記録である。東京のユニークな特質を生み出す基層構造を解き明かし、この都市にふさわしい未来像を描き出す新たな都市論。

- ・『水理公式集（2018年版）』（土木学会）
- ・発刊日；2019年3月
- ・著者；道奥康治（分担執筆）
- ・内容；水工学の基礎事項とともに、目覚ましい進歩をとげたここ十数年間の水工学の知見を取り入れ、それらを公式として体系的に整理し解説した。

- ・『建築史への挑戦 -住居から都市、そしてテリトリーオへ』（鹿島出版会）
- ・発刊日；2019年4月
- ・著者；陣内秀信・高村雅彦編著
- ・内容；住居から都市、そしてテリトリーオ（領域）へと、建築史の可能性を切り拓いてきた陣内秀信の最終講義および連続・対談講義録。

- ・『アナザーユートピア』（NTT出版）
- ・発刊日；2019年3月
- ・著者；榎文彦・真壁智治・北山恒・他（共著）
- ・内容；建築家・榎文彦は近年の論考「アナザーユートピア」で、これまでのように建築から都市をつくるのではなく、「オープンスペース」——広場、路地、道、空き地、原っぱ、等——を中心につくることが、都市の未来、賑わい、人々の交流をつくるのではないかと主張し、都市・建築分野を超えて、多分野の人に取り組んでほしい課題として問題提起をした。本書では、榎の問題提起を受け、さまざまなジャンルで活躍する若手からベテランまでの17人が、それぞれの角度から「オープンスペース」という概念を深めることで、2020年以降の日本の都市のあり方に一石を投ずる。

- ・『決定版 清明上河図』（国書刊行会）
- ・発刊日；2019年7月
- ・著者；高村雅彦（共著）
- ・内容；謎の画家・張択端によって精緻に描かれた北宋都市の光景や人々の暮らし。「神品」として名高い画卷を高精度の原寸大画像で余すところなく掲載。さらに原寸を超える拡大画像でハイライト部分を紹介する。日本に伝わる模本3点（林原美術館本、東京国立博物館本、筑波山神社本）から、内外の研究者による充実の論考、跋文の釈文や翻訳まで付している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・『復元 江戸城能舞台と弘化勸進能』(法政大学江戸東京研究センター)
- ・発刊日; 2019年3月
- ・著者; 高村雅彦監修+高村研究室

- ・『東京発掘プロジェクト 水辺編 I』(法政大学江戸東京研究センター)
- ・発刊日; 2019年3月
- ・著者; 高村雅彦・皆川典久監修

- ・『江戸東京の都市組織に挑む』(彰国社)
- ・発刊日; 2019年9月
- ・著者; 渡辺真理・北山恒・他(共著)

【査読付き論文】

- ・馬場憲一「学徒出陣の記憶とその受容についてー現代学生への記憶伝承とその認識の検証を通してー」『現代福祉研究』第19号 2019年3月
- ・小川夕季/出口清孝/川久保 俊/大風 翼「白川村の地形モデルを用いたCFD解析と合掌造り民家の温熱環境実測」『2019年度日本建築学会大会環境系論文集』第84巻, 第763号 2019年5月
- ・包慕萍/高村雅彦「近代における居住環境改良思想の満鉄住宅標準設計への影響」東アジア都市史学会、中国上海・上海社会科学院、2019年6月
- ・邵 帥「20世紀東アジアの都市住宅-1950年代上海における計画思想とその制度から読む他都市との比較」東アジア都市史学会、中国上海・上海社会科学院、2019年6月

【論文】

- ・陣内秀信「江戸東京の心臓部、中央区の醍醐味 本郷」吉川弘文館 No.139、2019年1月
- ・陣内秀信「テリトリーオの概念について」『法政大学エコ地域デザイン研究センター2018年度報告書』pp.54-57、2019年2月
- ・陣内秀信「日本人は80年代以後のイタリア文化をいかに受容してきたかー都市の魅力とテリトリーオの豊かさの視点から」『日伊文化研究』第57号 pp.2-14、2019年3月
- ・畠山望美・高村雅彦・内藤啓太「崖線から見る江戸東京の庭園に関する研究」『2018年度2019年度日本建築学会大会関東支部研究報告集』2019年3月
- ・鳥越けい子「環境と音楽：サウンドスケープ論を手掛かりとして」音楽文化の創造(CMC)電子版、Vol.08 特集「環境と音楽」pp.1-7、2019年4月
- ・出口清孝「和食文化に対する「食」と「温熱環境」に関する基礎的考察」『民俗建築』155号 2019年5月
- ・陣内秀信「東京のなかの銀座；都市文化の魅力のありか」『都市計画』Vol.68, No.4, 2019年7月
- ・秋山浩一/高橋大地/石川忠晴/道奥康治「豪雨イベントおよび土壌の湿潤性を考慮したダム貯水池上流域の崩壊地面積予測モデルの構築」『土木学会論文集 B1(水工学)』Vol.75, No.4 2019年
- ・北山恒「南六郷ハウス」『新建築』2019年8月
- ・稲益祐太「華やかな都市の、その下には」『建築雑誌』2019年度日本建築学会大会、第134集(第1725号)p.47、2019年6月
- ・北山恒「革命はすでに始まっている」『建築雑誌』no.1728、2019年9月
- ・高村雅彦「なぜ水辺に都市が栄えるのか」『経済界』第55巻、2019年11月
- ・高村雅彦「島原城下町を「水の聖地」から読み解く」『水の文化』第63号、2019年11月
- ・稲益祐太「海路と陸路がつくる尾道のテリトリーオ」建築討論(webサイト)37巻、2019年11月

【基調講演/招待講演/国際学会】

- ・高村雅彦「奪われる自由と創造される空間」法政大学江戸東京研究センターワークショップ「テクノロジーと東京」、法政大学、2019年3月
 - ・高村雅彦他「自然素材で「始原の小屋」をつくる」江戸東京たてもの園「たてもの園フェスティバル」江戸東京たてもの園、2019年3月
 - ・Hidenobu Jinnai, Città e territori ereditati: Principi e metodi della valorizzazione in Giappone e in Italia, ANCSA アルガン賞授与式、イタリア・グッピオ市 2019年4月
 - ・高村雅彦「古代地形から読む神田明神とその景観」江戸東京文化講座、神田明神、2019年5月
 - ・高村雅彦・加藤智也他「中国大連沙河口区の再生計画」大連理工大学建校70周年記念ワークショップ「大連歴史街区の更新設計」大連理工大学、2019年5月
 - ・Hidenobu Jinnai, Studio comparativo della struttura urbana e dell'abitazione nelle piccole città del mondo mediterraneo: Turchia, Tunisia, Andalusia e Italia VII Conferenza dei Borghi del Mediterraneo, イタリア・チステルニーノ市、2019年10月
 - ・陣内秀信「水都東京の再考ー建築からテリトリーオまでー」
- 全国まちづくり会議 2019in 東京、日本都市計画家協会、竹中工務店東京本社、2019年9月
- ・道奥康治「川の魅力発見と未来へつなぐ川づくり」ふるさと兵庫の川シンポジウム、御影公会堂、2019年2月
 - ・道奥康治「持続可能な水工学に向けて」災害科学研究所研究交流会、大阪大学中之島センター、2019年10月

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- ・高村雅彦・邵帥『徹底解剖！万里の長城』番組名：地球ドラマチック、NHK Eテレ、2019年11月
- ・稲益祐太「南イタリア都市の諸相—プーリアの建築とテリトリー—」国際シンポジウム—南イタリア石造ドームの伝統的建築”トゥルッリ”の再生—、関東学院大学、2019年12月

【報告書】

- ・陣内秀信、稲益祐太、マッテオ・ダリオ・パオルッチ、ジュゼッペ・ガルガーノ、『アマルフィ海岸のフィールド研究—住居、都市、そしてテリトリー—』、法政大学エコ地域研究センター、2019年9月
- ・法政大学エコ地域デザイン研究センター、『平成30年度千代田学 九段・神保町地区の地域史資料アーカイブ化とその表現に関する調査・研究』2019年3月
- ・山本理顕責任編集、北山恒、他(共著)、『都市美』、名古屋造形大学、2019年8月

【学会発表】

- ・稲益祐太「プーリア州ガッリーポリにおける都市内に造られた地下オリーブオイル搾油場」日本民俗建築学会大会 武庫川女子大学 2019年6月
- ・馬場憲一「文化財政策におけるエコミュージアムの指向について—その動向と改正文化財保護法の検討を通して—」日本エコミュージアム研究会 石川県立四高記念文化交流館 2019年7月7日
- ・北山恒「脱近代あるいは非都市」2019年度日本建築学会大会、2019年8月
- ・川久保俊/吉田功樹/大澤幸之祐「深層学習による画像認識を用いた遮熱舗装の効果検証に関する研究」日本ヒートアイランド学会、東京大学 柏キャンパス、2019年9月
- ・加藤 圭/出口清孝/川久保 俊/河野峻大「ヴァナキュラー建築に施されたパッシブデザインの応用に関する研究(その4) 定量的データに基づくヴァナキュラー建築の分布傾向と気候風土の関係の把握」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・荒田史朗/川久保 俊/出口清孝/山下大樹/和久井 景太「数値流体解析を用いた外皮表面積の差異が集合住宅内の温熱環境に及ぼす影響の検」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・松尾 諒/出口清孝/川久保 俊/加藤 圭「全国を対象とした地域間健康格差の実態把握と要因分析」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・石川怜/川久保 俊/出口清孝/茂手木 大貴/高瀬直也「自治体のHP及び各種計画におけるSDGs関連情報の盛り込み状況」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・大門俊介/川久保 俊/出口清孝/星 且二/石田紗英「内外の温湿度が皮膚水分量に与える影響に関する通年調査(その1)—皮膚水分量・経皮水分蒸散量の通年変化—」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・石田紗英/川久保 俊/出口清孝/星 且二/大門俊介「室内外の温湿度が皮膚水分量に与える影響に関する通年調査(その2)—マルチレベル分析に基づく皮膚水分量に影響を与える要因の把握—」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・北田文也/出口清孝/川久保 俊/松尾 諒/加藤 圭「ホットスポット分析を用いた全国市区町村別健康格差の時系列比較」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・和久井景太/川久保 俊/出口清孝/宿谷昌則/山下大樹「暖房方式とその使用方法の違いが人体エクセルギー消費速さに及ぼす影響のCFD解析による可視化」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・吉田功樹/川久保俊/出口清孝/山下大樹/渡辺智也/岡埜紘子「赤外線サーモグラフィを用いた都心部における暑熱環境の実態把握の試み(その1) 研究目的と実測概要」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・岡埜紘子/川久保俊/出口清孝/吉田功樹/山下大樹/渡辺智也「赤外線サーモグラフィを用いた都心部における暑熱環境の実態把握の試み(その2) 建物及び地表面温度の24時間連続実測」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・大澤幸之祐/川久保俊/出口清孝/吉田功樹/岡埜紘子/山下大樹「赤外線サーモグラフィを用いた都心部における暑熱環境の実態把握の試み(その3) 街区被覆と表面温度の関係性」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・渡辺智也/川久保俊/出口清孝/吉田功樹/山下大樹/岡埜紘子「夏季の屋外における暑熱環境対策が心拍と脈拍に与える影響の検証」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・鳥越けい子「地下空間とサウンドスケープ：都市景観における音風景とは」土木学会地下空間研究委員会「人にやさしい地下空間セミナー」第7回、土木学会講堂、2019年9月
- ・邵帥/高村雅彦「上海における建国直後の計画思想とその制度—東アジア都市の近現代における住宅地形成と集合住宅に関する研究—その3」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・包慕萍/高村雅彦「大連沙河口からみる初期の満鉄標準住宅—東アジア都市の近現代における住宅地形成と集合住宅に関する研究—その4」2019年度日本建築学会大会、金沢工業大学、2019年9月
- ・橋本航征/福井恒明「港湾と都市の連携—の観点から見たみなとオアシスの機能配置と運営」第60回土木計画学研究発表会、富山大学、2019年11月
- ・堀越義人/福井恒明「河川堤防の形態とアクセス整備に着目した水辺アプローチの多様性」第60回土木計画学研究発表会、富山大学、2019年11月
- ・八杉遥/荻原知子/福井恒明「明治以降の風景写真に見る都市風景の変化とその要因」第15回景観・デザイン研究発表会、日本大学(駿河台キャンパス)、2019年12月
- ・久保拓巳/福井恒明「水害常襲地の土地利用変遷と都市計画—倉敷市真備地区を対象に—」第15回景観・デザイン研究発表会、日本大学(駿河台キャンパス)、2019年12月

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・田中咲/福井恒明「市民参加の地域活動における市民の意向－外濠市民塾の活動を対象に」第15回景観・デザイン研究発表会、日本大学（駿河台キャンパス）、2019年12月 ・堀川萌/荻原知子/福井恒明「明治以降の新聞記事に見られる広場等公共空間の変遷」第15回景観・デザイン研究発表会、日本大学（駿河台キャンパス）、2019年12月 ・田邊喬太/福井恒明「九段・神保町周辺の地域史資料アーカイブ化とその活用」第15回景観・デザイン研究発表会、日本大学（駿河台キャンパス）、2019年12月 ・稲益祐太「スーヴェニールのなかの都市」2019年度日本建築学会大会都市史小委員会、建築会館、2019年12月 ・馬場憲一「住民参画の文化財保護政策における制度的課題－改定文化財保護法と自治体文化財保護条例の分析から－」日本文化政策学会、さいたま市文化センター、2019年12月
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし
<p>③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）</p>
<p>※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2019年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2019年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし
<p>④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）</p>
<p>※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質保証活動は運営委員会において実施している。 ・運営委員会の構成員はセンター長・副センター長を含め17名の兼任研究員及び客員研究員であり、議題に応じてはオブザーバーの参加も規定上認められている。運営委員会では各委員からの報告を受け、それにに応じて広く議論を行い、研究活動の質の向上に努めている。 ・イベントやシンポジウムでのアンケートを中心に、学内外を問わず、幅広い立場の方々からの意見や指摘を受ける体制を整えている。加えて、各プロジェクトでは、地元の町会や企業、行政との連携が取られているため、事業内容についてその都度評価を受ける柔軟な体制が築かれている。
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし
<p>⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況</p>
<p>※2019年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2019年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。</p> <p>【採択を受けた外部資金】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度「千代田学」（千代田区内にある短期大学、大学、大学院等の研究機関が千代田区の様々な事象を多様な切り口で調査・研究し、その定着と発展、また、各学校が区及び地域と連携を図ることを目指して、事業経費の一部を補助するもの）に下記の事業が採択。 ■ 内濠地域におけるアドホックな賑わいの可視化に関する調査・研究 ■ 岩佐明彦 エコ地域デザイン研究センター ■ 概要： 「アドホックな賑わい」（暫定的で単一目的指向型の人の賑わい。これまでの各種統計ではうまく捉えることができなかった賑わいの形態）を内濠地域で抽出・分析し、内濠地域の特性を活かした都市計画・都市政策の策定に資する資料の提供を行う。（事業実施期間 2019年4月1日から2020年3月31日） <p>【応募した外部資金】</p> <p>2020年度 科研費基盤研究(A) (一般)「テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発」（代表；福井恒明）（不採択）</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし

(2) 長所・特色

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・当センターは、学内外の研究者と連携した研究活動が活発であり、さらに連携対象が研究者に限らず、地域住民・行政・企業・教育機関と多岐に渡ることが特色といえる。また、多くのプロジェクトに地元の住民や行政・企業が関わり、活動に対するフィードバックを受けやすい体制にある。 ・運営委員会は、文理にわたる専門性を持つ研究者から構成されており、多角的な視点による研究活動を推進することができる。 ・各プロジェクトでは、これまで蓄積してきた成果や研究者のネットワークを活かしながら、対外的に多くの活動を行っている。さらにシンポジウムや論文執筆、報告書刊行により、研究成果の社会的還元を積極的に行っている。 	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>外部資金の獲得が懸案事項である。千代田学事業については引き続き 2020 年度も採択を受けているものの比較的少額でテーマも限定的である。科研費申請をはじめ、引き続き外部資金の獲得のための努力を続けたい。</p>	

【この基準の大学評価】

<p>エコ地域デザイン研究センターの研究・教育活動実績においては、シンポジウムの実施 6 回、イベントの実施 9 回の実績があり、その回数のみならず、内容も多種多様にわたる。また、対外的に発表された研究成果においても、著書 8 編、論文 18 本、報告書 3 報のほか、数多くの学会発表、講演などにより精力的に研究成果を発信しており、高く評価できる。研究成果に対する社会的評価に関しては「特になし」の回答であるが、著書や論文、報告書の本数からして引用がないとは考え難く、ウェブサイトのアクセスなども含め、可能な限り調査することが望まれる。年次報告会を開催し、一般から活動内容に関する意見を集める機会を設けることで、11 回の運営委員会と合わせ、質保証活動は適切に行われている。今後、運営委員会へのオブザーバーの参加を活用するなど、第三者評価の制度化が期待される。また、イベントやシンポジウムにおいてアンケートなどによって意見を聴取し、運営委員会を通じてセンター内で情報共有するとともに、プロジェクト活動でも、町会や企業、行政による事業内容についての評価を受けられる体制がとられている。外部資金の応募・獲得状況に関しては、千代田区が実施する「千代田学」事業においては引き続き獲得したが、科研費基盤研究 (A) は、不採択であった。外部資金の獲得は、エコ地域デザイン研究センターの社会的認知を高めることに繋がる。外部資金獲得のために一層の努力が期待される。</p>
--

III 2019 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	都市とその周辺地域の成り立ちや関係性を、歴史文化・水循環などの観点から総合的に捉える新たな領域概念「テリトリー」を提示する。
	年度目標	テリトリー概念に関する研究体制を構築し、活動を開始する。府中玉川・瀬戸内・新潟などのサイトの研究活動を通じ、「テリトリー」概念を構成する具体的な事象を整理し、共有する。
	達成指標	テリトリー概念をテーマとし、各サイトの研究活動成果を持ち寄る研究会を開催する。
	年度末報告	<p>執行部による点検・評価</p> <p>自己評価 A</p> <p>理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019 年度年度末報告会 (2020. 2. 25) にて、各フィールドにおける研究をテリトリーの観点から横断的に議論した。 ・月 1 回の運営委員会では各フィールドにおける研究状況やテリトリー概念の具体化について継続的に議論している。 <p>改善策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス対応で延期されたシンポジウム等を実施する。 ・研究会を継続して実施し、その成果のアウトプットについて検討する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	学術的知見をもとに、近未来の都心部及び都心周縁部のあり方や具体的な地域の姿について、

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		地域と共に議論し社会的な発信を行う。
年度目標		都心部については外濠市民塾を中心に、地元住民、地元企業や地元の教育機関との連携を深め、より良い関係を築く。都心周縁部については研究者や地域と議論する体制をつくり、基礎的な知見を蓄積する。
達成指標		・外濠市民塾を1回以上開催する ・テリトリーオに関する内容をテーマとした報告会を1回以上開催する
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	・外濠・日本橋川の再生に関する東京都知事への提言実施（法政大学・東京理科大学・中央大学の総長・学長連名，2019.9.17）に際して中心的な役割を果たし、その結果として東京都の長期計画である「未来の東京」戦略ビジョンに玉川上水の復活と外濠の浄化が盛り込まれた。 ・第10回外濠市民塾（2019.8.7）を開催した。 ・第1回テリトリーオ研究会（2019.11.27）を開催し、が一部からのゲストスピーカーによる話題提供を元に、エコ研の主要メンバーによる意見交換を実施し、論点を整理した。
改善策	・引き続き都心部の環境改善について地域や行政との連携を図る。 ・活動に関する広報（参加者募集）、活動成果の広報についてはウェブサイトへの掲載、動画公開などを行っているが、これらの周知についてより充実を図る。	

【重点目標】

重点目標：テリトリーオ概念に関する研究体制を構築し、活動を開始する。

目標を達成するための施策

- ・各研究対象地における研究成果の定期的な共有
- ・テリトリーオに関する研究会の開催
- ・江戸東京研究センターのブランディング事業との共同作業

【年度目標達成状況総括】

今年度の達成目標はすべて達成した。月1回の運営委員会にて研究成果の共有を行った。テリトリーオに関する研究会は11月に実施し、年度末報告会でも実質的な議論を行った。江戸東京研究センターの事業とは常に連携を図り、学内での文理協働が進んだ。

特に、東京都知事に対する3大学総長・学長による提言（外濠・日本橋川の水質浄化と玉川上水・分水網の保全再生について）実施は、その内容が東京都の長期計画に盛り込まれ、2021年度に調査予算計上されるという具体的な成果をあげた。本研究センターが継続的に活動し、他大学や地域と連携するなかで蓄積してきたものが実を結んだものといえる。

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

エコ地域デザイン研究センターの2019年度の研究活動の目標は、「テリトリーオ」の概念に対する研究体制の構築とその活動の開始で、第1回テリトリーオ研究会の開催、報告会、運営委員会などによって研究成果の発信、議論の継続がなされており、目標は達成されている。また、社会貢献・社会連携に関しては、外濠市民塾を核として、地域住民や企業、教育機関と連携し、東京都の長期計画である「未来の東京戦略ビジョン」に「玉川上水の復活と外濠の浄化」が盛り込まれたことに際し、センターが中心的な役割を果たしたことは高く評価できる。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	都市とその周辺地域の成り立ちや関係性を、歴史文化・水循環などの観点から総合的に捉える新たな領域概念「テリトリーオ」を提示する。
	年度目標	「テリトリーオ」概念をより深めるために、様々な領域の研究者・専門家と意見交換を行う。
	達成指標	外部の研究者・専門家を招いてテリトリーオをテーマとした研究会を開催する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	学術的知見をもとに、近未来の都心部及び都心周縁部のあり方や具体的な地域の姿について、地域と共に議論し社会的な発信を行う。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度目標	地域と共に競技しその成果を発信する場を設ける。
	達成指標	地域と共同した議論と発信を行う。
<p>【重点目標】 「テリトリーオ」概念をより深めるために、様々な領域の研究者・専門家と意見交換を行う。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 研究会開催に向けて準備をすすめる。HP等で告知し対外的な発信に努める。</p>		

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

エコ地域デザイン研究センターの研究活動における2020年度中期・年度目標は、新たな領域概念である「テリトリーオ」を広く提示することである。そのために様々な領域の研究者・専門家と意見交換を行い、「テリトリーオ」をテーマとする研究会を開催することを達成指標としており、目標設定は適切といえる。

社会貢献・社会連携においては、年度目標が「地域との協議、発信する場の設定」、達成指標が「地域と協働した議論と発信」であり、これらはやや抽象的な表現にとどまっている。今年度の調書には記載されていないが、新潟市内の関係者との潟の再生に関する協議、里潟環境ネットワーク会議とのテリトリーオ研究に関する意見交換会が予定されている。また、年度報告会の開催や年度報告の発行、およびテリトリーオ研究の成果をウェブ掲載することが予定されている。次年度以降、「年度目標」・「年度目標に対する達成指標」について、具体的に記述することが強く望まれる。

【大学評価総評】

エコ地域デザイン研究センターでは、学内外の研究者・専門家と連携した研究活動を積極的に行っており、さらに地域住民や行政、企業、教育機関と連携を深めることで高い研究活動を維持している。研究成果は、多くの著書や論文、報告書にまとめられ、シンポジウムも積極的に開催し社会的に広く還元されており、高く評価できる。しかしながら、外部資金の獲得に関しては様々な取り組みはみられるものの、懸案事項となっており、引き続きの努力が望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

江戸東京研究センター

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所との協同によって生まれた江戸東京研究センターにおいては、設置されて日が浅く、研究活動も試行錯誤の段階であろうと思われる。創設間もないにもかかわらず、多様な江戸東京研究の諸分野にまたがる研究・教育活動実績が認められ、出版物、学会発表等の研究成果も蓄積されてきている。科研費等外部資金の応募・獲得状況もめざましい。

しかし、2019年度中期目標・年度目標・達成指標については抽象的であると思われる。今後の目標策定にあたっては、以下の2点を踏まえることが必要であろう。第1は、HPの〔江戸東京研究センター>研究ブランディング事業>事業計画書>年次計画〕に公表されている「平成31(令和元)年度」の「目標」「実施計画」との整合性である。第2は4つの研究プロジェクトとの関連である。中期計画と年次計画を階層的に位置づけ、達成指標は具体的に「指標」となる項目を挙げる必要がある。これらの腑分けによって、ややもすると雑駁な印象を与えかねない研究活動の諸側面も、自ら系統づけられ整理されるように思われる。今後に期待したい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

・第1の「令和元年度の目標、実施計画との整合性」について

令和元年度の目標は「江戸東京の社会的・文化的特徴に関する研究と〈実践知〉を生かした市民・一般参加の拡大」であった。その目標を達成するための実施計画は、4つのプロジェクトと全体のブランディング戦略のそれぞれに分けられる。目標の「江戸東京の社会的・文化的特徴」に関しては、①水都－基層構造プロジェクトでは、後背地や近郊農村をつなげて分析するテリトリーオの方法を用いて、江戸東京の全体を水と地域形成の視点から解読し、同時に生活や生業、風土により形成された文化的景観を意味づけ、②江戸東京の「ユニークさ」プロジェクトでは、参勤交代や農村地方からの人口流入によって多様な人々が集合したという江戸の基本的な性格に注目し、人口の推移や構成の問題から江戸東京の社会に見いだせるユニークさを明らかにし、③テクノロジーとアートプロジェクトでは、諸外国の大都市における多様な事例の調査研究をおこない、東京が達成している自然と歴史の生成変化(メタボリズム)の特性を文化的な側面から明らかにし、④都市東京の近未来プロジェクトでは、人間の生活に豊かさをもたらす社会の実現とそれを支える都市構造について、近代以前の文脈を保持しつつ生成変化する東京の固有性という視点から明らかにすることであった。いずれも江戸東京の社会あるいは文化の特徴を解明しようとしたものであって、目標と実施計画の整合性を保つことに努力した。また、目標の「〈実践知〉を生かした市民・一般参加の拡大」に関しては、前年度よりも広範な市民・一般参加拡大を目標として、外堀市民塾や後述のIIの1.1の①のように国内シンポジウムを多数開催し市民・一般参加の機会を増やしただけでなく、ヴェネチアでの国際シンポジウムをも実施して国外にも情報を発信し交流を促進して、研究内容を世界的な規模で広く還元する活動にも着手した。

・第2の「4つの研究プロジェクトとの関連」について

指摘いただいた「4プロジェクトの中期計画と年次計画を階層的に位置づけ、達成指標は具体的に「指標」となる項目が必要」に関して、令和元年度の「2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書」においては、4プロジェクトごとに別々の課題を設定するのではなく、それらが融合して推進できるような中期目標を明記し、それに対応する年度目標を記述して、全体での達成指標を可能な限り明示した。2019年度をもって事業を中止するという文科省の突然の決定によって、当センターの研究体制も見直しに迫られ、予算も当初の1/3に削減されたことから、プロジェクト間に相互の強弱が生じ系統づけにくい環境になった。このことから、複数のプロジェクトの在り方について今後早急かつ重点的に修正すべき課題と考えている。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

江戸東京センターは、2019年度の大学評価委員会から指摘された評価結果について、第1の「令和元年度の目標、実施計画との整合性」への対応については、HPに公開されている平成31年度の実施計画が記載されたことを確認することができ、評価できる。

第2の「4つの研究プロジェクトとの関連」については、4つのプロジェクトを融合して推進できる中期目標を明記したとされるが、「2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書」に書かれたものは、2020年度目標の達成指標に具体的な記載がされていることが確認できる。

2019年度の2つの目標、「江戸東京の社会的・文化的特徴」(研究目標)、「〈実践知〉を生かした市民・一般参加の拡大」

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

(社会貢献・社会連携目標) という評価区分の異なる二つの目標が「研究活動」の欄と一緒に記載されているが、性格の異なる2つの目標は項目を分けて記載する方が分かりやすいと思う。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

1 研究プロジェクト

(1) 水都一基層構造

プロジェクト・リーダー：高村雅彦(デザイン工学部建築学科教授)

研究テーマ：都市と地域のテリトリーと文化的景観

(2) 江戸東京の「ユニークさ」

プロジェクト・リーダー：横山泰子(理工学部創生科学科教授)

研究テーマ：「武都から帝都へ」

(3) テクノロジーとアート

プロジェクト・リーダー：都合により年度途中で安孫子信(文学部哲学科教授)から山本真鳥(経済学部経済学科教授)に交代

テーマ：東京のパブリック・アート

(4) 都市東京の近未来

研究プロジェクト・リーダー：北山恒(デザイン工学部建築学科教授)

研究テーマ：国際的研究ネットワークの構築・プロジェクトサイトの策定・行政とまちづくりの連携研究

2 講義・教育プログラム

1. 秋学期全14回 デザイン工学部講義「風土と建築」
2. 春学期全14回 デザイン工学部講義「フィールドワーク」
3. 春学期後半全14回 デザイン工学部講義「都市史」
4. 春学期全14回 履修証明プログラム「人文地理学セミナーA」
5. 秋学期全14回 履修証明プログラム「人文地理学セミナーB」
6. 秋学期全14回 履修証明プログラム「風土と建築」
7. 春学期全14回 履修証明プログラム「フィールドワーク」
8. 春学期後半全14回 履修証明プログラム「都市史」
9. 春学期全14回 履修証明プログラム「江戸の文芸と文化Ⅰ」
10. 秋学期全14回 履修証明プログラム「江戸の文芸と文化Ⅱ」
11. 秋学期全14回 履修証明プログラム「伝統文化と民衆世界Ⅱ」

3 シンポジウム・研究会等

以下、開催日、テーマ、場所、参加者の属性と人数の順に記載する。

1. 2019/4/3(水)、研究会「エクハルト・ハーン先生を囲んで：ベルリン近郊のエコシティと東京のグリーンインフラ」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 40
2. 2019/4/10(水)、神田明神・江戸東京文化講座 第2回「東京・水の都市、水の地域」 神田明神文化交流館 学外 63
3. 2019/5/14(火)、ローザ・カーロリ講演会「The origin and development of Tsukudajima in Edo-Tokyo (江戸・東京における佃島の誕生と発展)」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 17

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

4. 2019/5/16(木)、神田明神・江戸東京文化講座 第3回「江戸東京におけるカップ」 神田明神文化交流館 学外 36
 5. 2019/5/19(日)、磯崎新 特別講演会「東京は首都足りうるか 大都市病症候群」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 700
 6. 2019/5/31(金)、神田明神・江戸東京文化講座 第4回「古代地形から読む神田明神とその景観」 神田明神文化交流館 学外 47
 7. 2019/6/15(土)、神田明神・江戸東京文化講座 第5回「将軍の鷹狩りと江戸の町」 神田明神文化交流館 学外 37
 8. 2019/6/27(木)、神田明神・江戸東京文化講座 第6回「江戸狂歌の大流行～山の手でも下町でも、神田明神でも」 神田明神文化交流館 学外 39
 9. 2019/7/2(火)、東京文化資源会議との研究会 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 8
 10. 2019/7/6(土)、シンポジウム「東京と江戸をつなぐー風景と場所」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 188
 11. 2019/7/11(木)、神田明神・江戸東京文化講座 第7回「力持ちの流行と神田明神の力石」 神田明神文化交流館 学外 23
 12. 2019/7/18(木)、研究会「コンテンツ・ツーリズムと東京」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 51
 13. 2019/7/23(火)、神田明神・江戸東京文化講座 第8回「東京の文化的景観～江戸城外濠と葛飾柴又」 神田明神文化交流館 学外 59
 14. 2019/8/2(金)、研究会「近代東京と『スポーツの都』」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 21
 15. 2019/8/7(水)、第10回外濠市民塾「外濠浚渫工事見学会」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 45
 16. 2019/8/17(土)、「玉川の語源を探る夕べ」 二子玉川ライズ 学外 50
 17. 2019/9/21(土)、「御嶽山で語る畠山重忠 父と娘玉川が紡ぐ魂の邂逅」 武蔵御嶽神社神楽殿 学外 50
 18. 2019/9/28(土)、研究会「美術という見世物 ～江戸から東京へ～」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 73
 19. 2019/10/1(火)、建築フォーラム vol.1「東京駅・皇居前広場・皇居一天皇制と「帝都」の空間をめぐる」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 98
 20. 2019/10/5(土)、江戸東京アトラスプロジェクトワークショップ 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 20
 21. 2019/10/15(火)、建築フォーラム vol.2「アジア主義を更新する」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 92
 22. 2019/10/29(火)、建築フォーラム vol.3「東京をやりなおすー東京文化資源区からの提言」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 85
 23. 2019/11/5(火)、建築フォーラム vol.4「近未来の『東京』の表象：ストリート/スクリーン/内部空間」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 83
 24. 2019/11/17(日)、シンポジウム「江戸東京の東西南北」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 156
 25. 2019/11/19(火)、建築フォーラム vol.5「発明と読み替えー状況を変える建築的思考」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 85
 26. 2019/11/21(木)、研究会「東京首都圏のグラフィティとストリートアート」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 8
 27. 2019/11/26(火)、建築フォーラム vol.6「都市における演劇のコモンズ(共有地/共有知)を巡って」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 75
 28. 2019/12/3(火)、建築フォーラム vol.7「POST SPRAWL TOKYOー大都市の時代の終わり」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 90
 29. 2019/12/8(日)、講演+座談会「江戸の天文学」 法政大学小金井キャンパス 学内 79
 30. 2019/12/14(土)～15(日)、歌舞伎学会共催シンポジウム「歌舞伎の江戸東京 都市空間と劇場街」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 147
 31. 2020/1/13(月)～14(火)、国際シンポジウム「水の都市としての東京とヴェネツィア～過去の記憶と未来の展望」 カ・フォスカリー大学(イタリア・ヴェネツィア) 学外 90
 32. 2020/1/25(土)、研究会「東京の京友禅」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 49
 33. 2020/2/19(水)、「気候変動と雨水活用～雨水の基準と制度を考える日独シンポジウム～」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 118
 34. 2020/2/26(水)、Edo Castle Mission(江戸城・江戸の都市の復元的研究)との研究会 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 15
 35. 2020/2/29(土)、年度末シンポジウム 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 29
- 以上

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・江戸東京研究センター パンフレット vol.3「江戸東京研究センター 2019 年度報告書」

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・江戸東京研究センターweb サイト https://edotokyo.hosei.ac.jp/symposium_collegium

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

1 著書・報告書・制作物

1. 2020年3月 EToS 叢書2『風土(FUD0)から江戸東京へ』法政大学江戸東京研究センター（安孫子信監修）
2. 2019年9月 書籍『江戸東京の都市組織に挑む 上野, 本郷, 谷中, 根津, 下谷』彰国社、法政大学江戸東京研究センター+法政大学デザイン工学部建築学科+南カリフォルニア建築大学+トリノ工科大学
3. 2020年3月 報告書「テクノロジーと東京」法政大学江戸東京研究センター
4. 2020年3月 年度報告書「EToS vol.3」法政大学江戸東京研究センター
5. 2020年3月 映像「玉川源流物語」法政大学江戸東京研究センター水都府中プロジェクト
6. 2020年3月 書籍『江戸とアバター 私たちの内なるダイバーシティ』田中優子, 池上英子
7. 2020年3月 「武蔵玉川絵図」神谷博
8. 2020年3月 シンポジウム報告書「地域から外濠の再生を考える」外濠再生懇談会+江戸東京研究センター+エコ地域デザイン研究センター+東京理科大学外濠及び神楽坂地域調査研究推進室
9. 2019年5月 書籍『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典』文学通信、小林ふみ子（共著）
10. 2019年4月 書籍『建築史への挑戦 住居から都市、そしてテリトリーオへ』鹿島出版会、陣内秀信・高村雅彦
11. 2019年11月 書籍” Giancarlo De Carlo and ILAUD. A moval frontier”, Fondazione OAMi Milano, 陣内秀信（共著）
12. 2019年7月 報告書「生誕百年 廣末保の仕事」法政大学国文学会、田中優子
13. 2019年8月 報告書「都市美」名古屋造形大学、北山恒（共著）

2 学会論文

以下、題目、著者、雑誌名、発表年月の順に記す。

著者：出口 清孝

雑誌名：民俗建築(日本民俗建築学会)第155号

発表年月：2019年5月

論文標題：東京のなかの銀座；都市文化の魅力のありか

著者：陣内秀信

雑誌名：都市計画 Vol.68, No.4

発表年月：2019年7月

論文標題：南六郷ハウス

著者：北山恒

雑誌名：新建築

発表年月：2019年8月

論文標題：革命はすでに始まっている

著者：北山恒

雑誌名：建築雑誌 no.1728

発表年月：2019年9月

論文標題：なぜ水辺に都市が栄えるのか

著者：高村雅彦

雑誌名：経済界 第55巻

発表年月：2019年11月

論文標題：島原城下町を「水の聖地」から読み解く

著者：高村雅彦

雑誌名：水の文化 第63号

発表年月：2019年11月

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

3 査読付き論文

発表標題：近代における居住環境改良思想の満鉄住宅標準設計への影響

発表者名：包慕萍・高村雅彦

学会等名：東アジア都市史学会

発表場所：中国上海・上海社会科学院

発表年月：2019年6月

発表標題：20世紀東アジアの都市住宅-1950年代上海における計画思想とその制度から読む他都市との比較-

発表者名：邵 帥

学会等名：東アジア都市史学会

発表場所：中国上海・上海社会科学院

発表年月：2019年6月

発表標題：白川村の地形モデルを用いたCFD解析と合掌造り民家の温熱環境実測

発表者名：小川夕季・出口清孝・川久保俊・大風翼

学会等名：日本建築学会環境系論文集第84巻, 第763号

発表年月：2019年9月

3 学会発表

発表標題：上海における建国直後の計画思想とその制度 東アジア都市の近現代における住宅地形成と集合住宅に関する研究 その3

発表者名：邵帥・高村雅彦

学会等名：2019年度日本建築学会大会（北陸）

発表場所：金沢工業大学

発表年月：2019年9月

発表標題：大連沙河口からみる初期の満鉄標準住宅 東アジア都市の近現代における住宅地形成と集合住宅に関する研究 その4

発表者名：包慕萍・高村雅彦

学会等名：2019年度日本建築学会大会（北陸）

発表場所：金沢工業大学

発表年月：2019年9月

発表標題：ヴァナキュラー建築に施されたパッシブデザインの応用に関する研究(その4) 定量的データに基づくヴァナキュラー建築の分布傾向と気候風土の関係の把握

発表者名：加藤圭・出口清孝・川久保俊・河野峻大

学会等名：2019年度日本建築学会大会

発表場所：金沢工業大学

発表年月：2019年9月

発表標題：赤外線サーモグラフィを用いた都心部における暑熱環境の実態把握の試み(その1) 研究目的と実測概要

発表者名：吉田功樹・川久保 俊・出口清孝・山下大樹・渡辺智也・岡埜紘子

学会等名：2019年度日本建築学会大会

発表場所：金沢工業大学

発表年月：2019年9月

発表標題：赤外線サーモグラフィを用いた都心部における暑熱環境の実態把握の試み(その2) 建物及び地表面温度の24時間連続実測

発表者名：岡埜紘子・川久保 俊・出口清孝・吉田功樹・山下大樹・渡辺智也

学会等名：2019年度日本建築学会大会

発表場所：金沢工業大学

発表年月：2019年9月

発表標題：数値流体解析を用いた外皮表面積の差異が集合住宅内の温熱環境に及ぼす影響の検

発表者名：荒田史朗・川久保 俊・出口清孝・山下大樹・和久井景太

学会等名：2019年度日本建築学会大会

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：全国を対象とした地域間健康格差の実態把握と要因分析
発表者名：松尾諒・出口清孝・川久保俊・加藤圭
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：自治体のHP及び各種計画におけるSDGs関連情報の盛り込み状況
発表者名：石川怜・川久保俊・出口清孝・茂手大貴・高瀬直也
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：室内外の温湿度が皮膚水分量に与える影響に関する通年調査（その1）－皮膚水分量・経皮水分蒸散量の通年変化－
発表者名：大門俊介・川久保俊・出口清孝・星旦二・石田紗英
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：室内外の温湿度が皮膚水分量に与える影響に関する通年調査（その2）－マルチレベル分析に基づく皮膚水分量に与える影響を与える要因の把握－
発表者名：石田紗英・川久保俊・出口清孝・星旦二・大門俊介
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：夏季の屋外における暑熱環境対策が心拍と脈拍に与える影響の検証
発表者名：渡辺智也・川久保俊・出口清孝・吉田功樹・山下大樹・岡埜紘子
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：ホットスポット分析を用いた全国市町村別健康格差の時系列比較
発表者名：北田文也・出口清孝・川久保俊・松諒・加藤圭
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：暖房方式とその使用方法の違いが人体エクセルギー消費速さに及ぼす影響のCFD解析による可視化
発表者名：和久井景太・川久保俊・出口清孝・宿谷昌則・山下大樹
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：脱近代あるいは非都市
発表者名：北山恒
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：港湾と都市の連携の観点から見たみなとオアシスの機能配置と運営
発表者名：橋本航征・福井恒明
学会等名：第60回土木計画学研究発表会
- 発表場所：富山大学
発表年月：2019年11月

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

発表標題：河川堤防の形態とアクセス整備に着目した水辺アプローチの多様性

発表者名：堀越義人・福井恒明

学会等名：第 60 回土木計画学研究発表会

発表場所：富山大学

発表年月：2019 年 11 月

発表標題：明治以降の風景写真に見る都市風景の変化とその要因

発表者名：八杉遥・荻原知子・福井恒明

学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会

発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）

発表年月：2019 年 12 月

発表標題：水害常襲地の土地利用変遷と都市計画一倉敷市真備地区を対象に

発表者名：久保拓巳・福井恒明

学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会

発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）

発表年月：2019 年 12 月

発表標題：市民参加の地域活動における市民の意向－外濠市民塾の活動を対象に

発表者名：田中咲・福井恒明

学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会

発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）

発表年月：2019 年 12 月

発表標題：明治以降の新聞記事に見られる広場等公共空間の変遷

発表者名：堀川萌・荻原知子・福井恒明

学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会

発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）

発表年月：2019 年 12 月

発表標題：九段・神保町周辺の地域史資料アーカイブ化とその活用

発表者名：田邊喬太・福井恒明

学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会

発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）

発表年月：2019 年 12 月

4 招待講演・国際学会

発表標題：Città e territori ereditati

発表者名：Hidenobu Jinnai

学会等名：Principi e metodi della valorizzazione in Giappone e in Italia、ANCSA アルガン賞授与式

発表場所：イタリア・グッピオ市

発表年月：2019 年 4 月

発表標題：古代地形から読む神田明神とその景観

発表者名：高村雅彦

学会等名：江戸東京文化講座

発表場所：神田明神

発表年月：2019 年 5 月

発表標題：中国大連沙河口地区の再生計画

発表者名：高村雅彦・加藤智也他

学会等名：大連理工大学建校 70 周年記念ワークショップ「大連歴史街区の更新設計」

発表場所：大連理工大学

発表年月：2019 年 5 月

発表標題：廣末保の仕事

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

発表者名：田中優子
 学会等名：法政大学国文学会
 発表場所：法政大学
 発表年月：2019年7月
 発表標題：水都東京の再考～建築からテリトリーオまで～
 発表者名：陣内秀信
 学会等名：全国まちづくり会議 2019in 東京
 日本都市計画家協会
 発表場所：竹中工務店東京本社
 発表年月：2019年9月
 発表標題：徹底解剖！万里の長城
 発表者名：監修：高村雅彦・邵帥
 学会等名：番組名：地球ドラマチック
 発表場所：放送局：NHK Eテレ
 発表年月：2019年11月
 発表標題：歴史から見る多様なネットワーク
 発表者名：田中優子
 学会等名：朝日新聞社
 発表場所：法政大学
 発表年月：2019年11月
 発表標題：1980年代の〈石川淳〉と〈江戸〉
 発表者名：田中優子
 学会等名：日本女子大学文学部
 発表場所：日本女子大学
 発表年月：2019年12月

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・江戸東京研究センター パンフレット vol.3 「江戸東京研究センター 2019年度報告書」
- ・江戸東京研究センターweb サイト <https://edotokyo.hosei.ac.jp/publications>

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して 2019 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2019 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019 年度の web サイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

1 書評

評者名：篠原資明

媒体：東京新聞・中日新聞

書評掲載年月：2018年9月

著書名：立原道造 故郷を建てる詩人(水声社 2018年7月)

著者名：岡村民夫

評者名：串田純一

媒体：表彰

書評掲載年月：2019年4月

著書名：立原道造 故郷を建てる詩人(水声社 2018年7月)

著者名：岡村民夫

評者名：成毛眞

媒体/掲載年月：週刊新潮 2019年4月（朝日新聞 2019年2月、日本経済新聞 2019年3月）

著書名：へんちくりん 江戸挿絵本（集英社インターナショナル 2019年2月）

著者名：小林ふみ子

2 メディア報道

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

1. 2019年4月7日号 「持続可能な社会に向けて異分野融合でアプローチ」 異分野融合研究の一例として江戸東京研究センターの研究活動を紹介、サンデー毎日
2. 2019年7月号 「磯崎新 特別講演会『東京は首都足りうるか』—大都市病症候群」 開催報告記事、雑誌「新建築」
3. 2019/5/29 江戸から見ると「三都」 磯崎新特別講演会について、毎日新聞
4. 2020/1/23 江戸から見ると「数学と暦学と天文学」 講演+座談会「江戸の天文学」について、毎日新聞
5. 2020/2/5 江戸から見ると「ベネチア・東京」 ヴェネツィアでの国際シンポジウムについて、毎日新聞

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・江戸東京研究センター パンフレット vol.3 「江戸東京研究センター 2019年度報告書」
- ・江戸東京研究センターweb サイト https://edotokyo.hosei.ac.jp/symposium_collegium

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

2019年4月19日開催された外部評価委員会において、目標の設定および実施計画はおおむね妥当かつ適切で、計画通りあるいは計画以上の成果があがっているとして、委員からSあるいはAの評価を得た。特に、出版物やシンポジウム、研究会等の外に見えるかたちでの成果がめざましい点が評価された。また、私立大学ブランディング事業が今年度で終了することとなっても、なんらかの方法でぜひ継続することが望ましいとの指摘があった。2019年度の評価については、当初2020年4月下旬に面談のうえで3名の外部評価委員より評価を受ける予定であったが、新型コロナウイルスの影響のため5月下旬に延期された。現在、書類による審査、評価を受けており、6月には外部評価の内容が判明する予定である。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2019年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

1 2019年度中に応募した外部資金（全て科研費）

(1) 研究代表者

- ・基盤研究(A) 福井恒明 2,611,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(B) 岩佐明彦 553,000円 被災者回復ステージのガラパゴス化とそのブレイクスルー
- ・基盤研究(B) 出口清孝 5,833,000円 パッシブデザイン導入に向けた世界の建築気候図作成と気候変動適応策への応用
- ・基盤研究(C) 小林ふみ子 780,000円 江戸狂歌資料による大衆的作者=読者の教養の研究
- ・若手研究 金谷匡高 1,155,000円 明治初期転換期における士族授産による地場産業の発展と武家地空間の変遷について
- ・若手研究 栗生はるか 1,950,000円 「銭湯」とその周辺地域の持続可能性に関する研究

(2) 研究分担者

- ・基盤研究(A) 岩佐明彦 800,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 金谷匡高 700,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 栗生はるか 400,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 高見公雄 500,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 高村雅彦 800,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 出口清孝 250,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 根崎光男 250,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 長谷部俊治 250,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(B) 川久保俊 807,000円 パッシブデザイン導入に向けた世界の建築気候図作成と気候変動適応策への応用

2 2019年度中に採択を受けた外部資金（全て科研費）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(1) 研究代表者

- ・ 基盤研究(B) 2017-2022 高村雅彦 1,250,000円 東アジア都市の住宅地形成と集合住宅に関する学術調査
- ・ 基盤研究(B) 2017-2020 岩佐明彦 664,000円 東日本大震災を踏まえた応急仮設住宅「熊本型デフォルト」の検証
- ・ 基盤研究(C)(基金) 2017-2021 米家志乃布 900,000円 民間地図作製史からみたフロンティア像の日露比較研究
- ・ 基盤研究(C)(基金) 2018-2021 松本剣志郎 800,000円 近世都市インフラ維持管理の社会史的研究
- ・ 基盤研究(C) 2019-2021 川久保 俊 1,800,000円 住環境改善がもたらす健康影響シミュレーション手法の開発
- ・ 基盤研究(C) 2019-2022 山本 真鳥 900,000円 オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究
- ・ 基盤研究(C) 2019-2021 中丸 宣明 700,000円 明治前期における新聞に付随する書籍・印刷物の研究
- ・ 基盤研究(C) 2019-2023 大塚 紀弘 900,000円 資料調査に基づく日本中世における渡来人の基礎的研究
- ・ 基盤研究(C) 2019-2021 安孫子 信 1,120,000円 オーギュスト・コント『実証哲学講義』の歴史的意義をめぐる学際的研究
- ・ 基盤研究(B) 2019-2022 小口 雅史 3,310,000円 古代末期防御的集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築

(2) 研究分担者

- ・ 基盤研究(B) 2015-2020 高村雅彦 590,000円 台湾都市史の再構築のための基盤的研究：都市の移植・土着化・産業化の視座から
- ・ 基盤研究(S) 2017-2022 川久保俊 1,000,000円 住環境が脳・循環器・呼吸器・運動器に及ぼす影響実測と疾病・介護予防便益評価
- ・ 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）2019-02-07～2022-03-31 川久保俊 370,000円 都市における暑熱リスク軽減を目的とした対策導入シナリオに関する国際共同研究
- ・ 基盤研究(A) 2018-2022 小口雅史 150,000円 平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境のグローバル資源化
- ・ 基盤研究(B) 2016-2020 小口雅史 1,720,500円 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究
- ・ 基盤研究(B) 2017-2021 小口雅史 260,000円 中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究
- ・ 基盤研究(B) 2016-2020 大塚紀弘 30,000円 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究
- ・ 基盤研究(B) 2019-2021 安孫子 信 220,000円 ベルクソン『時間と自由』の総合的研究—国際協働を型とする西洋哲学研究の深化
- ・ 基盤研究(B) 2019-2021 陣内 秀信 1,000,000円 地理的表示(GI)を活用したSDGsに寄与する農業と農村振興に関する日欧比較研究
- ・ 基盤研究(C) 2019-2023 小林 ふみ子 100,000円 高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践的研究
- ・ 基盤研究(A) 2017-2020 森田 喬 400,000円 人と社会の側からみた地図・地理空間情報の新技術とその評価

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 研究開発センター市ヶ谷事務課作成資料および科学研究費データベース KAKEN による。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ 特色1 文系と理系の異分野融合の研究組織であり、かつ研究業績が上がっている点。 ・ 特色2 学外の研究組織（大学、博物館）や地域、企業などとの連携活動の可能性があり、かつ実際に実績が積み上げられている点。 ・ 特色3 学内の人的ネットワークを多様に作る点。 	

(3) 問題点

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

内容	点検・評価項目
・2019年度をもって事業を中止するという文科省の突然の決定によって、当センターの研究体制も見直しに迫られ、予算も当初の1/3に削減されたことから、プロジェクト間に相互の強弱が生じ系統づけにくい環境になった。このことから、複数のプロジェクトの在り方について、今後早急かつ重点的に修正すべきことが大きな問題点である。	

【この基準の大学評価】

江戸東京研究センターの研究活動は、シンポジウムやセミナーなどの交流・公開の機会を通じて活発に行われている。多彩な内容の著書、報告書、論文、学会発表、科研費の採択状況など、旺盛な研究活動には目を見張るものがある。教育活動についても、新たに「神田明神江戸東京文化講座」を開講するなど、社会教育活動に努めていることは高く評価できる。

江戸東京研究センターの研究姿勢は、「異分野の融合」を目指したとはいえ、自己点検・評価シートの記載内容を見る限りでは、諸研究を縦割的（個別、領域内の共同研究）に集合化させる様子が見られる。統一テーマのもとに異なる領域や専門分野を横串に通すスタイルの学際的な共同研究がほとんど見られないことは惜しまれる。昨年度をもってブランディング事業を中止するという突然の決定と、それに関係する大幅な予算削減の状況下で、プロジェクト間に強弱が生じ系統づけにくくなったことや、複数のプロジェクトの在り方について、まずは修正すべきことがあるということは理解できるものの、今後、江戸東京研究センターの設置理念に則して、学術論文や科研費の研究プロジェクトなどで、研究領域を横断する学際的な共同研究に期待したい。

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的研究教育拠点の形成。 エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所が共同し、国際化の時代に対応した先端的な江戸東京研究を行い、研究成果を社会に広く還元するとともに、持続可能な地域社会の構築を目指す教育拠点となる
	年度目標	2019年度のテーマは「江戸東京の社会的・文化的特徴に関する研究と〈実践知〉を生かした市民・一般参加の拡大」を事業目標とする
	達成指標	一般市民にも開かれた従来型の研究会とシンポジウムの他、今年度中に新たな市民講座の開設と社会人教育を行う
	年度末報告	<p>執行部による点検・評価</p> <p>自己評価 S</p> <p>理由 従来型の研究会をとシンポジウムを合計21回以上行い、その成果を都度web上で公開した。学会発表、書籍発行などを行った。さらに、イタリアでの国際シンポジウムも開催し、国際的な研究の成果を得た。その他、神田明神江戸東京文化講座を8回行い、社会人教育としての履修証明プログラムという新規事業を行った。</p> <p>改善策 2017年度から継続中の事業成果の多くは形にすることができたが、2019年度末以降に予定されていた研究事業が感染症対策のために停止した状態となっている。その分の遅れを取り戻す必要がある。</p>
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	東京の貴重な水辺である外濠・玉川上水をはじめ、東京の地域に対する関心を高め、具体的な環境改善につなげる
	年度目標	外濠に関する研究の蓄積を生かした市民活動を継続
	達成指標	外濠に関する研究の蓄積を生かした市民活動を継続
	年度末報告	<p>教授会執行部による点検・評価</p> <p>自己評価 S</p> <p>理由 外濠に関する研究の蓄積を生かした市民活動を継続した。その一環として、2019年9月には田中優子総長が、東京理科大学学長・中央大学学長との連名で東京都知事に対し、政策提言を提出した。</p> <p>改善策 予定していた社会貢献・社会連携事業のうち、2019年度末以降の予定が感染症対策のために</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		停止した状態となっている。その分の遅れを取り戻し、計画を再考する必要がある。
【重点目標】		
今年度末には、2017年度から継続中の事業成果を総括し、公にする必要がある。既に研究成果は積み上げられているが、現在進行中の研究活動については可能な限り今年度中にまとめ、形にすることを重点目標とする。そのため、まずは研究プロジェクトの活動内容の再検討を行い、研究成果の書籍化やweb上での成果公開などを旨とする。		
【年度目標達成状況総括】		
2019年度の目的はブランディング事業の根幹である「市民・一般参加の拡大」にかかっていたが、新たな市民向け連続講座や履修証明プログラムなどを行い、一般参加者の拡大につとめることができた。また、建築家磯崎新氏を招聘したシンポジウム「東京は首都足りうるか」で700名を超える参加者を得るなど、大々的な研究企画を成功させた。センターの出版物(7冊)、さらに映像資料も作成するなど、大学のブランディング事業として多方面にアピールすることができた。		

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

「江戸東京の社会的・文化的特徴に関する研究と〈実践知〉を生かした市民・一般参加の拡大」という年度目標のもとに実施した事業は、研究会やシンポジウムを継続的に実施しつつ、イタリアでの国際シンポジウムの開催、さらに「神田明神江戸東京文化講座」のように新規普及事業に取り組むなど、積極的な活動は評価される。さらに、複数の大学学長と連名で都知事に政策提言をした点は、今後の行政と大学との政策連携の道を拓くものとして大いに注目される。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的研究教育拠点の形成。 エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所が共同し、国際化の時代に対応した先端的な江戸東京研究を行い、研究成果を社会に広く還元するとともに、持続可能な地域社会の構築を目指す教育拠点となる。
	年度目標	当センターのブランド化を推進するための一つの戦略として、そのターゲットを国内から国外へと広げるための「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」を年度目標とする。本年をさらなる飛躍の年として、2021年度に大きなまとめを実施し、2022年度以降も学内外でセンターの存続と研究の継続が認められる組織体につなげていきたい。
	達成指標	年度目標の達成のために、すでに実施した2020年1月のヴェネチアでの国際シンポジウムに続き、11月に日中韓を主体とするアジア国際シンポジウム、また秋には日韓の文化交流イベントを本学で開催する。こうして、主な達成指標は年度内に2回の国際シンポジウムを開催することであり、国際的な学術交流をより深化させるとともに、研究成果を世界に向けて発信していく。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	東京の貴重な水辺である外濠・玉川上水をはじめ、東京の地域に対する関心を高め、具体的な環境改善につなげる
	年度目標	各シンポジウムでは広報を積極的に行って参加を募り、知的な機会を社会に提供することが具体的な貢献となる。また、そこで得られた研究者や市民との間に交流のためのネットワークを築き、社会との連携を強めていく。とくに、国際シンポジウムという性格上、海外の人々との連携につなげることが期待できる。また、それらのシンポジウムの内容を著書や報告書として刊行し、ひろく成果の公表に重きを置くことで社会に貢献し、ブランド化の認知をさらに推し進めようとするものである。
	達成指標	2020年の3回にわたるシンポジウムの内容を書籍あるいは報告書として刊行し、広く社会に研究成果を広めることが具体的な達成指標となる。
【重点目標】		
「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」のみに集中し、それを重視して2020年度の目標とする。		
【目標を達成するための施策等】		
2020年1月のヴェネツィアシンポジウムに続いて、2回の国際シンポジウムを本学で開催する。		

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

年度目標とする「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」に則して、アジア国際シンポジウム、日韓の文化交流イベントを開催するなど、積極的な研究交流や普及の取り組みは高く評価される。一方、前年度評価で指摘されたように、研究活動に社会貢献・社会連携が含まれており、両者を仕分けすることが求められる。

また、年度目標とする「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」を研究活動の目標としているが、はたして研究活動として適切であるか疑問が残る。研究活動とは、やはり研究内容が問われるものではないだろうか。本研究センターはHPの事業目的に述べられているように、エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所という、理系と文系の相互に異なる性格の研究機関が共同してより学際性を高めることであるならば、今後はミッションや施策に則した学際的な研究テーマを具体的に取り上げることがもとめられる。

社会貢献・社会連携については、コロナの影響により不透明な状況が続いているためにやむを得ないと思われるが、年度目標はやや具体性に欠けていると思われる。次年度以降の計画に期待するとともに、「達成指標」は質的・量的に具体的な内容を示すことが望ましい。

【大学評価総評】

江戸東京研究センターの研究活動は、シンポジウムやセミナーなどの交流・公開の機会を通じて活発に行われている。多彩な内容の著書、報告書、論文、学会発表、科研費の採択状況など、旺盛な研究活動には目を見張るものがある。教育活動についても、新たに「神田明神江戸東京文化講座」を開講するなど、社会教育活動に努めていることは高く評価できる。複数の大学学長と連名で都知事に政策提言をした点は、今後の行政と大学との政策連携の道を拓くものとして大いに注目される。

江戸東京研究センターの研究姿勢は、「異分野の融合」を目指したものとはいえ、自己点検・評価シートの記載内容を見る限りでは、諸研究を縦割的（個別、領域内の共同研究）に集合化させる様子が見られる。統一テーマのもとに異なる領域や専門分野を横串に通すスタイルの学際的な共同研究がほとんど見られないことは惜しまれる。実際には様々な検討や試みが行われていると思われるが、国のブランディング事業の中止と大幅な予算削減に伴う複数のプロジェクトの見直しとあわせて、江戸東京研究センターの設置理念に則して、学術論文や科研費の研究プロジェクトなどにより、学際的な共同研究の視覚化をはかることに期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。